江南町文化財調査報告第八集

本田東台 上前原

1988

埼玉県大里郡江南町教育委員会

序

なじみ深い茅葺き屋根も少なくなり、往時の姿も懐かしく思う世の中となりましたが、それでも庭の傍らに、苔むし、蔦をからませた老木などを見つけた時、なんとなく由緒ありげな床しさを感じることがあります。これを守り残してきた家人の容姿にまで一種の気品さえ伝わるようです。同様に一村一郷にも往時を偲ぶに足りる格式高き寺社や遺跡、遺物、伝説等が存在していることは、これを伝えた祖先の努力と共にその土地に独自の郷風を育て住民の品位の上にも自然と誇りを感じられます。

私たちの江南町にも随所に古墳や城跡、またそれらを証する数多くの出土品が発見され、先覚者達の事跡を目の当りにする機会が多くなってきました。経済の発展と共に解明され、かつ失われた歴史遺産は町民の郷土愛を培うことに、さらに学術資料としても役立てられることを願うものです。

本田・東台遺跡、上前原遺跡は電力需要の増加に対応し、送電能力を倍増する事業に起因して発掘調査を行ったものです。わずかな面積中に、それぞれ古代人の生活のあり様を示す遺物や住居跡が現われた。本田・東台遺跡に幾度も茅葺きの家を建て換えて暮らしていた古墳時代の人々が、また上前原遺跡では2mに達する土層に記憶された暗闇の中に数千年前、江南町の開拓者であった縄文時代の人々の生活の一端を明らかにすることができました。本書が今後、各方面において埋蔵文化財の調査研究のため、私たちの祖先の正しい姿を知る一助となることを期待します。

最後になりましたが、この調査に関し、お世話になりました地元協力者の皆様をはじめ関係諸機関各位の惜しみない協力とご指導に厚くお礼を申し上げて発刊の辞といたします。

昭和63年3月10日

江南町教育委員会
教育長　細　井　　多

ご あ い さ つ

電源開発株式会社は、昭和27年の会社創立以来、関係各位のご指導ご鞭撻を得て、全国各地に水力・火力合計約1,000万キロワットの電源を開発するとともに、基幹送電線の整備を併せ行い、わが国の電力供給確保の一翼を担ってまいりました。

ご当地の皆様には、昭和34年の只見幹線建設以来、30年近くにわたり長いお付き合いをさせていただき、無事に電力の供給ができましたことに、あらためてお礼申し上げます。

さて当社は、このたび只見幹線の建替増強工事を実施するにあたりまして、埼玉県教育委員会並びに江南町教育委員会のご指導により、江南町内の2ヶ所の鉄塔用地において、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなりました。この発掘調査は、江南町教育委員会に発掘調査をお願いし、当社も側面からこれに協力してまいりました。

このたびの調査によって、埋蔵されていた歴史上価値ある遺跡が明らかにされ、遺跡の全貌と数多くの出土品が究明され、その全容が発表されるに至りましたことは、当社も関係者のひとりとして、ご同慶にたえない次第でございます。

終わりに、この発掘調査を実施されました江南町教育委員会、並びにこの調査にご協力いただきました地元の皆様方、関係者ご一同様に対し深く感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

電源開発株式会社
只見幹線増強建設所
所長　堀　江　宏

例　　言

1. 本書は、電源開発株式会社による、只見幹線送電線路増強事業に伴い、事前調査された本田・東台Ⅱ・上前原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県教育局指導部文化財保護課の指導のもと、電源開発株式会社の委託を受け、江南町教育委員会が主体となって実施した。
3. 発掘調査から報告書作成に至るまでは、江南町の直営事業とし、初年度－発掘調査、2年度－整理、3年度－報告、と継続して行った。

発掘調査	1985年（昭和60年）10月1日～1986（昭和61年）1月31日
遺物整理	1986年（昭和61年）2月1日～1987（昭和62年）3月31日
報告書作成	1987年（昭和62年）4月1日～1988（昭和63年）3月31日

4. 発掘調査にかかる遺跡の名称と所在は、次のとおりである。

本田・東台（ほんでんひがしだい）遺跡 江南町大字須賀広	埼玉県遺跡№.65－89
上前原（かみまえはら）遺跡 江南町大字千代	埼玉県遺跡№.65－39

なお、本田・東台遺跡は、83年度調査の経過があり、今回はⅡ次として区別した。

5. 発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体者　江南町教育委員会　教育長　小島　孫一（前任）
細井　多　（後任）

事務局

教育次長	髙橋　正
社会教育主事	岡田　恒雄（前任）
〃	横山　舜一（前任）
〃	大島　栄　（後任）
主　事	鹿庭　栄子
	森田　幹雄（前任）
	新井　端

6. 発掘調査・整理作業は下記の者が担当した。

新井　端（江南町教育委員会）新島　喜久雄・内間　靖（立正大学卒業生）

7. 本書の実測図中、土器は、新井、新島、石器は、内間、髙橋、山家、福本が行った。
トレースは、福島、神谷、志村、橋本が当った。遺構の撮影は、新井、新島が行い、遺物写真の撮影は、新井、内間が行った。
8. 本書中の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図（熊谷）を使用したものである。

調査関係者名簿

（敬称　略）

本田・東台遺跡

（調査担当者）新井　端（江南町教育委員会）

（調査員）新島喜久雄（立正大学卒業生）　高橋史朗（立正大学生）

（補助員）

神谷佐代理　木村まさ　杉田君子　杉田君香　杉田恒子　相馬良道　高橋督治
高橋きよ　田中やす　山内知子　吉田兼吉　吉田常子　小林良規（立正大学生）

上前原遺跡

（調査担当者）新井　端（江南町教育委員会）

（調査員）新島喜久雄（立正大学卒業生）　高橋史朗（立正大学生）

（補助員）

新井ハナ　飯島正行　上杉久子　上杉婦美子　上杉千代　大谷キヨ　小久保志ず
小久保聡　杉田チヨ　相馬良道　田中節子　田中とよ　高橋督治　田辺　昇
寺山仁子　長倉　透　橋本克之　持田秀樹　矢島よ志　矢島あき　湯本ミキ
湯本トメ　吉田兼吉

（遺物整理）

神谷君子　志村もと子　橋本紀子　福島和子
新島喜久雄　内間　靖（以上　立正大学卒業生）　高橋史朗　須永　健　前島　卓
関本正彦　山家英明　福本　努　西原崇浩（以上立正大学生）

（指導・助言を賜った方々）

荒川　弘　石岡憲雄　井上　肇　今井　宏　岩本克昌　上杉　正
植木　弘　梅沢太久夫　大塚　実　金井塚良一　金井塚厚志　金子真土
金子正之　金子直行　川口　潤　笠原　満　木村俊彦　栗原文蔵
寺社下　博　関口和男　高橋一夫　高木義和　谷井　彪　長谷川七郎
中島　宏　板野和信　宮島秀夫　水村孝行　宮崎朝雄　松村　篤
森下昌市郎　森田幹雄　山形洋一

（電源開発・関係者）

戸田暉良　石渡麻夫　大塚博義　大貫包年　加藤興次　国井嘉永　小林真幸
斉藤　勉　堀　成基　星野憲禎　松元達也　吉野　隆

目　　次

1988本田・東台Ⅱ　上前原

序

あいさつ

例言

Ⅰ　発掘調査の契機と経過

1 発掘調査の契機 ……1
試掘調査について

2 発掘調査の経過 － 日誌抄 － ……5
本田・東台遺跡　上前原遺跡

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地 ……8
本田・東台遺跡の広がり　上前原遺跡の広がり

2 周辺の遺跡 ……15

Ⅲ　本田・東台遺跡（Ⅱ次）の遺構と遺物

1 遺構の概観 ……22

2 竪穴住居跡と出土遺物

第1号住居跡 ……23
第2号住居跡 ……23
第3号住居跡 ……27
第4号住居跡 ……28

第5号住居跡 ……33
第6号住居跡 ……35
第7号住居跡 ……33
第8号住居跡 ……35
第9号住居跡 ……41
第10号住居跡 ……43
第11号住居跡 ……41
第12号住居跡 ……47
第13号住居跡 ……47
第14号住居跡 ……41
第15号住居跡 ……35
土壙　溝　井戸　他 ……38

3 その他の遺構と遺物

縄文時代の遺物 ……51

4 考　　察

1） 古墳時代集落の変遷 ……89
2） いわゆる床下土壙について ……95
3） 古墳時代の土師器について ……96
4） 古墳時代以降の製鉄について ……98
5） 本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査 ……104

Ⅳ　上前原遺跡の遺構と遺物

1 遺構の概観 ……113

2 竪穴住居 ……115

3 埋没谷包含層 ……117

4 土　　壙 ……119

5 一括出土の遺物と考察

1） 縄文土器 ……120
2） 土製円盤 ……155
3） 石　　器 ……178
4） 縄文時代前期末中期初頭の遺物 ……184

V 結　　語 ……209

参考文献

執筆分担

Ⅲ－4－5）・大澤正己、 Ⅳ－5－2）・内間靖
Ⅳ－5－4）・新井　端、関本正彦
他はすべて　新井端の文責にある

表　目　次

第1表　周辺の遺跡地名表 ……19
第2表　本田・東台遺跡住居跡等出土土器観察表 ……72
第3表　本田・東台遺跡出土縄文土器観察表 ……85
第4表　本田・東台遺跡出土石器観察表 ……87
第5表　本田・東台遺跡住居跡一覧表 ……92
第6表　古代埼玉県の製鉄等関係遺跡 ……100
第7表　埼玉県下出土鉄滓の化学組成 ……111・112
第8表　上前原遺跡縄文土器観察表 ……163
第9表　上前原遺跡出土土製円盤観察表 ……176
第10表　上前原遺跡出土石器観察表 ……204

図　版　目　次

－ カラー図版 －

図版1 本田・東台遺跡景観・調査地点
図版2 上前原遺跡景観・調査地点
図版3 遺構
図版4 遺物

（本田・東台Ⅱ遺跡）

図版1　本田・東台遺跡景観85.11撮
図版2　表土除去・確認作業
図版3　調査状況・1号住居跡
図版4　2号住居跡床・床下土壙
図版5　3号住居跡・カマド
図版6　5、7、3号住居跡床、3、4号住居跡床下土壙
図版7　7号住居跡プラン 5号住居跡床
図版8　5、7号住居跡 8号住居跡床
図版9　6号住居跡遺物出土状況 6、15号住居床
図版10 9、12、13号住居跡床
図版11 10号住居跡床、床下土壙完掘状況
図版12 12、14号住居跡完掘状況
図版13 溝、A－3G・13号住居跡
図版14 切り合う住居群
図版15 4号住居跡東壁カマド
図版16 8号住居跡カマド周辺土器出土状態
図版17 8号住居跡カマド
図版18 11号住居跡床下土壙
図版19 井戸、13号住居跡床下土壙
図版20 2、3、5、6号住居跡遺物出土状態
図版21 6、8、9、10、12、13号住居跡遺物出土状態
図版22 11号住居跡遺物出土状態・深掘土層
図版23 2～5号住居跡出土土器
図版24 6～8号住居跡出土土器
図版25 9号住居跡出土土器
図版26 9～11号住居跡出土土器
図版27 12～13号住居跡、他出土土器
図版28 須恵器片・暗文土器、砥石、他
図版29 貝巣穴泥岩、石器
図版30 有溝石器、臼玉、管玉、土錘、他
図版31 石器、剝片

（上前原遺跡）

図版32 上前原遺跡上空
図版33 上前原遺跡景観 85、12、撮
図版34 表土除去　調査区
図版35 調査区設定
図版36 1号住居跡
図版37 1号住居跡内集石、第Ⅳ層上土壙群
図版38 第Ⅲ層、Ⅳ層上遺物出土状態
図版39 第Ⅳ層下層遺物出土状態
図版40 埋没谷
図版41 包含層遺物出土状態
図版42 第Ⅷ層出土縄文土器
図版43 第Ⅷ～Ⅳb層出土縄文土器
図版44 第Ⅳb～Ⅲb層出土縄文土器
図版45 第Ⅳb～Ⅲb層出土縄文土器
図版46 第Ⅲb～Ⅱb層出土縄文土器
図版47 第Ⅲa～Ⅲb層出土縄文土器
図版48 第Ⅱb～Ⅲb層出土縄文土器
図版49 第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器
図版50 第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器
図版51 第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器
図版52 第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器
図版53 第Ⅰ～Ⅱa層出土縄文土器
図版54 有孔鍔付土器、他
図版55 網代痕をもつ土器、他

図版56 土製円盤
図版57 土製円盤
図版58 土製円盤
図版59 土製円盤
図版60 礫　　器
図版61 礫　　器　スタンプ型石器
図版62 打製石斧
図版63 打製石斧　剝片
図版64 棒状石円盤状石敲打器　凹石
図版65 円盤状石
図版66 磨　　石
図版67 焼　　礫
図版68 焼　　礫
図版69 分析用鉄滓
図版70 鉄滓の顕微鏡組織
図版71 見学会・調査風景
図版72 整理作業風景

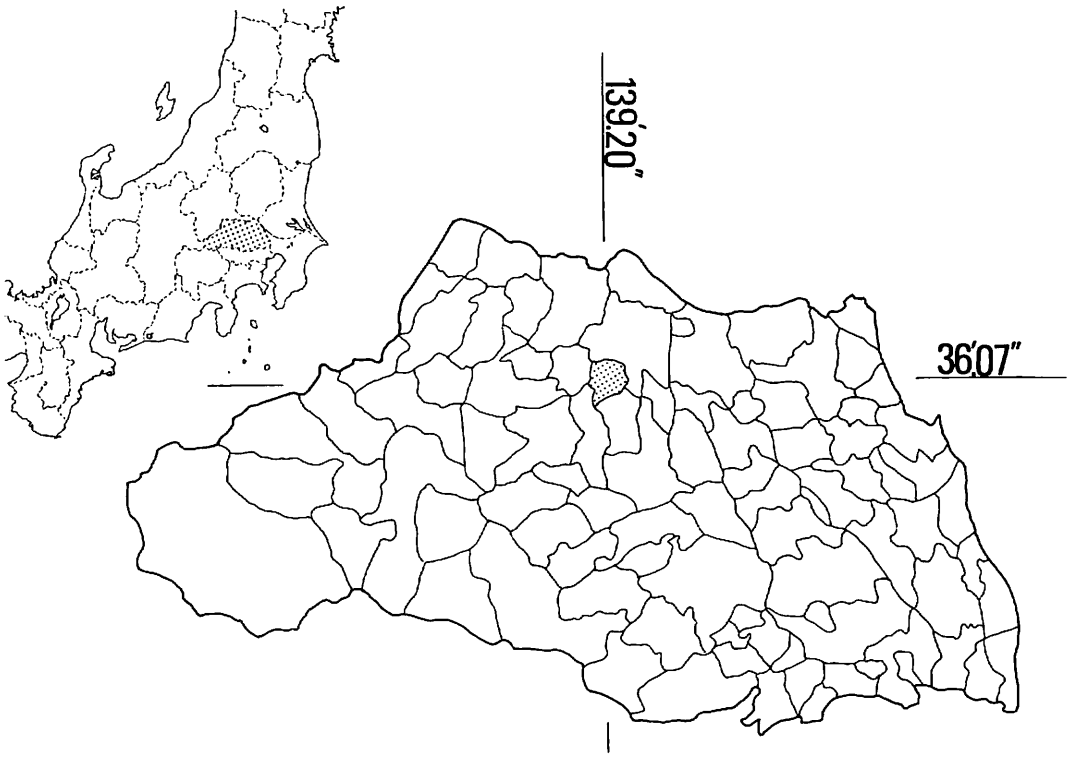
挿　図　目　次

第1図　遺跡の位図
第2図　本田・東台Ⅱ遺構全測図
第3図　上前原遺構全測図
第4図　大里郡南部の地形区分図
第5図　鉄塔用地地質柱状図
第6図　本田・東台Ⅱ遺跡地籍図と遺跡の広がり
第7図　上前原遺跡地籍図と遺跡の広がり
第8図　旧石器、縄文時代の遺跡
第9図　古墳時代の遺跡
第10図 本田・東台Ⅱ標準土層図
第11図 本田・東台Ⅱ 1、2号住居跡
第12図 本田・東台Ⅱ 2号住居跡掘方
第13図 本田・東台Ⅱ 3、4号住居跡
第14図 本田・東台Ⅱ 4号住居跡掘方
第15図 本田・東台Ⅱ 3、4号住居跡カマド
第16図 本田・東台Ⅱ 5号住居跡
第17図 本田・東台Ⅱ 7号住居跡
第18図 本田・東台Ⅱ 4、5号住居跡カマド
第19図 本田・東台Ⅱ 6、15号住居跡
第20図 本田・東台Ⅱ 8号住居跡
第21図 本田・東台Ⅱ 8号住居跡掘方
第22図 本田・東台Ⅱ 8号住居跡カマド
第23図 本田・東台Ⅱ 9号住居跡
第24図 本田・東台Ⅱ 9号住居跡
第25図 本田・東台Ⅱ 10号住居跡
第26図 本田・東台Ⅱ 10号住居跡掘方
第27図 本田・東台Ⅱ 12、13号住居跡
第28図 本田・東台Ⅱ 12、13号住居跡掘方
第29図 本田・東台Ⅱ 13号住居跡カマド
第30図 本田・東台Ⅱ A－3G
第31図 本田・東台Ⅱ 1、2、3号住居跡
出土遺物
第32図 本田・東台Ⅱ 4号住居跡出土遺物
第33図 本田・東台Ⅱ 5号住居跡出土遺物
第34図 本田・東台Ⅱ 6号住居跡出土遺物
第35図 本田・東台Ⅱ 7、8号住居跡出土遺物
第36図 本田・東台Ⅱ 9号住居跡出土遺物
第37図 本田・東台Ⅱ 10、11号住居跡
出土遺物
第38図 本田・東台Ⅱ 11号住居跡遺物分布
第39図 本田・東台Ⅱ 11号住居跡出土遺物
第40図 本田・東台Ⅱ 12号住居跡出土遺物
第41図 本田・東台Ⅱ 13,14号住居跡出土遺物
第42図 本田・東台Ⅱ A－3G出土遺物
第43図 本田・東台Ⅱ　井戸、他出土遺物
第44図 本田・東台Ⅱ　出土縄文土器
第45図 本田・東台Ⅱ　出土縄文土器
第46図 本田・東台Ⅱ　出土縄文土器
第47図 本田・東台Ⅱ　石製品・土製品
第48図 本田・東台Ⅱ　出土石器

第49図 本田・東台Ⅱ　住居跡主軸方位
第50図 本田・東台Ⅱ　住居跡変遷
第51図 床下土壙をもつ住居跡
第52図 本田・東台Ⅱ　坏の口径分布
第53図 古代埼玉県の製鉄等関係遺跡の分布
第54図 江南町等発見の製鉄関係遺構
第55図 上前原 1号住居跡・集石土壙
第56図 上前原Ａ－Ａ´土層断面図
第57図 上前原 1、2、3号土壙
第58図 上前原　土壙群
第59図 上前原　出土縄文土器
第60図 上前原　出土縄文土器
第61図 上前原　出土縄文土器
第62図 上前原　出土縄文土器
第63図 上前原　出土縄文土器
第64図 上前原　出土縄文土器
第65図 上前原　出土縄文土器
第66図 上前原　出土縄文土器
第67図 上前原　出土縄文土器
第68図 上前原　出土縄文土器
第69図 上前原　出土縄文土器
第70図 上前原　出土縄文土器
第71図 上前原　出土縄文土器
第72図 上前原　出土縄文土器
第73図 上前原　出土縄文土器
第74図 上前原　出土縄文土器
第75図 上前原　出土縄文土器
第76図 上前原　出土縄文土器
第77図 上前原　出土縄文土器
第78図 上前原　出土縄文土器
第79図 上前原　出土縄文土器
第80図 上前原　出土縄文土器
第81図 上前原　出土縄文土器
第82図 上前原　出土縄文土器
第83図 上前原　出土縄文土器
第84図 上前原　出土縄文土器
第85図 上前原　出土縄文土器
第86図 上前原　出土縄文土器
第87図 上前原　出土縄文土器
第88図 上前原　出土縄文土器
第89図 上前原　縄文土器出土分布
第90図 上前原　土製円盤出土分布
第91図 上前原　出土土製円盤
第92図 上前原　出土土製円盤
第93図 上前原　出土土製円盤
第94図 上前原　出土土製円盤
第95図 上前原　出土土製円盤
第96図 上前原　円形、棒状礫計測図
第97図 上前原　打製石斧計測図
第98図 上前原　焼礫計測図・出土分布図
第99図 上前原　石器計測図
第100図 上前原　出土剥片割合
第101図 埼玉県の前期末～中期初頭の遺跡
第102図 上前原　出土石器
第103図 上前原　出土石器
第104図 上前原　出土石器
第105図 上前原　出土石器
第106図 上前原　出土石器
第107図 上前原　出土石器
第108図 上前原　出土石器
第109図 上前原　出土石器
第110図 上前原　出土石器
第111図 上前原　出土石器
第112図 上前原　出土石器
第113図 上前原　出土石器
第114図 上前原　出土石器
第115図 上前原　出土石器
第116図 上前原　出土石器
第117図 上前原　出土石器
第118図 上前原　出土石器
第119図 上前原　出土石器

本田・東台Ⅱ　上前原

── 本　文 ──



江南町の位置

Ⅰ　発掘調査の契機と経過

1 発掘調査の契機

電源開発株式会社による送電線路は、新潟・群馬・福島県境の奥只見ダムより首都圏へ、電気を供給するため昭和34年（1959）に建設された。

この時、江南町も路線上に含まれたことから11基の鉄塔が町の南北を通過している。
建設後約30年、町の景観の一部に溶け込んでいた。昭和56年9月に電力需要の増大に応ずるため、電力容量を従来の720MWから7,530MWに高め、首都圏の増大する消費量をまかなう計画が伝えられた。完成すると、高さ約95mほどになり景観を一変する。

増強計画では、現在の送電鉄塔用地を拡幅して、新たに送電鉄塔を建設するというもので、新設を伴うものでなく既設ルートを利用するものであった。

江南町では、沖積地4基・台地上7基と該当し、45年の埋蔵文化財所在確認では、2ヶ所の遺跡と4ヶ所の散布地が確認されていた。この工事用地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、協議を行い60年6月に電源・県教委・町教委と現地確認のうえ遺跡の所在と取り扱いについて「遺構、遺物、分布の稀薄と考えられた4ヶ所については、試掘調査を実施した上で記録保存のための発掘調査を実施するかどうか検討する。遺物分布の濃密で、過去に調査歴のある2遺跡については、試掘をするまでもなく当初より発掘調査が必要」との確認を行った。

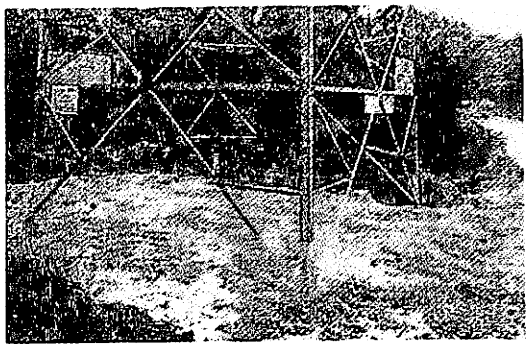
回答後ただちに、電源開発側より試掘を実施する準備と発掘調査の体制、積算について協力を求められ、基本的な調査体制として発掘・整理報告を含めた計画をつくり、町の事務執行に合わせた年度単位の事業に区分して実施することを伝えた。

試掘調査については、用地の立入準備ができた場所から随時、実施して行き、最終的に今回報告となった2遺跡について、初年度は発掘調査・次年度以降は整理・報告作業を行い、最終年度に報告書印刷という方針を確認した上で発掘調査を行うことにした。

60年7月に最終的な協議を行い、送電鉄塔建設用地内の2遺跡について発掘調査を行うことで江南町と委託契約が締結された。今回報告となった本田・東台遺跡と上前原遺跡である。

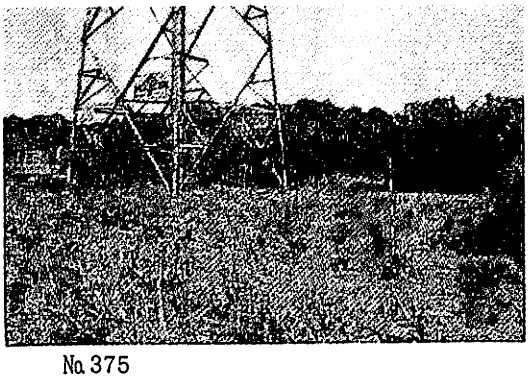
発掘調査については文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知が、電源開発株式会社からなされた。これに対し文化庁から、昭和60年12月18日付委保記第2－2346号の受理通知を受けている。

第1図　遺跡の位図　（黒丸印）1／50,000　　No.は　鉄塔番号

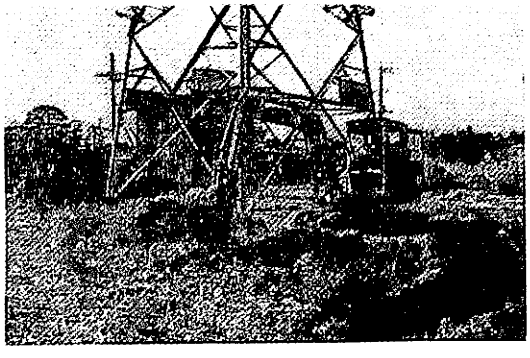


No.378

No.376



No.375



No.377

試掘調査について

No.375

地目は畑地だが荒蕪地となっており、雑木伐採後重機により用地をコの字形に囲むトレンチを配し、遺構・遺物の確認に当った。遺構・出土遺物ともなかった。立地は、台地中央、ローム層への移行が浅く30～40cmでハードロームへ達する。

No.376

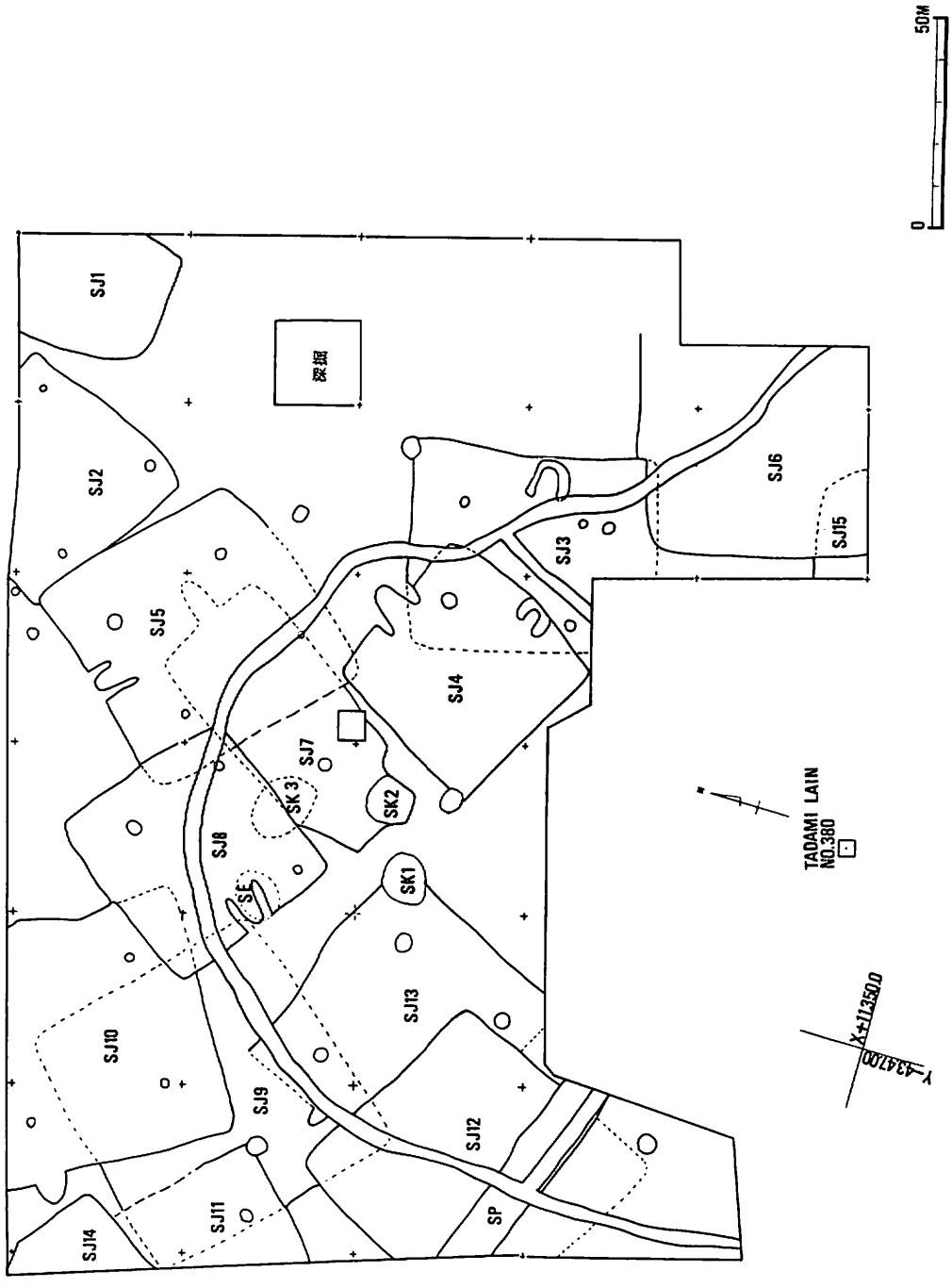
山林・台地上西側に谷津が入り込むが、区画整理区域内のため、埋め立てられている。重機よりトレンチを入るが、遺構・遺物とも検出なし。表土・ハードロームまでの層序が厚く1m程を測る。

No.377

荒蕪地　台地中央　位置的にも江南台地の南北中央付近　表土浅く　ハードロームまで30～40cm、遺構・遺物検出なし。

No.378

現状は山林で、西方の谷へゆるく傾斜している。表土下は、黒色土の薄層が存在し、ローム層となる。黒色土は、谷へ向うほど層厚を増すが、全く遺物を含まない。



第2図　本田・東台Ⅱ遺構全測図　（1／150）

2 発掘調査の経過

本田・東台遺跡 （Ⅱ次） 日誌 （抄）

10月1日（火）曇

調査区の設定・範囲を確認の上、テープ表示。

10月2日（水）晴れ

表土は浅く、30cm程度で多数の土器片・カマドが現われる。

10月4日（金）晴れ

表土除去完了、住居跡12～13軒現われる。土器は鬼高Ⅱ～Ⅲ式が多い。

10月7日（月）晴れ

住居跡確認 14軒　互いの切り合いが激しくなお数軒の増加が予想される。1、2号住居跡より発掘を進める。

10月14日（月）曇のち雨

2号住居床面下に土壙アリ。Ⅰ次調査でも多数確認されているため、他の住居跡もすべて床面下を精査することにした。

黒燿石製剝片出土。

10月16日（水）曇

5号住居跡貯蔵穴内より管玉検出。5号住にかかる。床下のプランが浮き上がり、7号住とした壁に継続していることが推定された。

7号住は、長方形を呈するようだ。また調査区を弧状に確認された溝状のカク乱は、鉄塔のアースであることがわかった。

10月21日（月）曇

重複の激しい11号住居跡床下の土壙より完形・破損した土器が多数出土。

10月23日（水）晴れ

3号・4号住居の切り合い確認。5号住居カマド、8号住カマドを切断。

10月26日（土）晴れ

7号住居跡より焼土塊・羽口・スラグ片多数検出。長方形プランの特殊性といい、小鍛冶住居の可能性が高い。

10月28日（月）晴れ

各住居ほぼ床面まで発掘を終える。残されたカマドを切開し図化にとりかかる。各住居跡とも多数の遺物を出土しており、同一型式内での切り合いも考えられるほど、住居構築がなされていた。

10月29日（火）雨

8号住居カマド脇に、一括遺物の据置状態の良好なセットを確認。4号住居カマド脇からも完形土器がまとまって出土した。

10月30日（水）曇

6号住居跡を切る新たな住居跡の存在を確認。15号住居とする。金井塚厚志氏見学に訪れる。（鳩山町教育委員会）

11月6日（水）7日（木）雨

雨のため、遺物の水洗い作業を行う。13号住居フク土よりナイフ型石器が出土していたことがわかる。

11月11日（月）晴れ

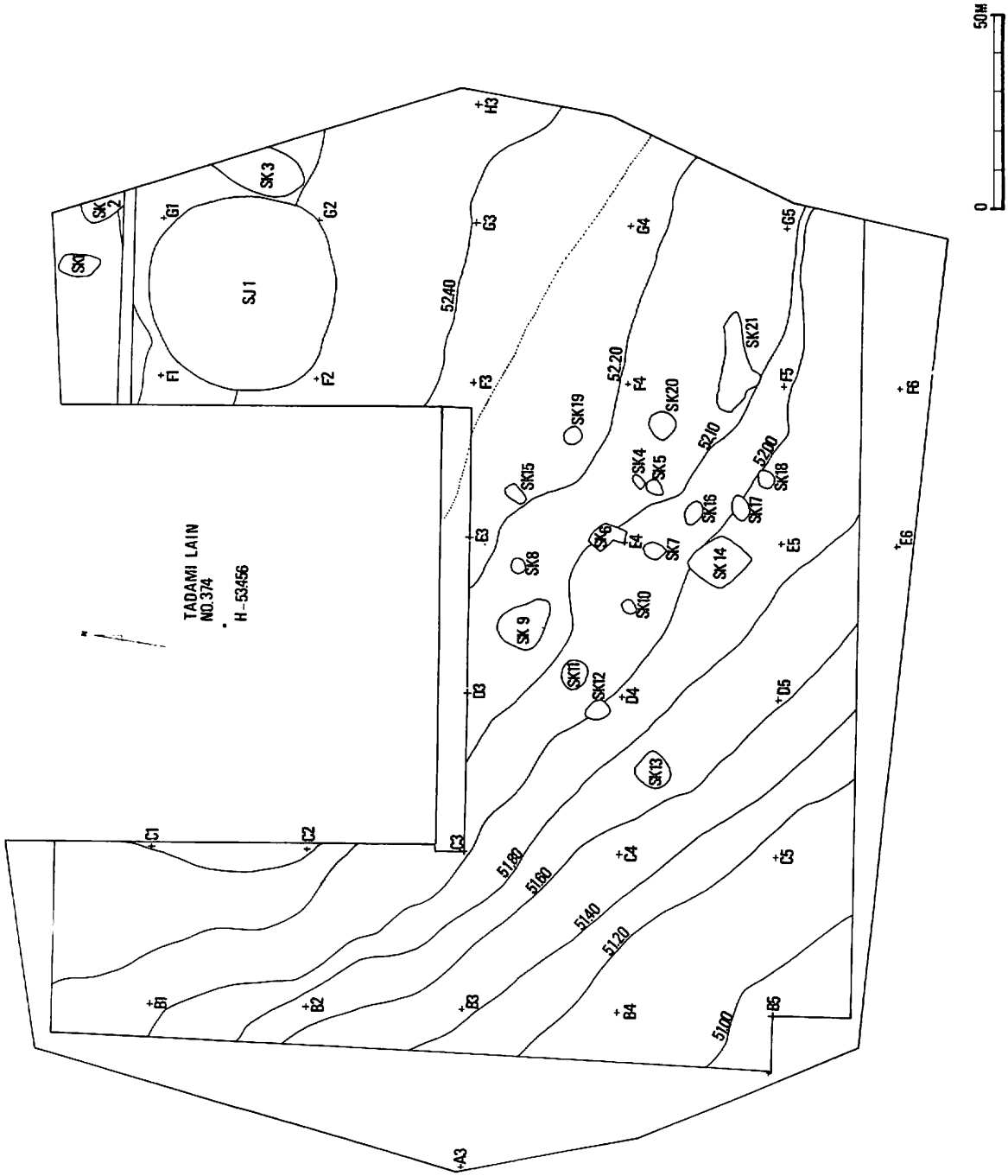
小学生を対象とした遺跡見学会を開く。
江南南小学校5年生、50名ほど見学。
未実測部分の実測図化を急ぐ。

11月13日（水）晴れ

完掘状況の実測を始める。
木村俊彦氏見学に訪れる。（滑川町教育委員会）

11月19日（火）晴れ

現場作業をすべて終え、発掘を終了する。
風が強く、雲も無く晩秋いよいよ深まる。



第３図　上前原遺構全測図

上前原遺跡日誌（抄）

11月20日（水）曇

本田・東台遺跡より移動し、表土除去を開始。桑を抜根し、排土地区内で焼却。表土を除くと、多数の縄文土器片が現われる。全域が黒色土でおおわれ、埋没谷・包含層の予想通りとなる。

11月22日（金）曇

表土をすべて除去し遺構確認作業に入る。北東隅にローム層が良好に検出され、これを掘り込む遺構・土壙が明瞭となる。調査区の大半は、黒色土の純層で、多量の縄文土器片を含んでいる。ボーリング探査では、最深部まで2.5m程堆積していることがわかった。

11月25日（月）晴れ

住居跡1軒、土壙3基検出。発掘を進める。埋没谷は地形のとおり、東南方向に開口する。土壙より十三菩堤式土器出土、黒燿石片が多数検出、注意しながら発掘を進める。

11月29日（金）快晴

江南北小学校5年生、（約60名）

発掘調査見学

12月2日（月）晴れ

埋没谷にかかる地区を1m方眼に設定。B.I.G.より実測を始める。土器・石器片に混じり土製品も出土している。

1号住居内集石、検出。

12月9日（月）晴れ

埋没谷のトレンチから、Ⅷ層の堆積層を確認。遺物の掘り下げを早める。B－3～E－5、第Ⅱb層の掘り下げを始める。

12月12日（木）晴れ

前日の大霜。今日も大霜、調査区壁面凍結して剝落する。午後足場がゆるみ滑べる。午後より第Ⅲa層を掘り下げる。

12月14日（土）晴れ

調査が遅れているため本日も作業を行う。

12月18日（水）晴れ

Ⅲb層を掘り進む。埋没谷斜面が現われ始める。土壙群のプラン検出。

12月19日（木）晴れ

Ⅲb層一加曽利E式より勝坂式土器が、多数を占めるようになる。宮島秀夫氏見学に訪れる。（東松山市教委）

12月23日（月）晴れ

Ⅳ層に至る埋没谷斜面に沿って、遺物が出土する。航空写真のため準備を行う。

12月24日（火）晴れ

上空の風強いが空撮実施。Ⅴ、Ⅵ層を掘り進む。撚糸文土器・条痕文土器が出土し始める。

12月27日（金）晴れのち曇

半日仕事を行う。今年中の完掘は、無理となった。雪・凍結を防ぐシートがけを行い、仕事納めとする。

1月6日（月）晴れ

新年度の掘り始め、Ⅶ層に達する。早期撚糸文土器の出土が認められる。調査区の地形測量を並行して行う。

1月8日（水）晴れ

埋没谷の最下面に達する。撚糸文土器15～20片が集中して出土。G2・G3・G4グリットに旧石器調査土壙を設定する。

1月10日（金）晴れ

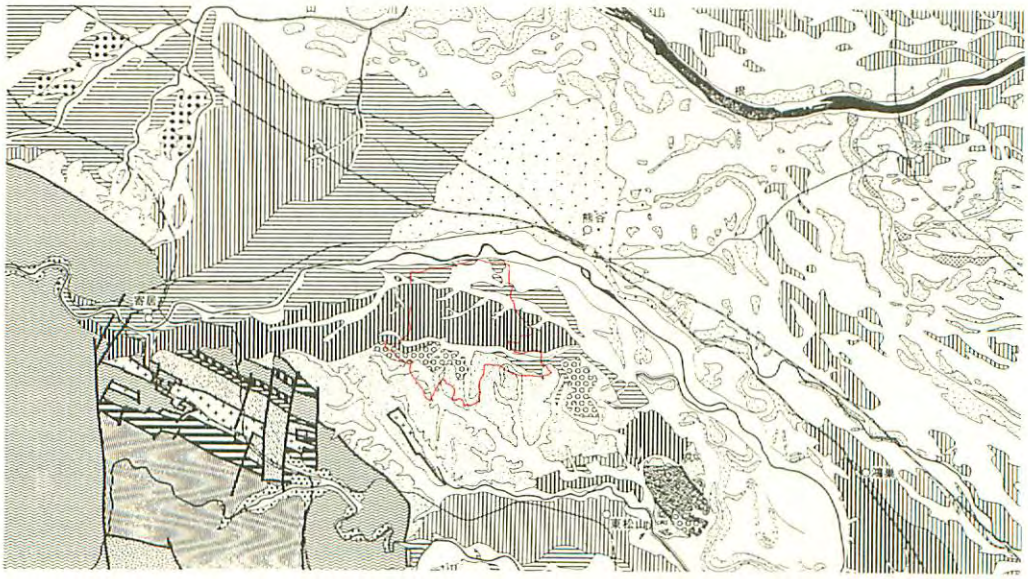
旧石器は検出できず。図面等を確認のうえ、現場作業を今日で終える。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

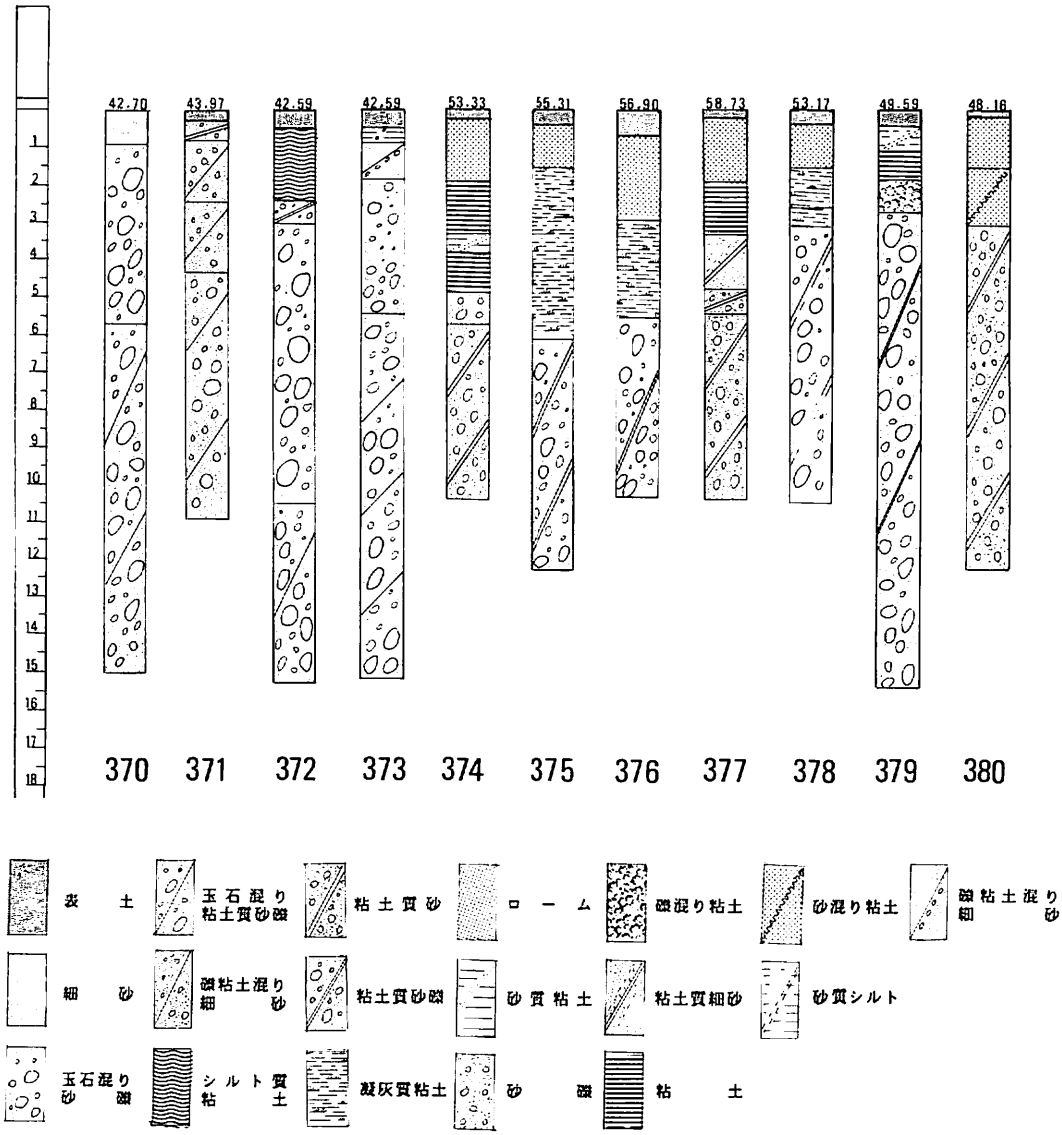
1 遺跡の立地

本田・東台、上前原の両遺跡は荒川の右岸扇状地である江南台地上の南北縁辺にそれぞれ立地している。台地の起源、地質についてはようやく研究が進められ、いくつかの報告がある。(文1) それによると、江南台地は基盤とする第三紀層上に秩父古世層を起源とする砂礫層を乗せる荒川中位段丘に相当する。そして、この砂礫層上の堆積面が台地面の基本となっている。東西17km、南北3kmの長方形をした地域である。荒川に面する北縁は10～20mの急崖となって沖積底地へ続く。南側は比企丘陵と接するが地形、地質的に判然と区別される。この境界部分を流れる和田川は台地長軸と平行して走る台地内でもっとも大きい河川である。海抜高度は100～40mで西部から東部へと漸次低下する起伏の少ない平坦な地形面を形成しているが、台地内には小規模な開析谷がいくつも発達している。南縁に位置する本田・東台遺跡も、北縁に位置する上前原遺跡もこれらの開析谷に面した位置にあり、同様な場所での遺跡立地の割合はかなり高い。

江南台地の地質概要は、表層部に腐植土を乗せ、以下ローム層が堆積し、ローム層の下に粘土層、粘土層の下に台地の基本となる砂礫層が発達している。砂礫層の層厚は8～20m程と推定されており、姥ヶ沢地点での露頭中にはシルト層を挟んでいる部分もある。表層部の腐植土は耕作土と混ざる部分もあるが台地全域で確認される。またローム層も下位の粘土層と整合する堆積で台地全域に見られる。このローム層は上部を大里ローム層に、下部は新期ローム層に対比され、大里ローム層は南関東の立川ローム層との対比が考えられている。粘土層は灰白色の川本粘土層とされ、台地全域に良く発達しており2～5mの層厚を測る。これは下末吉ロームに対比されるが粘土化の成因についてはまだ良く判っていない。櫛引台地では、本層は砂礫層との互層、粘土混じり礫層とやや異なったあり方を見せている。

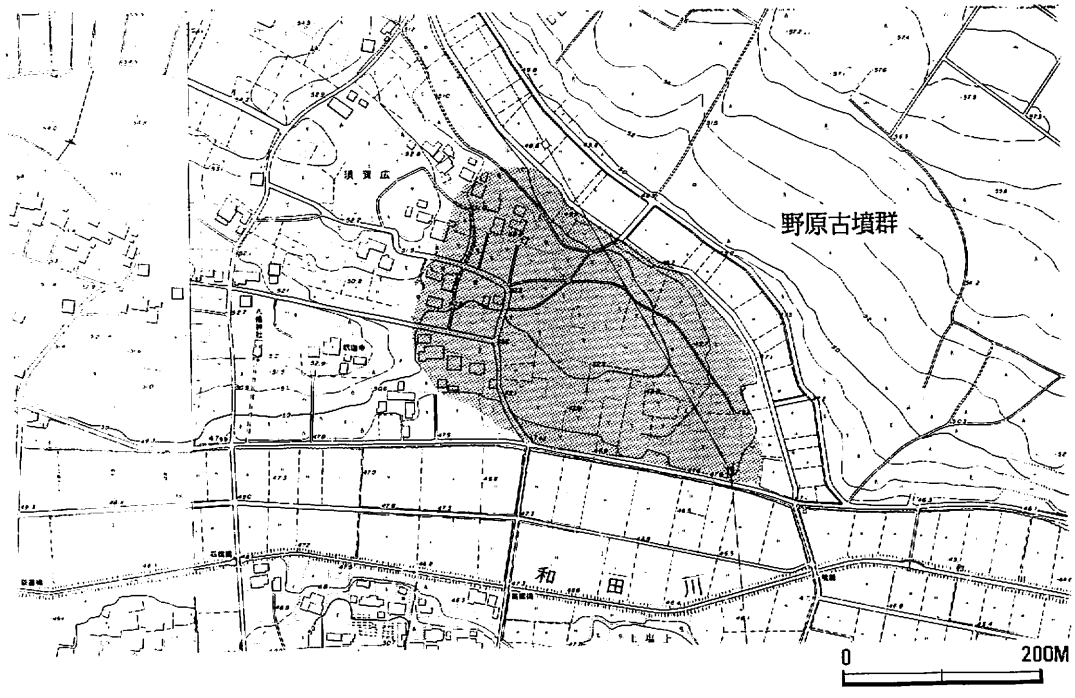


第4図　大里郡南部の地形区分図



第5図　鉄塔用地地質柱状図

本田・東台遺跡では、Ⅰ、Ⅱ次調査で井戸2基を調査したがいずれもこの灰白色粘土層中で掘込みを止めていた。江南台地での現在使用されている井戸の平均的な深さは6～9mとされこれは灰白色粘土下の扇状地礫層まで掘り込んでいることが窺われる。一般的な台地の地下水位と異なり、江南台地の地下水位は浅いと言える。ローム層中、礫層中の水を集めているのだが、雨量との関係が密接で、旱魃等の自然条件の影響を受け易い。また地下水の涵養は板井付近から成沢へかけての流動が顕著に見られる。これらの源は台地の南から西に位置する外秩父山地、比企丘陵からと考えられている。



第6図　本田・東台遺跡地籍図と遺跡の広がり

本田・東台遺跡の広がり

本田・東台遺跡は名の示すとおり、本田地区と東台地区に広がる大規模な集落跡である。

本遺跡は、江南台地と比企丘陵を区分する和田川の流域に散在する集落の一つもである。左岸の江南台地と右岸の比企丘陵には、旧石器時代以来各時代にかかる遺跡が重複している場合がいくつかある。これらの遺跡でも発掘調査がたびたび行われ多くの成果を得ている。本遺跡でも現在まで3回の発掘調査が行われた。その結果、古墳時代中～後期を中心とする住居群・掘・土壙等が発掘されている。他に、旧石器・縄文土器も出土しており、各時代に渡る遺構が重複しているようだ。

第1回の調査は、昭和43年3月に奥田直栄氏の指導により、学術調査を目的として、学習院大学附属高等科史学部の手によって行われた。1287㎡の調査から6軒の住居跡が検出されたというが未だ詳細の報告を見ない。

第2回の調査は、江南町教育委員会が農道改修に際し、事前調査として昭和58年に実施した。

遺跡の東西を斜断する幅8m、長さ約400mに達する道路敷下に42軒の住居群が現われ、鬼高Ⅰ～Ⅵ式の土師器を中心した多量の遺物を出土している。

第3回目の調査は、本報告の鉄塔用地で、遺跡の東南隅部分に当たる。詳細は、本報告のとおりであるが、15軒の住居群が激しく重複して検出された。

現在までの発掘調査と地形、現地の表採により遺跡の範囲を推測すると、台地は現在の道路面付近から、沖積地へ緩傾斜をなして移行する。ここが南限となる。

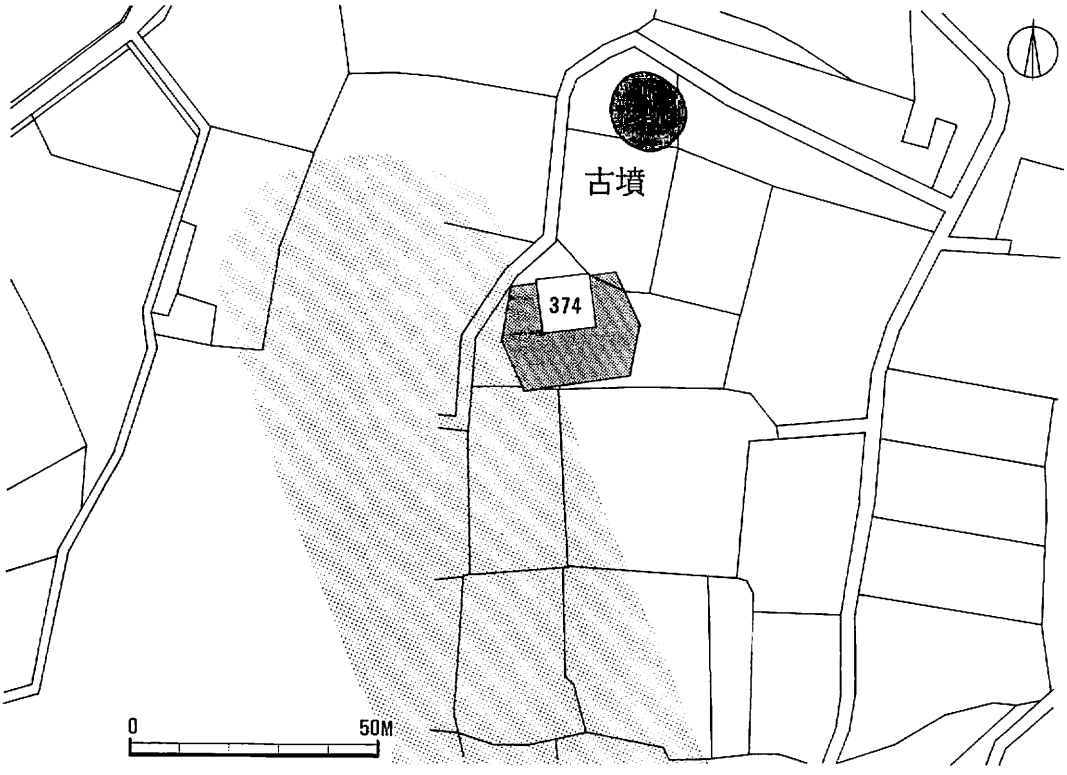
東は、和田川へ開口する狭長な谷淵と呼ばれる谷によって限られ、野原古墳群の立地する台地と区分されている。北は、かなり広い範囲に散漫な土器分布が認められ、伝兵衛沼に達する道路までは確実に伸びる。現在、集落配水の流れる字宮内から松原へ続く浅い谷が入り込んでおり、この埋没谷部分を東限としたい。面積的には約60,000㎡の広範囲に及び、おそらく百数十軒に及び住居群が埋蔵されていると考えられる。散布遺物から、中心となる時代は古墳時代～平安時代であろう。

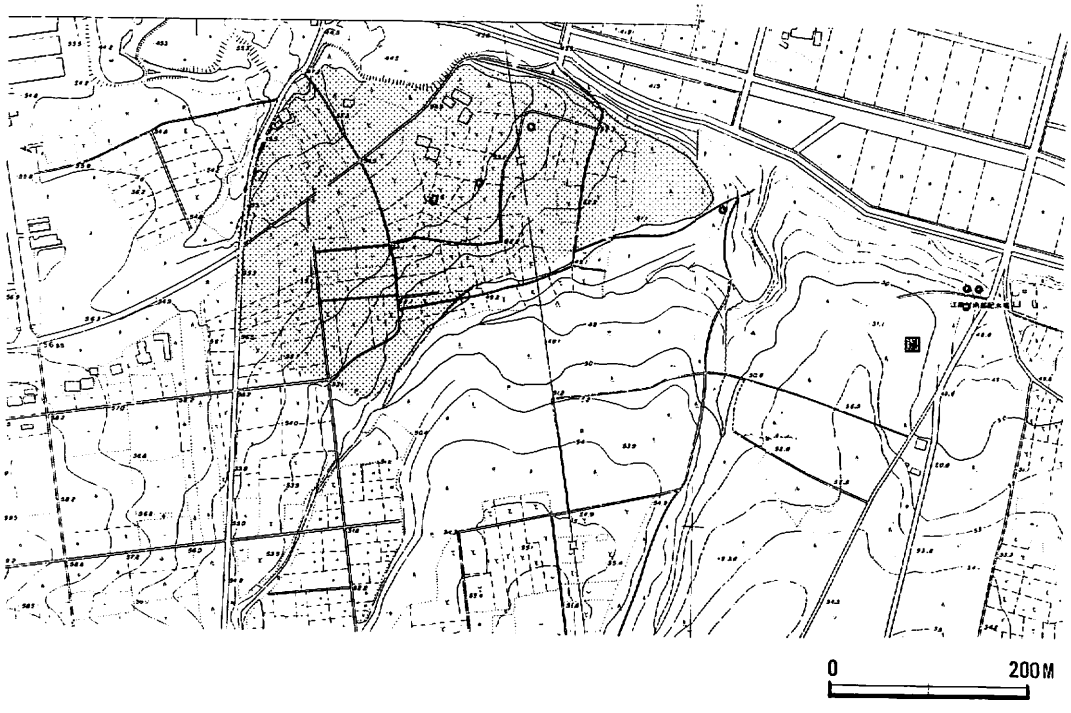
これは、隣接する後期群集墳として時期の明らかな野原古墳群と同時並行して存在するため、首肯できる背景ではなかろうか。

野原古墳群は立正大学の発掘調査から、6C中～7C代にかけての造営が考えられている。古墳時代中頃～後期の集落の様子を想像すると、和田川に面した南側と谷津の沖積地では米作りを行い、東・北東側の山林は古墳を造営する墳墓地としていた。居住の地は、字東台に激しい重複が見られるところから、中心となるだろう。伝兵衛沼に至る字本田は、やや住居群が粗になるらしく、畑地やこれを囲む疎林が広がっていたのではないだろうか。生活圏の同心円は、東台を中心として、生産地が東・南・西に広がりこの円の外側に古墳が作られている。

「踊る埴輪」の副葬された前方後円墳に眠る首長は、このような生活圏から輩出しているのだろう。

本遺跡は、土地利用の殆どが畑地である。耕作にもよるものであろうが、各調査地点の遺構までのフク土が、30～50cmと比較的浅いため、遺構の遺存状態が良好でない。現状のままの土地利用ならば、これ以上の遺構への影響も少ないと考えられるが、削平・掘削を伴うような土地利用では、遺跡の内側から破壊が進むおそれがある。畑地の区画は従前のままであるが、区画整備の意向もあり、保存に関しては注意が必要である。





第７図　上前原遺跡地籍図と遺跡の広がり

上前原遺跡の広がり

現在、荒川へ広がる沖積地を臨む江南台地の北縁一帯は、悠久の荒川の流れに削り取られた美事な直線をなしている。この台地縁辺から台地南西方向へ開折している2つの大きな浸食谷がある。最奥部にある溜池の名を取って西から仮に、植木谷、柴谷と呼んでおく。この谷の西側には本遺跡を始めとして多数の散布地がある。

本遺跡は柴谷に面しており、南西へ伸びる谷筋により西と南側を区切られている。北は台丘崖であり、眼下には荒川の茫漠たる流れが、どこまでも続く葦原の中に広がっていたはずである。

西は谷筋とともに3km以上も続く平坦な台地面で、本遺跡には萩山南遺跡と東原遺跡が隣接している。両遺跡から続く平坦な地形は微地形の変化がうかがえ、浅い埋没谷等による遺跡群の区分が推定される。

本遺跡で検出された埋没谷は、柴谷に入り込む浸食谷の先端樹枝部と考えられ、この小規模な谷に面して集落がつくられていたようだ。

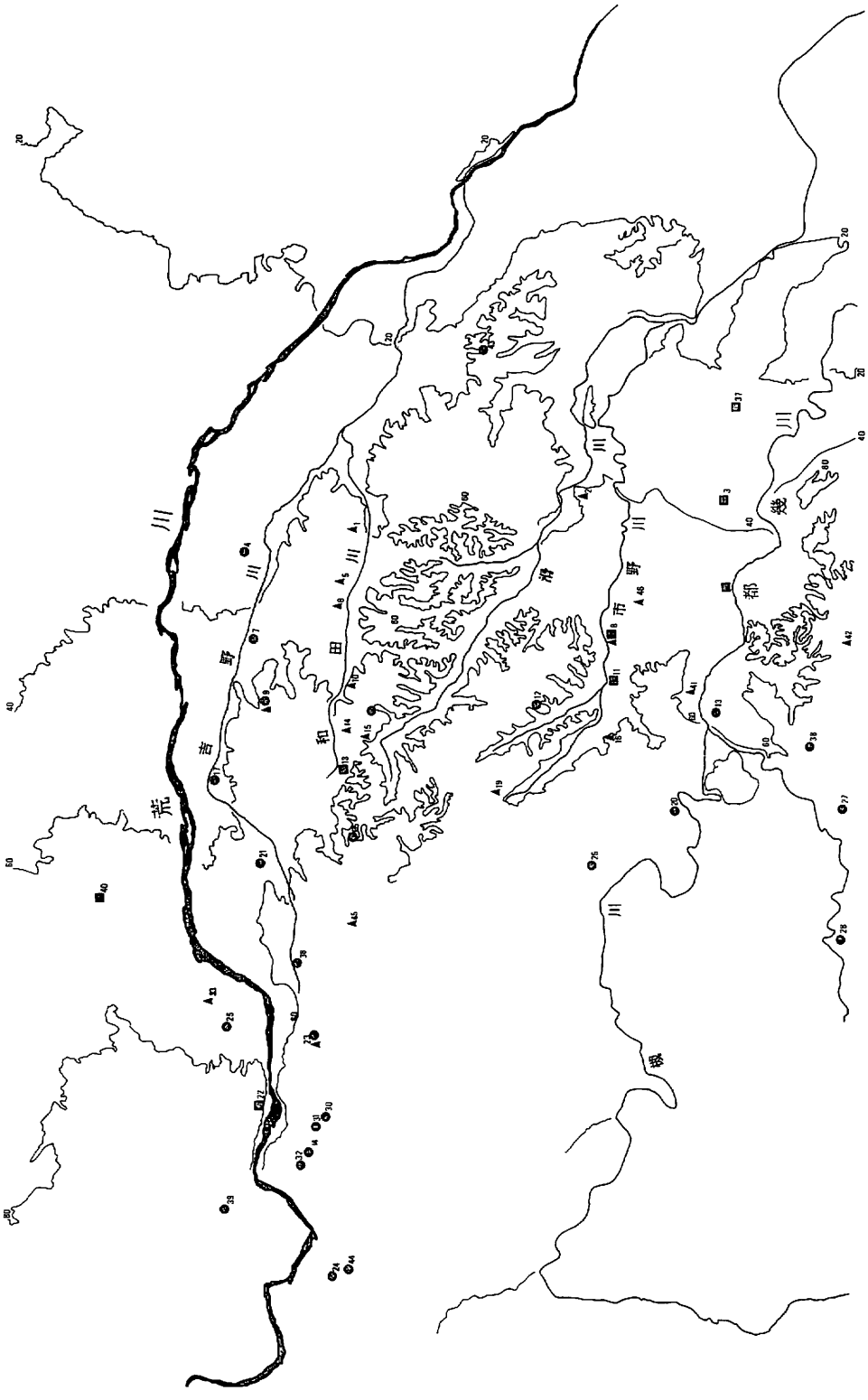
本遺跡の東方では、50×100m、西側でも80m×120mほどの平坦面があり、30×100mほどと考えられる埋没谷をとり込むような集落配置が推定される。そして廃棄の場として埋没谷が利用され、大量の土器、石器が遺棄されていた。西側に隣接する東原遺跡は、ほとんど壊滅してしまい、わずかな出土遺物が伝わっているにすぎないが、本遺跡に併行し継続する時期と考えられる。

萩山南遺跡では、有舌ポイントを始め井草、夏島式土器が採取されており、本遺跡より先行し、併行するだろう。

本遺跡は、埋没谷の最下層に井草・夏島式から始まり前期末〜中期全般に渡って全盛を迎えたようだ。本遺跡の発掘調査は遺跡全体の10%にも満たない小規模な面積であるため、全体像を掴むにはとうてい至らないが、平坦と思われた台地上の微地形に富んだ立地を巧みに利用していたことが、窺える。また同一支谷に分布する各地点の遺跡とも関連が考えられ、当時の生活圏を踏まえた遺跡群として今後の把握に努めたい。

縄文時代以降は、わずかに古墳時代の遺物が出土しているが、周囲には、古墳、古墳跡が認められた。これは今回の調査に伴って確認されたもので3基以上の存在が考えられ、これに対応する古墳時代の集落も周囲に予想される。現状は畑地のため、表面採取等から、上前原地点の西南方向に立地している可能性がある。また谷を隔てた成沢地区には、五領期の住居群を含む集落がある。これに重なって一辺22mの方墳を中心に分布する行人塚古墳群があって、上前原遺跡と対峙している。

1987年11月に上前原地区一帯の桑をすべて抜根、麦播の準備作業が行われた。微地形が現わとなり、各地点から遺物の散布が多量に検出された、調査部分は台地南面から侵入する埋没谷黒色土が良好に観察された。また住居跡等の位置が判明する場所もあった。また台地開口部の台地先端には径20m程の円墳が確認され、遺跡の広がりは台地面を広くとらえる必要がある。



第8図　旧石器、縄文時代の遺跡

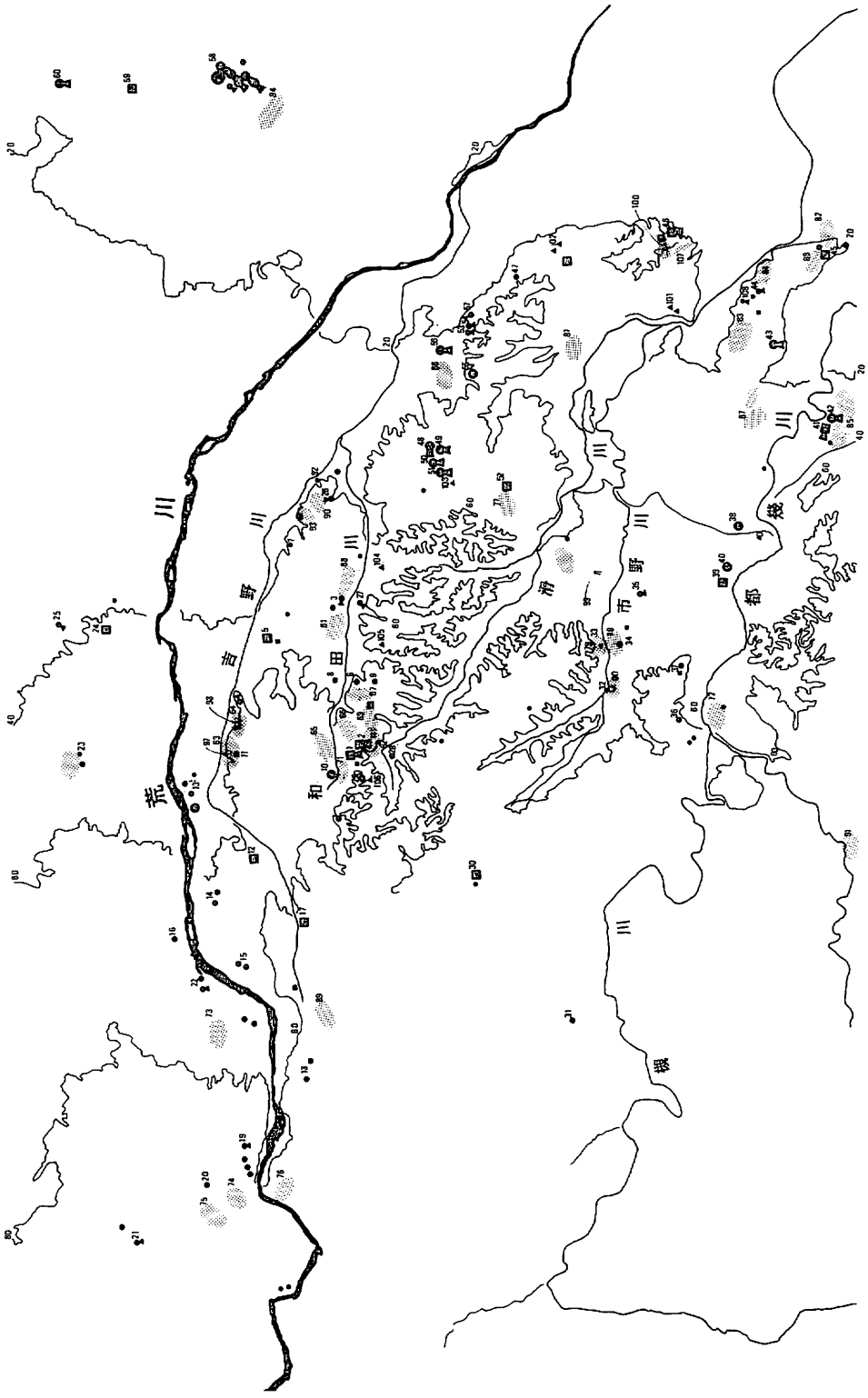
2 周辺の遺跡

江南町の歴史を語るとき対象となる地域はどこまでか。この範囲を決めること自体が一つの解明すべき問題となってしまう。埋れた人々のいとなみの広がりを現在の私達の生活のものさしで決めてしまうことができない。これは、はっきりしている。従来から採られているように自然環境によって区分される地域の上に、証拠としての遺跡、遺物を1つ1つ重ね合わせ総合的に把握することが妥当であろう。このためどんな小さな遺跡の断片でもおろそかにできない理由がここにある。

人々の生活は時代と共に栄枯盛衰を繰り返していた。遺跡の断絶、出現をたびたび見ることができる。周辺地域との比較は時代の推移、特色を考える上で重要だ。当然江南町の各時代の姿を考える時、この範囲には時代によって差がある。本文では縄文・古墳時代を取り上げ江南町を考える1例としたい。

旧石器時代〜縄文時代の遺構、遺物は本田・東台、上前原両遺跡で出土しており、周辺地域での発見例も増加している。本田東台遺跡からはいわゆる茂呂型ナイフ形石器が出土したが、フク土中のため層位的な確認はされてない。このようなナイフ形石器は他に荒神脇遺跡（文2）、氷川遺跡、宮脇遺跡（文3）、南大塚遺跡（文4）、大岡遺跡（文5）、打越遺跡（文6）で採取されている。牛無倶利遺跡（文7）、塩西Ⅱ遺跡からは、発掘調査によってナイフ形石器の出土層位が明らかとなった。牛無倶利遺跡、塩西遺跡ではブロックユニットも確認され、旧石器文化の生活が江南台地上に営まれていたことが明らかとなってきた。

縄文時代草創期の資料は、宮林遺跡、打越遺跡に質・量とも豊富な出土例がある。江南町では尖頭器、有舌尖頭器等が採取されており該期の遺跡が見つかる可能性が高い。花見堂遺跡（文8）、向原遺跡（文9）等でも採取例があり比企丘陵、松山台地域にも旧石器〜縄文草創期遺跡の増加が予想される。縄文早期の調査例は江南町内に多い、井草、夏島、稲荷台式の撚糸文系土器群と付随する多量の礫器、押型文土器の出土は、塩前遺跡（文10）、南方遺跡、宮脇遺跡、上前原遺跡、船川遺跡、原谷遺跡にある。表採例を加えるとさらに倍増する。周辺では打越遺跡、寺山遺跡（文11）とがある。本期の遺跡は江南台地域にかなりまとまっていたようで、南方、船川遺跡では住居跡も検出されている。また押型文土器もこれらの遺跡に多量に伴う例があり、客体的にしか出土しないと云われる状況と差異を感じられる。沈線文系土器は田戸下層式が本田・東台遺跡、越畑城跡（文12）にあり、三戸式は船川遺跡に検出されている。三戸式例は周辺では稲荷原遺跡（文13）にあり、旧石器時代以来、押型文系土器のあり方においても大宮台地周辺と類似する様相を示す。条痕文系土器群は本田・東台、上前原遺跡の他南方遺跡舟山遺跡（文14）があり、野島期の住居跡は金平遺跡（文15）に、鵜ヶ島台期の住居跡は虫草山遺跡（文16）にそれぞれ検出されている。前期にかかる遺跡は江南町内では採取資料のみで住居跡の調査例は無い。関山期は、平松台遺跡（文17）以外に調査例がほとんど無く、黒浜〜諸磯期にかかる遺跡の増加、増大が指摘されている。前期後半〜末には遺跡の調査・遺物の採取が無くなるが、上前原遺跡から前期終末に位置付けられる十三菩提式が出土している。本期の特徴として出土土器の分量は極わずかであるが直後型式の五領ヶ台式、下小野式の中期初頭の土器群を伴出しており、本地域では稀少例であった。調査例の良好な例が大宮台地



第9図　古墳時代の遺跡

にあり、江南台地でのあり方を考える上でたいへん参考になる。前期までの遺跡のあり方は中期になると全く異なり、広場を持つ集落がそこここに現われ、さらに拠点的集落と言える例も出てくる。行司免遺跡（文18）、上本田遺跡（文19）は良い例で勝坂期～加曽利E期にかかる大集落である。一般的集落は上前原遺跡・南方遺跡・中郷遺跡（文20）・舟山遺跡、台耕地遺跡（文21）・衆生ヶ谷戸遺跡（文22）・神山遺跡（文23）・平倉東国寺遺跡（文24）がある。また沖積地の自然堤防上では万吉西浦遺跡（文25）に加曽利E式土器の埋甕がある。江南町内でも勝坂式～加曽利E式期の土器が最も多く散布しているようだ。しかし、中期終末以降遺跡は減少傾向を示し、続く後期も同様である。上前原遺跡で称名寺式・堀之内式土器が検出される以外ほとんどない。後期～晩期は中期以来の集落減少傾向をここでもみることができる。わずかに橋屋遺跡（文26）、花見堂遺跡・屋田遺跡（文27）・北田遺跡（文28）がある。北田遺跡は和田川の右岸台地に位置し、下流の塩西遺跡でも同時期の土器が出土しているため増加を予想できるが規模は小さいだろう。一方、台地下の大里沖積地の中から後、晩期遺跡が検出される例が熊谷市・深谷市等にあり、遺跡の台地下の進出はさらに明らかにされるだろう。東西に伸びる起伏の少ない台地上には南側に連なる外秩山地・比企丘陵の山陵より湛養される地下水・雨水により、開析谷を開げ、湧水は豊かである。この江南台地上での生活に加え、北に広がる荒川と氾濫原と化す沖積地に島状に出来上がった自然堤防地での活躍と、縄文人の生活舞台は考える以上に広範に及んだろう。

江南台地上と周辺地域の古墳時代初頭の集落は現在のところ塩西遺跡・丸山遺跡・吉岡配水場内遺跡（文29）等の発掘例があるにすぎない。隣接する比企丘陵や、松山台地の発掘例より少ない。比企丘陵・松山台地では北田遺跡・花見堂遺跡・沢口遺跡（文30）・番清水遺跡（文31）・五領遺跡（文32）・下道添遺跡（文33）等から集落の調査例が蓄積されている。これら4世紀～5世紀までの集落・墳墓からは、非在地系土器とされる近畿地方・東海地方系統の土器が多数出土している。特に五領遺跡では、器台・坩・坏・台付甕などの古式土師器の型式名となっただけでなく、周辺地域に例を見ない大規模な集落をつくり上げており、出土土器も近畿地方的な要素を強く持っている。五領遺跡の北方、市野川を挟んだ丘陵上に山ノ根古墳（文34）が立地しているが、本墳は当地方で最も古く遡る古墳であり、しかも全長65mを測る前方後方墳である。古式の前方後方墳は在地的な要素に加え、非在地的な要素を伴う例が多く、高坂台地に立地する諏訪山29号墳（文35）も東海系の大廓式土器を出土していた。山ノ根古墳は市野川・滑川が比企丘陵より抜け出す位置の丘陵頂部に立地し、この滑川を溯った最奥部の丘陵上に前方後方墳を主体に持つ塩古墳群が立地する。近辺の調査からS字口縁台付甕、小型器台など非在地系土器を出土する塩西遺跡・丸山遺跡・船川遺跡・北田遺跡・行人塚遺跡等が蓄積されつつある。5世紀以降の集落は前代ほど検出されていないが、久米田遺跡（文36）・屋田遺跡・塩前遺跡・行司免遺跡が前代の集落圏外に広がっている。しかし、まだ少数と言える。塩前遺跡の場合、和泉期のカマドを持つ住居跡の発見があり、前代からの発展的な集落の継続を考えたい。しかし、塩地域に集中して見られる4世紀～5世紀代の遺跡から6世紀代の集落を出現させる前に少なからず稀薄な時期がある。あるいは主体となった集団が異なっているのかもしれない。本田・東台遺跡は、塩古墳より東に2km離れた和田川右岸に位置するが、和田川はさらに流下し雷電山古墳（文37）の丘陵裾を洗い吉野川と合流し現在の荒川へそそぐ。遺跡範囲の頁で

述べたとおり、本田・東台遺跡は大規模な遺跡であり、対面する野原古墳群の被葬者たちの集落にほぼ間違いないと考えられる。現在のところ、塩古墳群の首長と野原古墳群の首長との間に集団・世代の連続性をみることはできない。この問題は今後の調査によって塩古墳群、野原古墳群、本田東台遺跡等の造営開始時期・終末時期を解明する必要がある。

6世紀〜7世紀代の集落は、本田・東台遺跡を始めとして江南地域には岩比田遺跡（文38)、塩西遺跡、野原久保遺跡・宮脇遺跡に調査例がある。しかし、まとまった住居跡の発掘例は本遺跡の他に例がなく、当地方鬼高期の集落の実態が明らかとなった。比企丘陵・松山台地・高坂台地では鬼高期の住居群は多数調査され、舞台遺跡（文39）では100軒に及ぶ住居群が発掘され、出土した多量の土師器は比企地方の土師器編年の資料として重要である。この他に五領遺跡、番清水遺跡等にも良好な資料がある。江南町に隣接した鹿島遺跡（文40)、大谷遺跡（文41）にも鬼高期の住居跡がある他、調査例は増していなかったが今後の増加が予想される。

集落に見合う古墳群は本田・東台遺跡の場合、野原古墳群である。野原古墳群は前方後円墳を含む20数基の円墳で構成されている。この前方後円墳を含め、過去2回の発掘調査が行われており、前方後円墳から2箇所の石室が確認された。前方部から片袖型胴張をもつ横穴式石室が、後円部からは凝灰岩の切石を用いた片袖型横穴式石室が明らかとなった。両石室はすでに盗掘を受けていたが鉄鏃等の若干の遺物が出土した。金井塚良一氏（文42）は前方部の石室は後円部の石室より新しいとし、6世紀末の築造を考えられているが、亀井正道氏（文43）は7世紀前半としている。周辺に2〜3基を単位として分布する円墳群については発掘調査を行った坂詰秀一氏（文44）により、主体部構造の変遷と共に7世紀前半代から8世紀前半代にかかる築造と考えている。しかし正式な報告は未だ無く、詳細な検討を望みたい。江南地域には6世紀終末とされる伊勢塚古墳があった。野原古墳群と同様の規模を持つ前方後円墳であった。同様に、野原古墳群に対面する円照寺古墳群中にも前方後円墳がありほぼ同時代と考えられている。これらの前方後円墳築後、比企丘陵でも江南台地でも前方後円墳の築造は行われていない。かわりに鹿島古墳群、立野古墳群など円墳群と吉見、黒岩等の横穴墓群（文45）等が築造されていく。一方7世紀前半にはすでに滑川町に寺谷廃寺が建立されていた。和田川、滑川流域の開拓は4世紀後半より塩地域から始まっており、6世紀代より本田東台遺跡の集落が開かれる。これは、前代からの不断の開拓が続けられていたのであり、農業生産の進展や、家父長層の台頭など在地での自立、発展を考えることができる。

また金井塚良一氏はこの時期に渡来系氏族の活躍とその文化産業的な影響力を考えており、具体的には推古期以降の東国支配の中核として派遣された壬生吉志氏を上げている（文46）本田東台遺跡に集落を作った時期は北武蔵的な目でみても大きな変化のあった時期を重なっており、先進性のうかがえる地域の中心的集落として、重要な意義をもっている。

遺跡地名表（縄文時代）

番号	名　称	所　在　地	種　別	時　期　そ　の　他
1	荒　神　脇	江南町野原	集落跡	撚糸文、ナイフ型石器
2	打　　越	滑川町打越		爪形文、微隆起線
3	雉　子　山	東松山市石坂		称名寺式
4	西　　浦	熊谷市万吉西浦	埋カメ	縄文、加曽利Ｅ式
5	宮　　脇	江南町野原宮脇	住居跡１	旧石器、縄文、古墳、スクレイパー
6	本 田 東 台	江南町須賀広本田・東台		ナイフ、田戸式
7	上　前　原	江南町千代上前原	住居跡１	撚糸文、五領ヶ台、下小野、勝坂、加曽利Ｅ、堀之内式
8	屋　　田	滑川町月輪		撚糸文、押型文、晩期
9	南　　方	江南町千代	住居跡３	撚糸文、押型文、住居２、勝坂式住居１
10	船　　川	江南町小江川	住居２	押型文、三戸式
11	花　見　堂	嵐山町川島		晩期、千網式
12	中　　郷	嵐山町広野	住居跡	加曽利Ｅ式
13	行　司　免	嵐山町大蔵	住居跡106	勝坂～加曽利Ｅ式
14	塩　　西	江南町塩西		先土器、ユニット２、ナイフ型石器
15	塩　　前	江南町塩		撚糸文、押型文
16	金　　平	嵐山町志賀	住居跡	野島式、加曽利Ｅ式
17	舟　　山	川本町本田高岡	住居跡	諸磯式、勝坂式
18	北　　田	嵐山町古里		晩期
19	越　畑　城	嵐山町越畑		早期　沈線文、条痕文
20	山　　根	嵐山町遠山	住居跡７	黒浜式、諸磯式
21	上　本　田	川本町本田	住居跡	加曽利Ｅ式
22	橋　　屋	花園町小前田		晩期
23	牛 無 倶 利	寄居町赤浜		先土器、ユニット２
24	南　大　塚	寄居町折原	住居跡	先土器、スクレイパー
25	台　耕　地	花園町黒田	住居跡	加曽利Ｅ式
26	平　松　台	小川町小川	住居跡	関山、黒浜式
27	衆生ヶ谷戸	都幾川村番匠	住居跡１	加曽利Ｅ式
28	八　　幡	都幾川村	住居跡	黒浜式
29	宮　ノ　前	寄居町冨田		
30	む じ な 塚	寄居町	住居跡１	諸磯式
31	上　郷　西	寄居町		諸磯式
32	甘　粕　原	寄居町	住居跡	諸磯式、加曽利Ｅ式
33	宮　　林	花園町永田	住居跡１	草創期、多縄文、爪形文
34	露　梨　子	寄居町		諸磯式
35	神　　山	嵐山町古里	住居跡１	加曽利Ｅ式

遺跡地名表（縄文時代）

番号	名　称	所　在　地	種　別	時　期　その他
36	上　鶴　巻	寄居町大字赤浜字鶴巻	住居跡1	
37	鶴田，篭田	東松山市上野本		堀之内式
38	日　野　原	玉川村玉川	住居跡1	加曽利E式
39	金　　獄	寄居町桜沢	住居跡3	
40	大　　林	川本町上原大林		堀之内式
41	寺　　山	嵐山町菅谷		撚糸文
42	虫　草　山	鳩山町大橋	住居跡1	鵜ヶ島台式
43	胄　　山	大里村胄山	住居跡1	黒浜式
44	平倉,東国寺	寄居町立原	住居跡4	加曽利E式
45	稲荷久保	寄居町今市		スクレイパー
46	打　　越	滑川町月輪		ナイフ型石器

遺跡地名表（古墳時代遺跡）

図No.	名　称	所　在　地	備　考
1	塩狸塚1号墳	江南町塩	塩古墳群
2	塩狸塚2号墳	江南町塩	塩古墳群
3	野原1号墳	江南町野原	野原古墳群
4	千代古墳群	江南町千代	
5	行人塚古墳	江南町成沢	行人塚古墳群
6	西古墳群	江南町小江川	
7	天神山古墳	江南町御正新田	
8	小江川古墳群	江南町小江川	
9	釜場古墳群	江南町小江川	
10	立野古墳群	江南町阪井	
11	姥ヶ沢古墳	江南町千代	
12	ますヶ塚古墳	川本町本田	
13	鹿島古墳群	川本町本田	
14	塚原古墳群	川本町畠山	
15	箱崎古墳群	川本町畠山	
16	見目古墳群	川本町田中	
17	赤浜古墳群	寄居町赤浜	方墳
18	伊勢原古墳群	寄居町伊勢原	
19	小前田古墳群	寄居町小前田	
20	大塚山古墳	寄居町桜沢	
21	金獄古墳	寄居町桜沢	
22	黒田2号墳	花園町黒田	黒田古墳群
23	三ヶ尻古墳群	熊谷市三ヶ尻	
24	宮塚古墳	熊谷市広瀬	広瀬古墳群
25	八幡山古墳	熊谷市玉井	玉井古墳群
26	伊勢塚古墳	熊谷市吉岡	瀬戸山古墳群
27	円照寺古墳	滑川町薬王寺	円照寺古墳群
28	陣屋古墳群	嵐山町吉田	
29	尾根古墳群	嵐山町古里	
30	行人塚古墳	小川町上横田	行人塚古墳群
31	穴八幡山古墳	小川町増尾	
32	花見堂古墳	嵐山町川島	
33	寺ノ台古墳	滑川町水房	
34	屋田古墳	滑川町月輪	
35	月輪神社古墳	滑川町月輪	
36	稲荷塚古墳	嵐山町菅谷	
37	西原古墳群	東松山上唐子	
38	若宮八幡神社古墳	東松山市石橋	唐子古墳群
39	御獄山古墳	東松山市下唐子	
40	胄山古墳	東松山市唐子	
41	諏訪山29号墳	東松山市高坂	諏訪山古墳群
42	諏訪山1号墳	東松山市西本宿	

遺跡地名表（古墳時代遺跡）

図No.	名　称	所在地	備　考
43	野本将軍塚古墳	東松山市下野本	
44	おくま山古墳	東松山市柏崎	柏崎古墳群
45	古凍古墳群	東松山市古凍	
46	山ノ根古墳	吉見町久米田	
47	かぶと塚古墳	吉見町田甲	田甲古墳群
48	雷電山古墳	東松山市大谷	三千塚古墳群
49	弁天山古墳	東松山市大谷	〃
50	秋葉塚古墳	東松山市大谷	〃
51	長塚古墳	東松山市大谷	〃
52	鴻ノ面1号墳	東松山市大谷	
53	東山古墳	大里村胄山	
54	楓山古墳	大里村胄山	
55	胄塚古墳	大里村胄山	
56	とうかん山古墳	大里村胄山	
57	丸山古墳群	大里村胄山	
58	さきたま古墳	行田市埼玉	さきたま古墳群
59	八幡山古墳	行田市埼玉	〃
60	小見真観寺古墳	行田市埼玉	〃
61	本田・東台	江南町須賀広	後期
62	塩前	江南町塩	前期
63	姥ヶ沢	江南町千代	
64	権現坂	江南町千代	中～後期
65	鹿島	江南町塩	前～後期
66	塩西	江南町塩	前期
67	船川・新山	江南町小江川	前期
68	宮脇	江南町野原	後期
69	丸山	江南町塩	前期
70	明賀	江南町小江川	前期地図上、欠番
71	北田	嵐山町古里	前期
72	行司免	嵐山町大蔵	中～後期
73	花園町No.50	花園町荒川	
74	中小前田	寄居町桜沢	後期
75	金獄	寄居町桜沢	後期
76	東	寄居町鉢形	
77	追越	滑川町山田	前期
78	屋田	滑川町月輪	前期
79	寺ノ台	滑川町水房	前期
80	花見堂	嵐山町川島	前期
81	沢口	東松山市東平	後期
82	古吉海道	東松山市今泉	
83	五領	東松山市柏崎	前期
84	番清水	東松山市柏崎	前期－後期
85	大門	東松山市西本宿	
86	鹿島	東松山市大岡	
87	鶴田・篭田	東松山市上野本	前期
88	下道添	東松山市古凍	前期
89	塚田遺跡	寄居町大字赤浜	
90	吉岡配水場	熊谷市吉岡	前期
91	衆生ヶ谷戸	都幾川村番匠	
92	薬師塚古墳	熊谷市吉岡	
93	下原古墳群	熊谷市吉岡	
94	高畑	行田市下忍	
	武良内	行田市	
	鴻池	行田市	
95	舟木	大里村胄山	地図上欠番
96	円山	大里村胄山	
97	姥ヶ沢埴輪窯	江南町千代	
98	権現坂埴輪窯	江南町千代	
99	羽尾須恵器窯	滑川町羽尾	
100	和名埴輪窯	吉見町和名	
101	吉見横穴墓群	吉見町北吉見	
102	黒岩横穴墓群	吉見町前山	
103	比丘尼山横穴墓群	東松山市大谷	
104	天神山横穴墓群	滑川町福田	
105	高根横穴墓群	江南町小江川	
106	尾根横穴墓群	嵐山町古里	
107	久米田	吉見町久米田	前期
108	天神山古墳	東松山市柏崎	
109	篭原裏古墳群	熊谷市篭原	

Ⅲ　本田・東台遺跡の遺構と遺物

1. 概　観

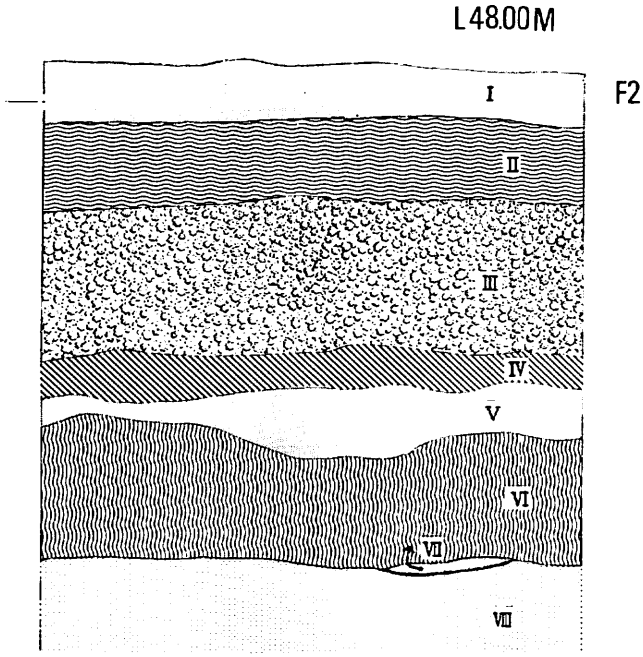
本遺跡では、以前から雨後の乾燥の状態によって遺構プランが現われることがあった。実際フク土は浅く、そのため耕作による遺物の分布も濃密である。

今回調査区の遺構確認面は、標準土層中の第1層であった。調査区のフク土はやはり浅く平均20～30cm程で、SJ8カマド・SJ3カマド・SJ4カマドのように既に遺構に達してしまうところもあった。住居によっては、一部フク土が残るがSJ1のように床面が出てしまう例もあった。またSJ12の床土に据えられた長甕の遺存長から住居内フク土の厚さは15～20cmであることも判った。

このようにフク土が浅い上に耕作によるカク乱が著しく、深部まで達しているため遺構の保存状態は必ずしも良好ではなかった。そのため、特にSJ9～14の確認については、激しい切り合いにもよるが困難をきわめた。このような状況から確認された遺構は古墳時代中期以降を中心とした次のとおりであった。

住居跡　15軒　SJ1を除いてすべて重複している
溝　　1条
土壙　　4基

検出遺物は住居跡に共伴する土師器が主体を占める他に、旧石器時代・縄文時代早期の遺物が出土している。遺物総量はコンテナ18箱である。土師器実測個体数は205個であった。



土層説明

Ⅰ　表土、茶褐色土
Ⅱ　黄色ローム硬質、ガラス質パミス粒子多
Ⅲ　褐色ロームで小石を含む。チョコレート色、粘質
Ⅳ　褐色ロームにまだら状に茶褐色の土を含む粘質土、硬質
Ⅴ　黄白色の粘土に黒色の小礫が混在⇨きわめて硬くしまっている。
Ⅵ　黄色粘土に白色粘土を含む。
Ⅶ　黄褐色粘土、白色粘土まじり
Ⅷ　黄白色粘土

第10図　本田・東台Ⅱ標準土層図

2. 竪穴住居跡と出土遺物

第1号住居跡 －SJ1

遺　構（第11図）

全体の約⅔を検出している。他は調査区外へのびている。たいへん遺存状態が悪く、西壁は途中で削平されてしまう。フク土は1層だけであった。平面形は略長方形で東西－m×南北2.7m以上の規模を持つだろう。主軸はN－7°－Eを示すようだ。壁の立ち上がりは南壁で5cmを測る。

柱穴、周溝、カマド等は検出されていない。床はほとんど直床であったが、床下土壙の検出された部分は一部に貼床が施されていた。床下土壙は楕円形プランをすると考えられ、1.2m×0.9mの規模を持ち、深さは36cmを測る。土層は4層に分けられた。

遺　物（第31図）

床上より土師器坏、2点、甕底部1点が出土している。いずれも小破片であった。

第2号住居跡 －SJ2

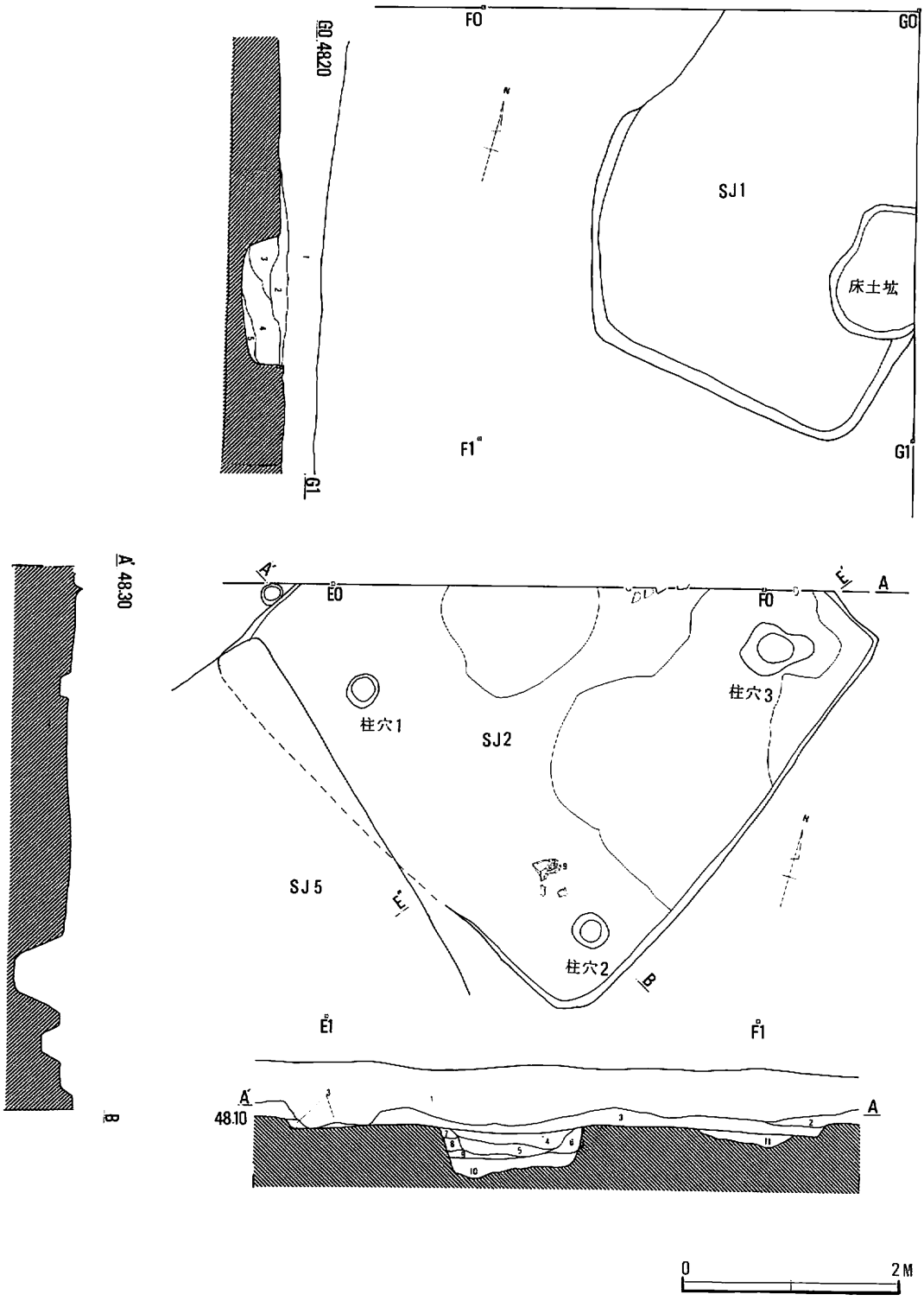
遺　跡（第11図、12図）

全体の約⅔以上を検出している。北壁、西壁隅は調査区外へのびている。SJ5と南壁の一部で重複している。SJ5に切られるため本住居跡の方が古い。フク土は3層確認されるがカク乱が住居床面近くに及んでいた。平面形は略方形で東西4.5m×南北4.7mの規模をもつ。主軸はN－30°－Eを示すようだ。壁のたち上がりは東壁9cm、西壁12cmを測る。柱穴と思われるピットは、各住居コーナー付近に検出された。柱穴1は直径20cm、深さ10cmを測る。柱穴2は直径28cm、深さ10cmを測る。柱穴3は直径34cm、深さ20cmを測る。床面は平坦であり、直床部分と、床下土壙の設置される部分がある。柱穴3は床下土壙と重複しており柱穴設置以前に床下土壙が設置されていることが判る。

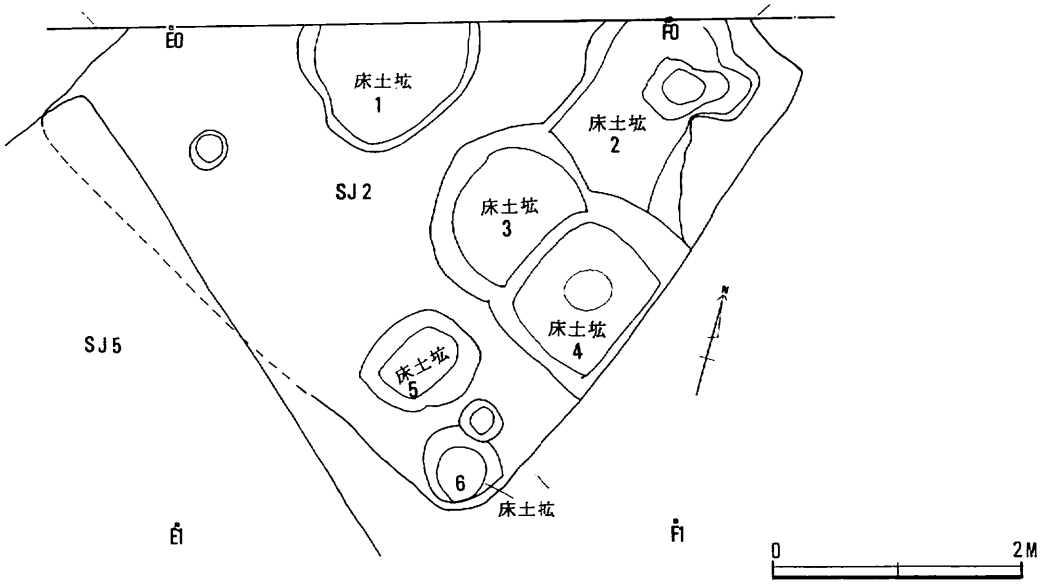
床下土壙は6基検出され、3基が重複するが、他は単独である。1号は7層のフク土に分けられ土師器坏、砥石等が出土する。フク土には焼土、灰も含まれていた。調査区外へのびるため完掘していないが、ほぼ円形のプランになり、直径は約1.5m、深さ35cmを測る。2、3、4号は互いに重複している。2→3→4号の順で新しくなっているようだ。2号は幅1m、長さ1.5m以上、深さ40cmを測る。フク土はローム塊を主体とする茶褐色土で、住居跡に伴う遺物は出土していない。

3号は、直径1.4mを測る円形プランをしている。フク土は茶褐色土遺物の出土は無かった。

4号は、住居壁面いっぱいまで掘こまれ、略方形プランをしている。1m×1.4mの規模を測り、深さ50cmで丸底の底面に達する。フク土はロームブロックを主体とする茶褐色土、遺物の出土は、無かった。5号は、90cm×80cmの楕円形プランをしており、深さ60cmの土壙内から土師器細片が出土している。6号は、直径50cmの円形プランをしており、深さは20cmを測る。本住居跡の床下土壙は東壁側に偏在していることが窺われる。この中で2～6は、ほとんど遺物が出土しておらず、多数の遺物を出土した1号とは設置の動機や、機能の性格が異なっているようだ。



第11図　本田・東台Ⅱ1、2住居跡



第12図　本田・東台Ⅱ2号住居跡掘方

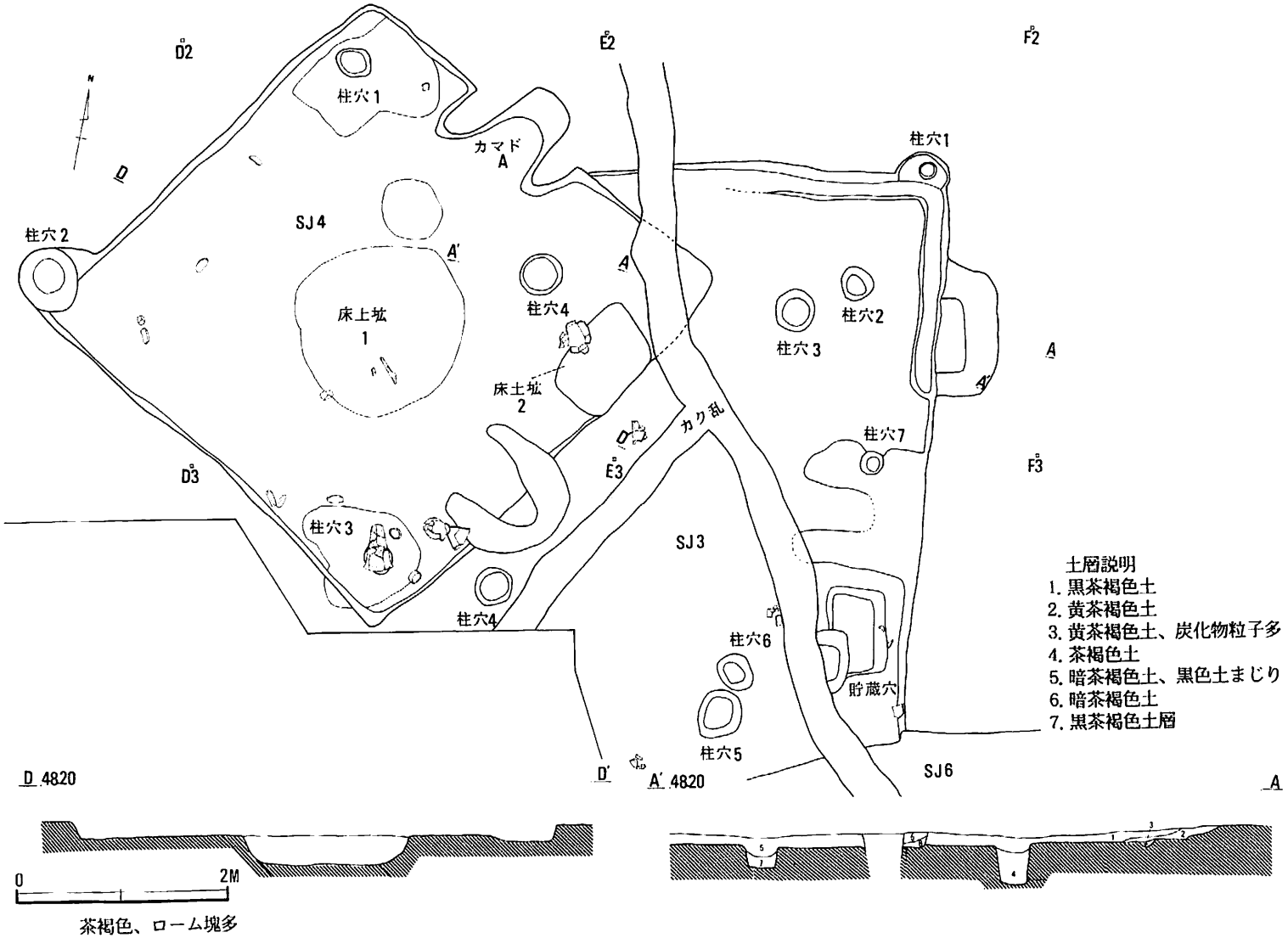
第2号住居跡土層説明A′－A（第11図）

1. 表土、耕作土、茶褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 茶褐色土、焼土粒子、炭化物を多く含む。
4. 暗茶褐色土、ローム粒子を多く含む。
5. 暗茶褐色土、焼土塊、炭、焼土粒子、ローム粒子を多量に含む。
6. 4層に比して焼土粒子を多く含む。
7. 4層と同一。
8. 黄茶褐色粘土塊
9. 暗茶褐色土
10. ローム塊を含む暗茶褐色土層
11. 焼土粒子を多く含む暗茶褐色土

遺　物（第31図）

床上より土師器坏、壷、こしき、土錘が出土している。他は土器小破片であり出土量は少ない。

1号床下土壙からは、土師器坏、砥石等が出土している。2号床下土壙からは石鏃が一点出土している。床上の遺物と床下土壙内の遺物を比較すると、土師器坏ではそれほどの時期差を見ることはできないが、床下土壙内の坏にやや古相を見ることができるようだ。



第13図　本田・東台Ⅱ3、4号住居跡

第3号住居跡　SJ3

遺　構（第13図）

ほぼ遺構の全体を発掘している。SJ4、SJ6と本住居跡が重複している。両住居跡に切られ、両住居より古い。南北に溝によるカク乱がなされている。東壁と北壁の一部が残り、平面形は略方形を呈している。カマドは東壁に位置し、右側に貯蔵穴、左側は出入口部と考えられる凹み状の施設が残っていた。フク土は2層確認された。規模は各辺が残っていないので推定せざるを得ないが主柱穴の配置を考慮すると東西5m×南北6m程の規模になるだろう。遺存部分では東西3.2m南北5mを測る。カマドを通る住居主軸方位はN－78°－Eを示す。北東コーナー部に一部周溝が巡る。幅20cm、深さ8cm程を測る。壁のたち上がりは、北壁8cm、東壁10cmしか残っていない。

柱穴と思われるピットは7ヶ所検出された。主柱穴は3、6、4、とSJ4内の柱穴4ではないかと考えられる。直径30cm前後、深さ20～40cmを測る。他に柱穴4、2、5、7とあるが、副柱的なものであろうか。柱穴4はコーナー部分に外へ張り出すように設置されている。柱穴7は、カマドの構築にかかわるものだろう。直径20cm、深さ18cmを測る。

貯蔵穴は、カマド右側に設置され、長さ75cm×幅50cmの長方形をしている。深さ24cmとやや深い。内部からは土師器、カメ等の破片が出土している。本住居の床面は直床であり、貼床部は無い。また床下土壙も設置されていなかった。

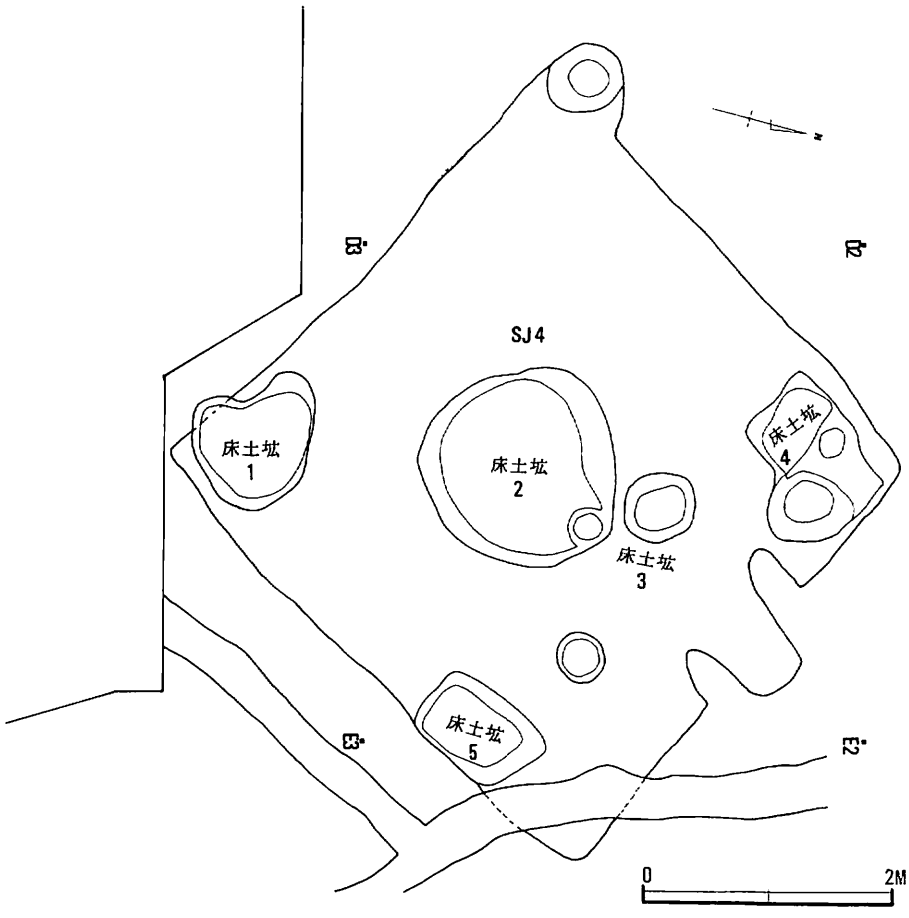
カマド（第15図）

東壁に位置している。現存長は焚口から住居壁まで2.2mを測る。燃焼部の一部と煙道は削平され消滅していた。両袖、及び燃焼部は良く遺存していた。燃焼部を壁内側に置く内カマド型をしていて、幅40cm、奥行70cmを測る。良く焼土化している。燃焼部と壁の間は地山を削り残した部分で燃焼部の一部と煙道の築かれた部分と考えられる。この間、約65cmの長さがあった。

袖は左右とも造り付けられ、左は幅40cm、長さ70cmを測る。右もほぼ同様の規模を持ち、燃焼部面は良く焼土化していた。燃焼部内からは土師器甕片が出土している。燃焼部から焚口部には溝状のカク乱が入るが、80cm×1mの焚口部を観察することができる。

遺　物（第31図）

フク土中は土師器細片が多いが、図示できるものは少ない。床上からは、カマド前面、貯蔵穴周辺よりこしきが出土している。他に壷下半、甕底部などわずかであった。



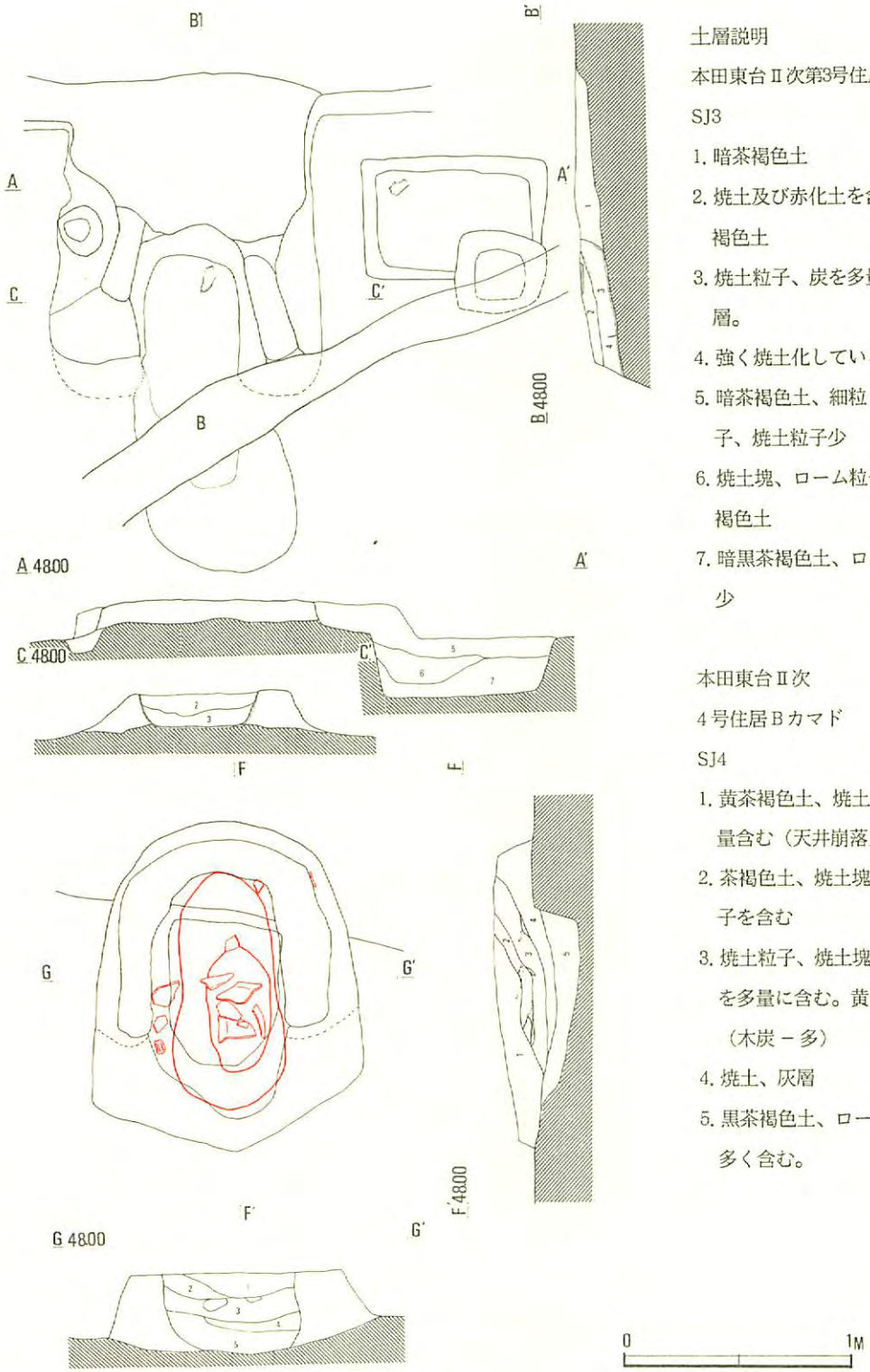
第14図　本田・東台Ⅱ4号住居跡掘方

第4号住居跡－SJ4

遺　構（第13、14図）

住居の全体を完掘している。SJ3、SJ5と重複しているが、本住居が他を切っているため、新しく位置づけられる。北東コーナー部は溝によるカク乱を受けている。平面形は略方形を呈しており、東西4.4m×南北4.3mの規模を測る。各辺とも直線的で、コーナーも矩形をなしている。カマドは2基設置され、北壁中央は付近に設置されたAカマドと南東コーナ寄に設置されたBカマドがある。新旧関係はAカマドが古いと考えられる。Aカマドを通る住居の主軸はN－28°－Eを示し、Bカマドを通る住居の主軸はN－113°－Eを示す。住居フク土は1層であり、他の住居と同様に浅い。住居壁は、東壁、南壁の保存が良く15～18cmを測る。周溝は確認されていない。

床は堅く踏みかためられていた。床面には4本のピットが検出され、各コーナー寄に位置するが、柱穴2は西壁コーナー隅に張り出していて特異であった。SJ3の柱穴1のように出入口部にかかる施設とも考えられよう。直径55cm、深さ45cmを測る。柱穴3は直上に完形のこしきが倒れ込んでいた。直径28cm、深さ40cmを測る。柱穴4はSJ3の柱穴位置にも合致することが考えられる。直径30cm、深さ28cmを測る。床面は一部直床の他、カマド周辺は貼床が施されていた。この直下には



土層説明

本田東台Ⅱ次第3号住居カマド

SJ3

1. 暗茶褐色土
2. 焼土及び赤化土を含む暗茶褐色土
3. 焼土粒子、炭を多量に含む層。
4. 強く焼土化している層。
5. 暗茶褐色土、細粒ローム粒子、焼土粒子少
6. 焼土塊、ローム粒子多、茶褐色土
7. 暗黒茶褐色土、ローム粒子少

本田東台Ⅱ次

4号住居Bカマド

SJ4

1. 黄茶褐色土、焼土粒子を少量含む（天井崩落土？）
2. 茶褐色土、焼土塊、焼土粒子を含む
3. 焼土粒子、焼土塊、炭化材を多量に含む。黄茶褐色土（木炭－多）
4. 焼土、灰層
5. 黒茶褐色土、ローム粒子を多く含む。

第15図　本田・東台Ⅱ3、4号住居跡カマド

床下土壙が設置されていた。また住居中央部には貼床の施されない床下土壙が掘られている。

遺物は、フク土、床上から礫、木炭、石英片等が検出されたが、Bカマド周辺の床上より完形、完存の土師器がまとまって出土した。Bカマド中からも破片が出土している。この中で大型のこしき、坏、壷等は一括の遺物として把握できる。

5基の床下土壙は、それぞれ規模、形態が変り、設置のあり方も異なっている。1号、4号、5号は住居の縁辺に掘り込まれる。4号、5号は掘方が方形に近く、カマドに近接していることから、貯蔵穴にも使用されたことが推定されるのではないか。5号は長さ1m×幅0.7m、深さ30cmを測る。フク土はローム塊を含む暗茶褐色土であった。1号、3号、4号も同様のフク土であった。床面中央部分に掘られた2号は、直径1.5m、深さ20cmの規模を持ち、略円形をしている。他と同様遺物の出土はほとんど無く、ローム塊、焼土粒子を含む暗茶褐色土のフク土であった。

Aカマド（第18図）

北壁中央付近に設置されていた。長方形の燃焼部を屋内に置くタイプで、甕の掛け口が壁ライン上に位置している。煙道はほとんど削平され遺存していない。長方形の燃焼部は、幅65cm、奥行1mを測る。火床面は焼土化していた。袖は、左右とも地山を掘り残しており、左袖で幅40cmを残している。このカマドからは出土遺物は無い。

Bカマド（第15図）

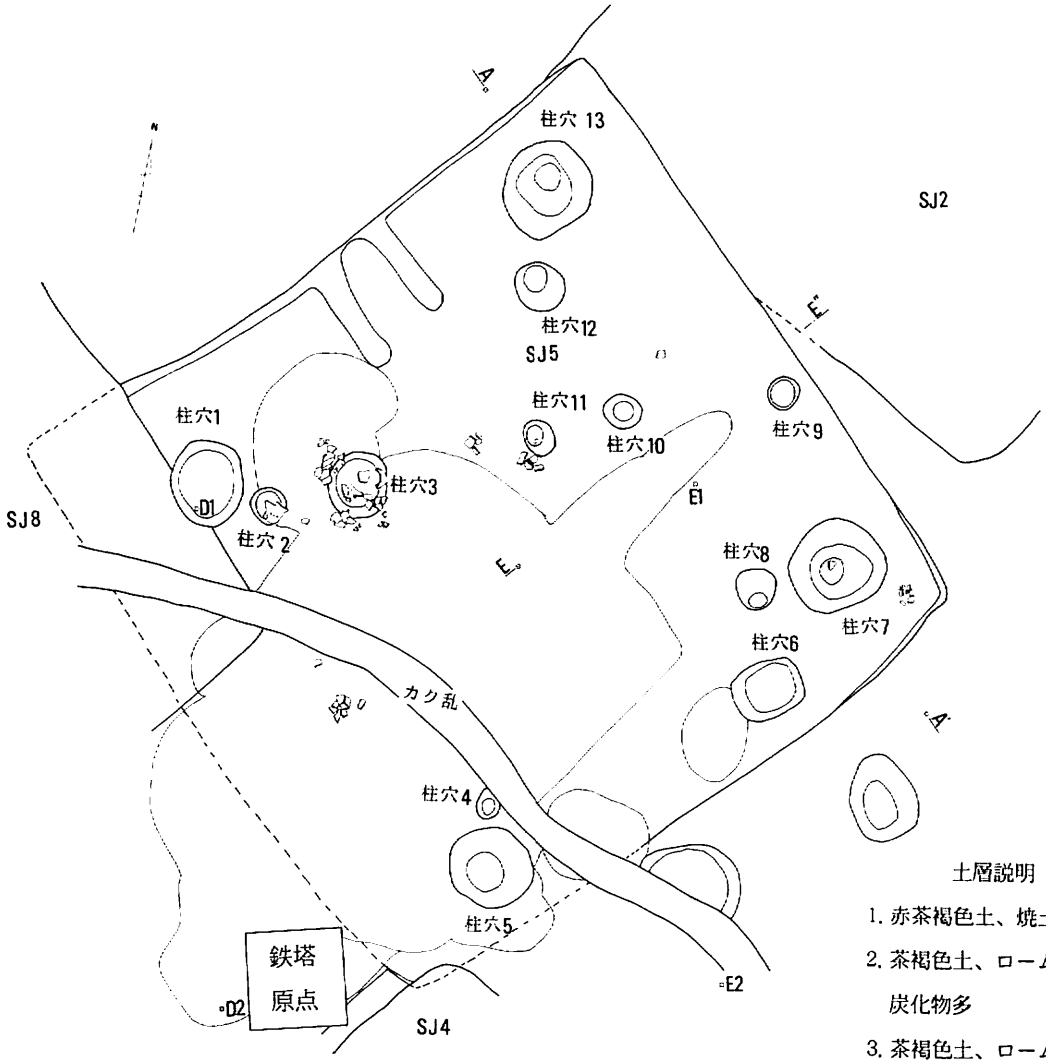
東壁のやや南東コーナー寄に設置されていた。煙道は削平され全く残っていない。燃焼部はやや壁外へ張り出すが大半は壁内に位置している。燃焼部の規模は幅50cm、奥行80cm程で30°～40°の傾斜を持って煙道へ移行するようだ。火床面には土師器甕片が落ち込んでいた。また燃焼部外側右床面には甕、こしきが立て掛けてあった。左右の袖、燃焼部は同一の暗茶褐色土及び白色粘土の混合土で構築される。袖は床面より高さ30cm、上面幅20～15cmが遺存していた。構築土中には土器片等は含まれていなかった。SJ3上に来る本カマドの構築上の下面はSJ3の床面と大差が無い。SJ3の埋没の進んでいない頃、SJ4、及び本カマドが構築されたようだ。

AカマドとBカマドの前後関係は、Aカマドが北壁の拡張に伴うものでなく、住居構築の当初からの設計とすると、後より造り付けられるBカマドより古いと考えられるが確証は無い。埋没状況もA.Bのカマドは自然な堆積をしており、住居廃絶まで併用されていたことが考えられる。東向のBカマドの周辺にはこしき、壷、坏の日常什器が集中しており日常的な使用を推定させるが、北向のAカマドの周辺にはほとんど遺物の出土が見られない。カマドの使用目的に区別があったのだろうか。

遺　物（第32図）

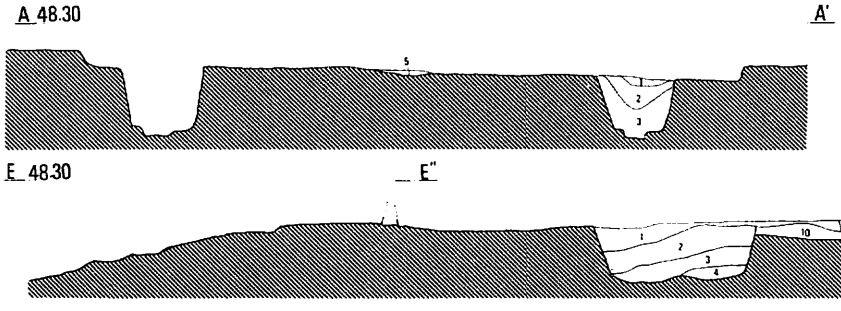
床上よりまとまって出土、大型のこしきは完存していた。隣接して2個の完形坏が床に密着して出土している。また小形の甕上に小型のこしきが組み合わせた状態で出土している。

Bカマド内の土師器片は長甕であった。大型のこしきは完存していた。また編物石らしい河原石も床上より出土している。



土層説明 A－A'

1. 赤茶褐色土、焼土粒子多
2. 茶褐色土、ローム粒子、炭化物多
3. 茶褐色土、ローム塊、焼土、炭化物を多量に含む。

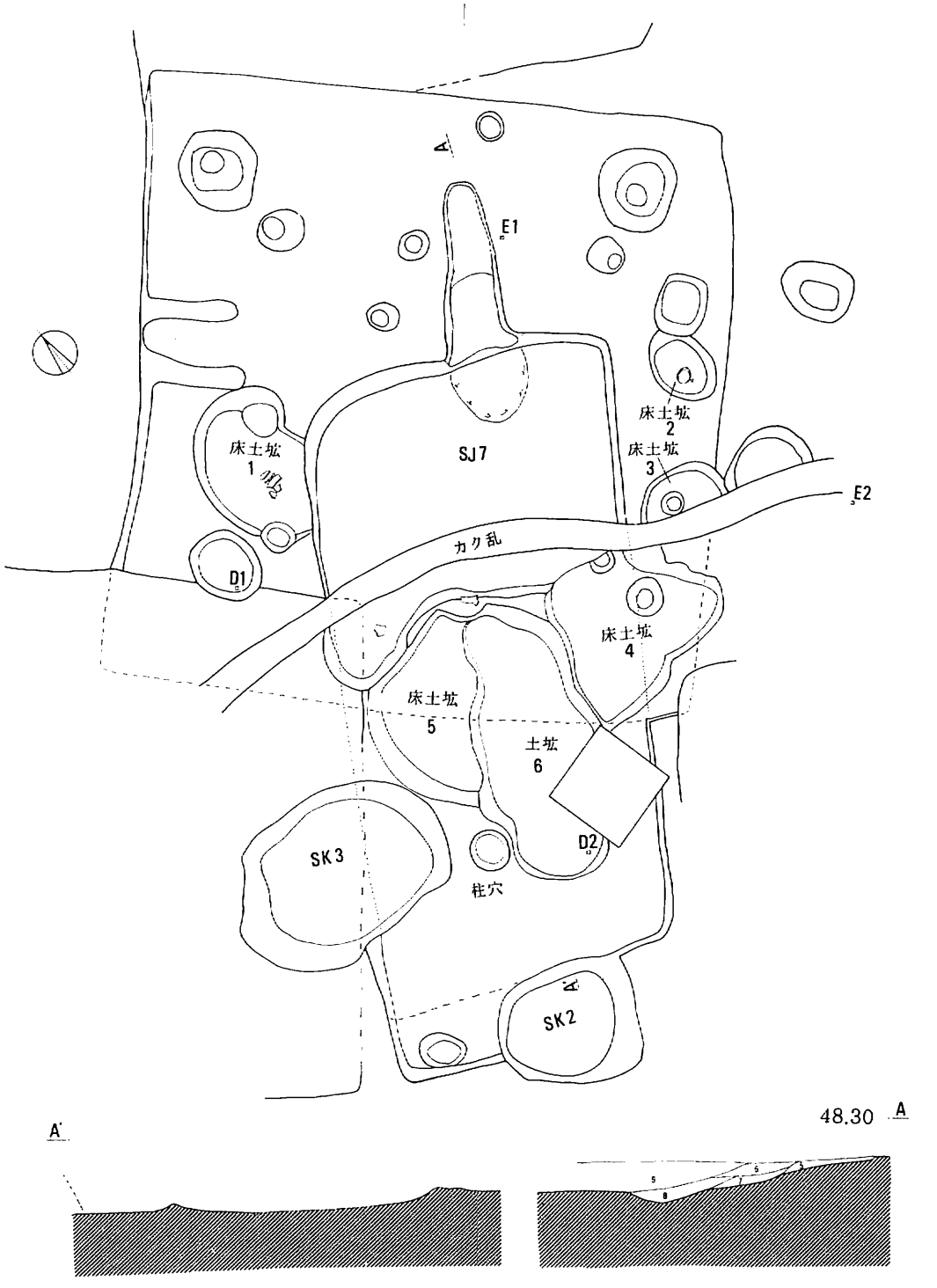


土層説明E－E' －E"

1. ローム塊＋暗茶褐色土（ローム塊大）
2. 暗茶褐色土
3. 暗茶褐色土（ローム塊中）
4. 焼土、暗茶褐色土（ローム塊中）
10. 黒茶褐色土
11. 焼土、ローム粒子を多く含む。茶褐色土

0　2M

第16図　本田・東台Ⅱ5号住居跡



土層説明 A′ －A

5. 焼土を多量に含む。茶褐色土

6. ローム塊、斑状に含む。暗茶褐色土

7. 焼土粒子、炭化物粒子を含む。
暗茶褐色粘土

8. 焼土堆、赤黄褐色

9. 暗茶褐色土ローム粒子、
炭化物を多く含む。

0 2M

第17図　本田・貢台Ⅱ7号住居跡

第5号住居跡－SJ5

遺　構（第16・17図）

全体を発掘している。切り合いが多く、SJ2、SJ4、SJ8、SJ7と重複する。新旧関係は、SJ2、SJ7を切り、SJ4、SJ8に切られている。このため西南コーナー部分は削平され、南壁から東壁にかけては遺存状況は良くない。平面プランは略方形であり、東西5.25m×南北5.40mの規模を測る。フク土はカク乱が深いため10cmに満たない。壁の遺存状況も12～13cmを測るにすぎない。カマドは西壁中央付近に設置されていた。カマドを通る住居の主軸はN－47°－Wを示す。床面は直床と貼床部分がある。直床は北壁側に広く、SJ7と重なる南壁側には貼床がなされる。全体的に良く踏み固められていた。ピットは大小13個が検出された。主柱穴と考えられるピットは、位置、規模などから、柱穴1、柱穴5、柱穴7、柱穴13を考えたい。これらは掘方の直径が50～60cm、深さ60cm前後の規模を持っている。さらに、この主柱穴を対角線で結ぶ内側にも主柱穴に添うピットがあり、同一のフク土が充填していることろから副柱的な性格を考えられよう。このピットは、柱穴2、柱穴4、柱穴8、柱穴12である。直径20～30cm、深さ20～30cm程の規模である。他に5ヶ所のピットがカマドを通る主軸の北半に多く分布している。

遺　物（第33図）

遺物はカマド周辺の床面より土師器坏、甕等が出土している。また柱穴13から管玉が出土した。

床下土壙は4基設置され、1号は長さ1.5m・幅1m、2号は長さ80cm・幅50cmの楕円形をしている。両土壙とも25～30cmの深さを持ち土師器が出土する。特に2号からは完存の坏が出土している。

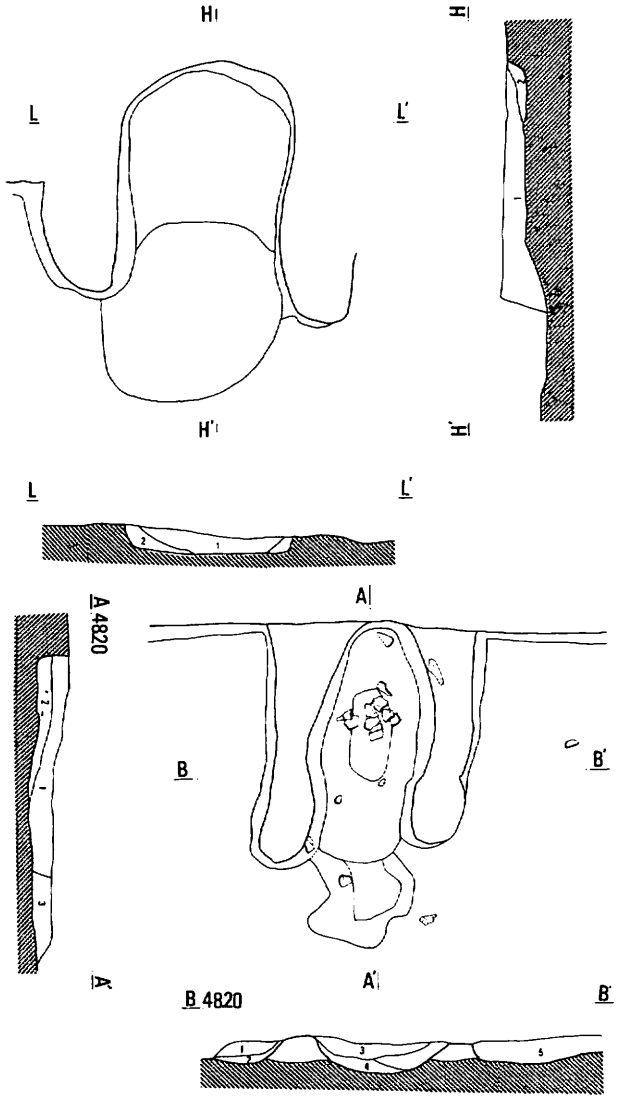
カマド（第18図）

住居跡西壁に位置し、燃焼部のほとんどを住居壁内側に設置している。燃焼部は幅45cm、奥行1mを測る。底面は丸底をしており地山面を火床としている。内部から土師器甕片が出土している。袖は後からの造り付けで、茶褐色粘土で構築される。幅20cm、長さ1mが残る。構築土中より土師器高坏片が出土した。カマド前面には不明瞭な焚口部が確認されている。煙道部は削平されたらしく全く遺存していない。

第7号住居跡－SJ7

遺　構（第17図）

全体を発掘しているが、SJ5、SJ8、SK2、SK3、との重複や浅いフク土から当初住居の全形を確定できなかった。しかしSJ5との重複により遺存していないと考えた住居の北半部分が残ることから南半部分とのつながりが認められ長方形という住居プランを現すに至った。本住居も重複が著しく、SJ5、SJ8、土壙に切られ、時期的に古い。東西2.8m×南北5.0mの規模を測る。南壁はやや掘り過ぎた。南北方向に長軸を持ち、カマドを通る住居の主軸と一致し、N－29°－Eを示す。床面は直床の他、床下土壙のフク土が見えたままの床面であった。しかしSK3、SK2、床下土壙4は本住居以後であった。カマドは北壁中央部に設置されていた。カマド前面には多量の焼土、焼土塊が分



土層説明

本田東台Ⅱ次4号住居Aカマド

1. 焼土粒子、炭化物、ローム粒子を含む。暗茶褐色土
2. 黄色茶褐色土、やや焼土粒子を含む。

本田・東台Ⅱ 5号住居カマド

B～B′

1. 黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 焼土（茶褐色土を少量含む）
4. ローム塊を含む暗褐色土
5. ローム

A～A′

1. 焼土を多く含む茶褐色土
2. ローム塊を含む褐色土
3. ローム塊、焼土粒子を含む暗褐色土

第18図　本田・東台Ⅱ4、5号住居跡カマド

布していた。また床面、床下土壙6内から鉄滓、羽口片が出土している。ピットは1ヶ所検出され直径35cm、深さ10cmを測る。ほぼ主軸上に位置する。

床下土壙は、5号、6号が本住居に伴う。5号は長さ1.5m、幅1m、6号は長さ2.5m、幅1.1mを測る。本住居では中央付近に床下土壙が設置されたようだ。深さは浅く10～15cm前後で底面は平坦である。6号は、底面が良く焼けていたが明瞭な鍛冶炉とはいえないまでも炉としての使用は確かであろう。

本住居跡は調査区内の他住居跡と異なり、平面プランは長方形を呈し、床面のレベルも他の住居跡に比して30～40cm程低い、またカマド前面の多量の焼土の他羽口、鉄滓も出土している。これらのことから本住居は、製鉄関係作業を行っていた住居跡である可能性が高く、いわゆる小鍛冶住居として良いだろう。

カマド（第16・17図）

北壁のほぼ中央に設置される。煙道部、燃焼部が残り、全長2.2mを測る。燃焼部から煙道部への移行は、なだらかに焚口より煙道までおよそ25°で立ち上っている。あまり明瞭でないが、煙道は長さ1m、幅45cmで側壁が良く焼土化していた。燃焼部は長さ60m、幅60cmの方形をしている。強く焼土化している。本住居のカマドは燃焼部を壁外に出す外カマド形をしている。袖は検出されなかった。カマド前面には長さ40cmの焚口部が認められた。またカマド前面の焼土塊の一部は天井の崩落土であろう。

第6号住居跡－SJ6

遺　構（第19図）

東壁、南壁が区外へのびるため全体を明らかにしていない。方形プランをなすと考えられる遺存規模で北壁4.4m、西壁4.5mを測る。SJ3、SJ15と重複しており、両住居を切って作られた。住居の主軸は不明だが、西壁の示すN－15°－Wに近いものと考えられる。壁際に周溝が巡っており幅18～20cm、深さ10～15cmを測る。壁は西壁で25cm、北壁で15cmを測る。西壁の乱れは崩壊のためである。床はSJ15と重複する部分に貼床が施される他、直床のままであった。全体的に固く踏み締められていた。柱穴は検出されていない。北西コーナー部分に多少の凹凸が認められるがピットとする程の穴ではなく、この程度の浅い凹みでも柱穴となるかもしれない。

遺物は床全体に分布するが、土師器甕、鉢等が出土している。完存品に近い。

床下土壙は検出されていない。カマドも調査区外と思われる。

第15号住居跡－SJ15

遺　構（第19図）

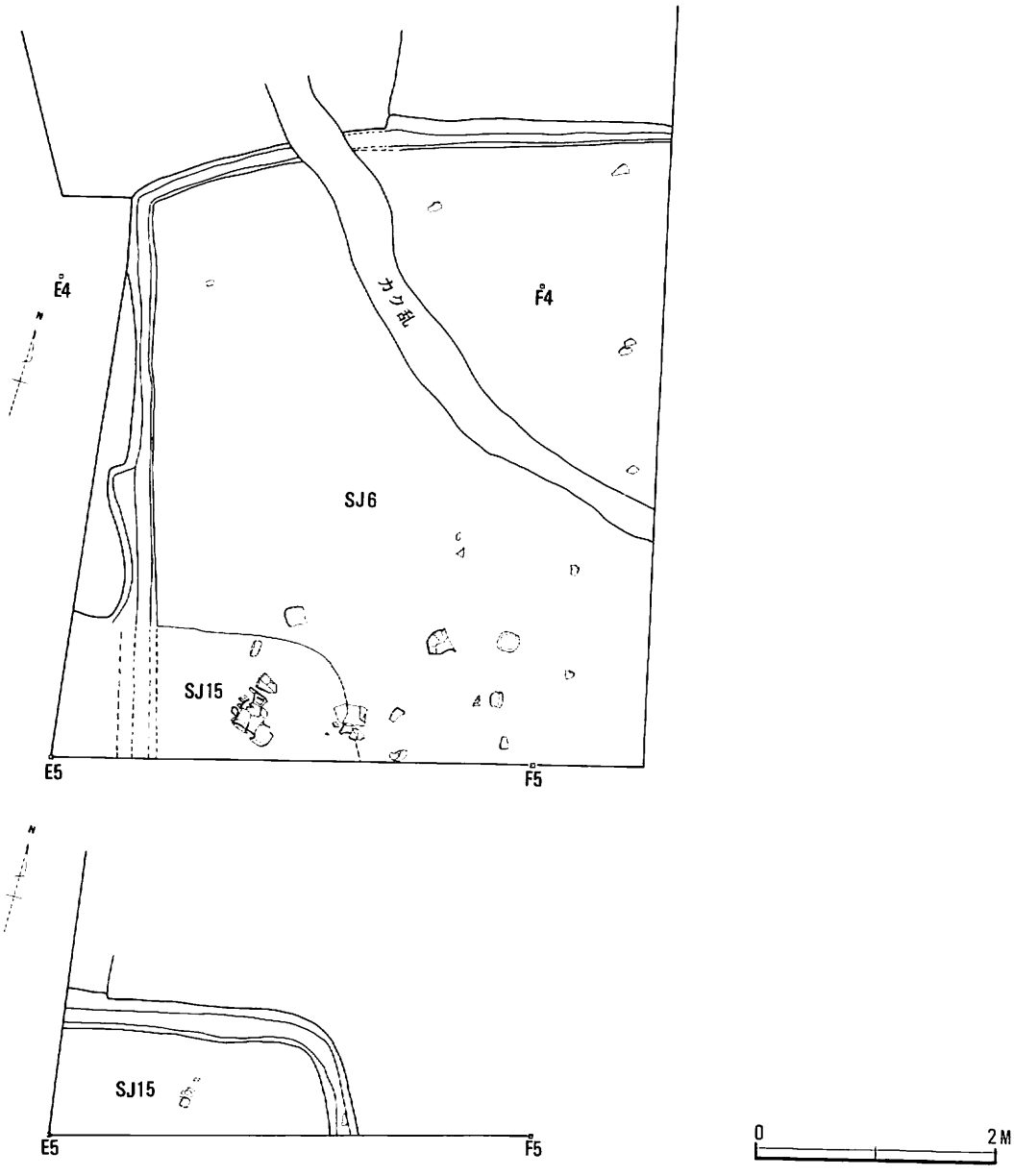
北東コーナー部分をわずかに検出している。ほとんどは調査区外である。SJ6と重複しているが、本住居の方が古い。SJ6貼床面から検出された北東コーナー部分は丸みを持っており、住居壁は北辺2.2m、東辺1mを測る。東辺を住居の主軸に近いとするとN－15°－Wを示している。

床面までの掘込みは、わり合い深く北壁で30cmを測る。壁際には周溝が巡り、幅15cm、深さ5cmを測る。断面は皿形をしている。床は直床であり、良く踏み固められていた。柱穴、床下土壙等は検出されていない。遺物は土師器細片が多い。

第8号住居跡－SJ8

遺　構（第20・21図）

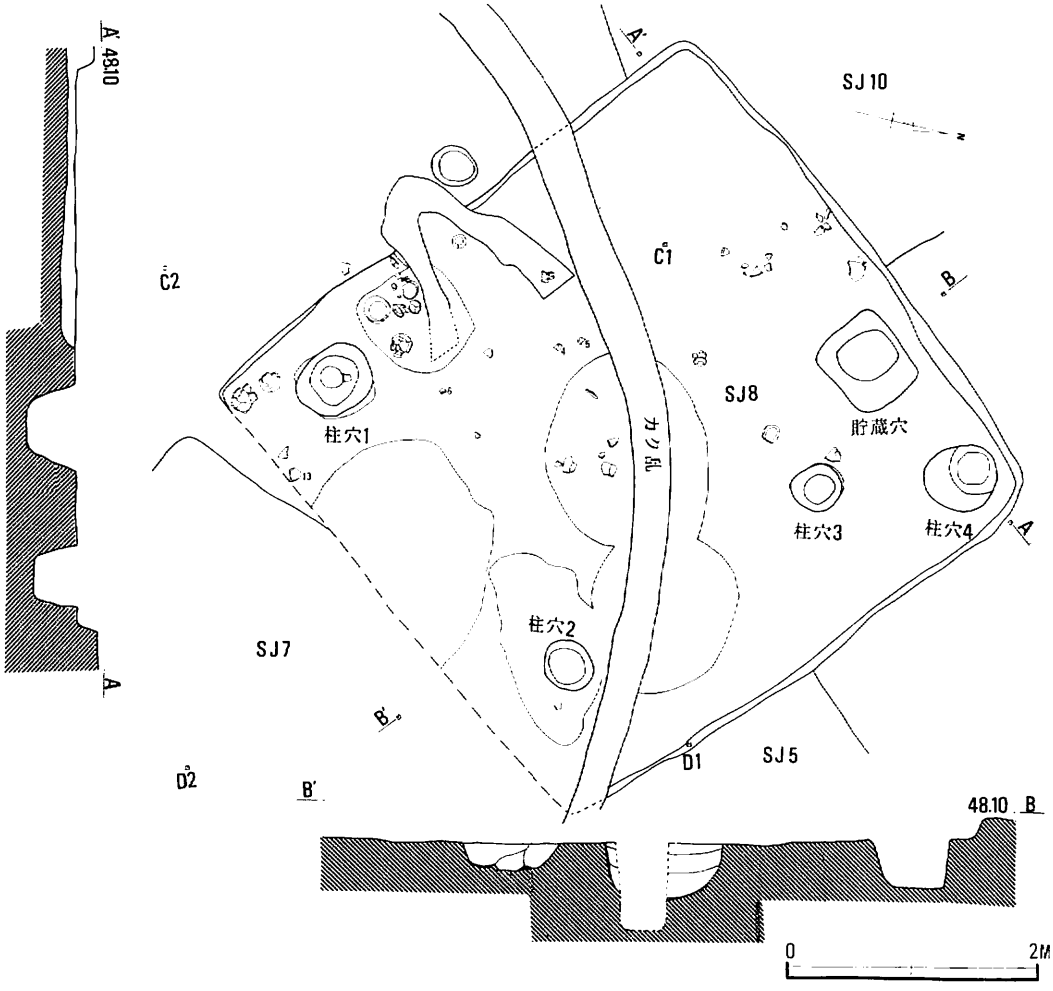
全体を発掘しているが重複が多く、遺存状態は良くない。本住居は井戸、SJ5、SJ7、SJ9、SJ10を切って作られ重複住居の中で最も新しい。さらにSK3、溝によるカク乱を受けている。平面プランは、略方形をしており、東西4.65m×南北4.75mの規模をもつ。各コーナーは矩形をし、壁面も直線的であった。カマドは南壁のほぼ中央付近に造り付けられている。良く焼けていたため表土除去直後に確認されたが、住居フク土はカク乱のため10cm前後を残すだけであった。カマドを通る住



第19図　本田・東台Ⅱ6、15号住居跡

居跡の主軸方向はN－14°－Wを示す。南壁にカマドを設置している例は本住居だけである。

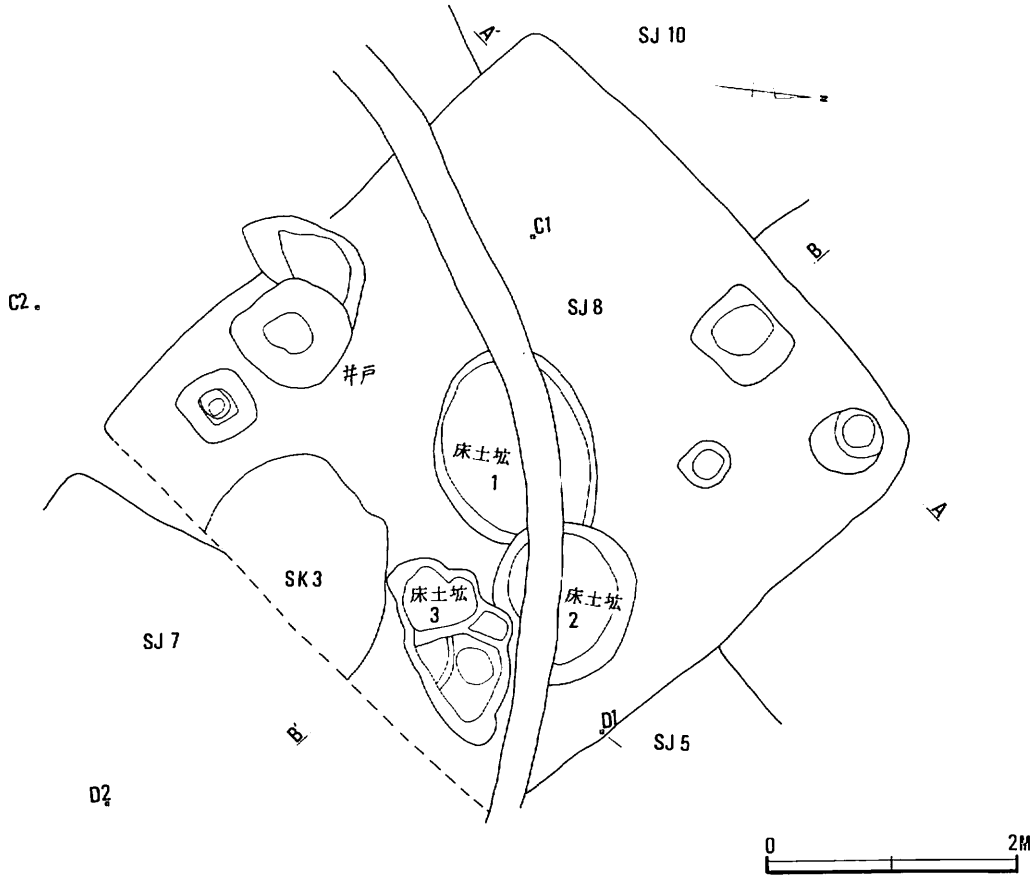
住居壁は北壁側で良く残り15～20cm程を測る。重複部分の壁は遺存状態が良くないため、特に東壁は不明瞭であった。床面は直床が主体であるが、SJ10、SJ5との重複部分、カマド周辺は貼床を施している。中央部には床下土壙が設置されている。ピットは5ヶ所に分布するが主柱穴と考えられたのは柱穴1、2、3である。東コーナー部分は柱穴を検出できなかった。柱穴1は直径60×50cm、深さ50cmを、柱穴2、3は直径約30cm、深さ35～40cmの規模をもつ。東壁と同じ主軸を持つ方形のピットは60×70cm、深さ40cmの規模で、住居フク土が流れ込んでいた。場所等に問題はあろうが貯蔵穴と考えたい。



第20図　本田・東台Ⅱ8号住居跡

床下土壙は貼床下面に重複する3基が確認された。1号は1.3×1.5mの楕円形をしており、ロームブロックを主とする暗茶褐色土が充填されている。床面を掘削した土をそのまま埋め戻したようだ。深さは45cmで、底面は平坦である。2号は1.1×1.3mの楕円形をしており、1号と同様の土層、形態をしていた。溝によるカク乱のため深部から土師器片が出土したが、土壙フク土中から全く遺物は出土していない。3号は1.55×0.8mの規模であり、底面は凹凸が激しい数次に係る掘り返しが窺われる。暗茶褐色土を主体としており、1、2号のようにロームブロックを主体としていない。規模、形態も異なり、また1、2号は再び掘り返されていないと考えられるなど、3号には性格、機能性の差異を推定できる。

遺物は床面全体に散布するが実測にたえる程の土器は少なく、ほとんど小破片であった。しかし完存品を中心として、南コーナー部分からカマド周囲にまとまって、床面より出土した土器群は、9個体に及び、本住居の一括出土遺物として貴重である。坏、甕、小鉢等がある。カマドからも遺物が出土している。



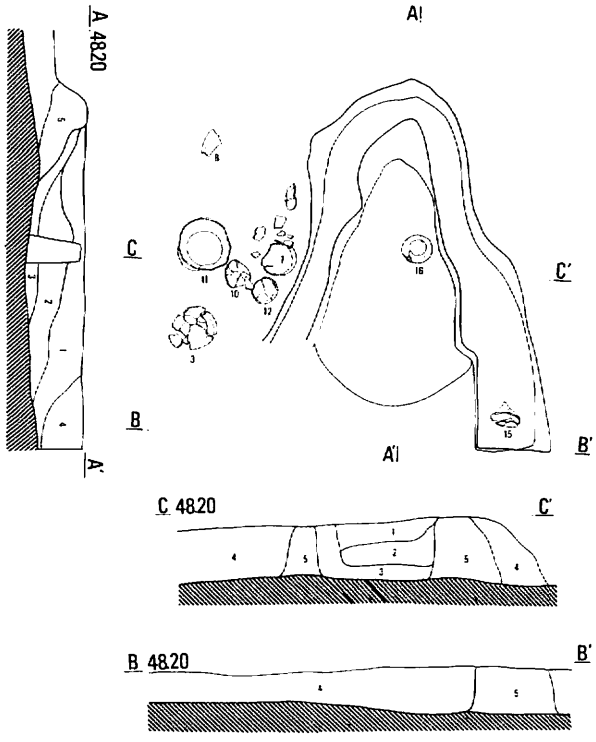
第21図　本田・東台Ⅱ８号住居跡掘方

井　戸

SJ8のカマド左袖下面に位置していた。カマド撤去後、当初床下土壙の一つとして調査を進めていたが底面がなかなか現れず、3.2mの深さに達し、水が湧いてしまった。上面径86cm、底面は直径30cm程の円形となり皿形をしていた。底面は標準土層の第Ⅷ層に当たっている。規模の小さいためか素掘りで、上面から、底面までほぼ直線的に掘り込まれていた。底部の土層は青灰色に還元していた。ほとんど自然な堆積をしており、上面20cm程が貼床を施していた。遺物は少なく、わずかに底部より土師器壷片が出土しているにすぎない。

付　記

当地方は、台地上に立地しているがローム層の下位に川本粘土層と言われる灰白色粘土層が台地全域に分布していることが指摘されており、この上面が湧水層となっている。現在でも、江南町須賀広など本遺跡の周辺に立地する民家では、この湧水層まで掘込んで水を得ており平均3～5m程である。土地では「一丈井戸」とも言っている。水質はあまり良くなく、日照りの時は涸渇したことが何度もあったという。



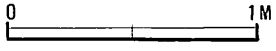
土層説明

8号住居カマド平面 C～C′　B～B′

1. 3cm大の焼土ブロックを含み赤褐色土
2. 1cm大の焼土ブロックを含む。また炭化物もある。
3. 茶褐色土で、ロームブロックを含む。
4. 住居跡のフク土、茶褐色土で極少のロームブロック焼土を含む

A～A′

1. C－C′ の土壌と同じ
2. 〃
3. 〃
4. 茶褐色土で極少のロームブロック、焼土を含む。



第22図　本田・東台Ⅱ8号住居跡カマド

第8号住居カマド（第22図）

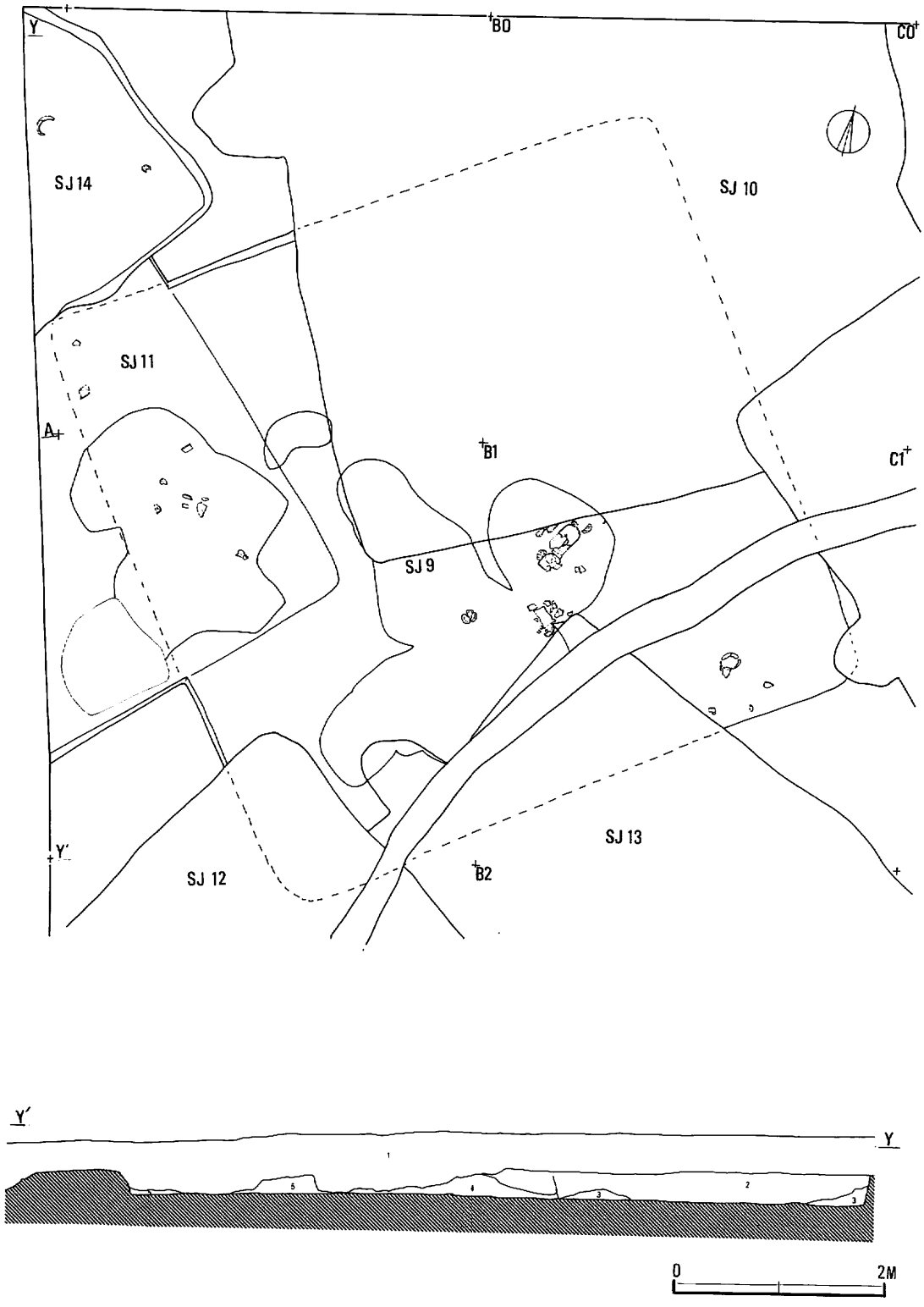
住居南壁の中央付近に設置されている。SJ9との重複部分に当り、SJ9のフク土上に構築されている。煙道は削平され残っていないが燃焼部は良く残っていた。全長1.5mを測る燃焼部は奥行1.1m、最大幅60cmで奥部に至るほどすぼまっている。住居壁内側に主体を置く内カマド型をしている。煙道へは35°の傾斜で立ち上がり移行する。側壁はほぼ直立して立ち上がり、25～23cmが遺存していた。火床面は一部が井戸にかかる貼床の他直床であり、側壁共々良く焼けていた。また燃焼部の中央、右袖寄に土製の支脚（16）が置かれており、ここにカマド掛口を想定できる。

袖は茶褐色粘土で構築され逆V字状に開く形をしている。袖の構築土中にわずかに土器片等が含まれ、右袖裾中封入された土師器蓋形土器（15）が出土した。焚口部はほとんど平坦であった。

遺物（第35図）

カマドの左側と住居東壁の間に完存土器のまとまった出土があった。みなカマド側壁に据え置くような状態であり、甕（11）は倒立させ体部下半を欠失しているが、断面の摩耗が進んでいるため器台として使用されたようだ。小鉢（10・12）は2個体、坏（7・3）も2個体上面を向いて置かれていた。他に、南コーナー部分の床上に完存の土師器坏2個体が遺存していた。

南を向くカマドは本住居跡のみであり、規模の上からも最も大きい。



第23図　本田・東台Ⅱ９号住居跡

第9号住居跡－SJ9

遺　構（第23・第24図）

全体を調査していると考えられるが、激しい重複のため遺存部分は極めてわずかであった。重複する遺構はSJ8、10、11、12、13溝があり、これらの住居プランのすき間に北、西、南の壁と床が残り、この部分を結んで元の形を想定した。本住居が古い。平面プランは略方形をしており、一辺6mの規模を測るだろう。西壁の遺存部から住居の主軸はN－44°－Wを示すと考えられる。

壁は遺存部分で17～30cmを測る。南壁ではほとんど平坦になっていた。床面は、遺存部分のほとんどが貼床されており、固くしまるが下面には床下土壙が設置されていた。周溝は見当たらないが、柱穴については遺存部分から検出できなかった。カマドも同様に、他の住居構築に伴い削平されているようだ。遺物は残存部床面上に分布し、土師器長甕、こしき、坏等が出土している。また貼床土中よりナイフ型石器が出土している。フク土中から炭化した桃類の種子も出土した。

床下土壙は5基検出された。互いに近接し切り合う、1号は1×1.4m、深さ30cmの楕円形、2号は1.7×1.0m、深さ40cmの長楕円形、3号は0.9×1m、深さ40cmの楕円形、4号は0.7×0.6m深さ25cm、5号は直径70cm、深さ40cmの略円形、6号は直径約2m、深さ25cmの略円形、7号は0.7×0.3m、深さ20cmの楕円形をしている。1号、2号は明らかにSJ10下にのびており、本住居に設置された床下土壙の数は、他住居跡との重複部分を含めると当初の実数ではないだろう。

第11号住居跡－SJ11

遺　構（第23、24、26、38図）

東南部コーナー付近を中心に検出しているが大半は調査区外にのびている。2軒の住居跡と重複しており、SJ9→SJ11→SJ14の新旧関係である。フク土は表土面から床面まで59cmで4層に分けることができる。床面は検出部分のほとんどが貼床されており、特にコーナー部分が顕著であった。下部には床下土壙が3基設置されている。1号は1.4×0.9m、深さ45cmの楕円形、2号は1.8×1.5m、深さ30cmの不定形、3号は90×90cm、深さ30cmの略方形をしている。本住居の床下土壙フク土は床土と考えられるロームブロックまじりでなく焼土、炭化物の混じる暗茶褐色土であった。貼床土は3号上に認められず出土遺物からも1→2→3号の新旧関係を考えられよう。

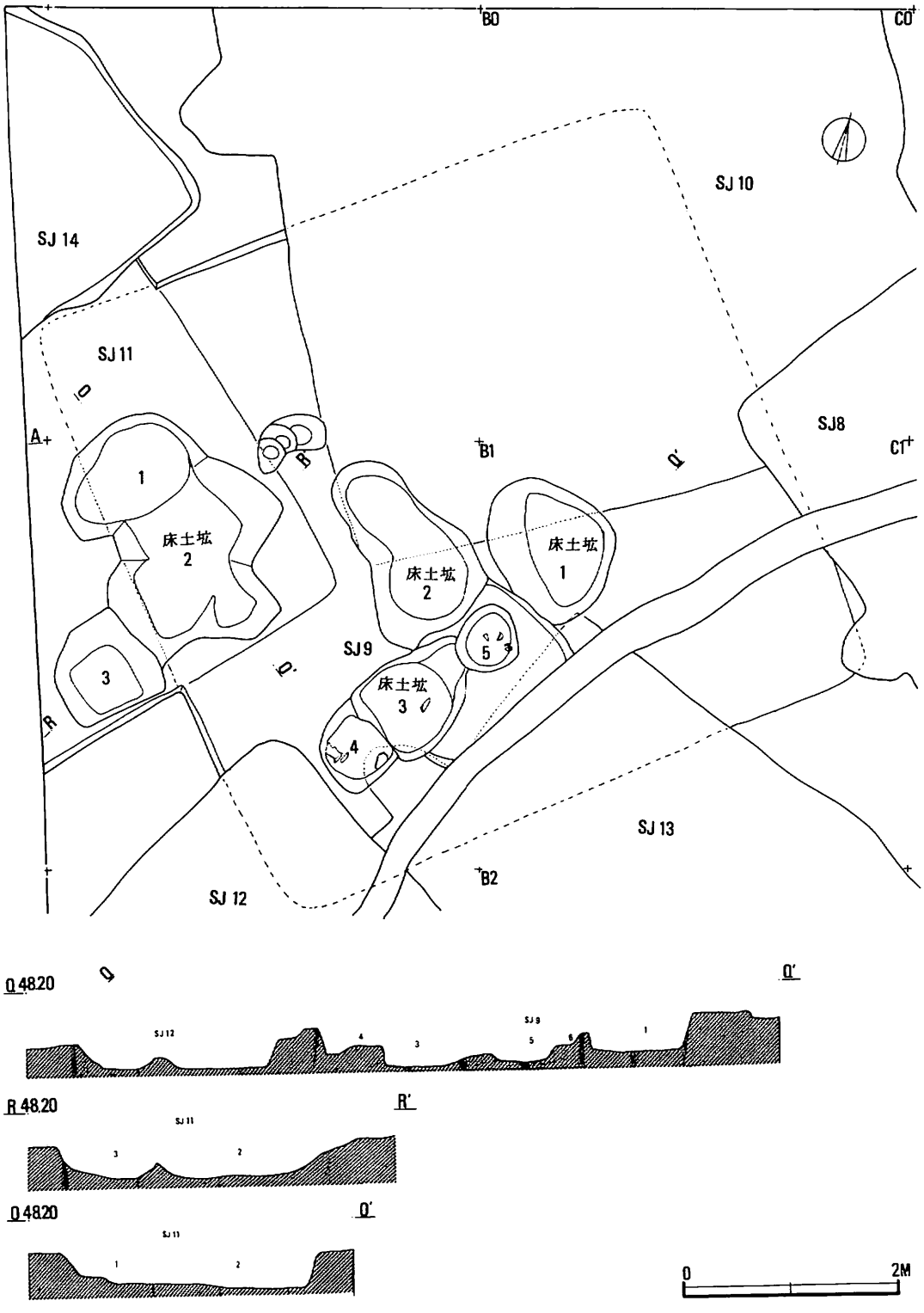
特徴的なことは本住居の床下土壙からは、第38図に見るとおり鬼高式土器を含む多数の土器が出土していることである。1、2号の出土状態は廃棄とも見られるが完形の土師器坏、こしきを含んでおり、このような例は調査区内では例が無い。また復元しえない破損品も多く単純にゴミの投棄とも考えられる。

第14号住居跡－SJ14

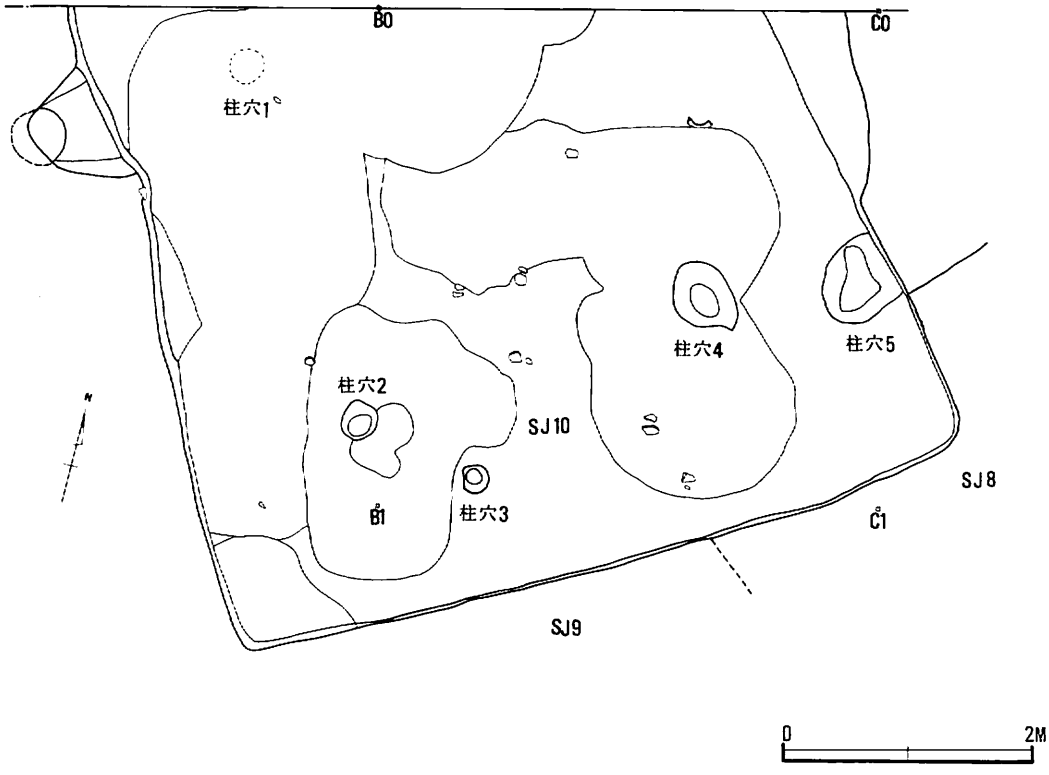
遺　構

東南コーナー部分を検出しているが大半は調査区外にのびている。SJ11を切って構築されている。フク土は3層に分けることができ表土から床面までは63cmを測る。壁は遺存部分で30cmを測る。

床面は直床であり、周溝、柱穴、床下土壙等は検出されていない。フク土中より土師器坏、甕等



第24図　本田・東台Ⅱ９号住居跡



第25図　本田・東台Ⅱ10号住居跡

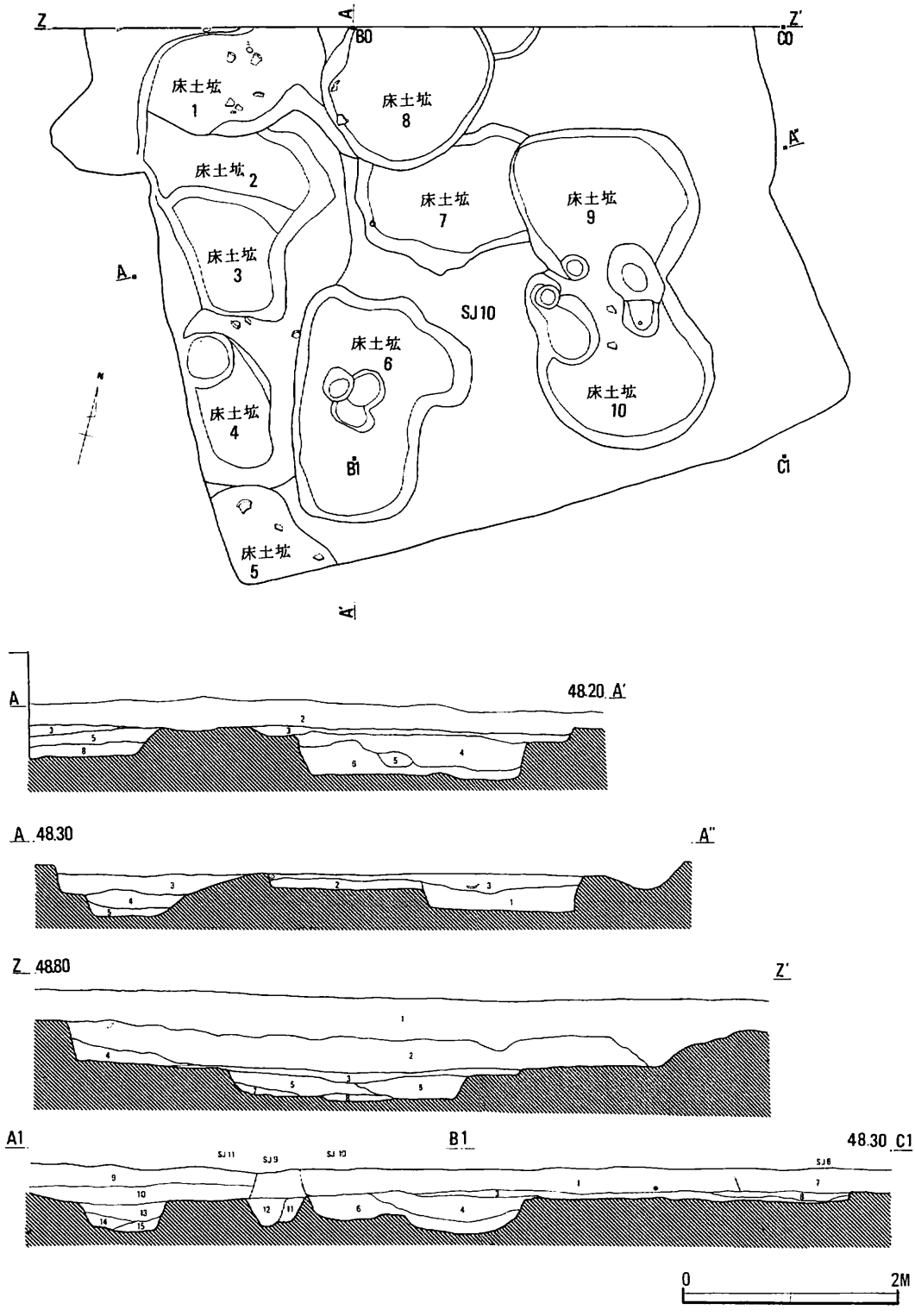
が出土している。

第10号住居跡－SJ10

遺　構（第25、26図）

全体のおよそ⅔を調査している。SJ8、SJ9と重複し、新旧関係はSJ9→10→8である。東西南壁の遺存長は、3.8m、5.2m、6.0mとやや歪んだ方形プランをしているようだ。西壁にはカマド状の張り出しがあるが、壁に掘り込みを行った部分で焼土化していない。東壁はカク乱のため壁ラインが乱れている。住居フク土（Z－Z′）は3層に分けられ表土から床面まで70～60cmを測る。床面は直床である部分が少なく大半が貼床（第3分層）が施され、下位に床下土壙が設置されている。貼床は直床と同様固くしまるがやや凹凸がある。ピットは5ヶ所検出され柱穴1、2、4は主柱穴となるだろう。柱穴1、2は直径25cm、深さ40～50cm、4は直径50cm、深さ50cmを測る。柱穴は床下土壙を掘削して作られる。床面上の出土遺物は土師器細片が多い。他に臼玉が出土する。

本住居内の床下土壙は大きいものが10基あり、各土壙が互いに切り合っている。各土壙のフク土は掘削後、早い時期に埋め戻されており、上面を貼床している。規模は1mを超え1.5m近い円、楕円形をするようであり、不正形の例は数次の掘削が考えられる。1号は1.5×1.0m、深さ25cm、2号は1.5×0.5、深さ15cm、3号は50×55cm、深さ20cm、4号は1.4×0.9m、深さ25cm、5号はSJ9の2号と同一、6号は2.1×1.6m、深さ35cm、7号は1.5×1.1m、深さ12cm、8号は直径約1.7m、深さ38cm、9号は1.8×1.5m、深さ36cm、10号は1.6×1.4m、深さ60cmの規模をもつ。



第26図　本田・東台Ⅱ 10号住居跡掘方

本住居の床下土壙は概して規模が大きく、床面積の6割を占めるようだ。また結果的に西壁に片寄るように見える。

10号住A～A′ 土層説明

1. 暗褐色土、2～3cm大のローム塊を多く、焼土、土器を含む。 2. 茶褐色土、ローム粒子、焼土を含む。 3. 茶褐色土、3～5cm大のローム塊を多量に、焼土、土器を含む。 4. 暗茶褐色土。 5. 黒茶褐色土

Z～Z′ 土層説明

1. 暗茶褐色土 耕作土 2. 茶褐色土、ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を多量に含む、土器層多（フク土） 3. 暗茶褐色粘土、硬くしまる。ローム粒子少量含む。 4. 暗茶褐色粘質土、ローム粒子を多く含んでいる。やや軟質 5. 茶褐色土、ローム塊（2～3cm大）を多く含み、焼土粒子を混入する。 6. 茶褐色土、5層に類似するが、焼土粒子の混入が、きわめて多い。 7. 焼土粒子を多く含む。暗茶褐色粘土 8. 焼土層

10号住A1－B1－C1杭土層説明

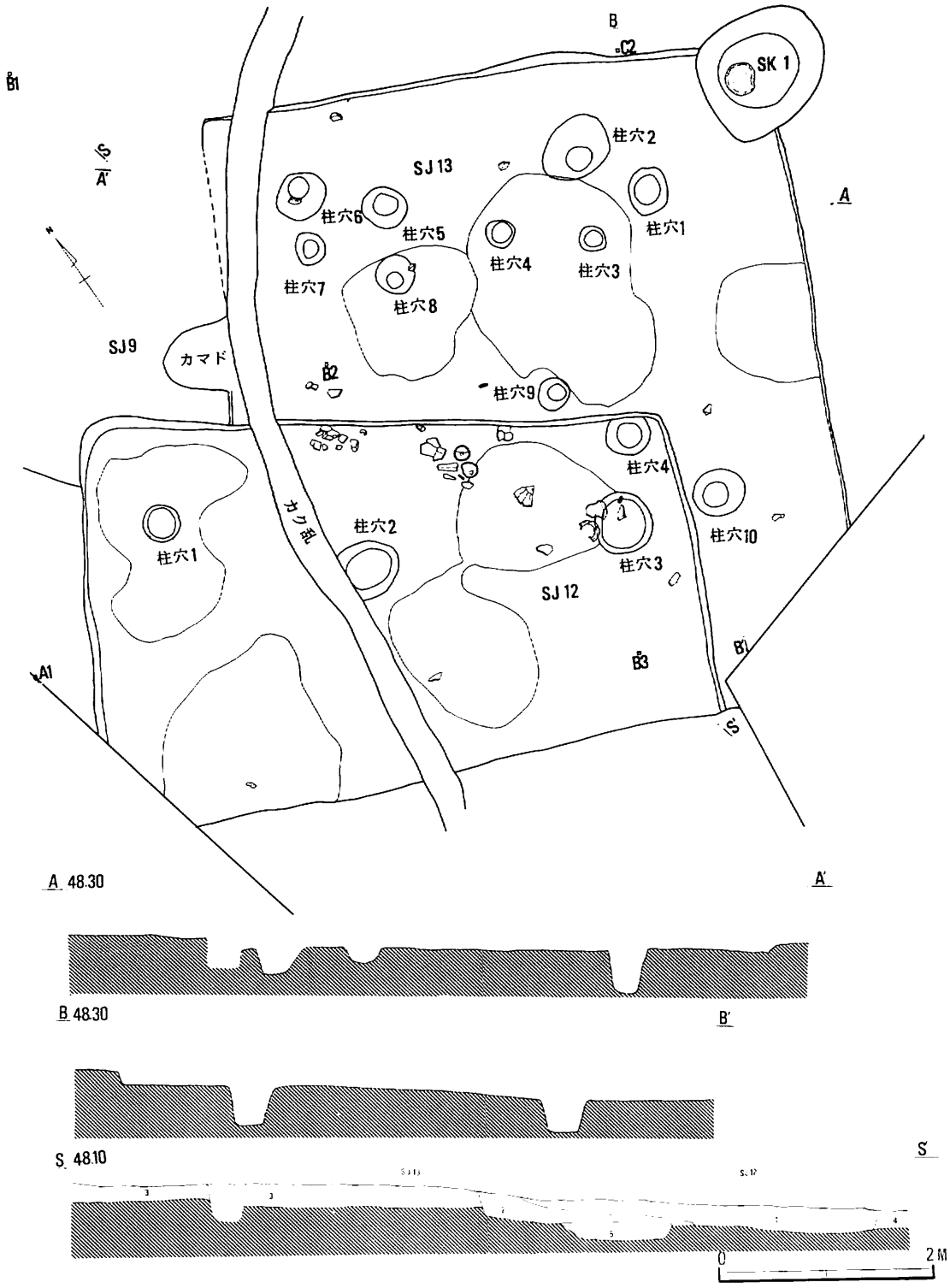
1. 黒茶褐色土、ローム小塊、ローム粒子を多量に含む。 2. 茶褐色粘土 3. 茶褐色粘土、ローム粒子、焼土粒子を含む、貼床 4. 5. 茶褐色粘土 6. 暗茶褐色、ローム塊粒子を多量に含む。 7. 茶褐色土、ローム粒子、焼土粒子を多量に含む。 8. 暗茶褐色土、焼土粒子を多量に含む。ローム塊を含む。 9. 暗茶褐色土、ローム粒子、焼土粒子を含む。 10. 黄茶褐色土、ローム小塊、焼土粒子を含む。(貼床) 11. 黒色土 12. 茶褐色土 13. ローム塊を多量に含む。茶褐色土。 14. 黄茶褐色土 15. 暗褐色土

第1号土壙土層説明

1. 黒茶褐色土 2. 黄茶褐色土 3. 黄茶褐色土 炭化物粒子、多し 4. 茶褐色土 5. 暗茶褐色土、黒色土まじり 6. 暗茶褐色土 7. 黒暗茶褐色土層

調査区東壁YY′ 土層説明（SJ14、SJ11、SD1）

1. 耕作土、暗茶褐色、パサパサ、細粒、焼土粒子を少量含む。 2. 茶褐色土、ロームブロック、4～6cm大焼土粒子を多量に含む。 3. 暗茶褐色粘土 4. 黄茶褐色土。細かい粒ローム粒子、焼土粒子を多く含む。 5. 黄茶褐色土、ローム塊、焼土粒子を含む。



第27図　本田・東台Ⅱ 12、13号住居跡

第12号住居跡－SJ12

遺　構（第27、28図）

北半部分を中心に遺存していた。SJ13、SJ9、SD1と重複するが、SJ13、SJ9を切って構築されSD1、SK4に切られる。北、東のコーナーのみ遺存し、他は検出されていないが、略方形プランをすると考えられる。壁は北辺、東西辺の一部で5.4mを測る。北壁の高さは10cm遺存している。床面は平坦であるが固くしまり、床下土壙部分を除いて直床であった。ピットは3ヶ所に確認でき、柱穴1、柱穴3は主柱穴となるだろう。柱穴1は直径30cm、深さ25cmを、柱穴3は直径55cm深さ30cmを測る。柱穴2はSJ13の主柱穴の1つだろう。床下土壙は4基確認された。特に貼床はされていない。1号は幾度かの掘削のため不定形をしており長さ1.7m、幅1m、深さ25cmの規模をもつ。3号は1.5×1.2mの楕円形で、深さ20cmの規模を持つ。4号は1.5×1.2mの楕円形で、深さ25cmの規模をもつ。

遺　物（第40図）

遺物は床上、北壁寄に多く第40図中の№12－13.14は正立した状態で出土している。坏、長甕を主体とするが羽口の検出もあった。

土層説明

B－B′

1. 茶褐色土
2. 暗茶褐色土、粘性強くかたい。

S－S′

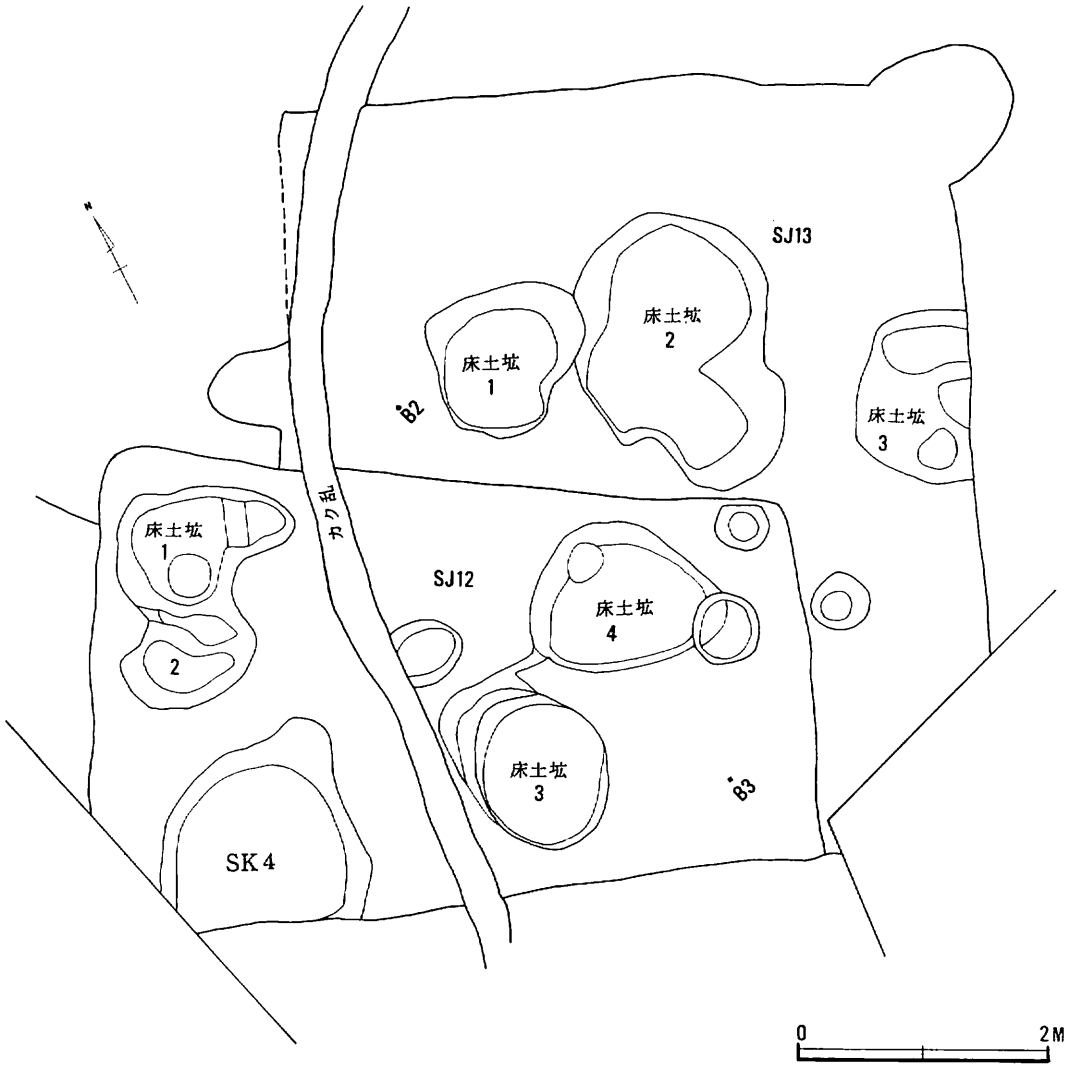
1. 茶褐色土、ロ－ム粒子、多
2. 茶褐色土、焼土粒子、多、焼土塊
3. 茶褐色土、ロ－ム粒子、焼土粒子、多、
4. 黄茶褐色土、ロ－ム粒子、焼土粒子、少
5. 暗褐色土

第13号住居跡－SJ13

遺　構（第27、28図）

北側と東側部分を検出している。SJ9、SJ12と重複するが、新旧関係はSJ9→SJ13→SJ12→SK1と激しく切り合う。東・北・西壁が残るがあまり明瞭でない。平面形は方形をすると考えられ、東西5.3mを測る。カマドは西部に設置されるがカク乱により一部破壊されている。カマドを通る住居跡主軸はN－37°－Eを示す。床面は平坦であるが固くしまっていた。床下土壙部分を除いて直床である。ピットは11ヶ所に検出されたが、主柱穴となるものは柱穴1、と考えられる。柱穴1は直径45cm、深さ50cmを測る。柱穴5は65×55cm、深さ20cmの楕円形をしている。柱穴10は、直径40cm、深さ30cmと規模も等しい略円形をしている。

床下土壙は3基検出された。各土壙とも上面に貼床が施されておりロームブロックを主体とする暗茶褐色土に充填される。



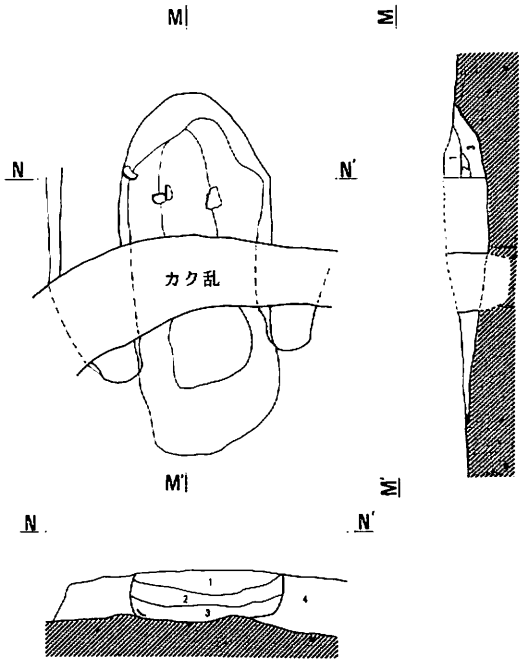
第28図　本田・東台Ⅱ12、13号住居跡掘方

遺　物（第41図）

土師器坏、高坏、甕片等が床上より出土した。北壁際からは鉄鏃の検出があったが遺存は不良。

カマド（第29図）

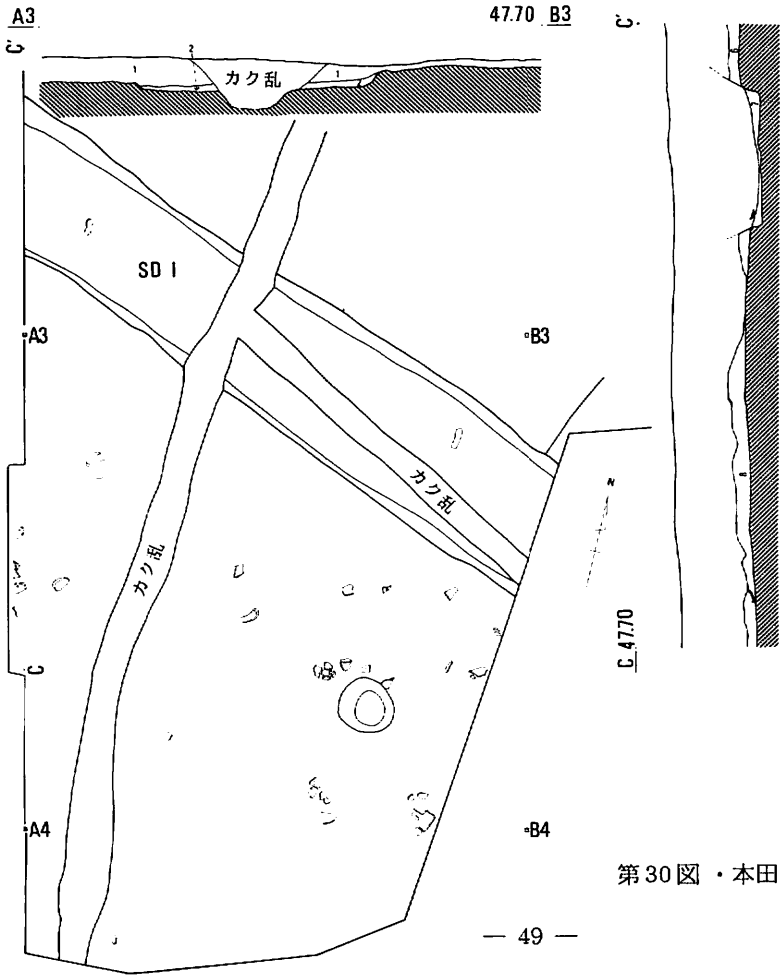
西壁の北コーナー寄に位置している。カク乱を受けているため遺存状態は悪いが概要は明らかにできた。燃焼部を半分以上壁外に張り出して構築される。燃焼部の中央付近に棒状礫が出土しており壁ラインとも一致する位置にあることから支脚の可能性がある。奥行1.15m、幅52cmの規模を持つ、両袖は重複住居のフク土を掘り残している。右袖の幅は20cm、立ち上がりは18cm遺存していた。焚口部は住居内へ30cm張り出し、緩やかな皿状の凹面をなしている。煙道は削平され遺存していない。カマド中から土師器甕細片が出土しただけだった。



13号住居カマド土層説明

1. 黄茶褐色土、焼土粒子を多く含む。天井落土
2. 焼土ブロック、粒土粒子を多量に含む。茶褐色土
3. 暗褐色土
4. 黒茶褐色土、土壙11H・3号のフク土
5. 暗茶褐色土、9号住フク土

第29図　本田・東台Ⅱ13号住居跡カマド

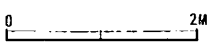


土層説明A3－B3

1. 茶褐色土
2. 暗茶褐色土、粘性強い
   かたい

土層説明C－C′

6. 耕作土、暗茶褐色バサバサ
7. カ黒茶褐色土
8. 暗茶褐色土
   焼土ローム粒子を多く含む。
   やや粘性。



第30図　・本田・東台Ⅱ A－3G

3. その他の遺構と遺物

A－3G （第30図）

溝の南側部分のほとんどを本グリットに含んでいる。SJ12の南・西壁部分に相当するはずであったが確認されていない。耕作土によるカク乱が40～50cmほどあって遺構の立ち上がりは確認出来ないがピット1ヶ所を検出している。出土遺物も土師器をはじめとして多数出土しており、16軒目の住居跡が立地していた可能性が高い。

遺　物 （第42図）

土師器甕破片、坏破片等が多い。図示できた土師器は坏が10点ほどある。他に縄文土器、礫器等が出土している。

SD1 （第30図）

SJ12を切って構築される。幅1～1.1m、深さ10～15cmを測り長さ4.8mに渡って検出されなを調査区外へ延びている。直線的な溝であるため主軸はN－47°－Wを示す。掘方は箱形を呈し、底面平坦である。緩やかに傾斜移行し、北西より南東へ流下する。遺物は土師器細片が数片出土した。

SK1 （第27図）

SJ13を切って掘削される。平面形は楕円形をしており、1.25×1.1m、深さ22cmを測る。フク土上層に直径30cmほどの輝緑安山岩質の円盤状河石を置いている。性格は不明である。

SK2 （第17図）

SJ7を切って掘削される。平面形は楕円形をしており、1.35×1.1m、深さ18cmを測る。SK1と並ぶ、フク土も暗茶褐色土である。出土遺物はほとんど無い。性格は不明である。

SK3 （第17図）

SJ8を切って掘削される。平面形は楕円形をしており2×1.4m、深さ20cmを測る。暗茶褐色土を充填している。出土遺物はほとんどない。

SK4 （第28図）

SJ12を切って作られる。平面形は円形に近く1.6×1.5m深さ60cmを測る。上層は黒茶褐色土、下層は暗茶褐色土の2層に分かれる。底面は平坦である。遺物はフク土上層より、須恵器坏が一点出土している。他に出土遺物は無い。性格は不明である。

縄文時代の遺物

縄文土器（第44、45 、46図、第3表）

〔概　要〕

本田・東台遺跡から出土した縄文土器の総数は63点である。これは総破片数であるが、小破片のため同一固体である可能性も含んでいる。すべての土器が縄文時代の遺構からではなく、調査区・古墳時代住居跡のフク土中より出土している。時期は縄文時代早期にかかるもので、他の時代の土器は無い。詳しく説明すると5群に分類でき、数量の上では縄文早期後半～末頃が主体となりそうである。

第1群	撚糸文系土器	9片	（井草式～夏島式）
第2群	無文土器	1片	
第3群	回転押型文土器	1片	
第4群	貝殻沈線文系土器	3片	（田戸下層式）
第5群	貝殻条痕文系土器	49片	（野島式・鵜ヶ島台式、他）

第1群土器（1～9）

1、2、3、5は器面に原体LRによる斜縄文を施している。4はRLによる縄文を施している。6、7、8は器面に原体RLによる撚糸文を施している。これらの撚糸は1～2ミリと極めて細いがしっかり施文されている。9はLRによる撚糸文が施される。1群土器中には口縁部は無いが、縄文、撚糸文とも密にしっかりと施文されていることから、井草式～夏島式に比定されよう。

第2群土器（10）

無文土器である。口縁は内そぎ状になっている。1群と同様焼成良好であり、撚糸文系土器群に伴うとして良いだろう。

第3群土器（13）

回転押型文土器、細く長い楕円形文が全面に施文される。一粒の大きさは、約幅2.5×約長さ5.1mmを測る。一片のみの出土であるが、時期的には第1群に伴うだろう。

第4群土器（11、12、14）

貝殻沈線文系土器、厚手で焼成も良く、堅緻な土器である。半截竹管状工具による太沈線、細沈線を横位に施している。11は、沈線間に貝殻腹縁文を施文している。本群は田戸下層式に比定されよう。

第5群土器

早期後半以降の器面に条痕の施される土器を一括した。本群は文様の施されるａ類ｂ類と条痕のみのＣ類に分けられる。

a類（57）

細隆起線の施された部分が残る小破片の土器である。野島式に比定されよう。

b類（15～17）

16は半截竹管状工具による細沈線を施文後、竹管による刺突を施している。14、17は、細沈線を沈線区画内に充填している。鵜ヶ島台式に比定されよう。

C類（18～63）

本類は、早期後半～末葉の各型式を含んでいると考えられるが、一応条痕文だけの土器として扱った。18～25、28～31、41、48、50は、表裏面に幅広い条痕を強く施文している。50は、口縁部である。26、27は、繊維をほとんど含まない。32は、器面にナデ状の凹線が施文されている。

石器、土製器等（第47・48図）

1は、茂呂型ナイフ形石器である。黒燿石製、基部から左側縁にかけて入念な調整が加えられている。長さ3.2cmと小形品だが完形であった。3～8は小剝片である。5はバルブが除去された剝片である。2は黒燿石製の石鏃・先端を欠損している。

9は炭化種子である。桃・梅等の堅果類の種子であろう。SJ9床上より出土した。10は滑石製の臼玉である。断面台形を呈し、長径1.2cm・短径1.0cm／孔径0.2cmを測る。SJ10より出土した。11は緑灰色を帯びた管玉である。長さ1.7cm、直径0.7cm、孔径0.3cmを測る小形品である。材質を特定できないが気泡状の細かい孔が表面に観察できる。ガラス製か。16の貝巣穴泥岩と伴にSJ5のpit4より出土した。

12～17は貝巣穴泥岩である。住居跡より出土しており加熱・被災している。淡褐色・茶褐色をしている。貝巣穴泥岩とは、海岸の波打ち際に生息する二枚貝のイシマテ・イシワリ等は軟質の岩に穴を開けて住かとするといい、これらの貝によって穴を開けられた泥岩のことである。東京都八王子市神谷原遺跡（文75）で最初に報告され、埼玉県内では草加市西地総田遺跡（文76）での報告に次ぐ資料である。両遺跡とも五領期にかかる時期とされており、本遺跡のように鬼高期にかかる例は少ない。神谷原、西地総田例とも祭祀的な使用法を推測されているが、本遺跡のSJ5における管玉との伴出例を除くと、すべてフク土中からの検出であった。

18、19は石英の破片である。18はSJ4床上より出土している。火打ち石の破片であろうか。

20、21、22は土製の網錘である。20は紡錘形をしており、長さ6.5cm、最大径1.7cm、孔径0.45cm重さ16.5gを測る。21は円筒状をしており、長さ5.4cm、直径1.5cm、孔径0.5cm、重さ13gを測る。22は欠損しているが紡錘形になろう。軸穴の断面は粘土から心棒を引き抜いている。投網・刺網等の錘具であろう。23は焼成された粘土塊である。つまんでちぎられた様子を留めており、部分的に指頭圧痕が残っている。

他に図示できなかったが、SJ12直上より鉄鏃と思われる小鉄製品が検出されている。遺存状態は不良であるが長さ6cmを測る。

礫　器（1、2、3、4）

礫器は4点出土しておりすべてフク土中からの検出だった。1は楕円・扁平な礫の左右から調整を加えている。背面は自然面のまま残っている。2は側面と片面のすべてに調整を加えている。3は楕円形を呈し片面全面を調整するが刃部に当る部分は背面も調整を施している。刃部の角度は約60°である。4は片面の一側縁に調整が加えられ、他は自然面を大きく残している。

剝　片

5は、側縁に調整の加えられた大型剝片である。背面は自然のままである。

打製石斧

6は短冊形をした打製石斧であるが、背面は自然面を残している。刃部の角度は62°を測る。

編物石（7、8、9、10、11、12、14）

長楕の平扁礫であるが住居跡フク土または床面より出土したものである。編物石とされるこのような自然礫は東京船田遺跡の五領期末とされる住居跡の発掘以来、古墳時代から平安時代までの住居跡から発見されている。莚編の錘りに類似することから編物石と呼ばれる。本遺跡ではSJ4から2個同時に出土したのみで他は別々に出土している。長さは15cm前後に集中する。民俗例では2個一組で8個を用いて莚を編んだという。

砥　石（10、17）

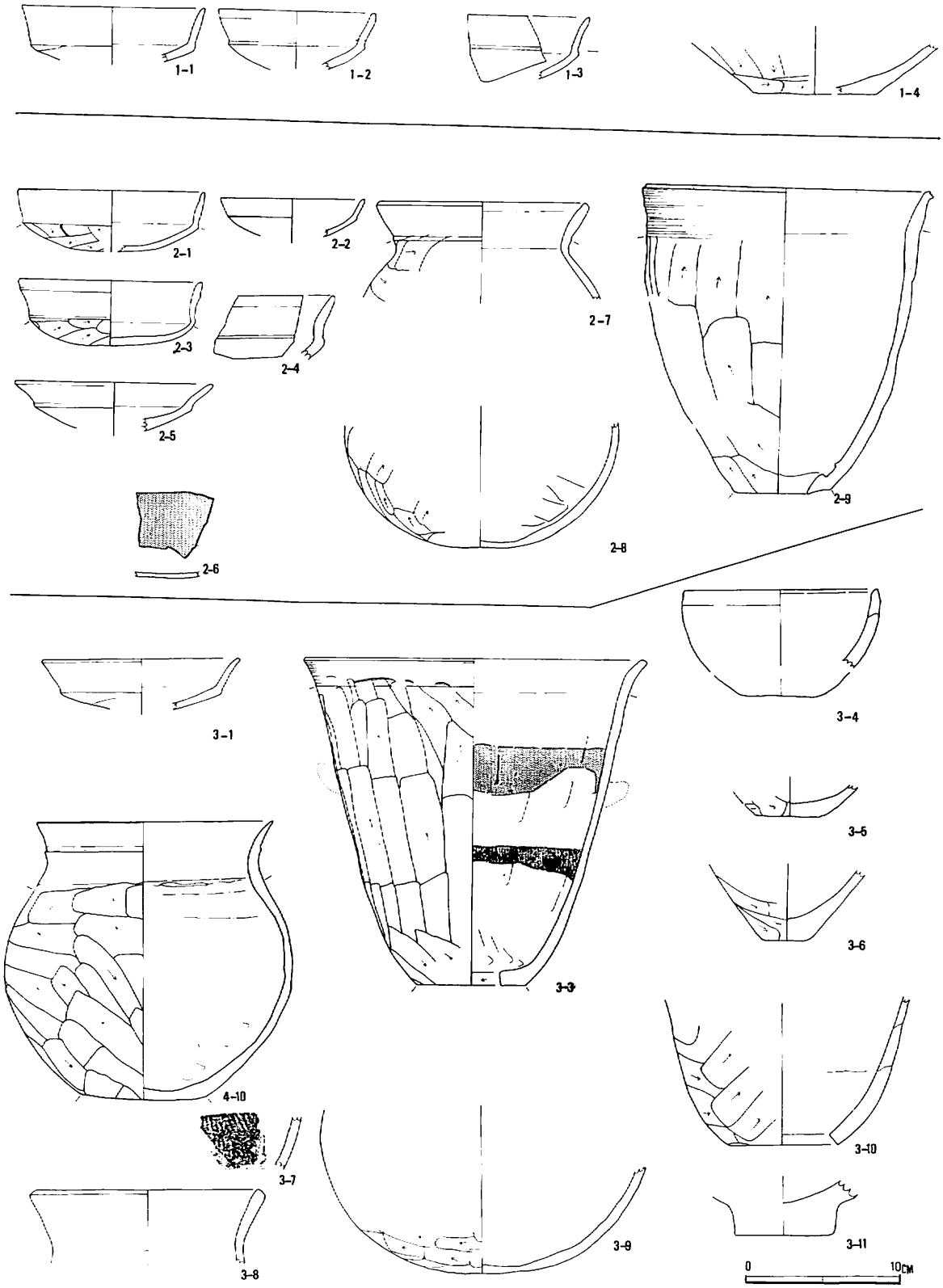
10は平面な広範部を砥面にしている。17は片面を剝離しているが長軸方向に各平面を砥面にしている。

磨　石（13、18、15、16、19、20）

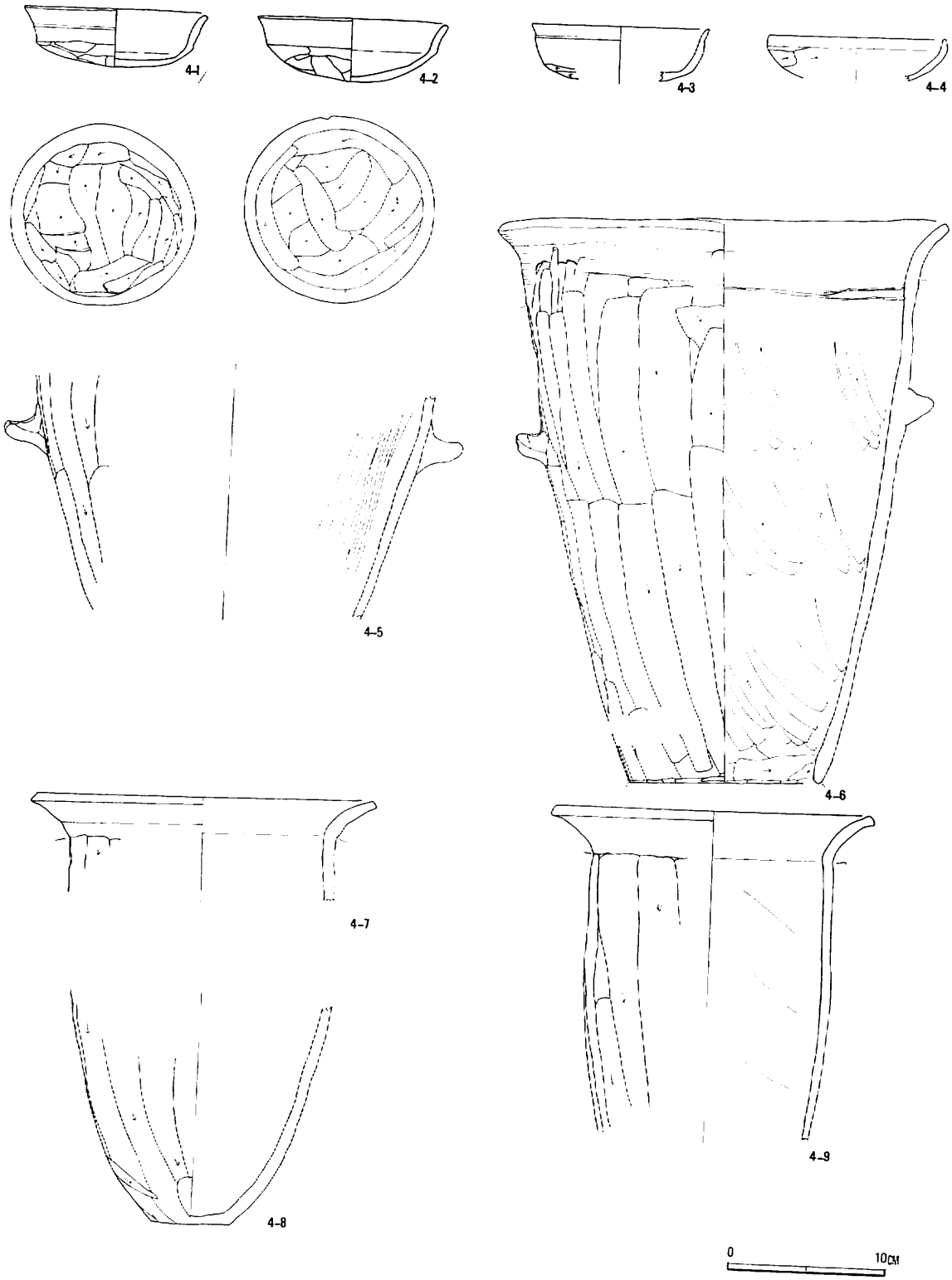
13は周縁、両側面を研磨して円盤状にする。他の磨石と異なるが片面が弧状をするため、円盤状に成形後も研磨を行ったと考えている。18も同様の状況を示している。両方とも砂岩製である。15、16、19、20は破損している磨石である。

有溝砥石（21）

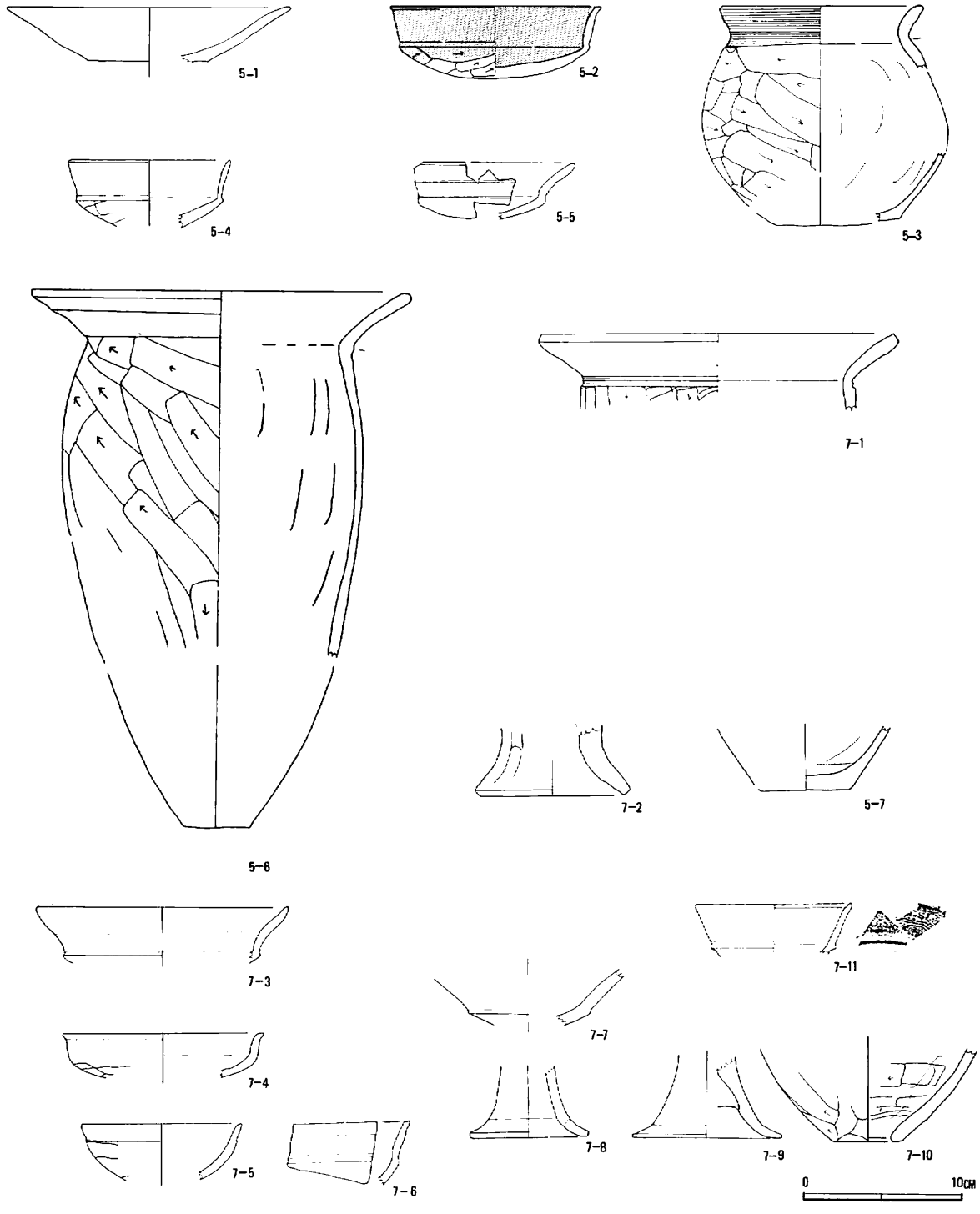
21は両側面に研磨によると見られる磨溝がある。楕円形の砂岩を用いており下位を一部欠失している。砥面の幅と長さは前面で1.7×3.2cm、背面で1.2×3.1cmを測る。前面と背面の磨溝は約30°のズレがあり一致しない。SJ10のフク土から出土しているが縄文時代に属する有溝研磨器としておきたい。



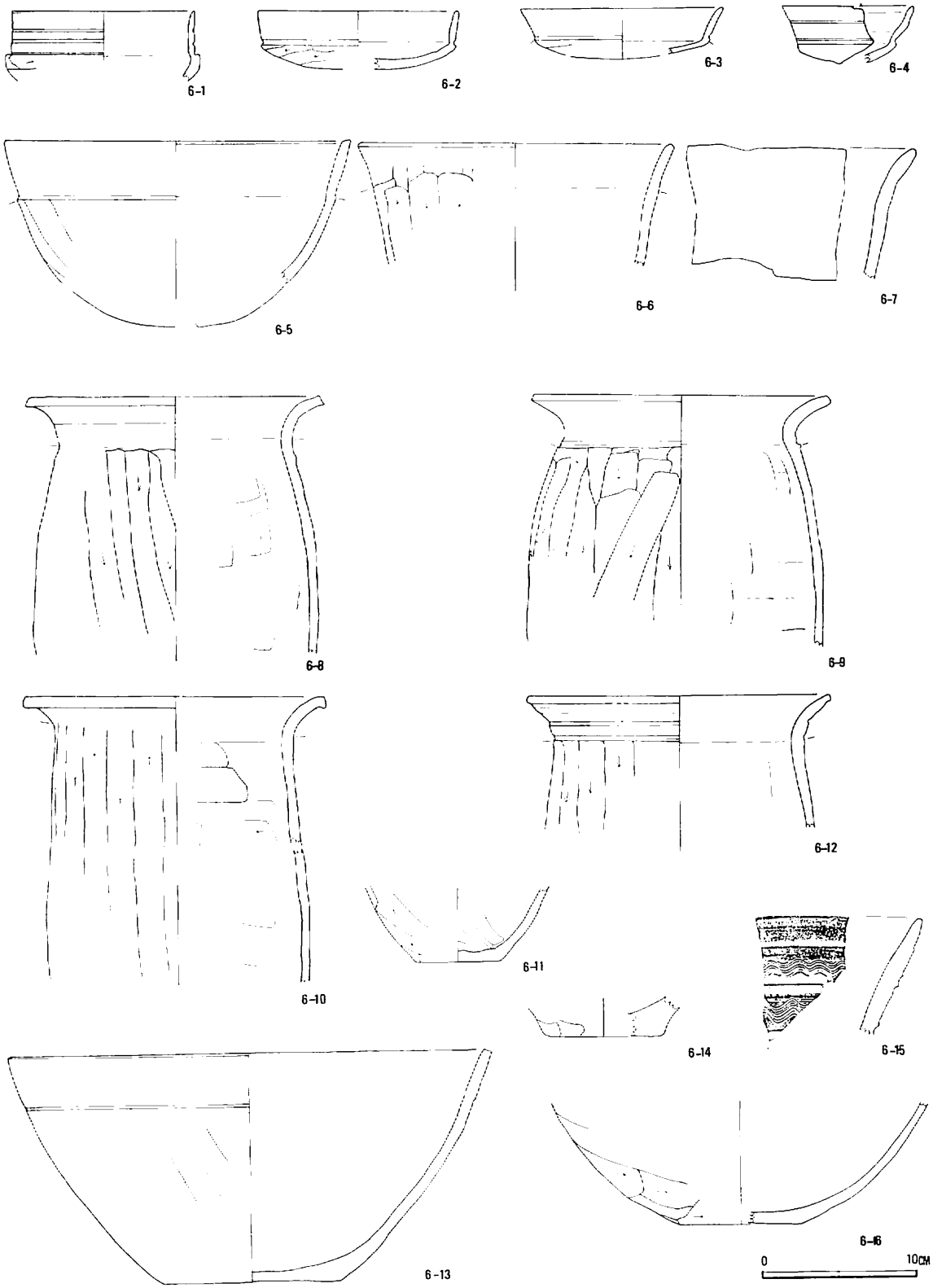
第31図　本田・東台Ⅱ1、2、3号住居跡出土遺物



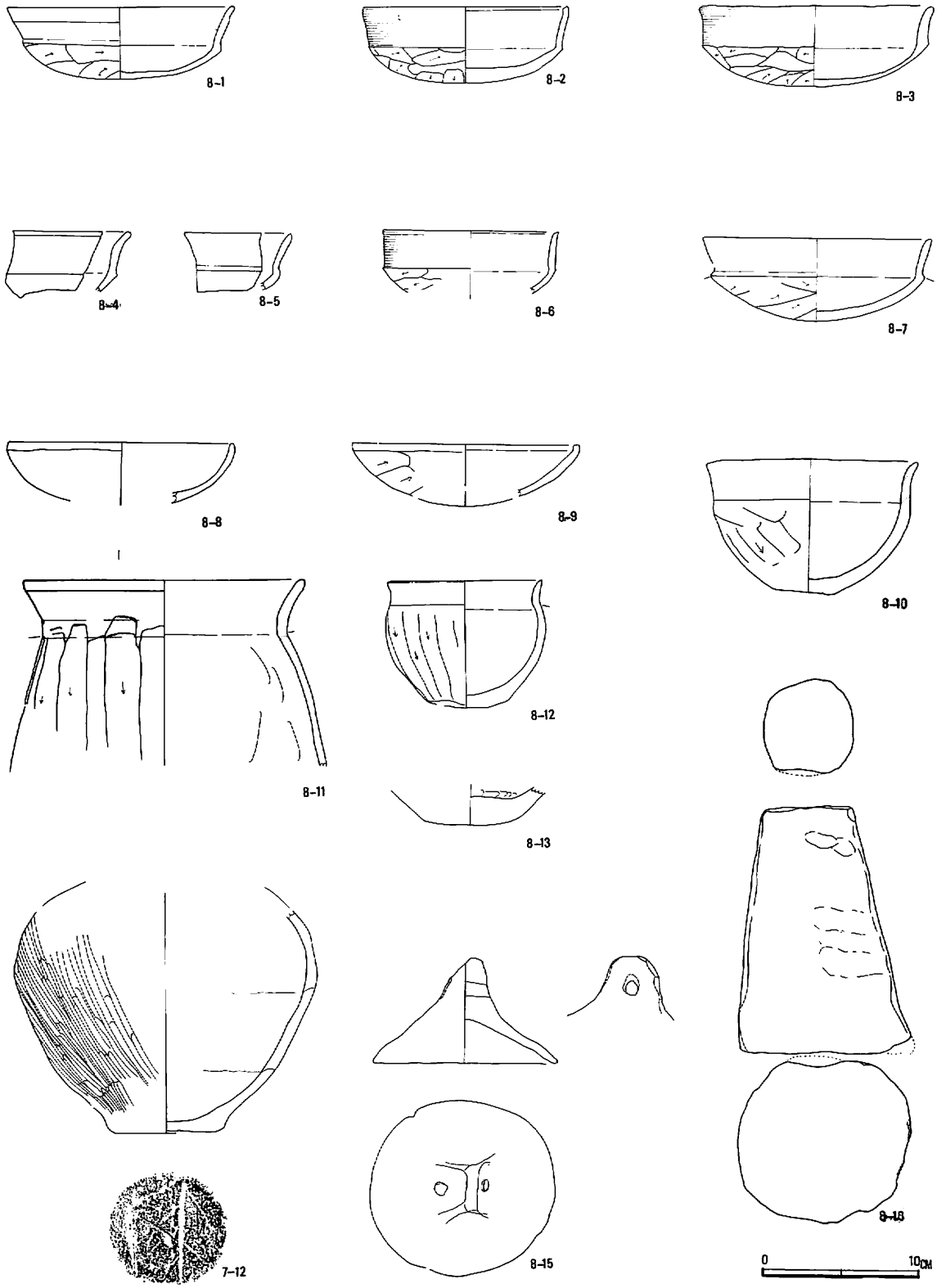
第32図　本田・東台Ⅱ4号住居跡出土遺物



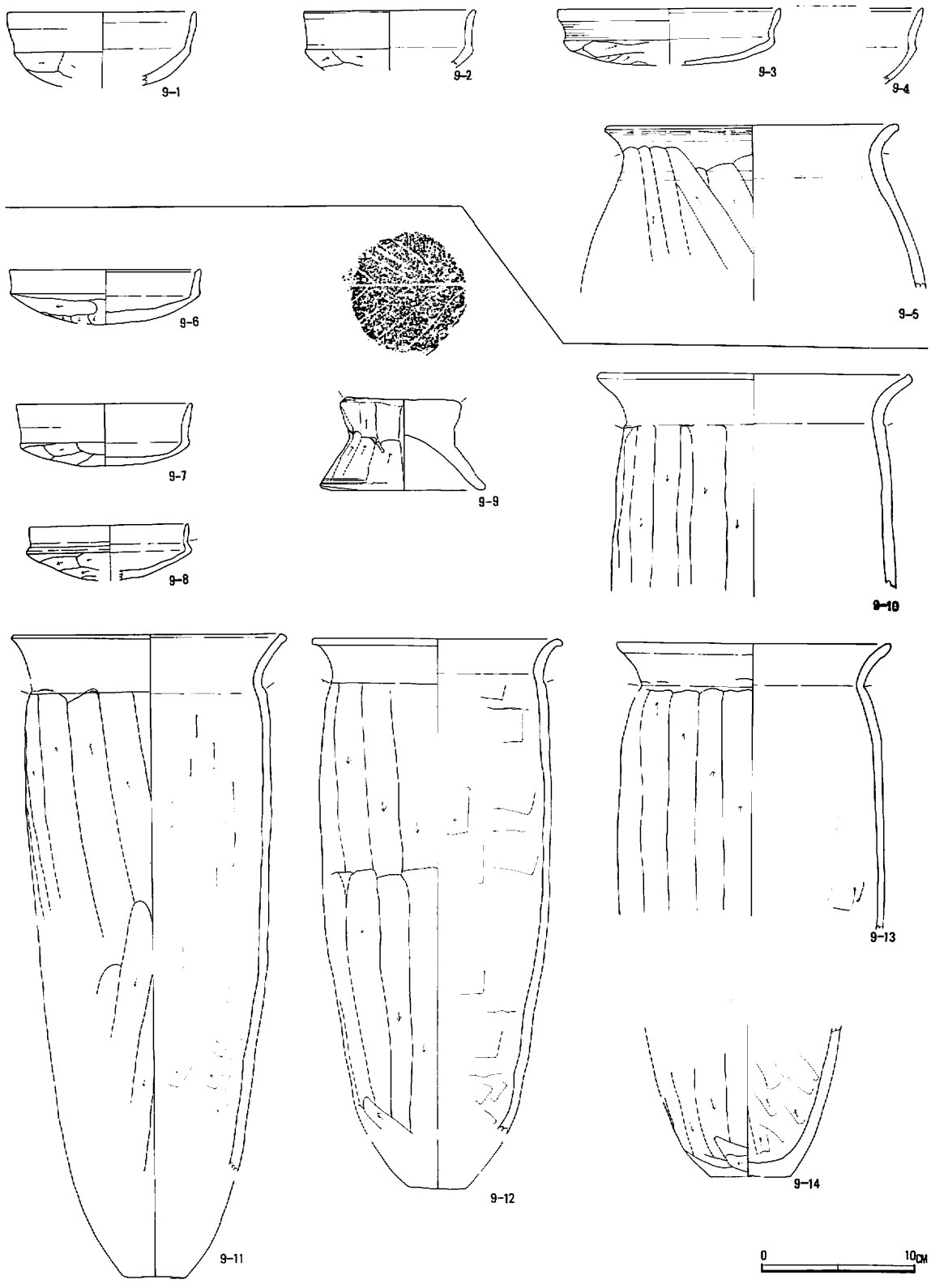
第33図　本田・東台Ⅱ5号住居跡出土遺物



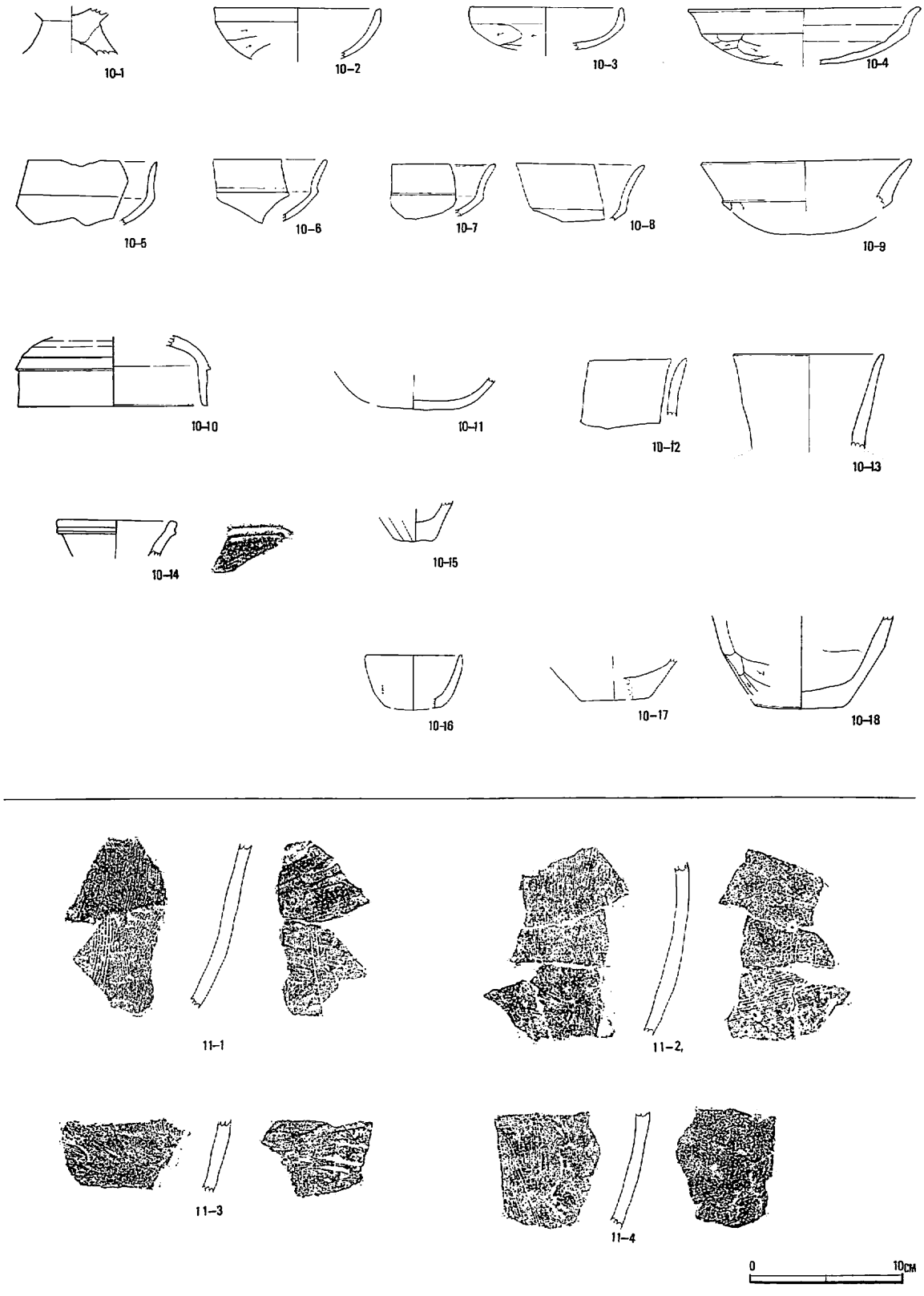
第34図　本田・東台Ⅱ6号住居跡出土遺物



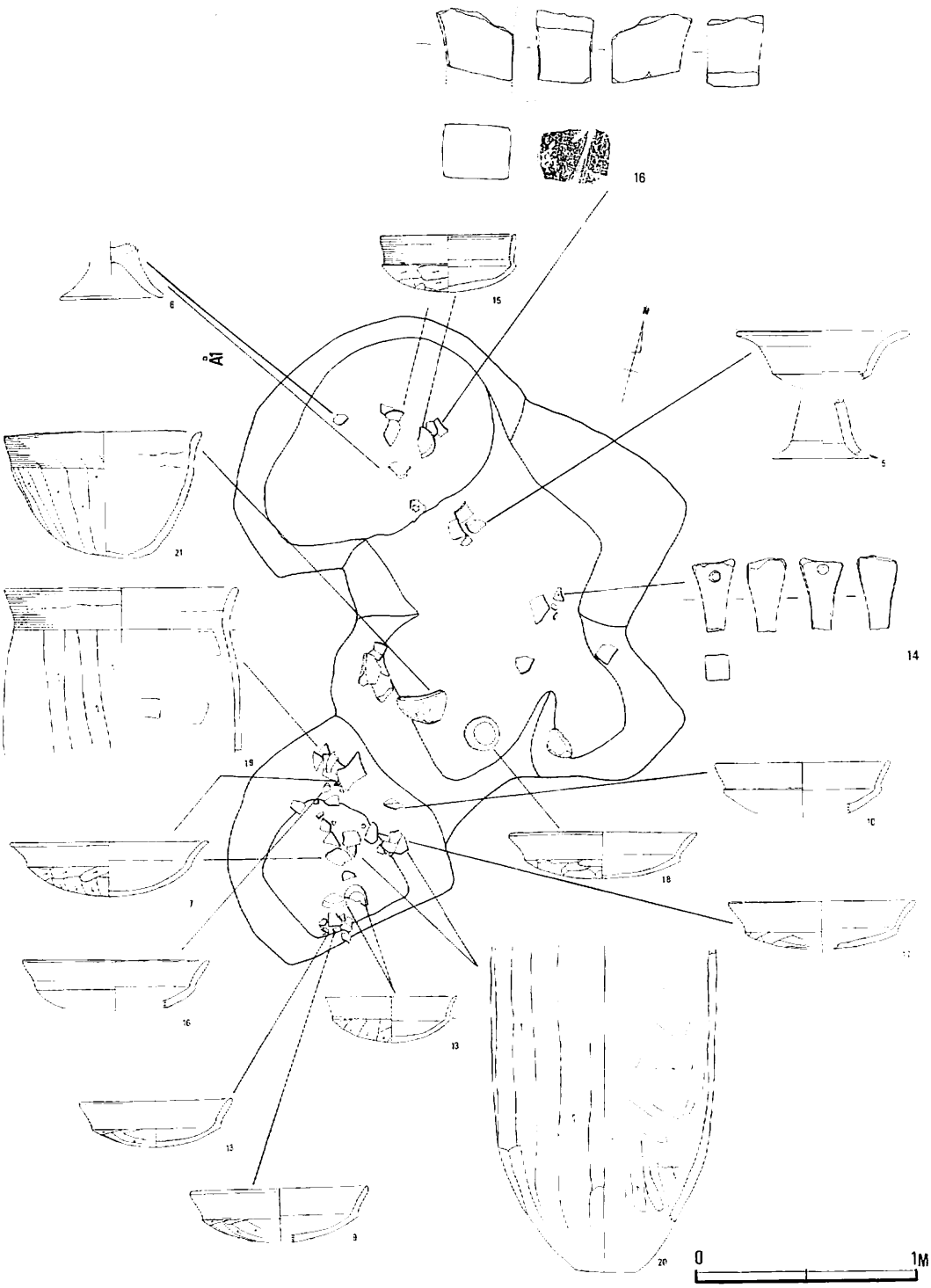
第35図　本田・東台Ⅱ7、8号住居跡出土遺物



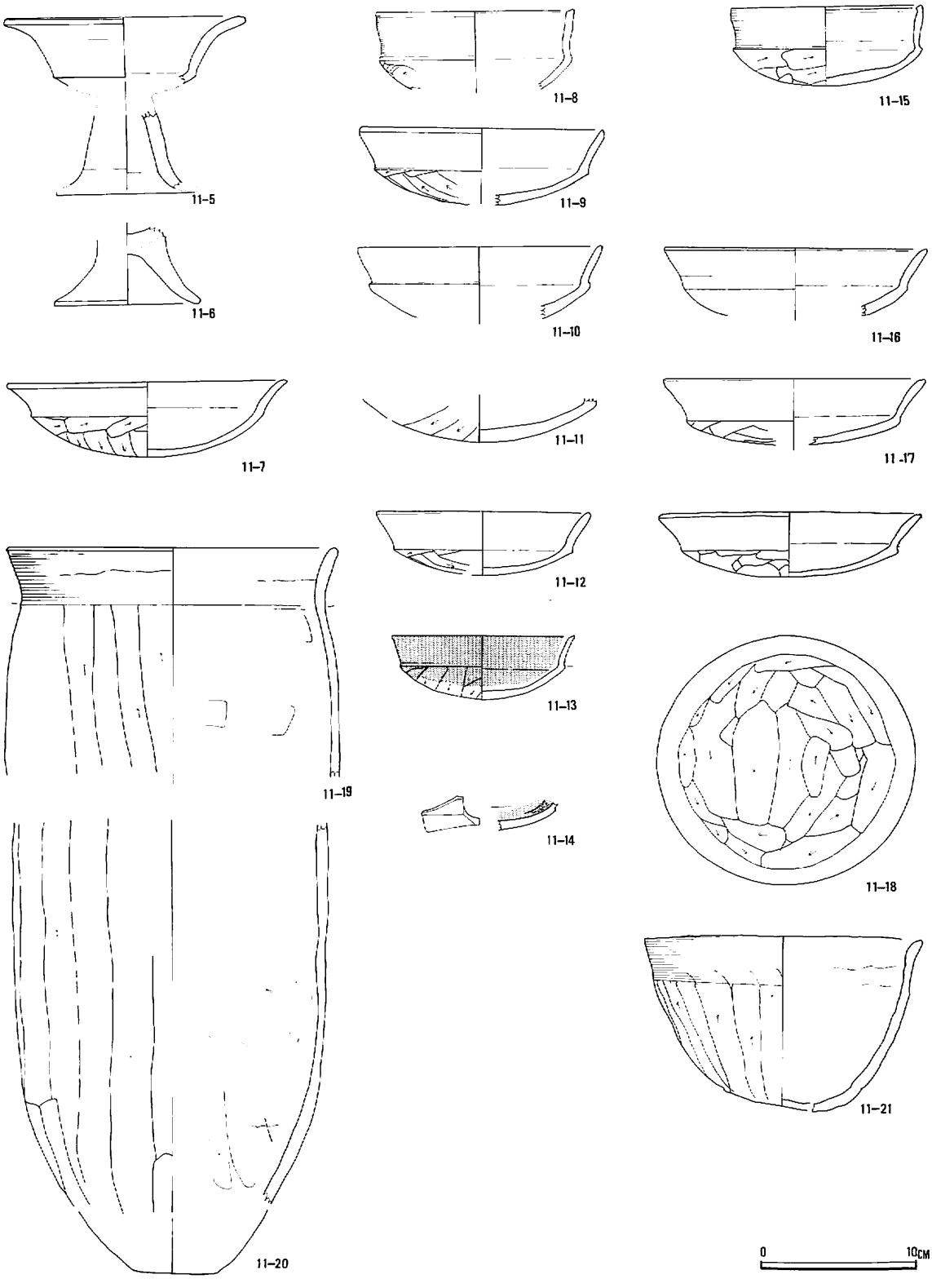
第36図　本田・東台Ⅱ9号住居跡出土遺物



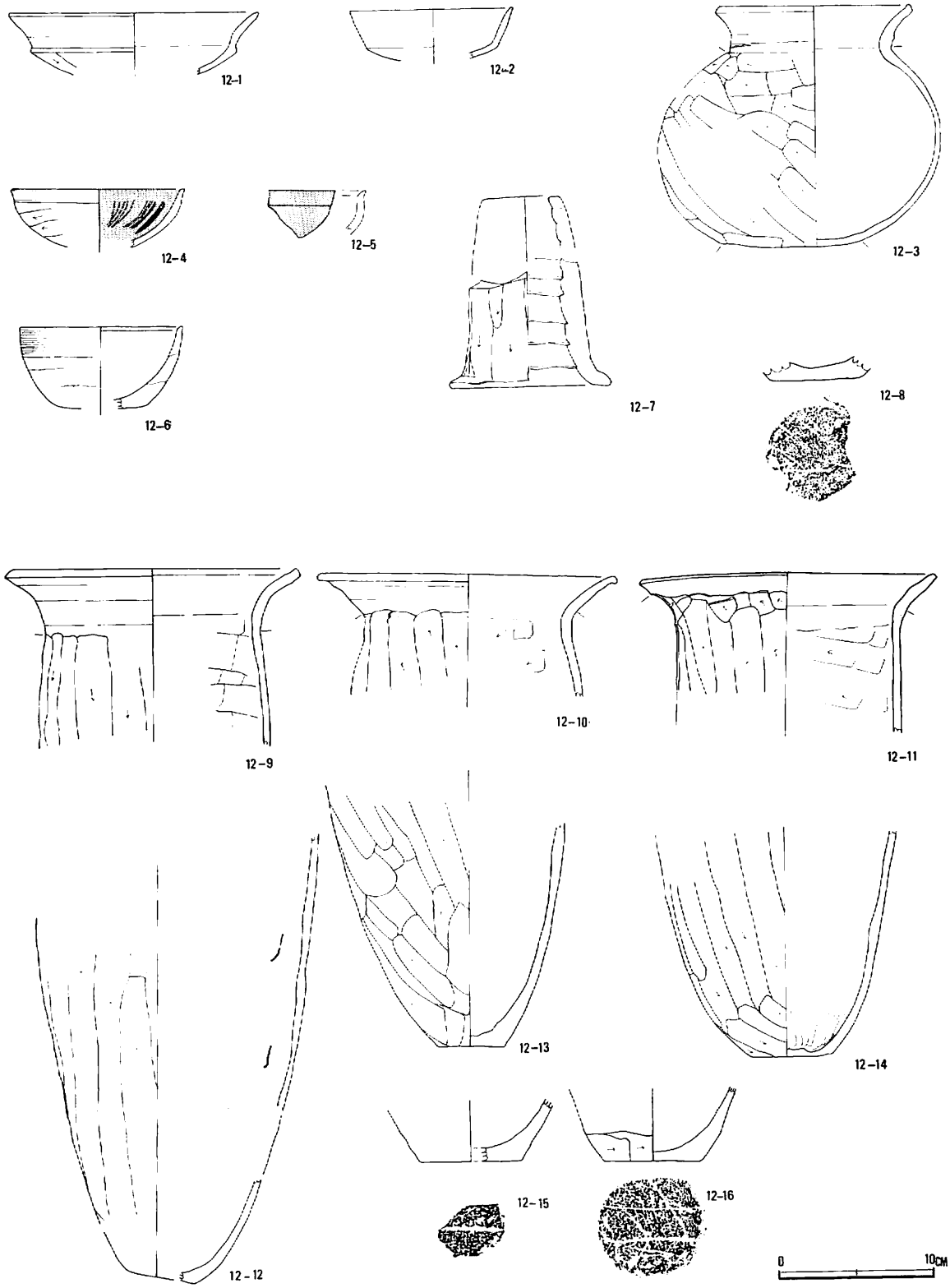
第37図　本田・東台Ⅱ10、11号住居跡出土遺物



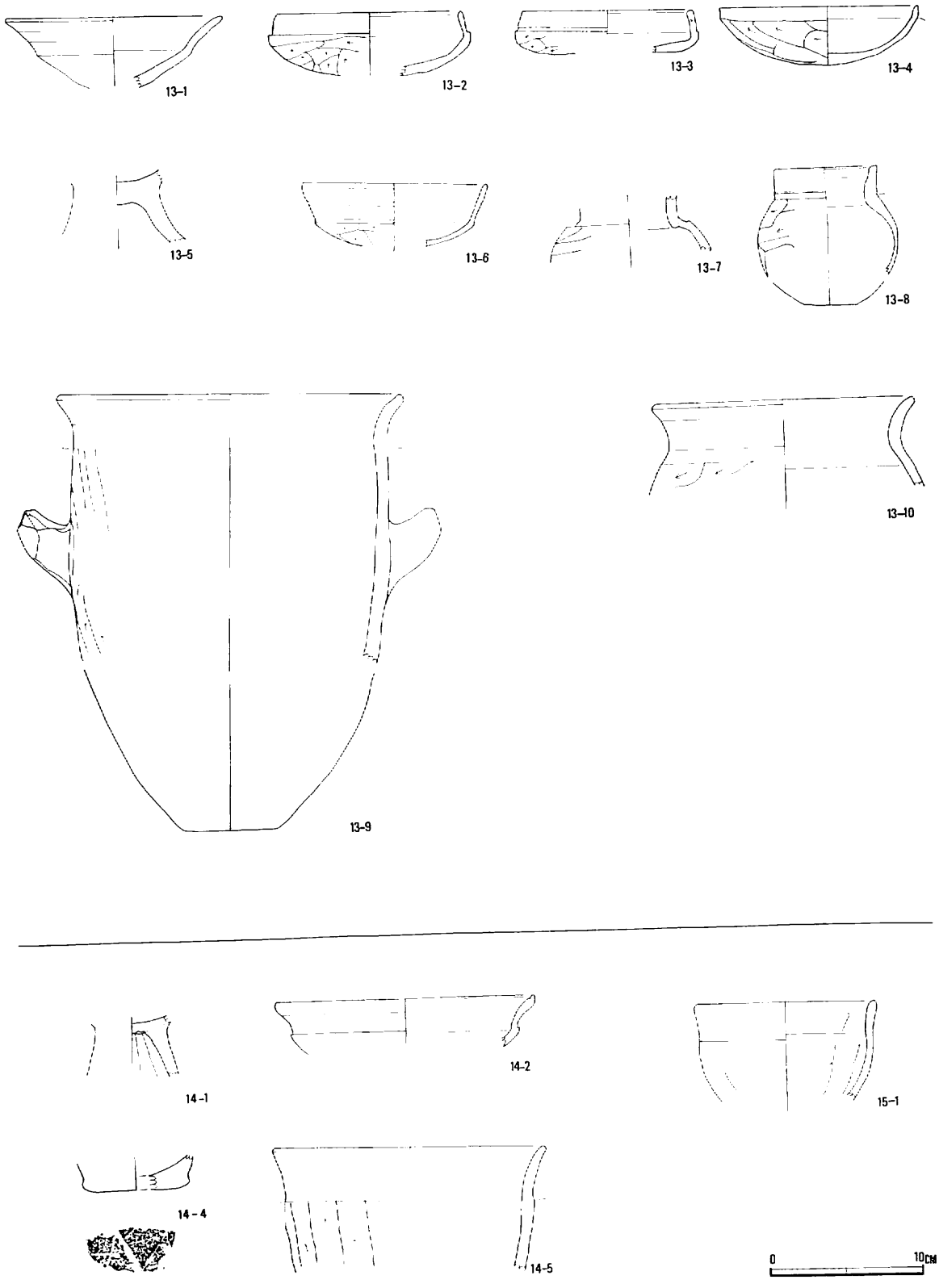
第38図　本田・東台Ⅱ 11号住居跡床下土壙遺物出土分布



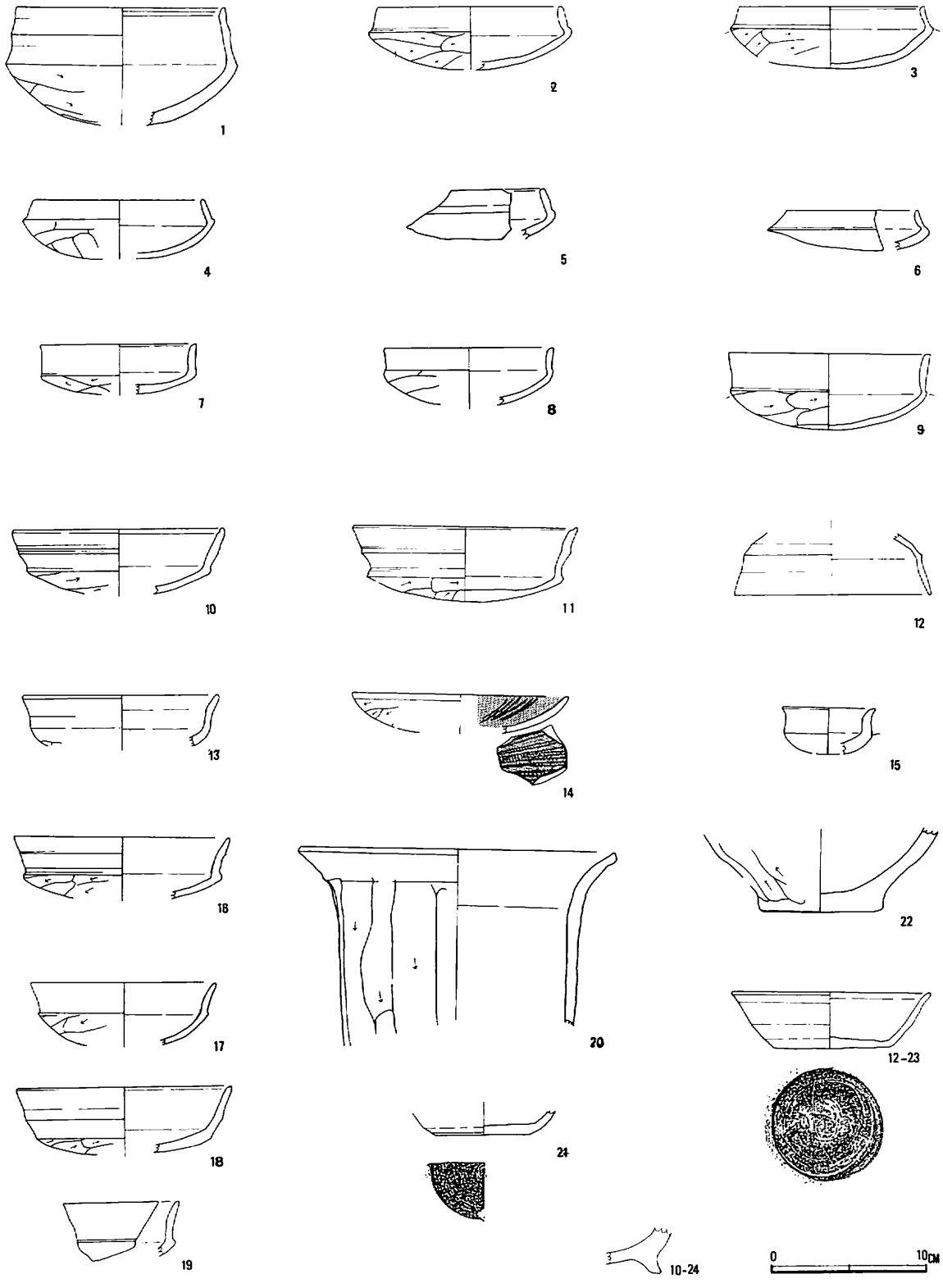
第39図　本田・東台Ⅱ11号住居跡出土遺物



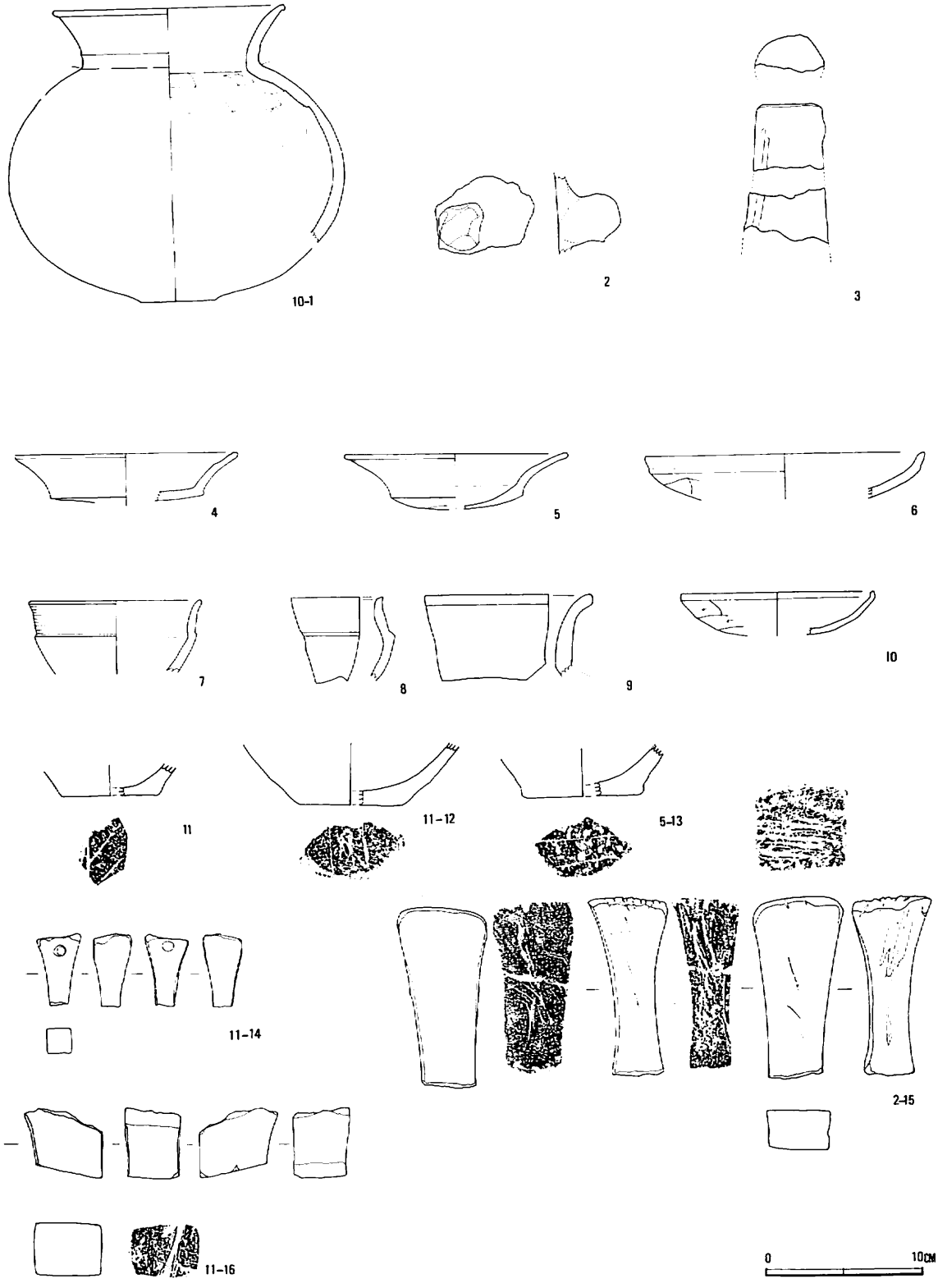
第40図　本田・東台Ⅱ12号住居跡出土遺物



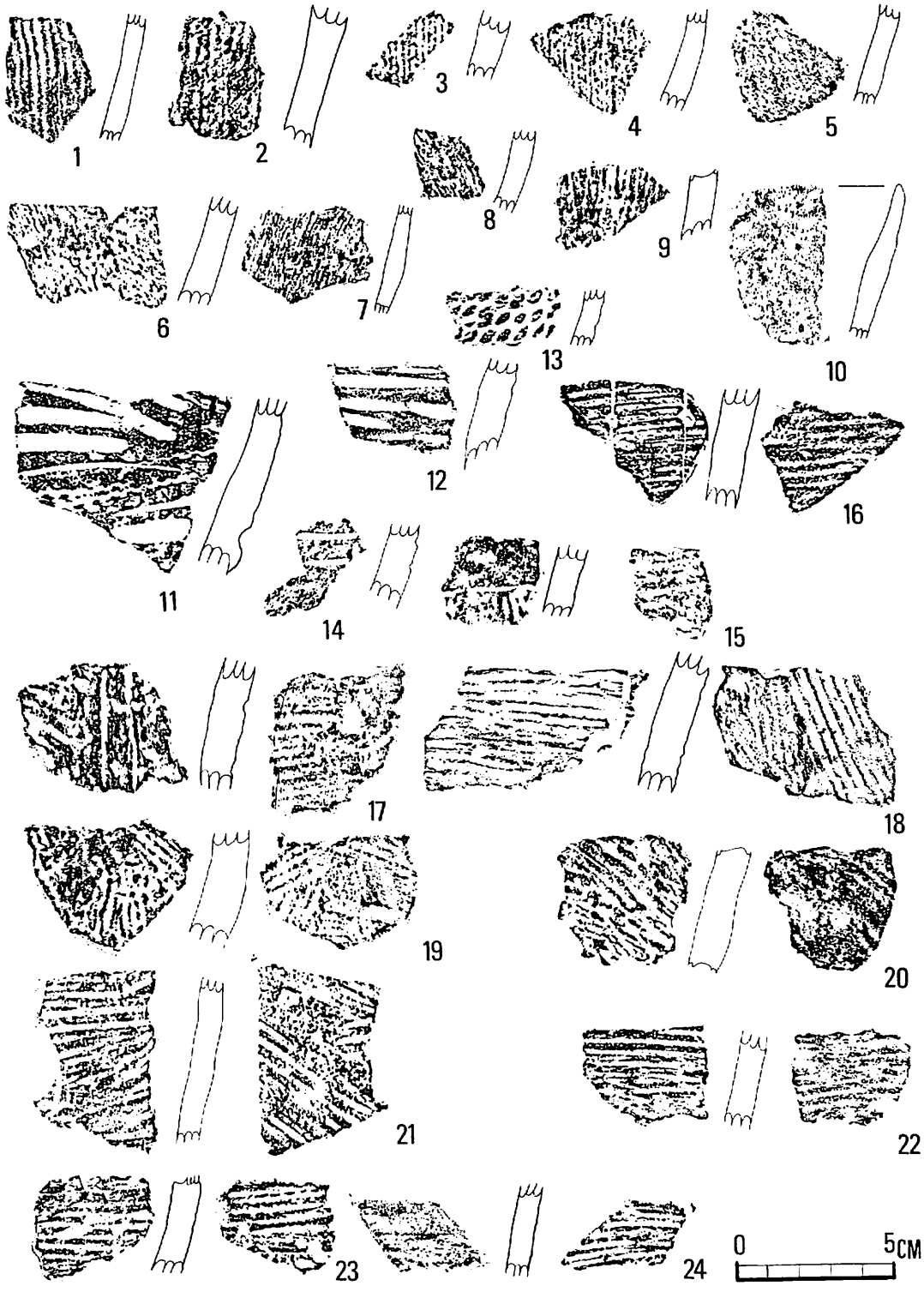
第41図　本田・東台Ⅱ13、14号住居跡出土遺物



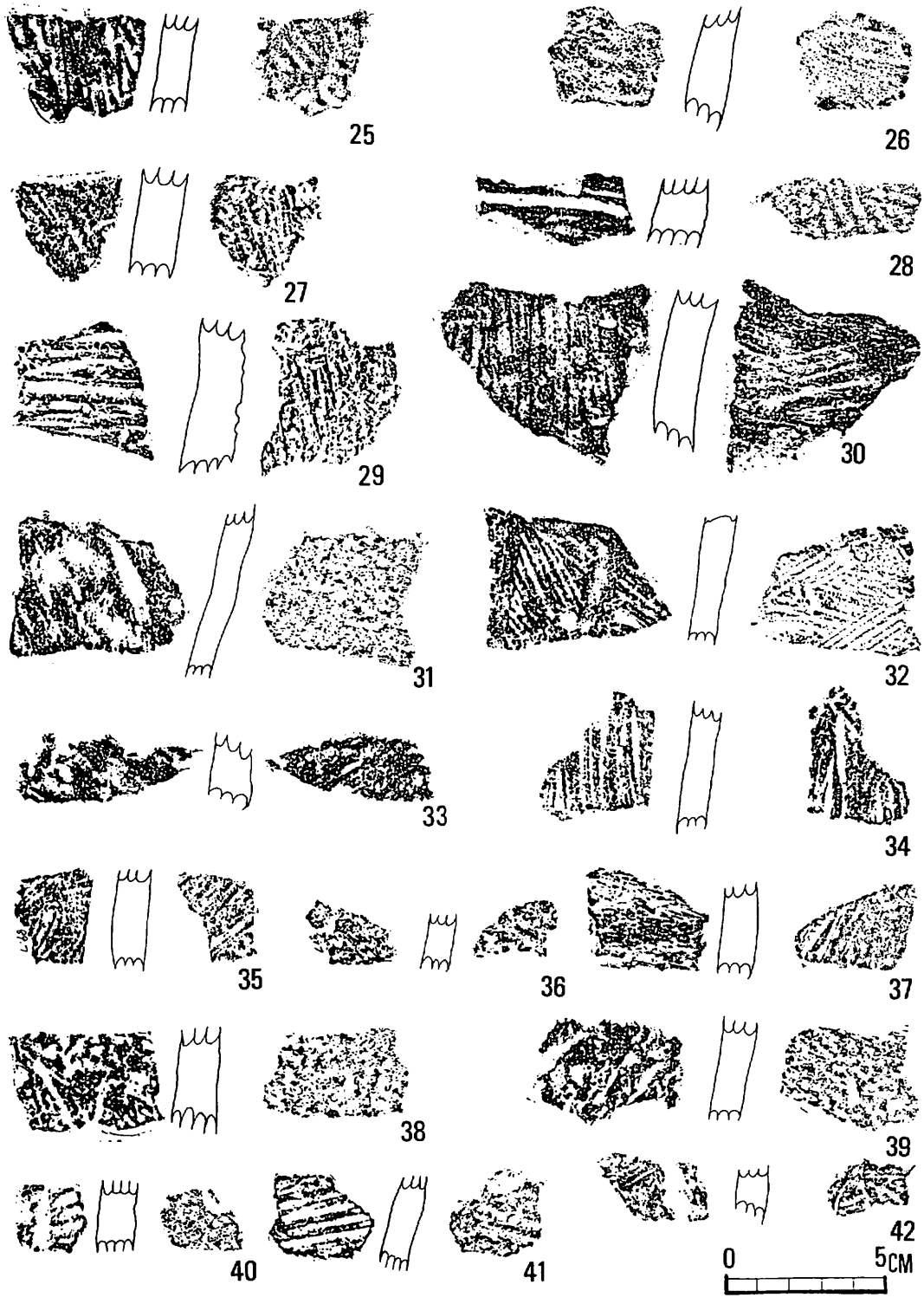
第42図　本田・東台ⅡA－3G出土遺物



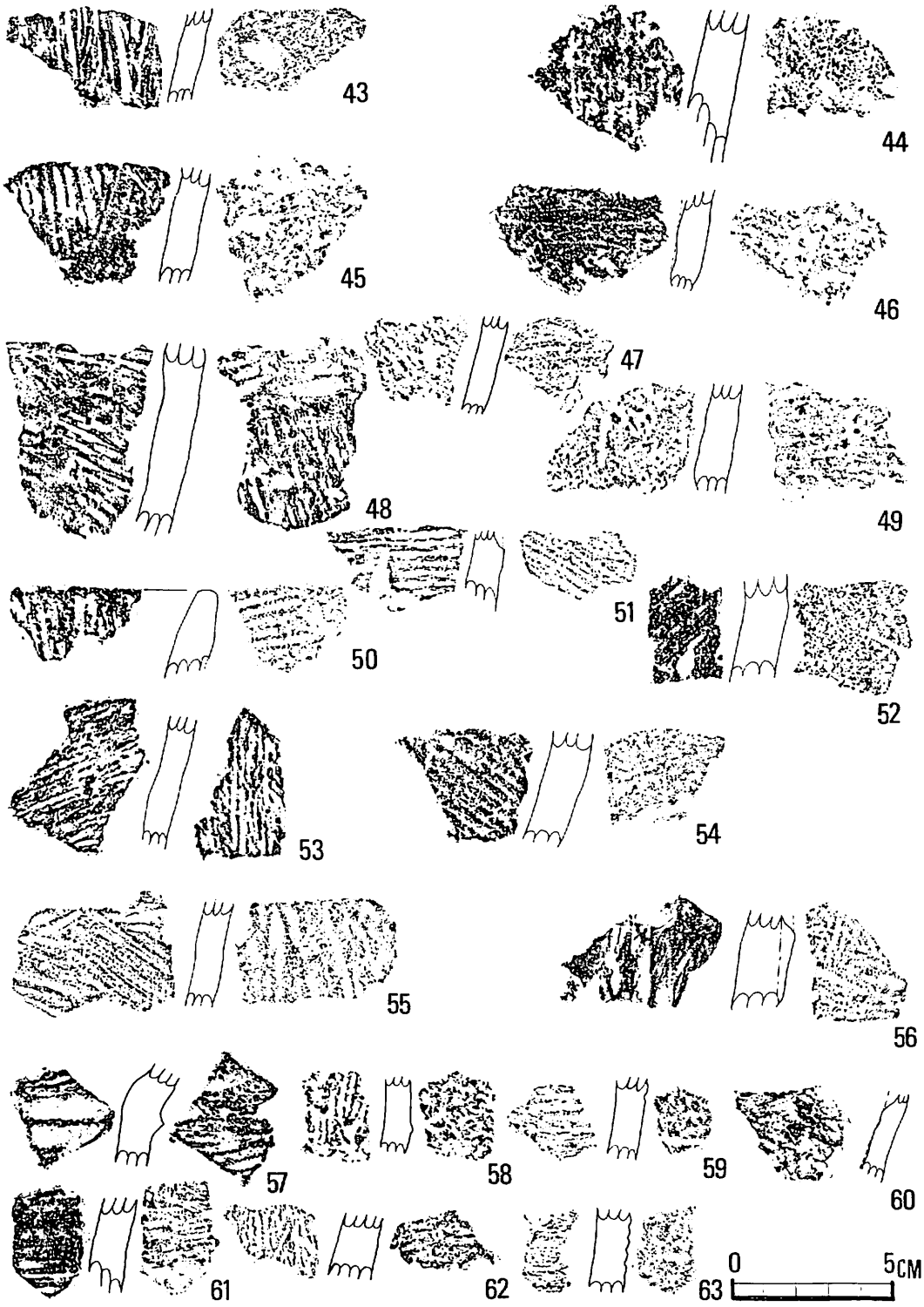
第43図　本田・東台Ⅱ　井戸、他出土遺物



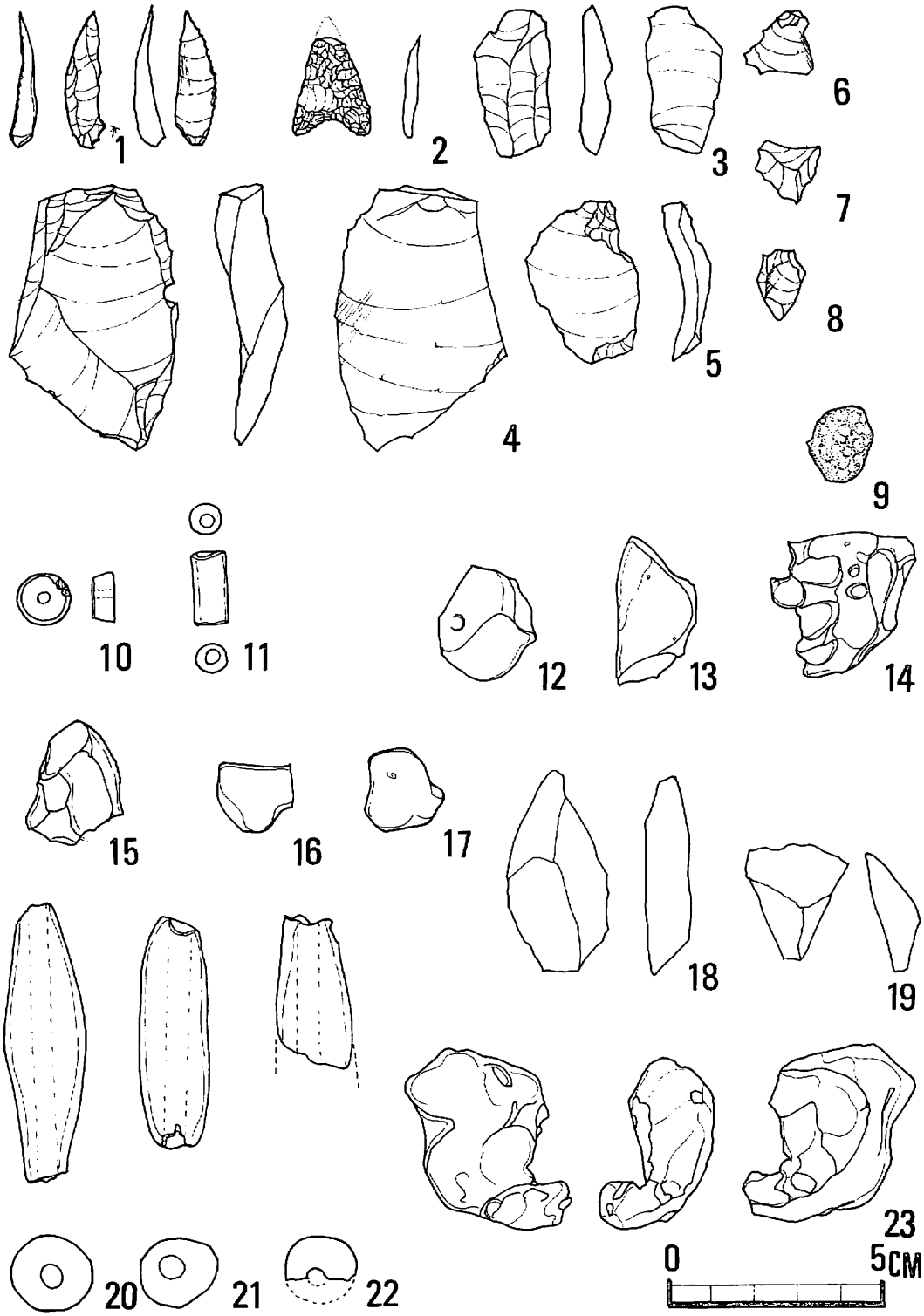
第44図　本田・東台Ⅱ　出土縄文土器



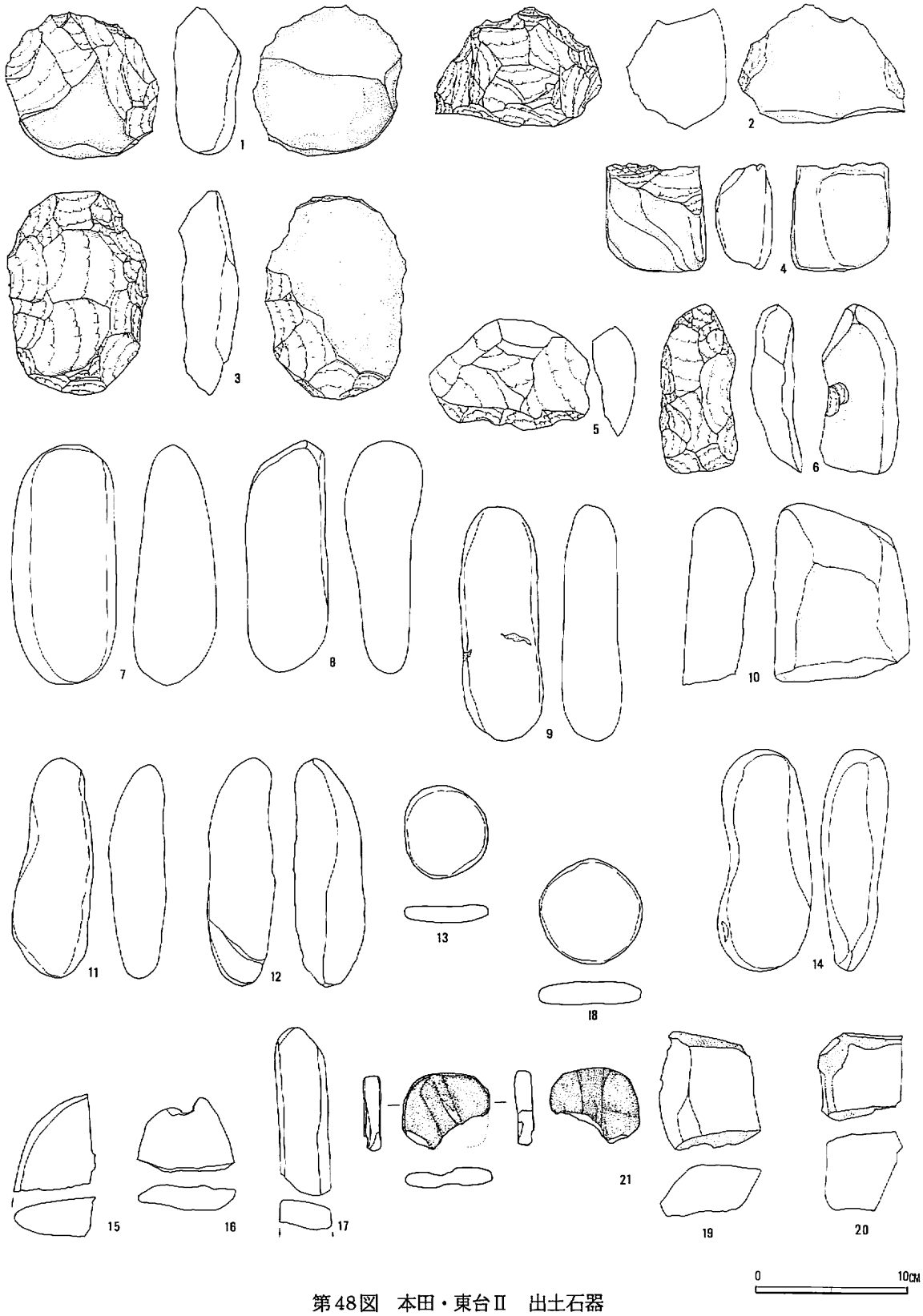
第45図　本田・東台Ⅱ　出土縄文土器



第46図　本田・東台Ⅱ　出土縄文土器



第47図　本田・東台Ⅱ　石製品・土製品



第48図　本田・東台Ⅱ　出土石器

第2表　　本田・東台遺跡Ⅱ住居跡等出土土器観察表

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
第31図 1−1	フク土	坏	口 12.0 高 3.5	黄茶褐色、細砂 口縁体部、1／4遺存
1−2	フク土	坏	口 10.2 高 3.8	黒茶、細砂1／6
1−3	フク土	坏	口 高 4.1	
1−4	フク土	甕	口 (16.0) 高 3.4 底 8.0	黒褐色、砂多
第31図 2−1	床直No.3	坏	口 12.2 高 4.0	黄茶褐色、細砂 体部1／2、遺存
2−2	土壙フク土	坏	口 9.4 高 2.5	黄褐色、細砂 体部1／5、遺存
2−3	土壙内No.11	坏	口 12.1 高 4.3	赤褐色、中砂 体部無欠損、3／4遺存
2−4	土壙No.4	坏	口 高 4.2	黄茶褐色、細砂
2−5	No.3	坏	口 13.1 高 3.1	黒茶褐色、中砂 1／6、遺存
2−6	貯蔵穴	坏	断面長4.4	赤茶褐色、微砂 1／6遺存
2−7	貯蔵穴	甕	口 13.9 高 6.5	暗茶褐色、細砂 口縁部1／4、風化
2−8	フク土No.1	甕	口 (18.0) 高 8.5	暗茶褐色、細砂 体下半1／3、遺存
2−9	貯蔵穴	甑	口 19.0 高 20.2	暗茶褐色、黒斑 細砂、小石多、体部1／3欠
第31図 3−1	カマド中	坏	口 12.9 高 3.3	黄褐色、中砂1／4遺存 風化顕著、内面黒色灰化物付着
4−10	No.20	甕	口 15.4 高 18.2	黄茶褐色、細砂多 体、口縁1／3欠
3−3	フク土	甑	口 22.1 高 21.0	炭化物付着

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
3−4	No.2 No.4	椀	口 12.6 高 5.0	黄茶褐色、細砂 体部のみ1／4遺存
3−5	フク土	甕	口 (8.2) 高 2.0	黒褐色、細砂小石 底部のみ
3−6	床No.3	甕	口 (10.3) 底 4.2 高 4.5	茶褐色、砂多底部1／2
3−7	貯蔵穴 フク土	甕	3.7	灰褐色、細砂 須恵器
3−8	フク土	甕	口 15.4 高 4.9	赤茶褐色、甑 細砂、口縁1／3遺存
3−9	No.6	甕	口 20.9 高 11.0	黒褐色、細砂 体部下半完存
3−10	貯蔵穴 No.12	甕	口 (16.0) 高 9.7 底 7.0	4H No.12 赤茶色、細砂1／3遺存
3−11	フク土	坏	底 6.5 高 3.7	小石、砂、多し
第32図 4−1	Bカマド No.23	坏	口 11.7 高 3.6	赤褐色、良、細砂 完形
4−2	No.22	坏	口 12.0 高 4.0	暗茶褐色、良、中砂 完形、小石、多
4−3	No.18	坏	口 11.2 高 3.4	茶褐色、細砂 体部1／5、遺存
4−4	フク土	坏	口 11.3 高 2.8	1／6黄茶褐色、微砂
4−5	Bカマド	甑	口 (25.3) 高 14.5 底 (17.3)	茶褐色、細砂 体部1／4のみ遺存
4−6	フク土	甑	口 28.5 高 36.3	黒褐色、良、砂多 3／4遺存、体下半一部欠失
4−7	フク土	甕	口 22.0 高 6.5	黒茶褐色、細砂 口縁、1／5遺存
4−8	No.23	甕	口 16.6 高 15.0	茶褐色、細砂 1／2遺存、底部のみ

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
4－9	Bカマド No.6.3.7.4	甕	口 20.5 高 20.8	焼、黄茶褐色、口縁2／3遺存 胎土、細砂、他欠　体部1／4遺存
第33図 5－1	カマドフク土 床上No.8	高坏 上部	口 17.8 高 3.5	黄茶褐色、軟、細砂 1／8遺存
5－2	Pit	坏	口 13.3 高 5.0	黄茶褐色、細砂 口縁1／2欠損、3／4遺存
5－3	No.17.16.13	壷	口 12.8 高 10.0	茶褐色、細砂多 口縁完存3／4、体下半1／2欠 、3／4遺存
5－4	P.6	坏	口 10.3 高 4.4	茶褐色1／4遺存 中砂
5－5	フク土	坏	高 3.5	黒褐色、細砂 赤色粒子、小破片
5－7	No.12	甕	口 23.8 高 23.2	焼成、良、暗茶褐色、細砂、多 体部上半完存、下部のみ
7－1	フク土	甕	口 22.3 高 4.8	赤茶褐色、細砂多 口縁部、1／2遺存
7－2	フク土	羽口	底 9.8 高 4.4	黄茶褐色、細砂 1／8破片
7－3	フク土	坏	口 15.9 高 3.5	赤茶褐色、細砂 体部1／5遺存
7－4	フク土	坏	口 (12.0) 底 3.8 高 3.5	暗茶褐色、細砂 坏部1／6遺存
7－5	フク土	坏	口 10.2 高 4.0	黄褐色、細砂 1／3遺存
7－6	フク土	坏	高 3.8	黒茶褐色、細砂
7－7	フク土	高坏		
7－8	フク土	高坏 脚部	底 6.5 高 4.8	暗茶褐色、中砂、脚部1／5 7－7と同一個体
7－11	フク土	須恵器 瑕	口 10.0 高 3.2	青灰色、細砂 小破片

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
7－9	フク土	高坏脚部	底 9.5 高 5.3	黄茶褐色、細砂 脚部1／2遺存
7－10	フク土	甑	口 (13.5) 高 6.0 底 4.2	黄茶褐色、赤褐色粒子 底部1／2遺存
第34図 6－1	床上No.26	坏	口 11.9 高 4.6	黄茶、黒茶褐色、細砂 体部1／6遺存
6－2	フク土	坏	口 13.0 高 3.7	黄茶褐色、小石、細砂 1／4遺存
6－3	フク土	坏	口 13.1 高 3.0	茶褐色、細砂、風化著しい 口縁体部1／2欠損
6－4	フク土	坏	口 (4.5) 高 3.7	茶褐色、細砂
6－5	床 No.21.16.15	鉢	口 22.5 高 9.5	黄茶褐色、細砂、多 口縁のみ1／4遺存
6－6	床No.24	甑	口 20.5 高 8.0	黄茶褐色、細砂、多 口縁のみ1／5遺存
6－7	床No.33	甑	底 10.5 高 8.5	黄褐色、細砂 口縁1／10
6－8	床直29 床下Dフク土 フク土No.10	長甕	口 19.4 高 16.8	焼成良、暗茶褐色、胎土、細砂 口縁1／8欠、体下欠
6－9	No.9.17	長甕	口 19.3 高 16.5	黒褐色、細砂、小石、少 茶褐色、体上半部、体下半欠
6－10	フク土 No.1.10.18	長甕	口 19.6 高 19.1	黒灰色、砂、多 口縁部1／6欠損
6－11	床No.32	長甕	口 11.9 高 4.8	暗茶褐色、細砂 底部のみ
6－12	床No.10	長甕	口 19.7 高 8.7	焼成、黄茶褐色、胎土、細砂、多 口縁部1／4
6－13	No.5	鉢	口 31.4 高 15.1	黒褐色、白黄褐色、細砂 体部1／2遺存
6－14	床下 土壙	甕	高 2.7	黒褐色、細砂 1／2遺存
6－15	フク土	須恵器 甕		黒灰色、細砂 小破片、鋭い隆線

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
6－16	フク土	甕	口 24.4 高 7.0	黄茶褐色、細砂多し 底1／2遺存
第35図 8－1	床直No. 11.10.9.7	坏	口 14.7 高 5.0	カマドフク土、黄茶褐色、黒色砂 口縁、体、底部1／4欠損60％遺存
8－2	床直No.2	坏	口 13.3 高 5.0	赤茶褐色、中砂 口縁部1／4欠損、4／5遺存
8－3	カマドNo.1	坏	口 15.0 高 5.3	暗茶褐色、小石砂 体部一部欠失4／5遺存
8－4	カマドNo.16	坏	高 3.8	茶褐色、中砂 茶褐色粒子
8－5	カマドNo.17	坏	高 3.8	茶褐色、細砂
8－6	カマドNo.14	坏	口 11.8 高 4.0	茶褐色、細砂 口縁のみ1／8遺存
8－7	カマドNo.5	坏	口 14.7 高 5.3	黒茶褐色、細砂 口縁1／2欠損、3／4遺存
8－8	カマドNo.13	坏	口 14.5 高 3.9	茶褐色、細砂 体部1／5遺存
8－9	フク土	坏	口 14.0 高 2.9	茶褐色、細砂 体部1／4のみ遺存
8－10	カマドNo.3	鉢	口 13.6 高 8.5	黄茶褐色、細砂 完存
8－11	カマド No.2.12	長甕	口 18.1 高 12.0	暗茶褐色、細砂、多 口縁部完存、体部40％遺存
8－12	カマドNo.4	鉢	口 9.9 高 8.2	口体部1／2、茶褐色、細砂 1／2遺存
8－13	床No.4	甕		細砂、茶褐色、底部
7－12	床No.1	壺	高 14.4	黄褐色、良好 中砂、多、体部1／2遺存、木葉痕アリ
8－15	カマド右袖中	蓋	口 12.2 高 6.0	黄茶褐色、石英、長石 小石多、一部欠損4／5遺存
8－16	カマドの中央	支柱	長径 11.2 短径 5.7 高さ 16.0	器表は強く、焼土化し、 剝落する。

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
第36図 9－1	床下土壙No.3	坏	口 12.5 高 4.3	赤褐色、細砂 体部1／4遺存
9－2	床下土壙	坏	口 11.2 高 3.7	黄茶褐色、中砂 口縁部1／4遺存
9－3	床下土壙No.2	坏	口 14.5 高 3.7	黒・茶褐色、細砂 3／4遺存
9－4	床下土壙 A－1G	坏	2.7 高 4.8	茶褐色、1／10細片 赤茶褐色、粒子
9－5	床下土壙No.1	甕	口 19.3 高 10.8	赤褐色、細砂 口縁部1／6遺存
9－6	床No.1	坏	口 12.5 高 3.6	黒茶褐色、細砂 体部1／2遺存
9－7	床No.12	坏	口 11.5 高 4.0	黄褐色、微砂 口縁体部1／3遺存
9－8	床D2 No.2.3	坏	口 10.3 高 3.6	黒茶褐色、細砂、1／4
9－9		器台	長径 10.8 短径 7.8 高さ 5.4	黒茶褐色、細砂 脚1／4欠、木葉痕アリ
9－10	フク土	長甕	口 20.6 高 14.2	暗茶褐色、細砂多し 口縁、体部1／2遺存
9－11	No.5	長甕	口 18.0 高 35.5	黄茶褐色、体部1／2 細砂多、1／2遺存
9－12	フク土	長甕	口 16.3 高 31.0	暗茶褐色、細砂 口縁体部1／3遺存、内面ハケ→25～28cm
9－13	床No.3, A－1Gフ 床土壙	長甕	口 17.9 高 18.7	黄茶褐色、細砂多量 口縁3／4、体部1／4、3／4遺存
9－14	D No.3	長甕	底 5.3 高 10.0	底部
第37図 10－1	床下土壙No.1	高坏か	高 3.1	黄茶褐色、細砂 脚部のみ
10－2	2号床下土壙	坏	口 10.9 高 3.4	灰茶褐色、細砂 1／5遺存
10－3	No.1	坏	口 11.1 高 2.8	黄茶褐色、細砂

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
10－4	床下土壙1号	坏	口 15.2 高 3.7	赤茶褐色、細砂 1／4遺存
10－5	床下土壙2号 No.2	坏	高 4.2	黄茶褐色、赤色粒子、軟質
10－6	床下土壙 4号フク土	坏	高 4.1	灰茶褐色、細砂
10－7	床上 No.10	坏	高 3.5	赤茶褐色、細砂
10－8	床下土壙 3号フク土	坏	高 3.7	赤茶褐色、細砂
10－9	床下土壙 4号フク土	坏	口 13.8 高 3.0	黄褐色、赤褐色、半粒多 口縁1／5遺存
10－10	床土4号No.2,7 13H2号,5号 No.1	須恵器 蓋坏	口 12.5 高 4.7	紫灰色、細砂、長石粒子 口、体部1／2遺存
10－11	床下土壙 1号	甕	口 10.7 高 2.2	底部のみ 細砂、茶褐色
10－12	4号土壙	甑	高 3.5	黄茶褐色 1／6遺存
10－13	床下土壙	坩	口 12.0 高 6.3	赤茶褐色、細砂 口縁のみ
10－14	床下土壙7号	須恵器 長頸壺	口 7.9 高 2.4	黒灰色、砂多、小破片
10－15	床下土壙 7号フク土	手 づくね	口 4.8 高 2.7	暗茶褐色、細砂 底部のみ
10－16	床下土壙7号	手 づくね	口 6.5 高 3.5	茶褐色、細砂 1／3遺存
10－17	床上No.3	甕	高 2.3 底 4.25	茶褐色、細砂、底部のみ
10－18	床下土壙	甕	底 3.0 高 6.2	黒茶褐色、細砂 底部のみ
第38図 11－1	床下 土壙	甕の胴 部	巾 6.5 高 10.5	11－1～11－4は同一個体と考えられる
11－2	2号床下土壙 No.1	甕の胴 部	巾 8.0 高 11.0	暗茶褐色、 2ミリ大の砂多、ハケ目が内外面に及ぶ

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
11－3	床下土壙	甕の胴部	巾 8.0 高 4.5	
11－4	フク土	甕の胴部	巾 6.7 高 7.7	
第39図 11－5	床下土壙2号 No.9.15	高坏	口 15.7 高 4.3	黄茶褐色、細砂、坏部1／4遺存
11－6	床下土壙2号 No.8.10	高坏 脚部	底 9.5 高 5.0	黄茶褐色、細砂、脚部のみ3／4遺存
11－7	フク土 床下土壙 No.20.51.60	坏	口 18.1 高 4.9	黄褐色、黒褐色、赤色粒子、軟質 体部3／4遺存
11－8	床下 土壙2号	坏	口 13.0 高 5.2	赤茶褐色、微砂、1／6遺存
11－9	1号土壙	坏	口 15.9 高 5.0	下層、No.41、42、40 黄茶褐色、微砂、赤褐色粒子、1／4遺存
11－10	床下土壙 1号No.25.27. 35,36,55	坏	口 15.9 高 4.7	黄褐色、細砂、軟質、風化摩滅、 口縁体部1／2、4／5遺存
11－11	土壙	坏		黄茶褐色 底部のみ
11－12	1号床下土壙 No.41.40.42. 45	坏	口 14.0 高 4.1	黄褐色、微砂、軟質。 体部1／3遺存
11－13	1号土壙 No.37.38	坏	口 11.9 高 4.1	赤褐色、細砂、赤彩 口縁一部欠、4／5遺存
11－14	フク土	坏		暗茶褐色、細砂、赤彩 1／8細片
11－15	2号土壙底部 床上No.7	坏	口 12.4 高 5.1	黄茶褐色、細砂、軟質 口縁部1／4遺存
11－16	床下土壙1号 No.71	坏	口 17.0 高 4.3	黄茶褐色、細砂、軟質 口縁部1／4遺存
11－17	床下土壙1号 No.67.58.52	坏	口 17.0 高 4.3	黄褐色、軟微砂 体部2／3遺存
11－18	貯蔵穴	坏	口 17.0 高 4.0	黄茶褐色、中砂 完形
11－19	床上 No.4.19.3	長甕	口 21.15	白黄褐色、体1／4遺存 小石、細砂多、大半欠、口径－復元

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
11－20	1号 床下土壙	長甕	胴径 19.7 高 25.5	11－19と同一個体と考えられる
11－21	貯蔵穴	甑	口 18.2 高 11.6	茶褐色、長石、細砂多 完存
第40図 12－1	床下土壙3号	坏	口 16.2 高 4.1	黄茶褐色、細砂 口縁のみ1／6遺存
12－2	床下土壙3号 フク土	坏	口 10.6 高 3.2	黄茶褐色、軟質 細砂、口縁1／8遺存
12－3	床上 No.8.9.7	壷	口 12.7 高 15.5	黒色、黒茶褐色、口縁2／3欠損、体下半2／3欠失、底部、完存、細砂
12－4	フク土	坏	口 11.2 高 3.9	黄茶褐色、細砂 口縁1／6遺存、赤彩
12－5	フク土	坏	長 3.0	細砂、1／10遺存 赤褐色塗彩
12－6	フク土	椀	口 10.6 高 5.2	茶褐色土、細砂 体部1／4遺存
12－7	床上No.3	羽口	口 10.5 高 7.5	羽口、黄茶褐色、体下半完存 4／5遺存
12－8	フク土	甕		木葉痕アリ、暗茶褐色、細砂
12－9	フク土	長甕	口 19.0 高 11.3	黄茶褐色、細砂 赤褐色粒子、口縁1／4遺存
12－10	床上No.11	長甕	口 19.3 高 7.8	細砂、小砂 口縁、1／3遺存
12－11	床上No.12	長甕	口 19.0 高 7.8	黄茶褐色、砂多し 内面黒色、口縁完存
12－12	床上No.1	長甕	高 29.0	灰茶褐色、細砂 体部2／3遺存
12－13	床上No.6	長甕	高 17.0	黒色、暗茶褐色、 細砂多、下半部完存
12－14	床上No.7	長甕	高 14.6	灰茶褐色、細砂と小石多 体下半完存
12－15	フク土	甕		底部、木葉痕、暗茶褐色、細砂

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
12－16	フク土	甕	底部 6.0	底部　木葉痕、暗茶褐色、細砂
第41図 13－1	P－3	高坏	口 14.2 高 4.7	明褐色、小石、中砂、多 1／5遺存
13－2	床下土壙5号 No.3	坏	口 12.0 高 4.2	黒褐色、細砂多2／3遺存
13－3	床上No.8	坏	口 11.0 高 2.8	黒茶褐色、細砂1／4遺存
13－4	フク土	坏	口 13.0 高 3.9	赤褐色、細砂 体部一部欠損5／6遺存
13－5	床直No.5	高坏	高 4.8	暗茶褐色、細砂 脚部完存2／5遺存
13－6	フク土	坏	口 12.1 高 4.1	黄褐色、細砂、軟質 赤色半粒1／4
13－7	フク土	小壷	高 4.0	黒茶褐色 口頭部1／5、1／4遺存
13－8	フク土	小壷	口 6.9 高 7.2	灰茶褐色、細砂 口体部1／4遺存
13－9	P4 No.15	甕	口 21.2 高 17.8	黄褐色、細砂 体部1／5遺存
13－10	P4 No.2	甕	口 17.2 高 6.0	暗茶褐色、胎土、細砂 黒色砂、小石、口縁1／2遺存
第41図 14－1	床上No.2	高坏	底部 4.6 高 4.0	赤茶褐色、細砂 脚部のみ1／2、1／3遺存
14－2	フク土	坏	口 17.0 高 3.4	暗茶褐色、細砂 1／10遺存
15－1	床上No.20	小壷	口 11.9 高 6.5	黄茶褐色、中砂 体1／4遺存
14－4	フク土	甕	底部 7.0 高 2.2	底部木葉痕
14－5	床上No.1	甑	口 18.0 高 8.2	黒茶褐色、中砂 口縁、体1／2遺存
第42図 1	A－3G	坏	口 13.5 高 7.5	黒褐色、細砂 体部1／2遺存

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
2	A－3G No.6	坏	口 12.0 高 4.0	黄茶褐色、細砂 口－体部1／3遺存
3	No.3	坏	口 12.0 高 4.0	黄茶褐色、中砂 口縁、体部1／2遺存
4	No.4	坏	口 11.0 高 3.8	黄褐色、中砂 体部1／3遺存
5	A－3G No.20	坏	高 3.2	暗茶褐色、細砂 小破片
6	A－3G	坏	高 2.5	黒茶褐色、細砂 小破片
7	A－2G フク土	坏	口 10.1 高 3.3	茶褐色、中砂多 口縁、体部1／5遺存
8	P.3	坏	口 10.9 高 3.8	黄褐色、細砂 口縁、体部1／4遺存
9	A－3G No.12	坏	口 13.0 高 4.9	黄褐色、中砂 口体部1／2欠損
10	A－3G	坏	口 13.8 高 4.0	黄褐色、微砂 体1／3遺存
11	A－3G No.2	坏	口 14.5 高 4.8	黒茶褐色、中砂 口縁1／4欠損
12	A－3G No.18	須恵器 蓋	口 12.7 高 3.9	黒灰色、砂、中粒多 口縁1／6遺存
13	A－3G フク土	坏	口 12.7 高 3.3	黒茶褐色、細中砂多 口縁部1／5のみ遺存
14	A－3G フク土	坏	口 13.9 高 2.4	黄茶褐色、細砂 1／10遺存、赤彩、暗文
15	A－3G フク土	坏	口 6.0 高 2.8	茶褐色、中砂 体1／3遺存、小形品
16	調査区 フク土	坏	口 13.7 高 4,1	黒褐色、微砂 1／4遺存
17	調査区 フク土	坏	口 11.7 高 4.2	黄茶褐色、小石、細砂 1／5遺存
18	表採	坏	口 14.0 高 4.1	茶褐色、細砂 体1／3遺存

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
19	調査区フク土	坏	高 3.5	赤褐色、細砂
20	調査区外出土	甕	口 20.3 高 11.0	灰茶褐色、小石、砂、多量 1／2遺存
21	A－3G No.17	須恵器坏	底径 6.2	青灰色、針状物、細砂 底部のみ1／4
22	A－3G No.10.11	甕	底 8.0 高 5.5	黒茶褐色、小砂、多 底部のみ完存
23	SK4 フク土No.1	坏（須恵器）	口 12.9 高 3.7	白灰色、小石細砂、針状物質、口縁一部欠損 口径13.8 底径 7.4 3／4遺存
24	表採	須恵器椀		黒青灰色、細砂、針状物質、小破片
第43図 1	井戸	壷	口 14.7 高 15.5	暗茶褐色 良、精（口縁完存、体1／4）
2	井戸フク土	甑把手		黄茶褐色、小石、中砂多 ソケット状のはめこみ式
3	A－3G	支脚	短径 4.2 長径 5.5 高 上 4.2 下 3.0	赤茶褐色 1／2遺存
4	フク土	坏	口 14.4 高 3.1	暗茶褐色、細砂 1／6遺存
5	フク土	坏	口 14.5 高 3.6	暗茶褐色、中砂 1／4遺存
6	フク土1	坏	口 18.0 高	黒茶褐色、 細砂多1／6遺存
7	SK1 フク土	坏	口 11.1 高 4.8	黒色砂粒多 黒灰褐色1／5遺存
8	フク土	坏		茶褐色、細砂
9	フク土	壷口縁		暗茶褐色、細砂
10	SK2 フク土	坏	口 12.4 高 2.8	暗茶褐色、細砂 1／6遺存
11	A－3G	甕底部	底 6.1 高 2.0	木葉痕

図版番号	出土地点	器種	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
12	SJ11 2号床下土壙No.1	甕底部	底 6.5 高 4.0	木葉痕
13	SJ5 フク土	甕底部	口 7.7 高 3.1	木葉痕

砥石観察表

図版番号	出土地点	大きさ (cm)	形態および手法の特徴
11－14	SJ11 2号床下土壙 No.12	横 2.9 長 4.5 厚 2.5	提砥用の穴アリ　半欠
2－15	SJ2 1号床下土壙 No.4	横 4.2 長 11.7 厚 2.8	砥面にキズアリ　下半1／4欠失
11－16	SJ11 1号床下土壙 No.46	横 5.0 長 4.8 厚 3.6	折損面を砥面にしている　小片

第３表　　本田東台遺跡出土縄文土器観察表

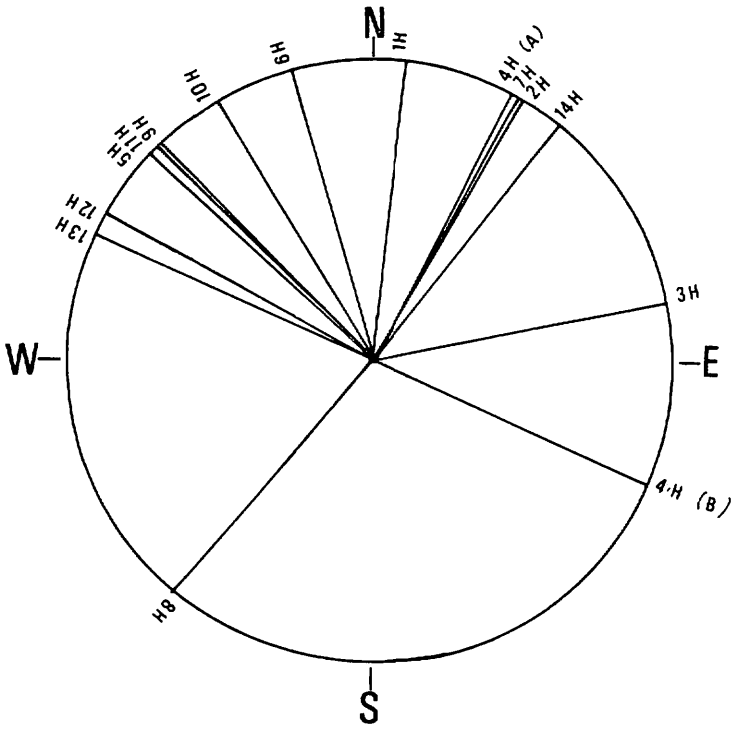
No.	出土地点	文様表現	地文	内面調整	色　調	備　考
1	SJ8カマド	撚糸文Ｒ		ナデ	赤褐色	Ⅰ群
2	SJ3	撚糸文		ナデ	赤褐色	Ⅰ群
3	SJ9	縄文		ナデ	黄茶褐色	Ⅰ群
4	SJ10床下土壙３	縄文		ナデ	黄茶褐色	Ⅰ群
5	SJ10床下土壙４	縄文		ナデ	赤褐色	Ⅰ群
6	Ａ－3G	撚糸文		ナデ	赤茶褐色	Ⅰ群
7	調査区内	撚糸文		ナデ	赤褐色	Ⅰ群
8	調査区内	撚糸文		ナデ	茶褐色	Ⅰ群
9	調査区内	撚糸文		ナデ	暗茶褐色	Ⅰ群
10	SJ5床下土壙	無文		ナデ	茶褐色	Ⅰ群
11	Ａ－0G	沈線貝殻腹縁		ナデ	暗茶褐色	Ⅲ群
12	SJ5床下土壙	沈線		ケズリ	暗茶褐色	Ⅲ群
13	SJ5	回転押型文	楕円	ケズリ	赤茶褐色	Ⅱ群
14	SJ7	沈線		ナデ	黒茶褐色	Ⅱ群
15	SJ13	沈線	条痕	条痕	茶褐色	Ⅳ群
16	SJ9	沈線,円形竹管,刺突	条痕	条痕	灰茶褐色	
17	SJ10床下土壙	沈線	条痕	条痕	茶褐色	
18	SJ10		条痕	条痕	茶褐色	
19	SJ5		条痕	条痕	茶褐色	
20	SJ6		条痕	条痕	黄茶褐色	
21	SJ8		条痕	条痕	茶褐色	
22	井戸		条痕	条痕	茶褐色	
23	SJ7		条痕	条痕	茶褐色	
24	SJ2床下土壙		条痕	条痕	茶褐色	
25	SJ2		条痕	条痕	黄茶褐色	
26	調査区内		条痕	条痕	黄茶褐色	Ⅳ群
27	SJ2貯蔵穴		条痕	条痕	黄茶褐色	
28	SJ13		条痕	条痕	茶褐色	
29	SJ9床下土壙３		条痕	条痕	暗茶褐色	
30	SJ5		条痕	条痕	黒茶褐色	
31	SJ4		条痕	条痕	黄茶褐色	

No.	出土地点	文様表現	地文	内面調整	色　調	備　考
32	SJ5	凹線	条痕	条痕	黄茶褐色	
33	SJ5床下土壙		条痕	条痕	黄茶褐色	
34	調査区内		条痕	条痕	黄茶褐色	
35	調査区内		条痕	条痕	黄茶褐色	
36	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
37	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
38	A－2G		条痕	条痕	黄褐色	
39	SJ9		条痕	条痕	黄茶褐色	
40	SJ2床下土壙		条痕	不明瞭	黄茶褐色	
41	SJ5床下土壙		条痕	条痕	黒茶褐色	
42	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
43	SJ2床下土壙		条痕	条痕	茶褐色	
44	SJ2床下土壙		条痕	条痕	茶褐色	
45	SJ5		条痕	条痕	茶褐色	
46	SJ4		条痕	不明瞭	茶褐色	
47	SJ4		条痕	条痕	茶褐色	
48	SJ6		条痕	条痕	茶褐色	
49	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
50	調査区内		条痕	条痕	暗茶褐色	口縁
51	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
52	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
53	SJ6		条痕	条痕	黄茶褐色	
54	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
55	調査区内		条痕	条痕	茶褐色	
56	SJ13	隆起線	条痕	条痕	黄茶褐色	
57	調査区内	隆起線	条痕	条痕	黄茶褐色	
58	SJ6		条痕	不明瞭	茶褐色	
59	調査区内		条痕	不明瞭	黒褐色	
60	調査区内		条痕	不明瞭	茶褐色	
61	SJ3		条痕	条痕	黒茶褐色	
62	SJ5		条痕	条痕	茶褐色	
63	表採		条痕	不明瞭	黄茶褐色	

第4表　　本田・東台遺跡出土石器観察表（第47、48図）

No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　材	種　別	注記
1	表採	9.7	10.0	4.4	535	チャート	礫器	
2	SJ13床下土壙	7.8	11.0	6.5	605	チャート	礫器	
3	SJ13P－4	13.5	9.0	3.7	570	チャート	石斧	No.3
4	A－3G	7.0	6.5	3.7	275	チャート	礫器	
5	SJ10P－5	10.7	7.2	2.7	190	チャート	礫器	No.3
6	溝1	11.0	4.5	2.8	190	チャート	石斧	No.1
7	SJ4	15.8	6.9	5.0	940	安山岩	編物石	No.7
8	SJ4	15.4	5.3	4.0	615	頁岩	編物石	No.8
9	溝1	15.5	5.2	3.5	500	頁岩	編物石	No.2
10	SJ2貯	11.8	8.7	3.9	655	頁岩	砥石	No.1
11	SJ6床	14.5	4.9	3.5	370	頁岩	編物石	No.19
12	SJ13P－4	15.1	4.4	4.3	395	砂岩	編物石	No.1
13	SJ5～7フ	6.1	5.5	1.1	65	頁岩		
14	フク土	14.7	5.3	4.0	485	頁岩	編物石	
15	フク土	6.0	5.0	2.6	95	花崗岩	磨石	
16	SJ6フ	5.0	6.4	1.4	41	花崗岩	磨石	
17	SJ4	11.1	3.2	1.7	150	チャート	砥石	No.4
18	SJ6フ	7.0	6.7	1.4	107	砂岩		
19	SJ11床下土壙	7.9	6.3	3.1	175	チャート		
20	SJ11	5.8	5.5	5.0	180			
21	SJ10	5.0	4.7	1.0	33	砂岩	研磨器	
1	SJ9	3.2	1.1	0.5	0.8	黒燿石	ナイフ	
2	SJ2	2.4	1.7	0.4	1	黒燿石	石鏃	
3	B－OG	3.7	1.8	0.7	3	チャート	剥片	
4	SJ13	6.1	5.0	1.2	22	頁岩	剥片	
5	SJ10	3.8	2.6	0.7	6	黒燿石	剥片	
6	表採	1.6	1.6	0.4	1	黒燿石	剥片	
7	A－3G	1.4	1.2	0.8	1	黒燿石	剥片	
8	SJ6	1.6	1.2	0.5	1	黒燿石	剥片	
9	SJ9床上	2.0	1.3	0.3	1	炭化物	桃の種	
10	SJ10	0.4	1.3	0.5	1.5	滑石	臼玉	
11	SJ5貯蔵穴	1.7	0.8	0.8	1.5		管玉	
12	SJ13P3	2.8	2.3	1.4	4.7		貝巣穴泥岩	
13	SJ7	3.4	1.8	1.5	5		貝巣穴泥岩	

No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　材	種　別	注記
14	SJ10床下土壙4	3.5	3.5	2.5	14.5		貝巣穴泥岩	
15	SJ10床下土壙	3.0	2.6	1.2	4		貝巣穴泥岩	No.3
16	SJ6貯蔵穴	18.0	1.8	0.8	2		貝巣穴泥岩	No.2
17	SJ13	2.0	1.8	0.7	1.5		貝巣穴泥岩	
18	SJ4	5.0	2.4	1.1	11	石英		No.13
19	SJ15	2.7	2.3	0.8	4	石英		No.5
20	SJ10	6.5	1.9	1.7	15.5		土錘	No.1
21	SJ10	5.5	1.7	1.6	13		土錘	No.7
22	SJ2	3.7	1.8	0.8	6		土錘	No.3
23	SJ11	5.0	3.8	3.1	21		焼成粘土	No.1



第49図　本田・東台Ⅱ住居跡主軸方位

4 考　察

1）古墳時代集落の変遷

本田・東台遺跡では、今回の調査を含め63軒の住居群が検出され、ほとんどが古墳時代中～後期・末葉にかかる時期のものであった。本遺跡の集落変遷のあり方は、全面的な調査を経なければ解明しようがないが、その一端として今回調査部分の住居変遷を見てみたい。

今回の調査部分は遺跡の東南隅に当たる部分のため、集落全体の中では外縁に当たるようである。しかし、検出された15軒の住居跡は互いに激しい重複を繰り返しており、遺構の構造・新旧関係等の把握には困難なものがあった。検出された井戸・住居・土壙等の遺構のあり方、出土遺物などから、遺構の移り変わりにはおよそ9期の変遷を下記の表のように考えることができた。

土器型式	鬼高Ⅰ	鬼高 Ⅱ			鬼高 Ⅲ			真　間	
時期区分	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ
遺　　構	SE	SJ7	SJ2	SJ3 SJ5 SJ9	SJ13	SJ10 SJ12 SJ15	SJ4 SJ6 SJ8 SJ11	SJ1 SJ14	SK4

Ⅰ期

もっとも古い遺構は、SJ8床下に埋没していた井戸であった。井戸内から、和泉期的な姿を残す壷が出土している。調査区内ではこの時期の住居は検出されておらず区外に位置していることが推定される。またSJ10の床下土壙フク土中から出土した須恵器は、本期にかかるものと考えられSJ10下に重複していたことも考えられる。

Ⅱ期

SJ7が現われる。この住居は長方形プランを持ち、住居内より火床・羽口片・鉄滓・焼土塊など、製鉄に関係した工房的性格を持った住居であったようだ。このような平常より火を多用すると考えられる製鉄工房跡（小鍛冶）が、他の住居から間隔を開け構築されることは興味深い。

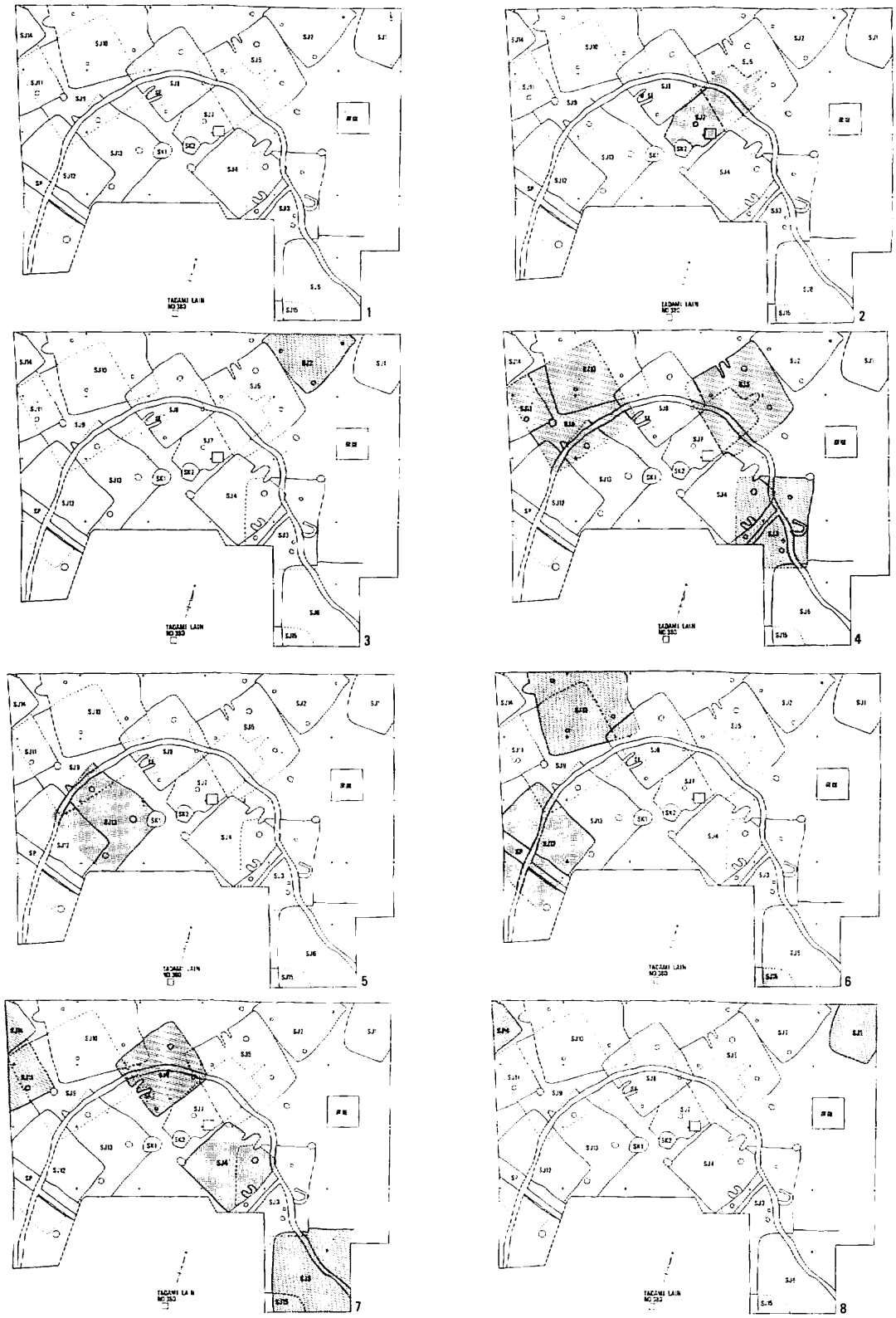
Ⅲ期

Ⅲ期としたSJ2は、SJ7と同一の主軸を持ち、同時併存も考えられる。

Ⅳ期

SJ3・SJ5・SJ9が構築される。SJ5は、SJ2を切りSJ7を埋め戻して造られる。SJ9とは主軸は同一であり、規模も近い。SJ5のpitからは、管玉が出土している。

SJ3は、前者とは主軸を異にし出入口部分をカマド左側に東を向いて設けている。



第50図　本田・東台Ⅱ住居跡変遷

Ⅴ期

SJ13が構築される。北西にカマドを配し、SJ9を切っている。

Ⅵ期

SJ12・SJ10が構築される。SJ12は、SJ13を切って造られるが主軸は近似している。

SJ10はSJ7を切って造られる。SJ15は、ほとんど区外へはみ出しているため、詳細は不明。この時期から住居群の重複が始まり、調査地区での住居造りが盛んになる。

Ⅶ期

既に埋没している井戸上にSJ8が構築される。他に主軸を等しくするSJ4、SJ11が構築される。SJ6は他に主軸を等しくSJ3・SJ15を切って造られる。SJ4は、北壁・東壁とカマドを2つ持っている。規模・方向性などSJ8に近似している。SJ8は南西壁にカマドを持つ。SJ10・9・7・5の各住居のスキ間に構築される。SJ11は、SJ9を切っている。この時期の住居は主軸方位や規模に近似性があるようだ。

Ⅷ期

SJ1・SJ14がこの時期に当たる。両住居間には構築物が造られず、空白となる。以降この地に住居は造られない。SK1・SK2等の土壙が造られ始め、土地利用の意識が変化したことがうかがえる。

Ⅸ期

SJ12上SK4がこの時期に当たる。住居フク土から掘方に達する円形土壙である。墓壙の可能性を考えたい。この時期の住居は、調査区内からは発見されていないが、当然周辺末調査部に存在するだろう。

Ⅰ～Ⅸは土器型式から鬼高Ⅰ式より真間式にかかる時期であり、およそ6世紀代～8世紀初頭にかかる約200年間の推移を見ることができる。

遺構の検出されない時期として、Ⅰ期以前の旧石器～縄文時代早期の期間が出土遺物から推測される。ナイフ型石器と数点の黒燿石片の残された時が本遺跡の始まりであろう。

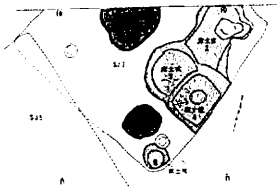
縄文早期前半にかけて散発的に土器が出土しており、この時期に伴う石器類も残され、既に集落が形成されていたと考えられよう。しかし、古墳時代にかかる激しい住居の造り換えにより消滅したようだ。以後、古墳時代までの間、この時期を示す遺構・遺物はまだ出土が無く空白の時代が長く続く。

第5表　住居跡一覧表（本田・東台Ⅱ）

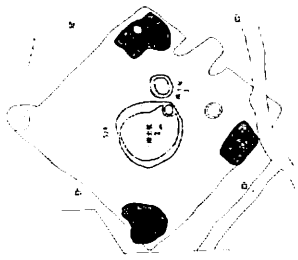
No.	プラン	規模 SN×EW 主軸方位	壁 高さ	壁 立ち上がり	ピット（柱穴）	周溝	床	床下土壙	フク土 確認面／掘り方
1	方形	270×－ (N－7－E)	5～0		－	－	硬質直床	1	1
2	方形	470×450 (N－30－E)	9～12		3	－	硬質貼床	5	3 (1～3)
3	方形	－×－ N－78－E	10～15		7	北西コーナー 幅33、深さ5	硬質直床		3 (1～3)
4	方形	430×440 N－28－E (A) N－113－E (B)	15～18		4	－	硬質貼床	4	2 (5～6)
5	方形	540×525 N－47－W	12～13		13	－	硬質	2	1
6	方形	－×－ (N－15－W)	12～25			北壁～東壁	硬質	－	1
7	長方形	560×280 N－29－E	15～40		2	－	硬質貼床	6	5
8	方形	475×465 N－140－W	15～20		4	－	硬質貼床	3	1
9	方形	605×570 (N－44－W)	17～30		－	－	硬質貼床	7	1
10	方形	600×510 (N－31－W)	30～35		5		硬質貼床	10	6
11	方形	－×－ (N－45－W)	20～27		－		硬質貼床	2	5 (1～5)
12	方形	540×－ (N－61－W)	10～10		4		硬質貼床	4	5
13	方形	535×－ N－65－W	10～15		10		硬質貼床	4	1
14	方形	－×－ (N－37－E)	27～27				硬質	－	4
15	方形	－×－ (N－15－W)	30～				硬質	－	3

カマド			出土遺物	新旧関係（備考）	遺存床面積%	時期
位置－用材	状態	遺物				
	－		坏	－	70	Ⅶ～Ⅷ
	－		坏,椀壷、甑	SJ5に切られる	70	Ⅲ
東壁中央	燃料部		壷、坏、甕、甑	SJ4、SJ6に切られる。	60	Ⅳ
北東壁中央 東南壁中央	(A) 燃焼部 (B) 燃焼部	カメ、坏、甑	長甕、坏、甑	SJ3、SJ5を切る	100	Ⅶ
北東壁中央	燃焼部	高坏	高坏、壷、坏、甕　管玉	SJ2、SJ7を切る SJ4、SJ8に切られる。	90	Ⅳ
－	－		鉢、長甕、坏	SJ15を切る	70	Ⅴ～Ⅵ
北壁中央	燃焼部 煙道		羽口、鉄滓、鉢、短頸壷	SJ5、SJ8に切られる	40	Ⅱ
南西壁中央	燃焼部	支柱	坏、長甕 鉢、小壷	SJ5、SJ7、SJ9、SJ10を切る	100	Ⅶ
	－		坏、甑、長甕 器台	SJ8、SJ10、SJ11、SJ12、SJ13に切られる。	30	Ⅴ
	－		坏、臼玉 椀、蓋	SJ9を切る SJ8に切られる	80	Ⅴ～Ⅵ
	－		坏、高坏、長甕、砥石	SJ9を切る SJ14に切られる。	20	Ⅵ～Ⅶ
	－		坏、甑、長甕、羽口	SJ9、SJ13を切る	80	Ⅵ
北西壁 北より	燃焼部のみ		高坏、坏、甑	SJ9を切る SJ12に切られる	60	Ⅴ
			高坏、坏	SJ11を切る	20	Ⅷ
				SJ6に切られる	15	Ⅴ～Ⅵ

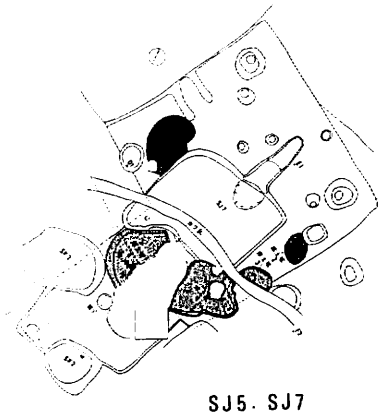
SJ 1



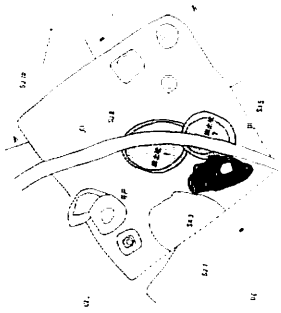
SJ 2



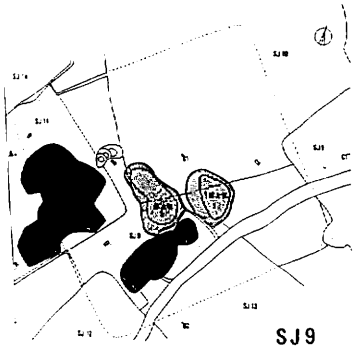
SJ 4



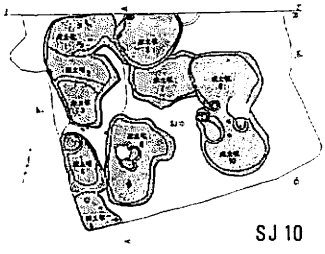
SJ5. SJ7



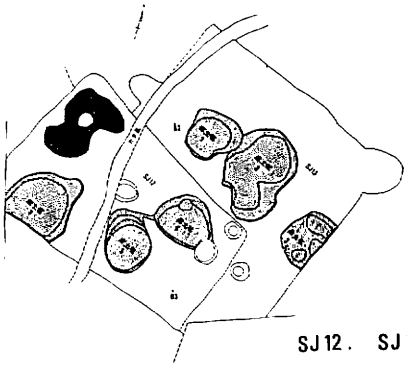
SJ 8



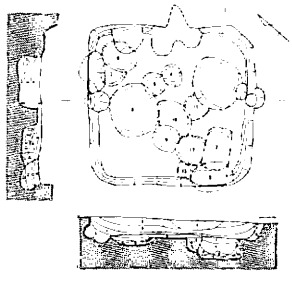
SJ 9



SJ 10



SJ 12. SJ 13



荒神脇、16号住居跡

第51図　床下土壙をもつ住居跡（スクリーン淡「フク土A」、濃「フク土B」）

2） いわゆる床下土壙について

遺構図中に表示した床土壙とは床下土壙の略記である。この遺構については、1974年　中島利治氏の江南町荒神脇遺跡の報告例が標式的な遺跡としての意義をもつ（文2）同氏はこの遺構を次の特徴を掲げて説明している。①「住居内床面下に穴を掘り、埋め戻し、再度貼床をしている土壙」②「互いに切り合い……土壙内は、焼土　炭化物　ロームブロック　少数の土器片等が人為的に埋め戻されている。」③「円形、楕円形、卵形や方形が多いが、……大きさは径50cm～1.5m位で、深さ20～80cm位である。」④性格についても「乳児、ヘナの埋葬としての土壙墓」との可能性を指摘されその後の研究の方向を示した。名称としては「住居跡内土壙」を用いている。

1979年藤井和夫氏（文47）は上浜田遺跡の報告で「床下土壙とは、竪穴住居址使用時にその住居址の床面を掘り込み、後に填土した上面に貼床を施した土壙を指し、土壙造営後も引続き住居を使用していたと考えられるもの」と定義づけ、床下土壙の名称を定着させた。しかし、床下土壙の研究は停滞気味で、現状ではこの幾度にも渡る掘削・埋め戻し行為を明らかにすることは困難である。今後、考古学的分析の上に理科学的な分析を加え、リン・脂肪酸等の土壌分析の採用が必要となっている。

床下土壙の古い例は大分県舞田原遺跡（文48）に弥生時代後期～古墳時代初頭の例がある。関東では弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、「床面の二重構造」（文49）とされる例の中に貼床を行う類似例が報告されている。古墳時代では埼玉県中道遺跡、本田・東台遺跡が知られ、奈良・平安時代には同じく荒神脇遺跡があり、千葉・神奈川県下でも上浜田遺跡（文50）、向原遺跡（文51）等が報告されている。荒神脇遺跡から2Km離れた本遺跡は奈良平安時代と古墳時代の差はあるが床下土壙の設置時期が古墳時代まで溯ることが確認された。古墳時代の床下土壙を持つ遺跡は県内の中道遺跡（文52）、下田遺跡（文53）、南大通線内遺跡（文54）等が知られるだけで、本期の住居調査例が多いだけに、検出例の少なさは何らかの特性を示しているのだろうか。しかし、本地域では高い発見率である。本遺跡での観察結果を掲げると「1. 床下土壙は一部分、又は全面が貼床される。2. 掘削後に直に埋め戻される。3. 形態・規模等は不定形・不整形・不規則である。4. フク土に遺物が混在する例がある。」等が指摘できる。

1は床面検出時に判断でき、貼床されていない場合明瞭に土壙プランが現われる。この場合でも床面は地山面と同様固くしまっている。2はフク土に大別して2種の差がありAは地山土と同質のロームブロックをそのまま埋め戻す。ローム塊が掘削されたまま崩れていない。1次調査SJ19Hでは工具痕の残るローム塊が床下土壙内より出土している。Bは茶褐色土とロームブロック混在を主体とし焼土・灰・土器等を含む。基数については、住居使用の結果であり存続期間の長い住居では土壙の数・占める床面積が増え結果的に住居一面に掘削が及ぶと考える。4はフク土Aの場合前代の混入品を除いてほとんど遺物を含まない。フク土Bの場合は遺物を含むことが多く土師器等の出土があった。この場合、床上出土の遺物と対比することが可能で、前段階より同時期までの時期が当てられる。SJ11のように多量の遺物を出土する場合は稀でほとんどの場合、小破片であり、少量と云える。これらの諸特徴は荒神脇遺跡等でも既に指摘された部分もあるが時代的な差もあり直接性格を判断できる状況にない。

5） 古墳時代の土師器について

本田・東台Ⅰ・Ⅱ遺跡からは、古代時代中～後期を中心とした多くの土師器・須恵器が出土した。激しい重複によるため各住居群から良好なまとまりとして出土した土器群はあまり多くない。また床面だけでなく床下土壙内からも土器片の出土があり、床面上の土器との比較もできる例があった。

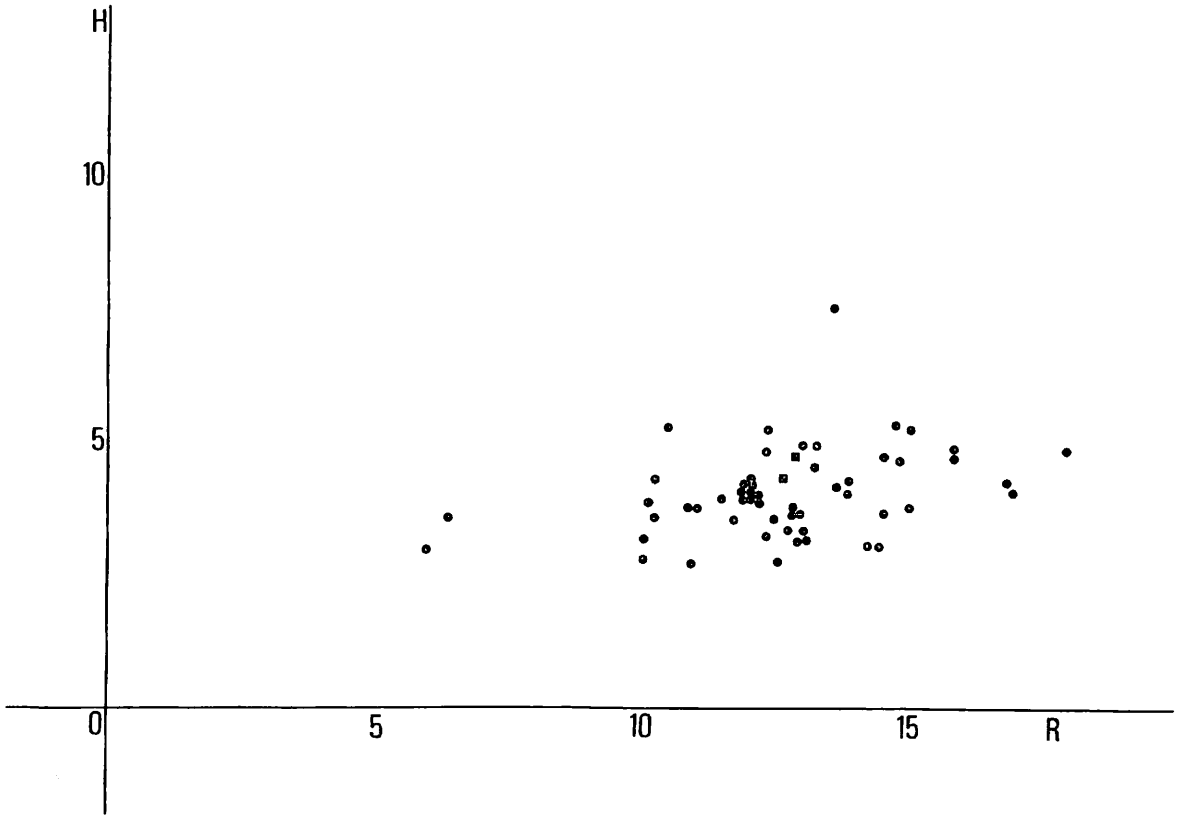
良好なまとまりとしてはSJ4、SJ8、SJ11が掲られる。SJ4ではBカマド周辺の床上に位置し完形の坏2、完存の甑1が出土した。SJ8ではカマド左側より坏4、小鉢2、甕1が出土している。SJ11では重複する3基の床下土壙より高坏1、坏11、甑1、甕1が出土した。これらの遺物は一応本遺跡中では、編年的な意味でまとまりを持つものと考えられる。次に、代表的な器種毎に見て行きたい。第52図に坏の口径、器高分布図を示した、口径10～15cm付近にほとんどが分布しており、10cm、12cm、13cm15cm前後にまとまりがある。SJ8№6の坏は、直立する口縁を持ち内傾する平面を端部に有する。SJ8№2の坏は口縁部と体部を分ける稜が目立たなくなり、№3に至っては底面のヘラケズリによって稜をつけている。SJ8№8、9の坏は住居跡廃絶後の混入であろうか。SJ11床下土壙の坏は、須恵器模倣によるSJ11№8、15の坏より埋納が始まり、SJ11№7、9、10、17、18の段階まで継続された。前者は直立する口縁、体部の稜などに鋭さを欠き口径も小さいことから鬼高Ⅰ～Ⅱ段階に、後者は口縁が大きく外反してしまい鬼高Ⅲ～Ⅳ段階に当るだろう。

長甕ではSJ9、12では、SJ9、№7、6、5、8があり、細身長胴の形が良く窺われ、7は45cm以上を測るだろう。これらは口縁部の外反は緩やかであり、胴は張出さず口径を越えない。鬼高Ⅱ～Ⅲ段階にかかる長甕の様子を良く表している。SJ6では、強く外反する口縁を持ち、体部上半に最大径を有する8、9とやや緩く外半する10、12がある。SJ6と類似の例にSJ5の長甕がある。口縁はくの字に外反し、体部上半に最大径を持つタテからヨコヘラケズリへの移行を窺わせるもので鬼高期の終末に当てられよう。またSJ11にはハケ目の施された甕片が出土している。甑はSJ2－4、7、11、13等の住居跡より出土している。この中ではSJ4№6が最大の法量を持ち、最小の例はSJ11、21である。№6は、口縁部がわずかに外反するが体部に至ってはほとんど直線的に移行してしまう。把手は矮小化している。小形の例はSJ1№9、SJ4№3がある。器形的には大形のものと大差が無いが底部を一部残し、円孔を穿けている。鉢形の甑は、SJ6、11にある。多く見られる多孔ではなく、単孔である。

特異な器形の土器を数例掲げることができる。これらの用途や性格については類例を待って検討したい。SJ6№13は大型の堝形土器である。口径40cmを越え器高は口径の2分の1を測る。底・体部には使用によると思われる加熱を受けており、状態としては伊豆地方の煎汁用に使われた例に類似するようだ。（文97）真間期以降に出土が認められる須恵器鉢に先行する。

SJ8№15は蓋形土器である。つまみに紐通しのためか貫通孔がある。身受の部分を特に作り出しておらず、受け口に合わせた落し蓋であったらしいが、カマド袖内より検出されるという特殊な出土のため身に当たる壷等は不明である。

SJ9№4は器台状の土器である。台形土器とも云えようか。製作途中の甕、壷の底部をそのまま利用したとも考えられる。内面のナデは荒く、「うつは」としてよりは、「台」とした方が良いだろう。



第52図　本田・東台Ⅱ坏の口径分布

類似品が岡部町内出遺跡（文98）にある。

羽口はSJ12No.7がある。これは内面に粘土ひも巻上げ痕が明瞭に残っており他の調整が施されていない。外面はタテヘラケズリと一見支柱の可能性もあるが上端部分の加熱還元変色により羽口への転用を考えたい。SJ7No.2はラッパ形の羽口破片であり、この完形品は1次調査では出土している。

須恵器については、少数でしかも小破片であったが、SJ10－10は遺存部位の良好な例であった。今回の調査により出土した須恵器の中では最古のものに当たると考えられる。田辺氏のTK23段階中村氏のⅠ型式Ⅳ段階に相当するだろう。

以上、本田・東台遺跡出土器の概略を述べたが、器種の細別や編年の区分等については充分な検討が加えられなかった。今後、Ⅰ次調査の出土資料と合わせ別の機会に報告を持ちたい。

4)　古墳時代以降の製鉄について

弥生時代中期以降、集落の増大や耕地の拡大などから、ある程度の鉄器の普及を考えられるが、埼玉県内では当時の鉄製品の出土はきわめて少ない。古墳時代に入ると集落、墳墓からの出土が増えてくる。しかし埼玉県内で製鉄が行われるようになる確実な時期は奈良平安時代になってからであり、それまではほとんど移入品とされ、おそらく完成品を受容する程度であったろうが、数少ない例では在地での製品の加工・製作は推測できる。これは、集落内より検出される羽口、鉄滓、炉を伴った小鍛冶跡から実証される。だが原料は多くの場合搬入品と考えられ、在地での生産はかなり遅れるようだ。

東京都中田遺跡の小鍛冶住居跡の発見以後、古墳時代の小鍛冶住居跡の発見は続いているが、同時期の住居跡数に比較してみると極少数と言える。しかも、これらは鬼高期以降にかかる例が多く鬼高期以前ではさらに事例が少なくなる。現在県内で最古と考えられる小鍛冶跡は江南町行人塚遺跡例である。住居内から台石・ハンマー、鉄滓、高坏転用羽口の製鉄関係遺物の他・器台・坩・坏等の五領式～和泉式の土師器が出土している。鬼高期以降は本田東台遺跡、神川町中道遺跡（文52）があり、集落内に小鍛冶住居が造られ、在地での鉄器製作が明確になって来る。行田市埼玉古墳群中の稲荷山古墳（文55）は金錯銘鉄剣を始めとする5世紀末～6世紀初頭の多数の副葬品が知られているが、この中に鉄製工具の一つである金鉗がある。単なる副葬工具類の一つとも考えられるが、製鉄に関連した工具であるとすると、稲荷山古墳の被葬者は中央との結びつきから鉄器製作の手段を所有、管理というかたちで掌握していたとも考えられよう。稲荷山古墳副葬の鉄製品は質量とも豊富で、剣、直刀、鏃、鉾、挂甲、馬具等があり、稲荷山古墳以前には見られない飛躍的な内容を持つ。

集落等の調査から原島礼二・高橋一夫氏等の研究成果があり、原島氏（文56）は、住居跡出土の鎌、スキ、クワ先等の鉄製農具を所有する階層の相異と変遷を指摘された。高橋氏（文57）は鬼高期の鉄製品のあり方について「鬼高期は鉄製品の出土が急増する時期であり、実際的に鉄製農具が出現、普及する時期と捉えて良いであろう。また群集墳からも直刀、鉄鏃等の武器が多量に出土している。武器はある面で消耗品であるため、他地域から製品を搬入するというより在地で製作したと考えるべきであろう。」とのべられ、鉄製品の製作に関して在地での要求の高まりや、受容態勢についてある程度の素地があることを提起された。製作に関しては埴輪や須恵器生産と同様一元的な製作も当然維持されたろうが、特定の集団では、技術を掌握する首長から、ある程度の技術を獲得していたことも考えられる。

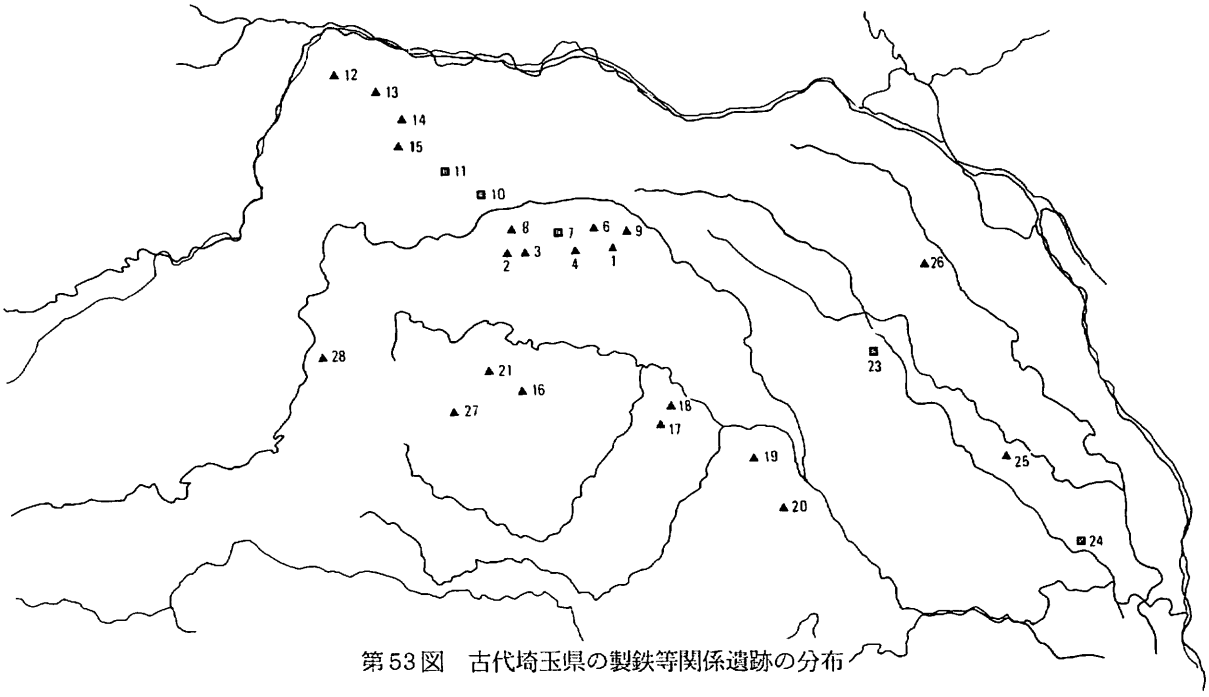
江南町を含めた荒川中流域の、鬼高期以降～奈良平安時代にかかる小鍛冶等の製鉄関係遺跡は県内でも高い発見数である。

本田・東台遺跡Ⅰ・Ⅱ次の調査では8本の羽口の他小鍛冶跡と考えられる2軒の住居跡が検出されている。

Ⅰ次19・21号住居跡からは鉄鏃が出土している。鉄製農具の検出は無いが多数の砥石の出土から当然所有していたと思われる。本遺跡に居住した集団は隣接する野原古墳群の造営者と考えられ、同古墳群の調査から6世紀後半～7世紀代の築造が推測され、前方後円墳からは、多数の埴輪・玉類の他・鉄刀・鉄鏃が出土し、集落との年代がうまくかみ合っている。集落内で製作された武器である

かまだ断定できないが、当然農具と伴に製作又は加工されていたと考えるのが妥当であろう。製作された武器のあるものは野原古墳群中に副葬されたと考えたい。後期群集墳と在地集落内での副葬武器の供給関係が一事例として提示できるだろう。荒川・和田川沿いには多くの後期群集墳が存在し、多量の鉄製武器を副葬していた川本町鹿島古墳群・花園町黒田古墳群（文58）・同小前田古墳群（文59）がある。野原古墳群と並行して築造されたこれらの古墳群は基盤となった集落の調査は未着手だが、花園町では同一地域に時期は下がるが奈良平安時代の大規模な鉄製遺跡である台耕地遺跡（文21）があり、前代から製鉄を行っていたことも推定出来るだろう。鹿島古墳群に至っては8世紀前半代まで築造が続けられており、34基調査された円墳の石室形態は、ほとんど河原石組胴張型横穴式石室であった（文40）。副葬品として鉄刀・鉄鏃が多量に出土しており、これらの年代については6世紀末～7世紀代の年代観が提起されていて（文60）石室構造からもとめられる年代観とずれがある。645年の大化改新の詔以降、防人の名が見えるが、律令の軍防令によると防人等の兵士が携行する武器は自弁しなければならない装備であった。この中に鉄製武具と考えられる「征箭五十隻・胡籙一具・大刀一口・刃子一枚」が列記されており、各郷戸より徴発された正丁は、おそらく、己の住む里や郷でこれらの武具を装備したのではないか。熊野遺跡にみられる小鍛冶住居跡はそのような郷の鍛冶屋であったのだろうか。

これを遡る本田東台遺跡内の鍛冶跡は前方後円墳を築造する地域の小首長と、彼をささえる家父長的世帯共同体層との古墳造営の意欲に裏付けられる面もあるのではないか。もちろん、生産を拡大するための農具の製作は当然主体を占めていたろう。鉄素材の供給は製鉄を行うことが全く不可能であれば、中央との連携を持った地方を統率する首長より、供給を受けていると考えたい。さらに群集墳の爆発的な増加に見られる家父長的世帯共同体の独自の活動も考えていくことが必要であろう。

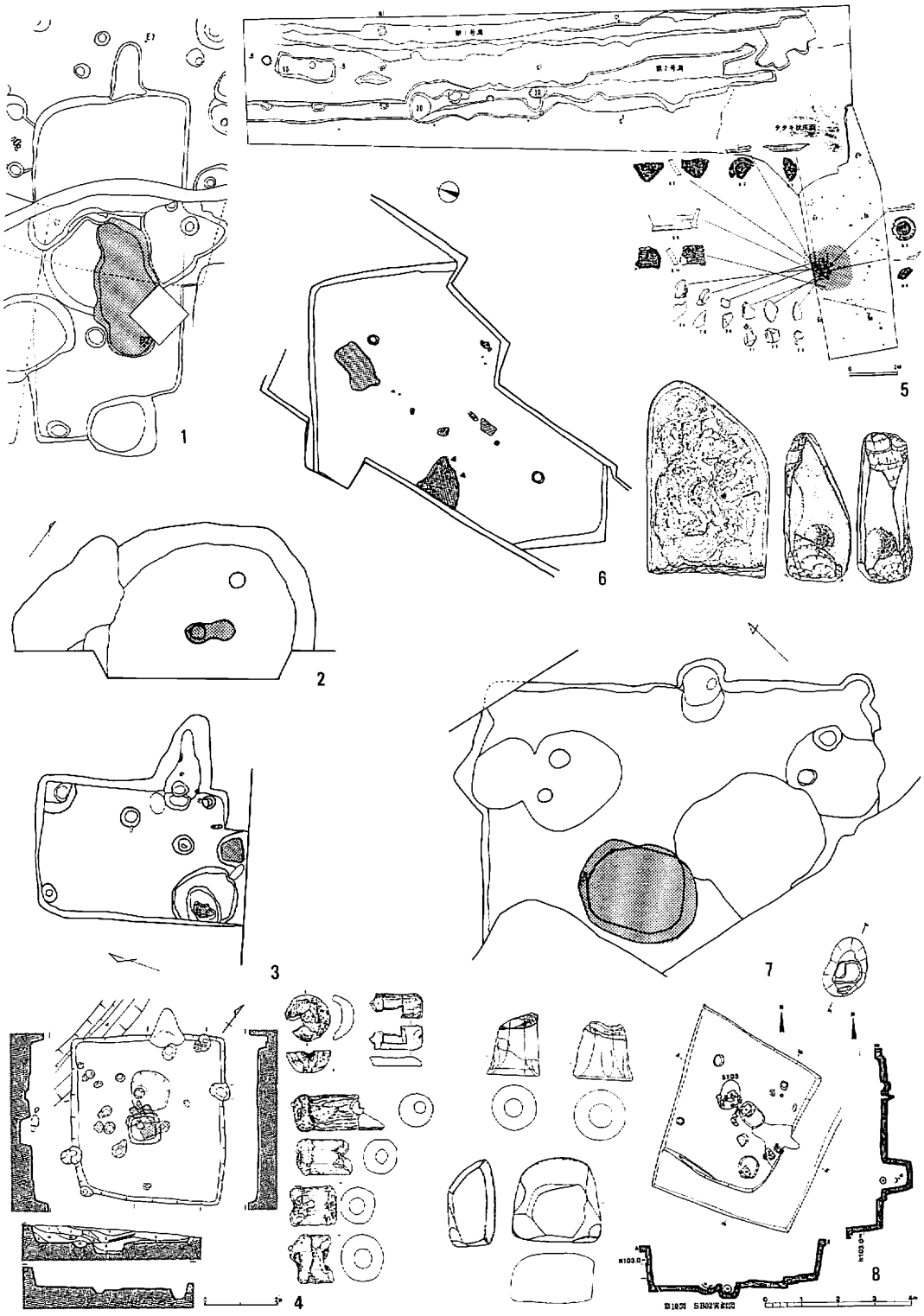


第53図　古代埼玉県の製鉄等関係遺跡の分布

第6表　古代埼玉県の製鉄等関係遺跡

No.	遺跡名	所在	遺構	遺物
1	熊野	江南町	住居（炉）1軒	羽口　鋳型　坩堝　鉄滓
2	荒井	江南町	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓
3	塩西	江南町	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓　台石
4	本田・東台Ⅰ	江南町	住居　1軒	羽口　鉄滓
5	本田・東台Ⅱ	江南町	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓
6	行人塚	江南町	住居　1軒	羽口　鉄滓　ハンマー　台石　砥石
7	宮下	江南町	pit、床面	羽口　鉄滓　鉄塊
8	金山	江南町	表採	須恵器　鉄滓
9	立正大学（鹿島）	江南町	炭焼窯　1基	
10	台耕地	花園町	住居（炉）1軒 炉3基	羽口　鉄滓　工具　鋳型
11	西浦北	岡部町	住居（炉）1軒 炉14基	羽口　鉄滓　鉄塊
12	中道	神川町	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓　台石
13	中堀	本庄市		羽口　鉄製品（刀子、鎌）
14	大久保山	本庄市		羽口　鉄滓
15	如来堂	美里町	炭焼窯 4～5基	金環　土師器
16	五領	越生町		鉄滓　鉄釘
17	新宿	川越市	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓
18	富士見	川越市	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓
19	川崎	上福岡市	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓　砥石　鉗子　紡錘車
20	俣埜	三芳町	炭焼窯	
21	雷（いかづち）	鳩山町	住居（炉）1軒	羽口　鉄滓
22	金平	嵐山町		鉄滓
23	大山	伊奈町	住居（炉）6軒 炉16基	羽口　鉄滓　鋳型　砥石
24	猿貝北	川口市		羽口　鉄滓　鋳型　鉄塊
25	諏訪山	岩槻市	住居（炉）2軒	鉄滓
26	上椿	杉戸町		羽口　鉄滓
27	大寺	日高町	表採	坩堝　銅滓
28	和同鉱山	秩父市		
29	岩下	蓮田市	住居	鉄滓
30	羽折	鶴ケ島市		鉄滓　鉈
31	ささら	蓮田市		鉄滓
32	黒浜椿山	蓮田市	炉4基	鉄滓　鍛造剝片
33	皀樹原・槍下	神川町	工房跡、炉8基	羽口　鉄滓
34	御蔵山中	大宮市	住居	羽口　鉄滓
35	鳩山窯跡群	鳩山町	住居、炉	羽口　鉄滓　鉄器

性　　格	時　　期	備　　考	文献
鍛錬鍛冶	9C中～後半	緑泥片岩の片材	2
鍛錬鍛冶	9C前～中		
鍛錬鍛冶	10C前～中	石組カマド	
鍛錬鍛冶	6C中～	床下土壙、貝巣穴泥岩	
鍛錬鍛冶	6C中～	床下土壙、貝巣穴泥岩	
鍛錬鍛冶	5C初	高坏転用羽口	
精錬、鍛錬鍛冶	9C中～10		81
	平　安		
	8C初	C14測定年代による	80
製錬、精錬、鍛錬鍛冶	9C後半	印章鋳型、獣脚鋳型、竪形炉3基	21
製錬、精錬、鍛錬鍛冶	11C後半～	自立円形炉14基	61
鍛錬鍛冶	6C中～		52
	平安後期		62
	11C		63
	奈良～平安		64
	10C		65
鍛錬鍛冶	8C前		66
鍛錬鍛冶	8C前		66
鍛錬鍛冶	9～10C		67
	10C中		68
鍛錬鍛冶	平　安		85
	平　安		15
製錬、精錬、鍛錬鍛冶	平安中（9C後半）	獣脚形鋳型、竪炉14基	69
製錬	10C後半	竪形炉6基、獣脚鋳型	70
鍛錬鍛冶	9～10C		71
	9C前	銅溶塊	72
	8～9C		73
	8C～		74
製錬	平　安		87
	奈良～平安		86
製錬	平　安		82
製錬、鍛錬鍛冶	平　安		88
精錬？鍛錬鍛冶	奈良～平安		84
鍛錬鍛冶	古墳時代		83
製錬、鍛錬鍛冶	平安時代		85



第54図　江南町等発見の製鉄関係遺構

鍛冶遺構の概要（第58図1～8）

埼玉県内の検出例（第6表）の中で江南町例と古墳時代にかかる神川町中道遺跡例の関係遺構を概述する。1 本田・東台遺跡Ⅱ SJ7はここでは省略した。

2 荒井遺跡　第1号住居跡

住居の½を調査　鍛冶炉は床面の中央付近に位置する。長さ94×幅 30cmの長楕円形を呈し、西側の小ピットは青灰色に還元していた。直径34cm・深さ12cmを測る。東側に続く浅い凹みも強く熱を受け赤変していた。小ピットから緩やかに傾斜する位置から羽口片、鉄滓等が出土した。

3 塩西Ⅱ遺跡　第23号住居跡

住居のほぼ全体を調査　カマド右側の壁が張り出し鍛冶遺構が位置する。略楕円形をするピットは直径60m・深さ18cmの規模で、皿状の底面は加熱を受け赤変していた。この傍に長さ35×幅20cmの被熱した台石と考えられる石材が床上にあった。

4 熊野遺跡　第4号住居跡

住居を完掘している。床中央部に一辺がほぼ90cm方形、深さ30cmの平底ピットがあり、フク土中より炭化物、鉄片、鉄滓、羽口、鋳型、 坩堝・河原石、片岩等が出土した。このピットに接して一段下がった方形部分があり西寄に直径30cmの円形ピットが位置し焼土化していた。これを鍛冶炉と考えている。鉄片の中には製品ではなく素材と考えられる資料があり注意される。

5 宮下遺跡　第2号跡（文81）

限られた調査区のため明確な製鉄遺構を検出できなかったが第2号跡から鉄滓、窯壁、羽口等が集中混在して出土した。窯壁、鉄塊等の出土から、製鉄炉の存在が推定される。

6 行人塚遺跡　第1号住居跡

本住居への一括廃棄遺物であり周囲に製鉄跡を推定できる。住居床面中央に河原石製の台石（35×20cm)、石製のハンマーがあり、床上・フク土中より高坏転用の羽口、鉄滓が出土。

7 本田・東台遺跡 SJ13

重複部分を除く⅔を調査、住居内の3号床下土壙の埋設した凹み上面に焼土が分布する。30×20cmの範囲が硬くしまる。ここを鍛冶炉と考えている。この部分より羽口が出土。本土壙は2.25×1.80m深さ52cmで、最下層にワラ、小枝等の炭化物、灰を多量に含み、フク土中にも鉄滓、炭化材、羽口片等が混入していた。

8 中道遺跡 SB02 （SX03）（文52.b）

住居の⅔以上を調査している。床中央に鍛冶炉が位置し58×55cmの方形、深さ5～7cmの土壙中央に径30～40cmのほぼ円形をした深さ15cmの小穴がある。この穴は火を受けて硬質化しており内面は黒緑色に、周囲は赤褐色である。この土壙より羽口が出土。また台石がやや離れて出土している。

時期は異なるが、熊野遺跡の鍛冶炉と中道遺跡は共通して、カマド前面に平底のやや深い方形ピットと一段下がったピット内に加熱を受けた円形小ピット（鍛冶炉）を配置している。この小ピットは荒井遺跡とも類似する。本田・東台遺跡は床下土壙の凹みを利用する点に、塩西Ⅱ遺跡は住居の一側方へ片寄り炉をつくる点に差異が見られる。

5）本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤正己

概要

古墳時代後期に比定される本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡住居跡出土の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

(1) 出土鉄滓は、鉄器製作時に排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類される。鉄滓外観は鍛冶炉の炉底に堆積した小型椀形状のものが含まれており、当遺跡内における鍛冶工房跡の存在を裏付ける。

(2) 鍛錬鍛冶に供された鉄素材は、鉱石系原料で含銅磁鉄鉱系の可能性が強い。

(3) 関東における古墳時代の製錬遺跡の検出は、現在のところ皆無である。当遺跡への素材鉄供給産地が注目される。国内産か大陸搬入品かは後日の課題となる。

1. いきさつ

本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡は、埼玉県大里郡江南町大字須賀広に所在する。推定年代は古墳時代後期（6世紀中頃から7世紀初頭）に比定された集落遺跡である。東台Ⅰ遺跡は住居跡42軒、東台Ⅱ遺跡では16軒が検出されて、両遺跡の一部の住居跡より鉄滓が出土した。これら鉄滓について、江南町教育委員会より、遺跡の性格把握を目的として調査依頼の要請があった。

今回、出土鉄滓の鉱物組成と化学組成の調査結果と、県内製鉄遺跡との関係及び列島内での古墳時代の鉄生産について考察しておく。

2. 調査方法

2－1 供試材

供試材の履歴をTable.1に示す。東台Ⅰ遺跡出土品3点及びⅡ遺跡出土品2点の計5点である。

Table.1 供試材の履歴及び調査項目

符号	遺跡	試料	出土位置	形状及び色調	大きさ		調査項目	
					サイズ（mm）	重量（g）	顕微鏡組織	化学組成
OH1	東台Ⅰ	含鉄鉄滓	9号住居跡覆土	偏平破片、黄黒褐色	33×30×7	10	○	○
2		鍛錬鍛冶滓	6号住居跡　床	粗鬆、青灰色	35×24×22	29	○	○
3		〃	36号住居跡床	椀形破片、黒茶色	51×50×27	43	○	○
4	東台Ⅱ	〃	3号住居跡No.7	椀形偏平、茶褐色	47×38×22	51	○	○
5		〃	AIG	椀形破片、暗茶色	40×30×10	18	○	○

2－2 調査項目

① 肉眼観察

② 光学顕微鏡組織

鉄滓は、水道水でよく洗滌し、中核部をベークライト樹脂に埋込みエメリー研磨紙の＃150、＃240、＃400、＃600、＃1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げている。

③ 化学組成

鉄滓の分析は次の方法をとっている。重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄（FeO）、二酸化珪素（SiO_2）。赤外吸収法……炭素（C）、硫黄（S）。原子吸光法……全鉄分（Total Fe）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、バナジウム（V）、銅（Cu）。中和滴定法……五酸化燐（P_2O_5）。

3. 調査結果

（1） 9号住居跡覆土出土：含鉄鉄滓（OH1）

① 肉眼観察：表皮側は黄褐色を呈し、滑らかな肌を有する。裏面は黒褐色で反応痕を残す。破面は気泡なく、鉄の酸化物が大部分と見受けられる。全体的形状は偏平状破片であった。

② 顕微鏡組織：Photo.1の1段目に示す。組織写真の中央部にある楕円白色部は鉄酸化物で黒錆層のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、その周辺を赤錆層のゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）と、汚染物質が囲んでいる。大部分が金属鉄の酸化物に変質している。

③ 化学組成：Table.2に示す。鉄滓成分というより鉄酸化物の組成である。全鉄分（Total Fe）は39.8％と低目で、このうち酸化第1鉄（FeO）は0.36％と極端に少なく、大部分は金属鉄の酸化物である酸化第2鉄（Fe_2O_3）で56.5％を含有する。該品は錆化による土壌汚染を受け、二酸化珪素（SiO_2）が20.24％、酸化アルミニウム（Al_2O_3）10.96％と高目で、酸化カルシウム（CaO）0.22％、酸化マグネシウム（MgO）0.082％と低目で、これらの造滓成分系が他の鉄滓成分とは異なっている。炭素（C）0.37％を含有し、酸化マンガン（MnO）1.01％と高目で鉱石系原料に由来する。

（2） 6号住居跡床上出土：鉄滓（OH2）

① 肉眼観察：表裏ともに青灰色地に赤褐色を混じ、全体が粗鬆で木炭痕を残し、一部で気泡を露出する。破面は黒色で小気泡を発する。鍛冶滓的外観を有している。

② 顕微鏡組織：Poto.1の2段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）と、淡灰色長柱状のフェアライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。鍛錬鍛冶滓特有の晶癖を表わしている。

③ 化学組成：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）は、やや低目の45.4％で、このうち酸化第1鉄（FeO）が47.5％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は少なく12.88％の割合である。酸化第2鉄（Fe_2O_3）量からみて金属鉄の酸化物は少ない。次に造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は38.23％を含有する。該滓の特徴は、この造滓成分中の酸化カルシウム（CaO）を4.61％と高値に含む事である。鍛

錬鍛冶滓で酸化カルシウム（CaO）を、このレベルまで含有するのは砂鉄系鉄素材では考え難く鉱石系原料素材の可能性がある。又、二酸化チタン（TiO_2）は0.38％を含みながらバナジウム（V）が0.010％と低値であるのは磁鉄鉱系で、更に銅（Cu）が0.027％と高目になるのは、含銅磁鉄鉱に由来する為と考えられる。以上の如く、該滓は、含銅磁鉄鉱系鉄素材の鍛錬鍛冶で排出された鍛冶滓と分類される。

（3） 36号住居跡床出土：鉄滓（OH3）

① 肉眼観察：表裏ともに黒褐色を呈し、比較的なめらかな肌で凹凸と木炭痕を有した小型椀形鍛冶滓の破片である。破面も黒褐色で気泡を発するが緻密である。

② 顕微鏡組織：Photo.1の3段目に示す。鉱物組成は大量の白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO）と木ずれ状のフェアライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）から構成される。一部に金属鉄（Metallic Fe）の残留も認められる。（写真中央対角線状に連なる白色不定形組織）

③ 化学組織：Table.2に示す。顕微鏡組織でヴスタイト（Wüstite：FeO）の量が多かった様に該滓は鉄分が多い。全鉄分（Totel Fe）は54.8％と最高値を示し、酸化第1鉄（FeO）は37.9％更に酸化第2鉄（Fe_2O_3）は金属鉄の酸化物の影響からか36.3％と高目であった。一方造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は鉄分の増加分だけ減少している。なお、該滓も酸化カルシウム（CaO）が3.92％と高目で、二酸化チタン（TiO_2）0.27％、バナジウム（V）0.008％は磁鉄鉱系素材を表わす。銅（Cu）のみは0.010％とやや低目であった。いずれにしても鍛錬鍛冶滓の構成成分である。

（4） 3号住居跡 №7出土：鉄滓（OH4）

① 肉眼観察：表皮は茶褐色を呈し、木炭痕や凹凸を有するが比較的なめらかな肌である。裏面は青灰色の反応痕を残し、気泡を発している。破面は黒色の緻密質で気泡は少ない。椀形鍛冶滓の破片である。

② 顕微鏡組織：Photo.1の4段目に示す。鉱物組成は大量のヴスタイト（Wüstite：FeO）と少量のフェアライト（Feyalite：2FeO・SiO_2）から構成される。鍛錬鍛冶滓の典型的晶癖を示す。

③ 化学組成：Table.2に示す。本田Ⅰ遺跡36号住居跡出土鉄滓（OH3）に近似した成分系で、これも含銅磁鉄鉱系鉄素材の鍛錬鍛冶滓の成分を表わしている。

（5） AIG出土：鉄滓（OH5）

① 肉眼観察：表皮は暗茶色で木炭痕と凹凸をもつ。裏面は黒褐色を呈し、椀形状突起をもち、気泡を露出する。破面は黒色で気泡は少ない。椀形鍛冶滓の約⅓程度の塊と考えられる。

② 顕微鏡組織：Phote.1の5段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）と灰色盤状結晶のフェアライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）それに金属鉄の酸化物であるゲーサイト（Goethite：ℒ－FeOOH）から構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖を示す。

③ 化学組成：Table.2に示す。該滓もこれまでに述べた各鉄滓の成分系に準じたものである。含銅磁鉄鉱系鉄素材の鍛錬鍛冶滓に分類される。

4. まとめ

(1) 古墳時代後期に属する本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓は、含銅磁鉄鉱系鉄素材の鍛造加工で排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類された。鉄滓外観は、鍛冶炉の炉底に堆積した小型椀形状鍛冶滓で鍛造量は少なかったと推定される。

(2) 鉱物組成はヴスタイト（Wüstite : FeO）の大量晶出と、少量析出のフェアライト（Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$）これに金属鉄の酸化したゲーサイト（Goethite : α－FeOOH）が組合されており、鍛錬鍛冶滓特有の晶癖を示す。

(3) 化学組成は、全鉄分（Total Fe）が45～50％台と多く、造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）中の酸化カルシウム（CaO）が4.0％台と高目が特徴的である。更に二酸化チタン（TiO_2）は0.3％台と微量含有であり、バナジウム（V）が0.010％台と低目で、これらの成分系鉄滓は磁鉄鉱系素材の鍛冶排出物を表わす。これに銅（Cu）を0.020～0.029％と含有するのは含銅磁鉄鉱が想定される。

(4) 埼玉県の秩父地方には、鉄鉱石が小規模ながら賦存するが、これが古墳時代の製錬に結びつくとはいい難く、本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡の鉄素材は他地域からの搬入品といわざるを得ない。

(5) 今回調査の供試材は、鉄滓のみで小鉄塊や鉄器の調査がなされていない。後日、これらの補足試料を加えて鉄素材の産地について言及したいと考えている。

(6) 江南町所在の行人塚及び本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓は、列島内での製錬開始時期を追求する上で重要な資料である。後日、更に検討を加える予定である。

5. 考察

5－1 埼玉県下の製錬遺跡と鍛冶遺跡の鉄滓について

関東における製錬開始時期（製鉄原料を木炭でもって還元する第1工程）は7世紀後半から8世紀初頭で[1]、いずれも製鉄原料は砂鉄を使用し、鉄鉱石系は確認されていない。一方埼玉県での製鉄関係遺跡は30例前後調査されているが、製錬遺跡は大山[2]、台耕地[3]（9世紀後半）、猿貝北[4]（10世紀後半）、西浦北[5]（11世紀後半）らの4遺跡[6]で、残りは鍛冶遺跡である。製錬遺跡の鉄滓は勿論砂鉄系である。原料砂鉄は塩基性（赤目）系であり二酸化チタン（TiO_2）を4～5％含有する。

鍛冶滓は、本稿でみた様に古墳時代は鉱石系、砂鉄系は9世紀以降になって現われる。Table.3に製鉄原料の違いによる鉱物組成と化学組成の代表値を整理して示している。

Table.3 埼玉県下の製鉄原料の相違による製錬滓と鋳冶滓の組成変化

原料 / 鉄滓分類 / 組成	砂鉄系			鉄鉱石系
	製錬滓	精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）	鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）	鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）
鉱物組成	Ulvöspinel ($2FeO.TiO_2$) Ilmenite ($FeO.TiO_2$) Fayalite ($2FeO.SiO_2$)	Wüstite (FeO) と少量の Ulvösomel ($2FeO.SiO_2$) Magaetite (Fe_3O_4), Fayalite ($2FeO.SiO_2$)	Wüstite (FeO) + Fayalite ($2FeO.SiO_2$)	Wüstite (FeO) + Fayalite ($2FeO.SiO_2$)
(Total Fe)	15～45%	45～55%	45～55%	45～61%
(TiO_2)	6～12	2～4	0.2～2	0.3～0.5
化学組成 (V)	0.2～0.5	0.1～0.2	0.01～0.1	0.005～0.02
(Ca)	0.3～9.0	0.5～1.0	0.08～0.6	2.8～5.7
(Cu)	0.005～0.0019	0.005～0.014	0.005～0.008	0.020以上
遺跡名	大山、台耕地 猿貝北、西浦北	大山、台耕地 西浦北	大山、台耕地 西浦北	本田・東台Ⅰ、Ⅱ 行人塚
推定年代	9世紀後半～11世紀後半			古墳時代

注：大山、台耕地、西浦北の各遺跡は、製錬→精錬鍛冶（大鍛冶）→鍛錬鍛冶（小鍛冶）の一貫作業がなされていた。

Table.3でみられる様相は、埼玉県だけでなく、千葉県でも指摘でき、更には関東で認められるパターンである。すなわち、関東の鉄器生産は、古墳時代は鉄素材を外部に依存した鍛冶加工のみの作業であり、律令体制以降から砂鉄精錬及び成分調整の精錬鍛冶、素材の鍛冶加工を加えた製鉄一貫作業操業となったと推定される。8、9世紀初頭は両者の接点となり、鉄製品は鉱石系及び砂鉄系の両方が存在する可能性をもつものと考えられる。鉄器の分析により、この方面の解明に期待がもたれる。

5－2 古墳時代の鍛冶素材について

関東地方の鍛冶工房の初現期は古墳時代である。近年、その発掘調査例は増しつつあって20有余例が挙げられる。[7] 江南町所在遺跡は、行人塚、及び本稿の本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡がこれに加わる。そのなかで鉄滓や鉄器の分析調査例は数が限られる。古墳時代中期の行人塚遺跡出土鉄滓は、後日正式報告の予定であるが、Table.2に示した分析結果から判る様に鉱石系鉄素材の鍛錬鍛冶滓で、本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡より先行する。また、本稿で述べた様に本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓は、含銅磁鉄鉱系鉄素材の鍛錬鍛冶と判明し、素材の産地同定が迫まられている。

一方、筆者は1986、1987年と千葉県所在の古墳時代中期の中山遺跡[8]、及び後期の上座矢橋遺跡[9]の鍛冶関連遺物を調査した。いずれも鉄素材は鉱石系であり、含銅磁鉄鉱素材が認められる。更に球状黒鉛鋳鉄という軟質化を狙った高度技術のMg添加の鋳鉄も存在し、大陸搬入品の可能性を指摘した。

又未発表であるが東北・福島県郡山市所在の古墳中期比定の永作遺跡[10]において、含銅磁鉄鉱系素材の鍛錬鍛冶がなされた事を確認している。西日本では弥生時代からの鍛冶が判明しているが、古墳時代中期までは、やはり鍛冶素材は鉱石系で、かなりの数の含銅磁鉄鉱素材が含まれている事を述べてきた[11][12]。以上の如く、列島内での古墳時代中期から後期にかけての鍛冶工房では含銅磁鉄鉱素材が広く使用されている。これらの鉄素材の産地は何処あろうか。

列島内で鉱石製錬の操業が行なわれた地域は、滋賀県の琵琶湖周辺[13]、岡山県一帯と広島県の一部[14] が判明している。このうち、岡山県棚原鉱山の含銅磁硫鉱の賦存は注目される。[15] しかし、これら各地域の鉱石系鉄生産の開始時期は6世紀後半以降におさえられ、5世紀代の操業は実証されていない[16]。今後調査が進めば5世紀代の製錬遺跡検出の可能性もありうると考えられるが後日の問題となる[17]。

次に古墳時代の中・後期に鉄素材は大陸側からの搬入は如何であったろうか。これも十分なる裏付け資料に欠ける憾みがあるが古墳副葬の鉄鋌と鍛冶具の出土や、渡来系の鍛冶集団の問題も無視できない。鉄鋌と鍛冶具は、5世紀代から6世紀後半代まで出土する。鉄鋌は韓国においても出土して、含銅磁鉄鉱的成分を有したものも存在する[18]。国内出土鉄鎚においても高銅成分の鉄鋌が確認されてる[19][20]。更に国際状勢を慮ると4世紀後半から5世紀初頭にかけて朝鮮半島では、高句麗・新羅・百済の政争があり、各種技術集団が難を逃れるため幾波にもわたって渡来したであろう。これらの人々は鉄素材や鉄器を携えたと考えられる。又、鉄素材の交易もあったろう。以上の状況を思い合わせると鉄素材の大陸産の将来説も捨てがたい。

古墳時代中・後期の鉄素材の産地同定は、国内鉄製錬開始時期の問題と相まって今後の古代史研究の重要課題となってくる。含銅磁鉄鉱の究明は、今後の研究課題の展開を握る重要な鍵である事を指摘して筆をおく。　1988.6.11

注

1. 穴澤義功「関東地方を中心とした古代製鉄遺跡研究の現状と課題」『日本古代の鉄生産』(1987年度たたら研究会大会資料) たたら研究会 1987 73頁
2. 大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』(埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集) 埼玉県教育委員会 1979
3. 大澤正己「台耕地遺跡出土の鋳銅・製鉄関係遺物の金属学的調査」『台耕地 Ⅱ』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984
4. 大澤正己「猿貝北遺跡出土鉄滓及び砂鉄の金属学的調査」『猿貝北・道上・新町口』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第52集) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985
5. 大澤正己「西浦北遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」埼玉県岡部町教育委員会への提出原稿1983.7.14
6. 埼玉県蓮田市教育委員会調査の椿山遺跡は製錬遺跡(平安時代)で実際には5遺跡となる。現在、報告書作成中。
7. 穴澤義功前掲書①
8. 大澤正己「中山遺跡鍛冶工房跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『中山遺跡・水流遺跡・東原遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第11集)印旛郡市文化財センター1987
9. 大澤正己「上座矢橋出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『上座矢橋』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第4集) 印旛郡市文化財センター 1986
10. 福島県郡山市教育委員会『永作遺跡』1988 鉄滓の分析結果は未報告 後日発表予定
11. 大澤正己「大県遺跡及び周辺遺跡出土鉄滓、鉄剣の金属学的調査」『大県遺跡・大県南遺跡』(柏原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集) 大阪府柏原市教育委員会 1984
12. 大澤正己「長行A遺跡出土の鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『長野A遺跡3』(北九州市埋蔵文化財調査報告書 第55集) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1987
13. 大澤正己「A地区製鉄炉出土鉄滓の分析について」『南郷遺跡発掘調査報告書』<一般国道(京滋バイパス)関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ>滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会 1988
14. 大澤正己「古代鉄生産」(金属学的見地からのアプローチ)『日本古代の鉄生産』(1987年度たたら研究会大会資料) たたら研究会 1987 273〜280頁
15. 大澤正己前掲書⑨
16. 大澤正己「古墳出土鉄滓出滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会編 1983
17. 岡山県古墳供献鉄滓のうち5世紀後半代のもので鉱石製錬滓が存在する可能性がある。佐々木稔、伊藤薫「鍛冶滓生成過程の推定」たたら研究会講演資料 1986 提示データ D古墳出土鉄滓、佐々木氏らは「精錬滓か」としているが筆者は鉱石製錬滓と考えている。
18. 佐々木稔、伊藤薫「東茱福泉洞古墳出土鉄器ならびに比較試料の金属学的解析」『たたら研究』発表予定原稿 1988
19. 窪田蔵郎「宇和奈辺陵墓参考地陪家高塚(大和6号墳)出土鉄鋌の金属考古学的調査」『宮内庁書陵部紀要』25 1973
20. 久野雄一郎「奈良市高塚古墳(大和第6号墳)出土鉄鋌7点の金属学的調査報告」『橿原考古学研究所論集』第7 吉川弘文館 1984 12

Table.2　　埼玉県下出土鉄滓の化学組成　（第７表）

試料番号	遺　跡　名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (TolalFe)	酸化第１鉄 (FeO)	酸化第２鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分/TotalFe	TiO_2/TotalFe	注
OG 1	行人塚	1号住居跡　No.14	鍛錬鍛冶滓	5C初～中	43.5	36.8	21.45	19.98	9.45	4.62	0.67	0.09	0.51	Nil	Nil	0.19	0.20	0.013	0.010	34.72	0.798	0.012	3
2	〃	〃　No.3	〃	〃	49.6	37.9	28.8	20.00	7.50	2.80	0.51	0.07	0.42	Nil	0.005	0.16	0.30	0.011	0.006	30.87	0.622	0.009	3
3	〃	〃　覆土	〃	〃	49.6	43.9	22.13	18.24	8.17	5.67	0.55	0.07	0.50	Nil	0.006	0.17	0.10	0.012	0.006	32.58	0.657	0.010	3
4	〃	〃　No.27	〃	〃	61.8	58.5	23.36	9.06	3.50	3.08	0.37	0.05	0.23	Nil	Nil	0.12	0.23	0.005	Nil	16.01	0.259	0.004	3
OH 1	本田東台Ⅰ	9号住居跡　覆土	〃	6C中～7C初	39.8	0.36	56.5	20.24	10.96	0.22	0.082	1.01	0.36	0.023	Nil	0.15	0.37	0.022	0.005	31.502	0.792	0.009	4
2	〃　Ⅱ	6号住居跡　床上	〃	〃	45.4	47.5	12.88	23.42	8.69	4.61	1.51	0.11	0.38	0.012	0.021	0.48	0.06	0.010	0.027	38.23	0.842	0.008	4
3	〃　Ⅰ	36号住居跡 床面	〃	〃	54.8	37.9	36.3	14.24	4.16	3.92	1.54	0.09	0.27	0.009	0.037	0.29	0.23	0.008	0.010	23.86	0.435	0.005	4
4	本田東台Ⅱ	3号住居跡　No.7	〃	〃	51.4	52.0	15.68	19.88	4.91	4.48	1.97	0.11	0.29	0.007	0.020	0.48	0.08	0.008	0.020	31.24	0.608	0.006	4
5	〃	〃　A1G	〃	〃	54.8	43.7	29.8	15.06	4.83	4.48	0.65	0.08	0.30	0.007	0.028	0.31	0.14	0.010	0.029	25.01	0.456	0.006	4
OSA 1	塩荒井	1号住居跡 A2No.8	〃	9C後半～末	64.6	64.1	21.11	10.04	2.09	0.57	0.20	0.04	0.20	0.009	Nil	0.18	0.11	0.008	0.008	12.89	0.200	0.003	5
2	〃	〃　覆土	〃	〃	57.0	47.3	29.0	14.98	4.35	1.12	0.53	0.07	0.29	0.007	0.008	0.24	0.23	0.010	0.012	20.98	0.368	0.005	5
3	〃	〃　A2No.7	〃	〃	66.6	61.8	26.6	8.58	1.31	0.49	0.14	0.03	0.14	Nil	0.005	0.12	0.082	0.007	0.009	10.53	0.158	0.002	5
4	〃	〃　覆土	〃	〃	56.4	48.9	26.3	14.84	3.03	0.84	0.40	0.06	0.20	0.009	0.037	0.24	0.19	0.010	0.011	19.10	0.339	0.004	5
5	〃	〃　〃	〃	〃	36.2	31.7	16.54	29.3	12.47	2.31	1.14	0.14	0.76	0.007	0.001	0.25	0.16	0.022	0.010	45.22	1.249	0.021	5
OM 1	宮下	1号住居跡	〃	9C後半～10初	68.4	63.4	27.4	4.98	1.70	0.59	0.28	0.07	0.33	Nil	0.005	0.22	0.20	0.019	0.007	7.55	0.110	0.005	6
2	〃	〃	〃	〃	57.9	59.5	16.63	13.92	4.72	2.52	0.99	0.10	0.79	Nil	0.013	0.25	0.14	0.026	0.008	22.15	0.383	0.014	6
3	〃	〃	精練鍛冶滓	〃	63.0	51.2	33.2	7.56	2.79	1.26	1.04	0.11	1.94	0.023	0.061	0.22	0.30	0.13	0.007	12.65	0.201	0.031	6
4	〃	5区　No.1	ガラス質鉄滓	〃	2.50	1.37	2.05	36.1	9.31	11.26	11.94	0.23	0.27	24.47	0.016	0.058	0.15	0.050	0.002	68.61	27.444	0.108	6
5	〃	試掘トレンチ	鍛錬鍛冶滓	〃	63.8	56.1	28.9	8.74	2.83	1.29	0.72	0.05	0.28	0.026	0.045	0.14	0.17	0.010	0.013	13.58	0.213	0.004	6
6	〃	試掘トレンチ4	精練鍛冶滓	〃	58.0	58.5	17.92	12.10	5.76	0.93	1.19	0.12	2.44	0.030	0.019	0.17	0.17	0.078	0.003	19.98	0.345	0.042	6
SB	ささら	2号住居跡 b区覆土	砂鉄製錬滓	平安時代	35.70	18.11	30.9	16.60	8.03	7.91	4.12	0.51	9.41	0.11	0.043	0.41	0.84	0.34	0.016	36.66	1.027	0.264	7
A-873	宿下	4号住居跡	〃	〃	54.4	57.3	14.05	11.96	4.91	2.90	2.27	0.20	3.96	0.054	0.023	0.16	0.12	0.21	0.005	22.04	0.405	0.073	1
A-874	〃	〃	〃	〃	34.4	9.34	38.8	17.22	9.64	1.26	2.21	0.26	4.79	0.064	Nil	0.19	0.97	0.30	0.008	30.33	0.882	0.139	1
A-875	〃	〃	〃	〃	20.2	21.27	5.24	40.2	15.97	7.35	2.22	0.12	0.76	0.013	0.41	0.93	0.27	0.014	0.018	65.74	3.255	0.038	1
A-872	ささら	鍛冶跡	精練鍛冶滓	平安時代	57.8	62.9	12.77	9.44	3.97	3.37	1.53	0.14	2.12	0.052	0.032	0.38	0.14	0.16	0.023	18.31	0.317	0.037	2
A-871	〃	〃	〃	〃	52.6	52.2	17.24	10.50	4.44	3.68	1.77	0.16	3.01	0.034	0.035	0.44	0.14	0.15	0.017	20.39	0.388	0.057	2
SC 26	〃	2号住居跡 c区覆土	〃	〃	39.6	39.1	13.19	16.16	7.07	10.39	3.87	0.28	8.94	0.082	0.032	0.40	0.10	0.30	0.010	37.49	0.867	0.207	7
68	〃	〃　〃	〃	〃	24.43	17.56	15.43	24.88	9.20	16.65	5.11	0.33	9.51	0.064	0.043	0.38	0.34	0.31	0.004	55.84	2.038	0.347	7
87	〃	〃　〃	〃	〃	8.90	6.90	5.06	59.90	19.18	4.02	2.60	0.18	1.12	Nil	0.009	0.19	0.03	0.33	0.003	85.70	9.629	0.126	7
186	〃	〃　〃	〃	〃	42.7	42.6	13.77	17.86	6.05	7.21	3.23	0.26	8.21	Nil	0.061	0.33	0.06	0.16	0.003	34.35	0.748	0.179	7
225	〃	〃　〃	〃	〃	52.0	29.6	41.5	7.48	3.78	3.11	2.94	0.21	9.24	0.058	0.074	0.20	0.24	0.29	0.004	17.31	0.333	0.178	7
Sd 19	〃	〃　d区	〃	〃	34.90	29.5	17.15	19.88	4.04	5.04	8.36	0.40	12.71	0.029	0.042	0.24	0.18	0.24	0.003	37.32	1.069	0.364	7
180	〃	〃　〃	〃	〃	38.30	25.45	26.47	20.44	6.99	8.95	3.49	0.25	6.87	0.035	0.075	0.40	0.28	0.17	0.004	39.87	1.030	0.178	7

Table 2 の注

1　大澤正己「宿下遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『黒浜貝塚群』＜宿下遺跡＞（蓮田市埋蔵文化財調査報告第　集）蓮田市教育委員会、1988　予定原稿
2　大澤正己「ささら遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『黒浜貝塚群』同上
3　埼玉県大里郡江南町教育委員会調査出土鉄滓、1988報告予定
4－1　新井端他『江南村内遺跡群Ⅰ』（昭和58年発掘調査概要）江南村教育委員会、1984
4－2　大澤正己「本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『本田・東台遺跡Ⅰ、Ⅱ』（江南町文化財調査報告　第7集）江南町教育委員会、1988
5　3と同じ
6　新井端他『江南遺跡群Ⅱ』＜宮下遺跡　元稲荷遺跡＞（江南村文化財調査報告　第5集）江南村教育委員会 1985
7　橋本勉、藤原高志「ささら遺跡」（蓮田3号）『年報』3埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1982
　大澤正己「ささら遺跡出土鉄滓の金属学的調査」埼玉県埋蔵文化財調査事業団への提出原稿、1984.3.23

Ⅳ　上前原遺跡の遺構と遺物

1 遺跡の概観

上前原遺跡とした遺物散布地の範囲は、広範な面積に及び、時代も各時代と長期間に及んでいる。そのおよその範囲は第7図に記したが、古墳の立地する東側の谷頭部から、西側の開析谷を南北方向に走る道路に区切られた約500mの範囲である。調査部分は台地縁辺よりやや台地内部に入った地点で、南側に入り込んだ谷より派生する小支谷（埋没部分）の谷頭部分に当っている。

約25m方形の調査区の東南側は埋没谷の谷地形が現れ、東半には土壙群、及び住居跡が発掘された。調査区の大半を占める埋没谷は多量の土器・石器等を含む包含層となっていた。埋没谷フク土上層から、1m方眼の小グリットを設定し、1層毎に発掘し、都合11回行った。4mを基準グリットとしたので、この小グリットは北西隅より東へ「あ－い－う－え」と進み1段下り「あ」の下グリットより再び「お－か－き－く」と順次「た」まで16区画に区分した。土層の確認は調査西側に15mのトレンチを谷底面まで掘り下げている。遺物の出土分布は埋没谷部分を中心にこの小グリットで、下図等に示した。

検出遺構は埋没谷を除いて縄文時代に係る遺構があった。

縄文時代住居跡　　1軒

縄文時代土　壙　　21基

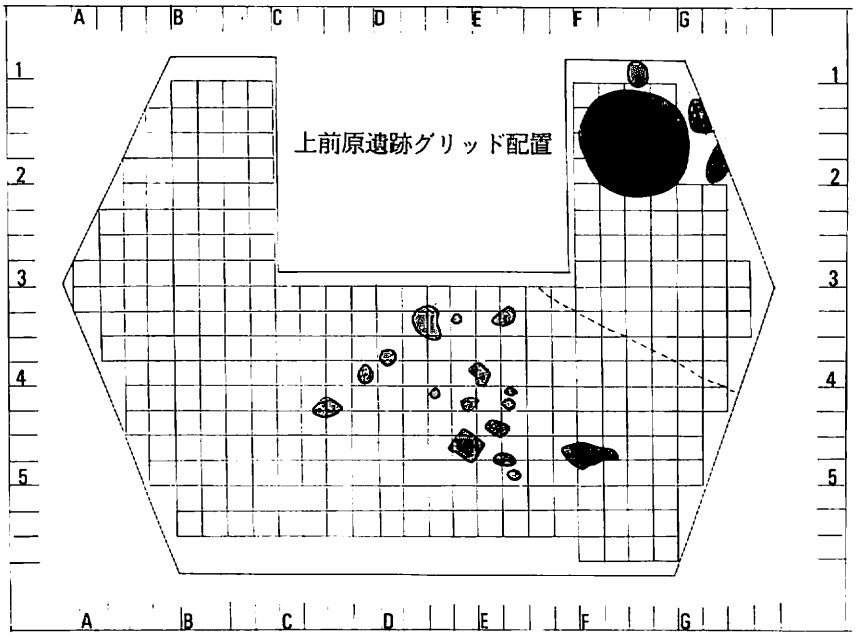
出土遺物は縄文時代の土器・石器、と焼礫等が伴出した。

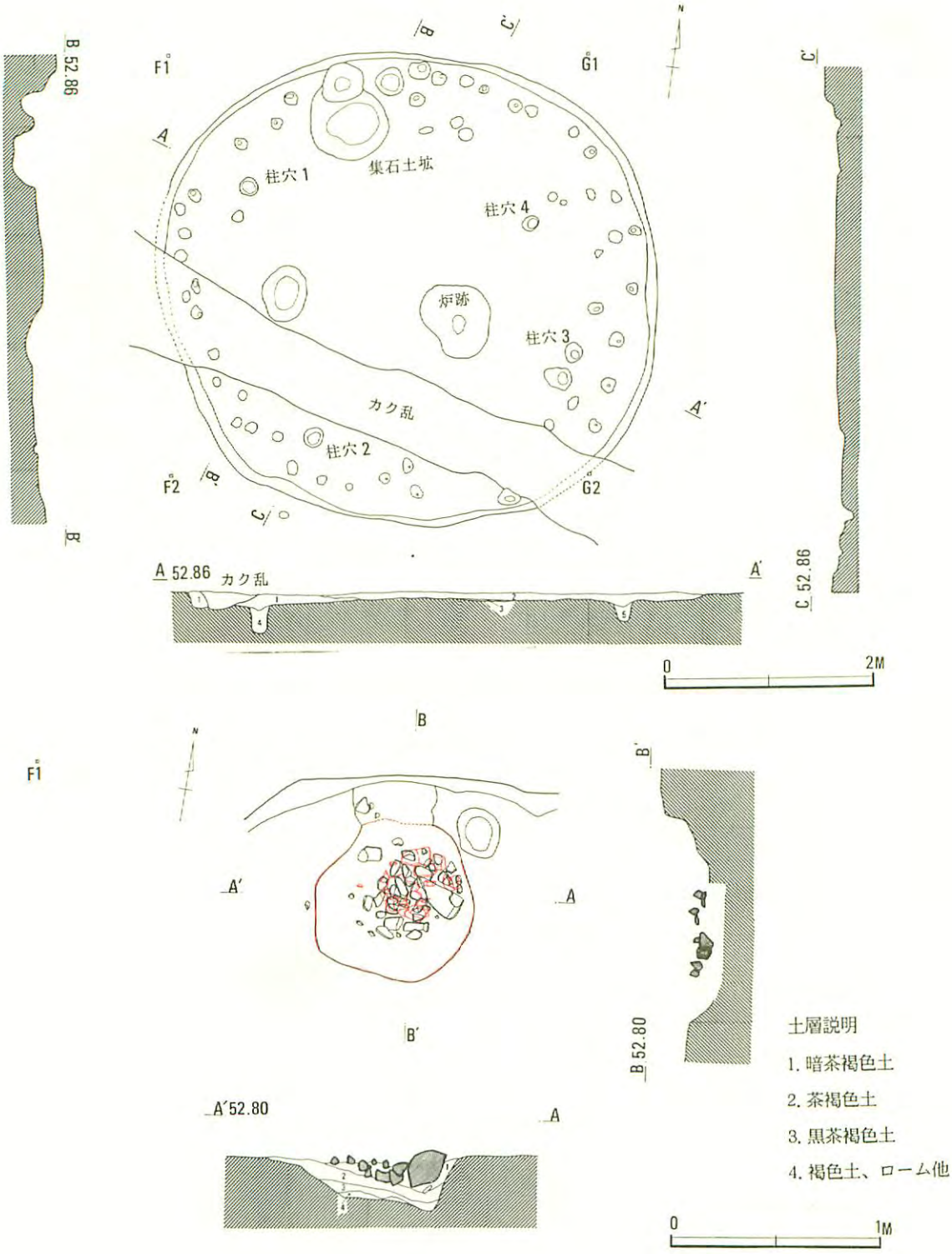
縄文時代土器、早期 120片、 前期 25片、 中期 16,099片　後期 20片

縄文時代石器、 6,419

縄文時代焼礫、 4,058

以上の他に古墳時代の土師器等が少量あった。





第55図　上前原1号住居跡・集石土壙

2 竪穴住居跡

第1号住居跡 （第55図）

F1区に位置する。埋没谷より15m程離れたほぼ平坦地に構築されている。全体を発掘しているが南半分を送電鉄塔用アース埋設に伴うカク乱を受けていた。直径4.7～5.0mの略円形プランをしている。土壙等に比較して、住居の掘り込みはきわめて浅く、検出フク土は5～10cmしかなかった。床はローム硬質面の直床であり、かなり凹凸が認められた。

住居中央のやや南東寄に炉跡が位置している。60×70cmの楕円形で浅い皿状をしている。炉床は良く焼けていた。

北壁に接して集石土壙としたピットが検出されている。直径70cm、深さ50cmを測る。フク土は、4層に分けることができたが、第1層中に多量の焼礫が集中していた。円礫・角礫等がほとんどで総数は72個を数える。炉跡から2m程の近距離に位置するなど、住居内の調理の場とも考えられよう。この土壙内からは第68図316の土器片が1点、2層中から出土した。図中の赤ラインは下層の礫の位置を示している。西壁側には60×40cm、深さ20cmの楕円形をした土壙がある。遺物は出土していない。

柱穴は、主柱穴と考えられる4本のピットがある。柱穴1は直径15cm、深さ24cm、柱穴2は直径20cm、深さ8cm、柱穴3は直径16cm、深さ18cm、柱穴4は直径16cm、深さ20cmを測る。柱穴1－柱穴4と柱穴2－柱穴3との距離は約2.7mと等しい。しかし、柱穴1－柱穴2は2.5m、柱穴4－柱穴3の距離は1.3mと前者の約½になっている。住居の平面プランに見合った柱穴配置なのであろう。壁に沿って巡る浅い凹みは屋根を支える垂木材の痕跡とも考えられる。

出土遺物は、黒燿石製石鏃1点、剝片2点の他はほとんど出土遺物は無い。集中土壙中より出土した土器片から住居の時期を中期前半に置きたい。

1号住居土層説明 A－A′

1 黒茶褐色土

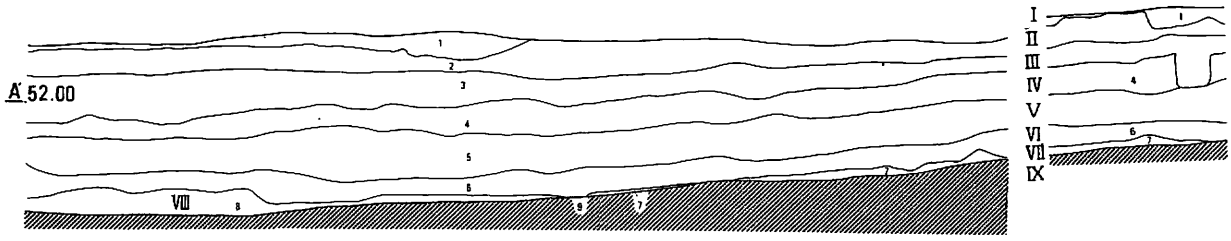
2 暗褐色土

3 焼土粒子を含む暗茶褐色土

4 褐色土、軟質

5 茶褐色土、軟質

上前原遺跡　第1号住居跡				
平面形	略円形	4.7×5.0m	柱穴1 直径15cm、深さ24cm	出土遺物
フク土	9層		柱穴2 直径20cm、深さ8cm	土器片 － 把手？
炉跡	楕円形	60×70cm	柱穴3 直径16cm、深さ18cm	石鏃
集石土壙	円形	直径70cm、深さ50cm	柱穴4 直径16cm、深さ20cm	
			壁周ピット 30ヶ所以上	
土　壙	楕円形	60×40cm 深さ20cm		



第56図　上前原Ａ－Ａ′　土層断面図

上前原遺跡　埋没谷大トレンチ　Ａ－Ａ′　土層説明

第Ⅰ層　　耕作土　灰茶褐色土、砂質で粗粒、粘性はない。遺物多数散布する。

第Ⅱ層　　黒色土　粘性があり、粒子が細かい。

第Ⅲ層　　黒色土、やや褐色を帯びる。粘性があり粒子が細かい。

第Ⅳ層　　黒色土、褐色味が強い。わずかにローム粒子を含む。粘性強く、粒子はやや粗い。

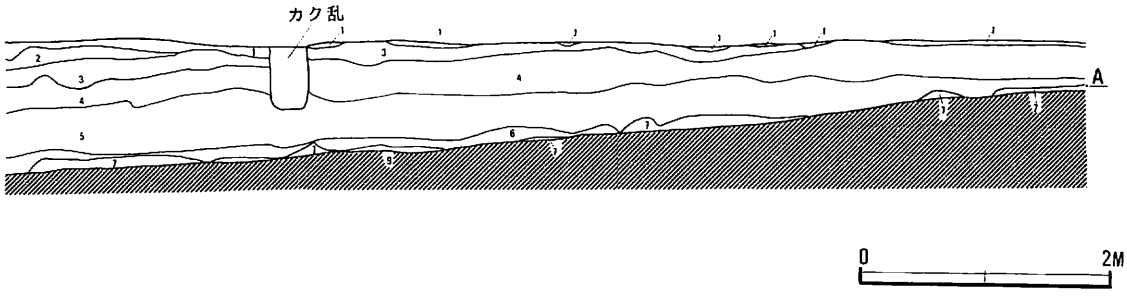
第Ⅴ層　　黒茶褐色土、粘性強く、きめが細かい。

第Ⅵ層　　黒茶褐色土、褐色味が強い。ボソボソになる粗粒、第Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ層上に乗る。

第Ⅶ層　　ハードローム、地山面

第Ⅷ層　　茶褐色土、クラックが入り、割れ目に第Ⅵ層と同質の土が充満する。砂質、硬くしまる。地山面

第Ⅸ層　　黄白色粘土、クラックが入り、割れ目に第Ⅵ層と同質の土が充満する。強粘性、地山面



3 埋没谷

江南台地を開析する谷の樹支状支谷の一つである。ほとんど埋没しているが微地形として観察できる。微地形から推定される谷頭部での谷幅は30m程度、深さは2～3m程度と考えられる。南側の主谷へ緩やかに傾斜しており、表土と混じった暗茶褐色土の帯が続く、主谷の主軸はN－118°－Wを示している。底面は川本粘土層といわれる白色粘土層で、網目状に無数の亀裂が縦横に入り黒色土、早期撚糸文土器が混入していた。

埋没土はすべて黒色土でいわゆる黒ボク状をしている。調査地点の最大厚は2.6mを測る。Ⅰ～Ⅸ層に分層したが各層は自然な堆積を示しており、層中からは多量の遺物が出土した。前述のとおり小グリットに区画（11面を掘り下げた）土層、土器型式との対比は概略以下のとおりである。

Ⅰ層－表土	称名寺式、加曽利E式、勝坂式、他混在			
Ⅱ層－1面	加曽利E式、称名寺式			縄文時代中～後期
Ⅲ層－2面	勝坂式、加曽利E式			縄文時代中期
Ⅳ層－3面	下小野式、勝坂式			
Ⅴ層－4面	関山式、黒浜式、十三菩提式、下小野式			縄文時代前～中期
5面	子母口式、野島式			
Ⅵ層 6面	無文土器、稲荷台式	条痕文系土器群		
7面	稲荷台、夏島式			
8面		撚糸文系土器群		縄文時代早期
9面				
Ⅷ層－10面	夏島式			
Ⅸ層－11面	井草式			

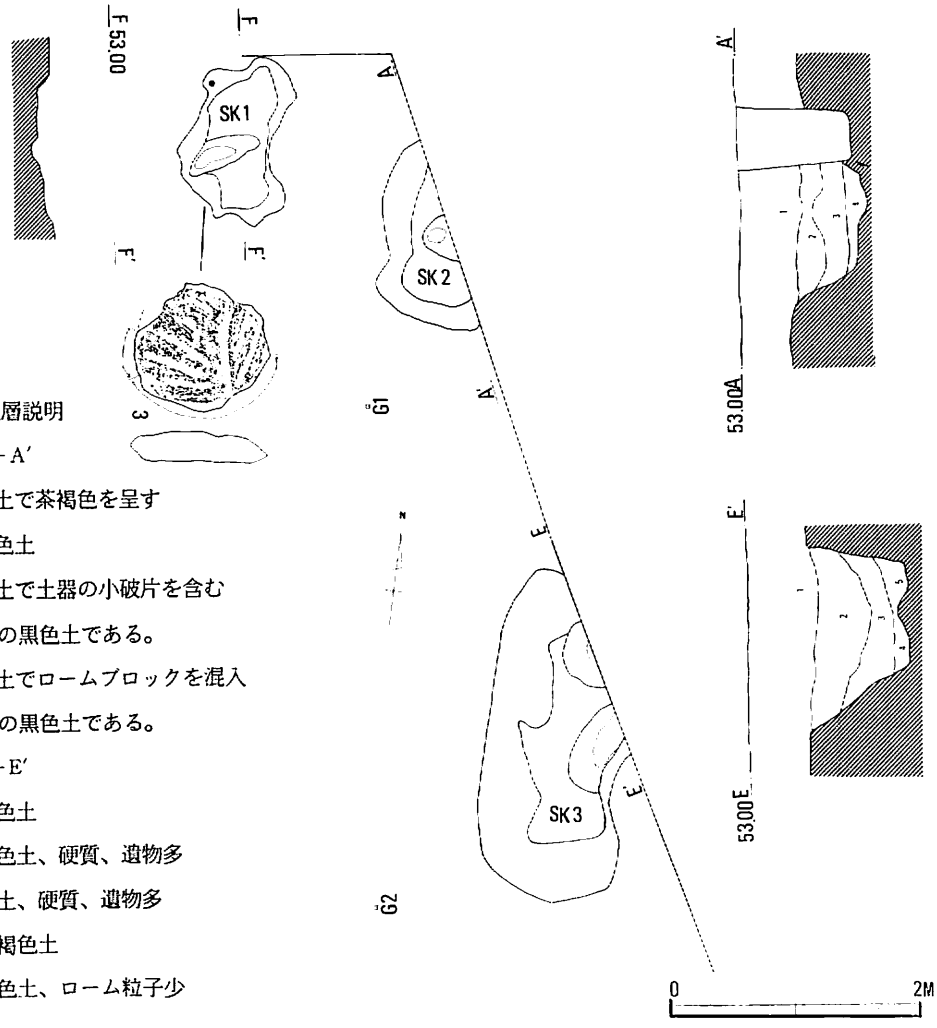
SD1
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
A
A'
B
B'
C
C'
0
2M

第58図　上前原　土壙群

4 土　壙

SK1は長さ1.1、幅62cmを測る5～10cmの浅い掘方を残す。形態は不整形だが、ほぼ楕円形をしている。底面に接して土製円盤（91図3）が出土している。縄文中期後半のものだろう。SK2は区外に伸びるため一部分だけ発掘した。平面形は楕円形か。一部にカク乱が入っている。遺物の出土は少ないが縄文時代中期であろう。SK3は一部区外へ伸びるが長さ2.5×幅1.2、深さ65cmの規模を測る。縄文土器片が多く出土しており315の把手などが出土している。SK1～SK3の土壙はSJ1の周囲に位置するが、SJ1との時期的な関係については不明である。SK4～SK19の土壙群は1mを超える規模を持つ土壙や中小規模の土壙がC－4からF4区に集中して検出された。

第2層を除去した後に検出され、ローム層を切り込んで掘削されている。遺物は土器等が混入したものがわずかに出土するのみで、ほとんど遺物は出土していない。縄文時代中期の遺構と考えられるだろう。



土層説明

SK2　A－A′

1. 耕作土で茶褐色を呈す
2. 黒褐色土
3. 黒色土で土器の小破片を含む
   硬質の黒色土である。
4. 黒色土でロームブロックを混入
   軟質の黒色土である。

SK3　E－E′

1. 茶褐色土
2. 黒褐色土、硬質、遺物多
3. 黒色土、硬質、遺物多
4. 暗茶褐色土
5. 茶褐色土、ローム粒子少

第57図　上前原1、2、3号土壙

5 一括出土の遺物

1） 縄文土器

〔概　要〕

上前原遺跡より出土した縄文土器の総点数は16,264点余である。土器はすべて小破片であり接合した土器は少ないが、同一個体と思われる土器も多数含んでいる。出土状態は耕作土から、埋没谷底面までの包含層中より98％以上の土器が出土している。時期は、縄文時代早期より後期までの長期間に渡り、各型式の多少は見られるがほぼ継続して出土している。

ややまとまった数が出土している土器は、早期撚糸文系土器群 120片、中期初頭小野式土器108片であった。土器群の主体を占めるのは、勝坂式・加曽利Ｅ式土器である。

本文では、早期から中期初頭までは図化できるすべての土器を掲げたが、これ以降の勝坂式～加曽利Ｅ式土器は同一類似文様の小破片を除き、土器群の実態を損なわない程度まで選別した。これらの土器を説明するについて大まかな土器群と小類別を次のように行った。

第１群　　早期撚糸文系土器群
第２群　　無文土器
第３群　　条痕文系土器群
第４群　　前期前半の土器
第５群　　前期後半～末の土器
第６群　　中期初頭の土器
第７群　　勝坂式・阿玉式土器
第８群　　加曽利Ｅ式土器
第９群　　称名寺式土器
第10群　　堀ノ内式土器

第１群土器 （1～75）

早期撚糸文系土器群を一括。すべて小破片、埋没谷底面から集中して出土する。接合出来た例は、土器のもろさによる折損のためで、他は接合不可能であった。以下A.B.Cに類別した。

Ａ類 （1）

角頭に肥厚した口縁上面と外面に同一の原体LRによる斜縄文を施している。口縁下に施文しない空白を置き、斜縄文を施文している。井草Ⅱ式に比定されよう。

Ｂ類 （2. 3. 6. 7. 8. 12）

口縁直下より、密に縄文が施される。2.　3.　7.　8.はRLを、12.は、LRを施している。7はやや風化が進み明瞭でない。夏島式に比定されよう。

Ｃ類 （4. 5. 9～11. 13～18. 60. 62. 68～71, 73～75）

条間のゆるい撚糸文が口縁部下より施文される。口縁が丸味をもち肥厚するものと、外傾する平

面をもつもの、丸味をもって尖るもの等がある。焼成は良好だが黄茶褐色系をしている。稲荷台式に比定されよう。11は口縁下に凹面があり、稲荷原式といわれるものに類似している。

胴部破片の中で（19～59. 61. 64～67. 72. 74）は上にA.B類に属するものであろう。

22はLRの撚糸文が施文される底部付近の破片である。20はRL原体の斜縄文が施文されるにともない原体は36では1mm前後、細いものは44. 50 の1mm以下がある。これらの土器片は、焼成良好堅緻で赤褐色系をしており井草～夏島期に当てることができよう。

第2群土器 （76～88）

無文土器である。口縁部が2片あるが肥厚していない。撚糸文土器群に伴うものであろう。

第3群土器

早期にかかる貝殻条痕文系土器群をまとめ、以下に類別した。

A類 （89～93）

土器面にヘラ状の工具による刺突が施されるもの。赤褐色味を帯び、片岩質の粒を含む胎土である。本例のような土器は、東京都小山田遺跡群（文77）、神奈川県受地台山遺跡（文78）等で検出があり、一応本報告でも子母口式としたい。

B類 （137～139. 142）

絡条体圧痕の施される土器である。137. 138. 142. は繊維の含有が多く、やや脆弱である。本類は子母口式に比定されよう。

C類 （149～158）

細隆起線と沈線で幾何学的モチーフを施す一群である。150は、口縁部で口唇には絡条体圧痕をキザミ状に配し、細隆起線、沈線と子母口式の流れを汲んでいる。156は、屈曲部に当り細隆起線と沈線が施されている。本類は、野島式に比定されよう。

D類 （94～96）

器面に擦痕の施される土器、胎土は精良で繊維の含有量は少ない。野島式以降に位置しよう。

第4群土器

前期前半にかかる土器で、きわめて少量であるが、以下の2類に分類した。この時期の遺跡・遺物は江南地方では少ないが、川本町舟山遺跡にまとまった出土例がある。

A類 （136. 143～146）

144はLRの4本の組紐が施文される。143. 145は、L<½で一方の撚りが元っている。146は、LR

に1組のrを巻きつけている。関山式に当てられよう。

B類（140. 141. 147. 148）

繊維を多量に含み、焼成もやや不良。縄文が施されるがあまり明瞭でない。
黒浜式に当てられよう。

C類（160. 161. 164）

沈線の施された土器である。諸磯式に比定されようか。161は剥離面の接合部にキザミが認められる。

第5群土器

前期後半から末葉と考えられる土器である。この時期は当地方だけでなく、類例は少ないが、以下の各類に類別した。

A類（159. 162. 163. 165）

162を除いて同一個体と考えられるが、平底の底部から直立し、頸部付近で屈曲する深鉢と考えられる。

B類（100～135）

100. 101は、口縁が肥厚し、口辺は平面を呈し、口唇外面より撚糸文の圧痕を施し、以下体部に撚糸文を施す。早期にかかる撚糸文系土器群と相似しているが、胎土・焼成・出土層位とも異なっており、早期の所産とは考えられない。これらの撚糸文土器は、今村啓爾氏の云うように中期末葉の十三菩提式土器に伴うものと見て良いと思われる（文79）。125. 126は、撚糸文というより、条痕的でさえある。

C類（166）

十三菩提式の特徴とされる要素をそなえた精製の土器である。波状の口縁をなし、口頸部から体部へ屈曲し、沈線で区分する。口縁には渦巻状に隆帯を配し、ソーメン状の粘土紐を貼り付け細かなキザミ目を付している。そしてこのソーメン状の区画の中には同様に粘土紐をX字状に連続させている。体部には、LR斜縄文上にソーメン状の粘土紐を2本一対で垂下させ、文様帯を区分している。

第6群土器

中期初頭の土器群

A類（167）

口縁部の小破片であるが、五領ヶ台式の特徴を良くそなえている。沈線文と三角刻文が施文され渦巻状の文様を配している。また渦巻状の凸起が口唇内面に施されている。

B類 (168～204)

羽状縄文、及びS字状結節文の施される土器である。168は、口辺部であり横位に沈線を配した後に羽状縄文、S字状結節文を垂下させている。189、191、193、198、199、202などは同様に垂下する文様を施している。他は、横位に羽状縄文とS字状結節文を施している。200～204は胎土等の近似から本類に含めた、本類は下小野式に比定されよう。

第7群土器

中期前半の土器群

237～291隆帯により立体的文様を描き、爪形文や沈線文を充填する。勝坂式293～337、340、341口縁部に隆帯等で、渦巻状の文様を描く。

338は、脚部と思われる破片、339は、焼成粘土塊、343～362は、鉢型土器の破片である。

363～408、410～423、地文に撚糸文や縄文を施し、隆帯による口縁部文様を持つ土器片。

409～415、424～466、地文に撚糸文や縄文を施し、隆帯による胴部文様を持つ土器。

第8群土器

中期後半の土器群

467～495、地文に撚糸文や縄文を施し、沈線による文様を持つ土器。

496～507、531～545、558、559、571、いわゆる連弧文の施される土器。

544、548～553、565、575、578～584、586、660、地文に櫛目を施文するもの。

589～618、654、677、680、684、地文に縄文の施される土器。

619～653、655～659、661～676、678、679、681～684、685、地文に撚糸文の施される土器。

686～754、無文部分の土器片。755～760、口縁部に円形刺突をするもの。

768、鋭く深い沈線の施される深鉢型キャリパ土器。769～775、有孔鍔付土器片。

341、776～779、剝離面に調整、地文の残る土器片。341、776～789は縄文が、779には沈線が観察できる。780～837、底部の一括。

820～826は底面に網代底を残す。821が2本越え、1本潜り、1本送りの他は1本越え、1本潜り1本送りである。827、828、831はミニュチア土器である。

第9群土器

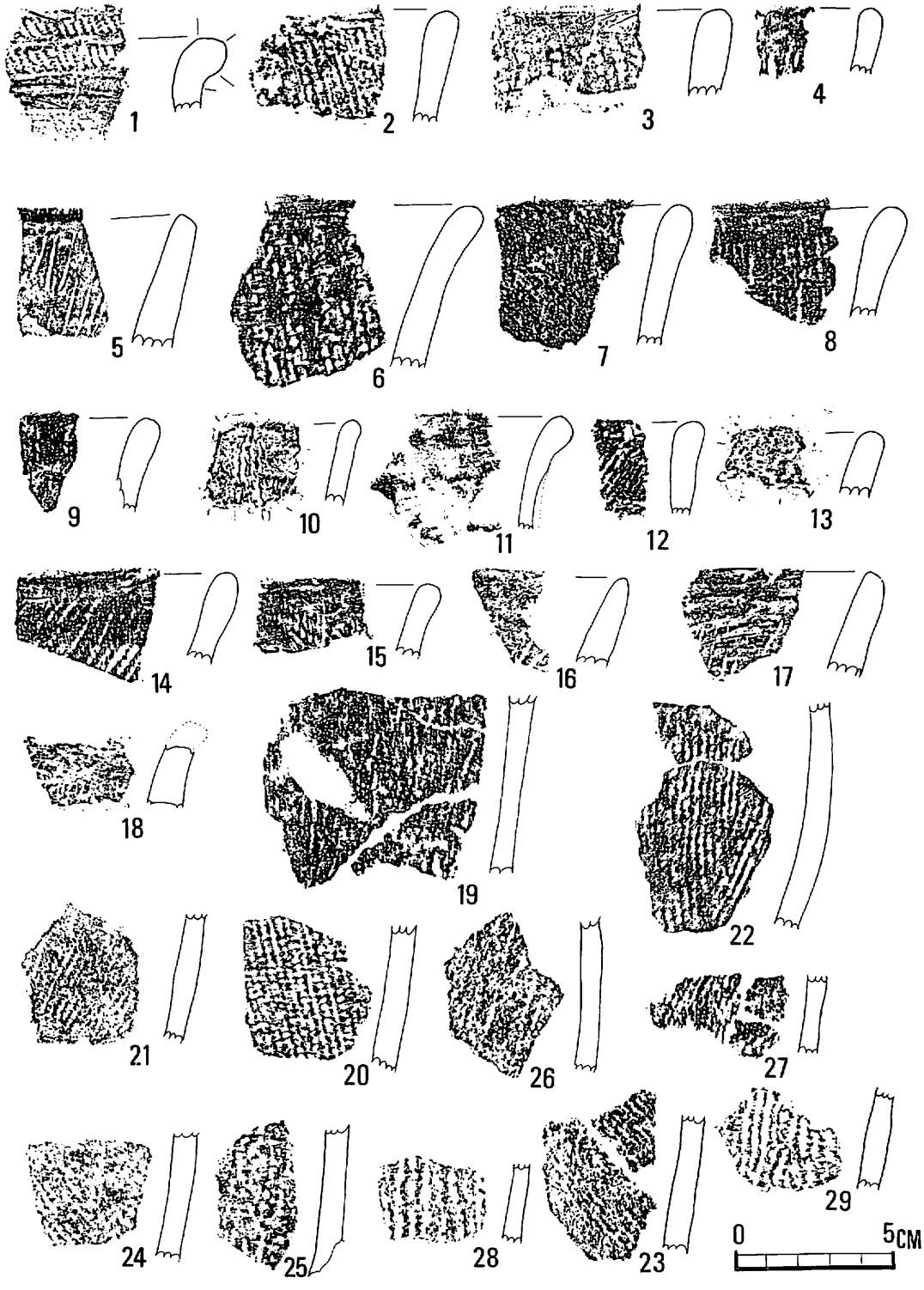
後期初頭

839～854、856、858、縄文を抹消し、T字文・スペード文を描く。称名寺式土器とされるもの。

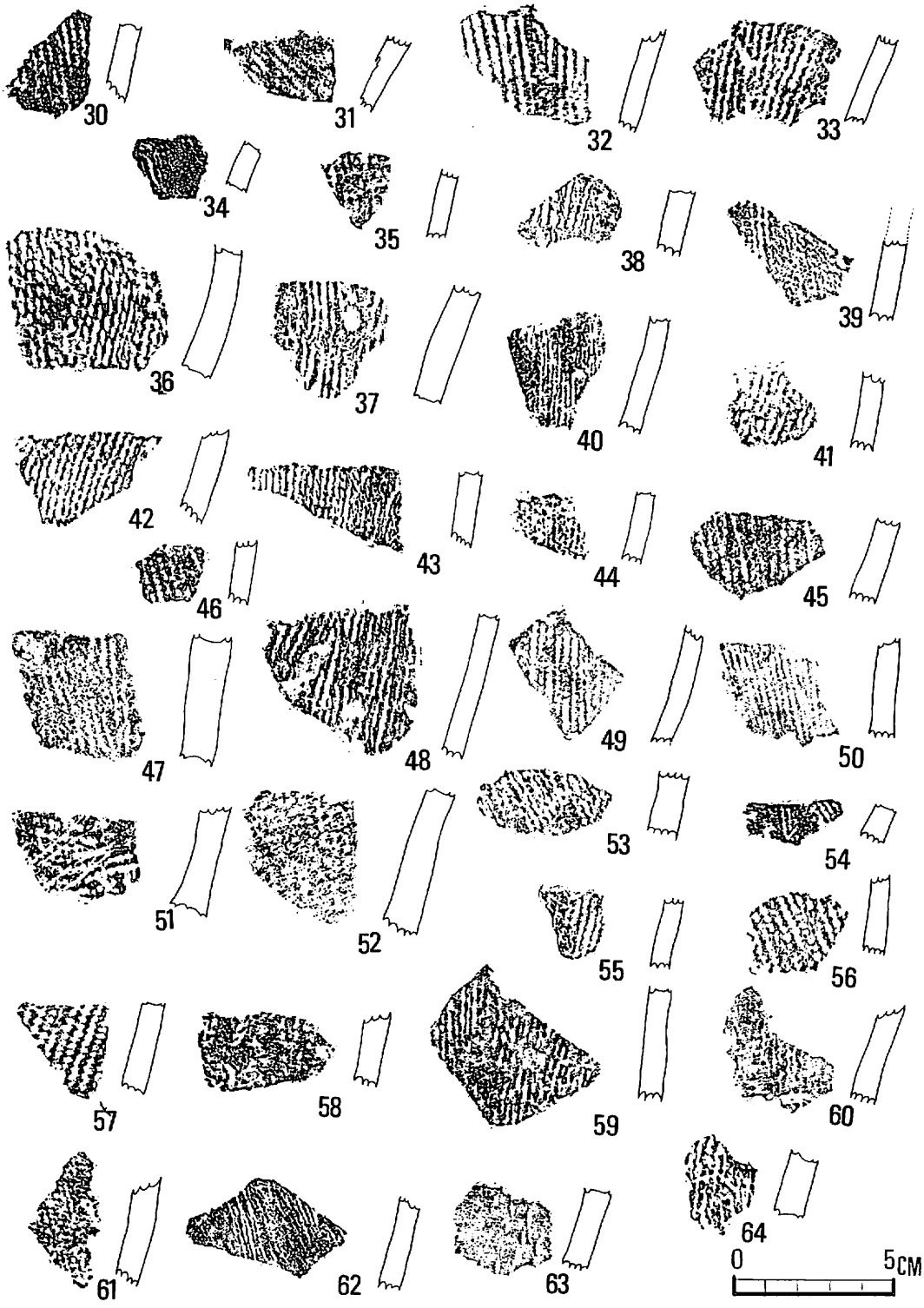
第10群土器

後期中半

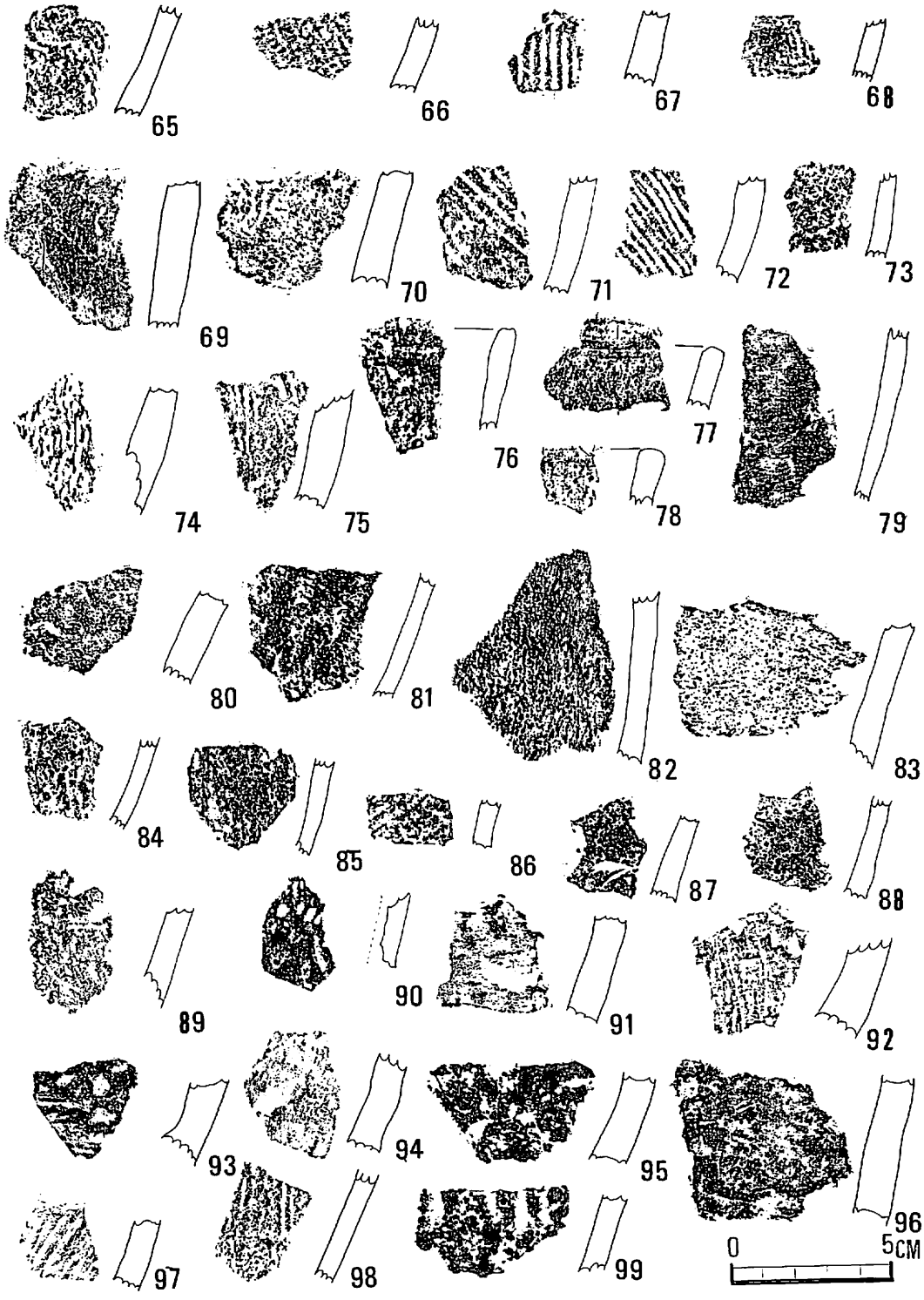
855、859～864、堀ノ内式とされるもの。



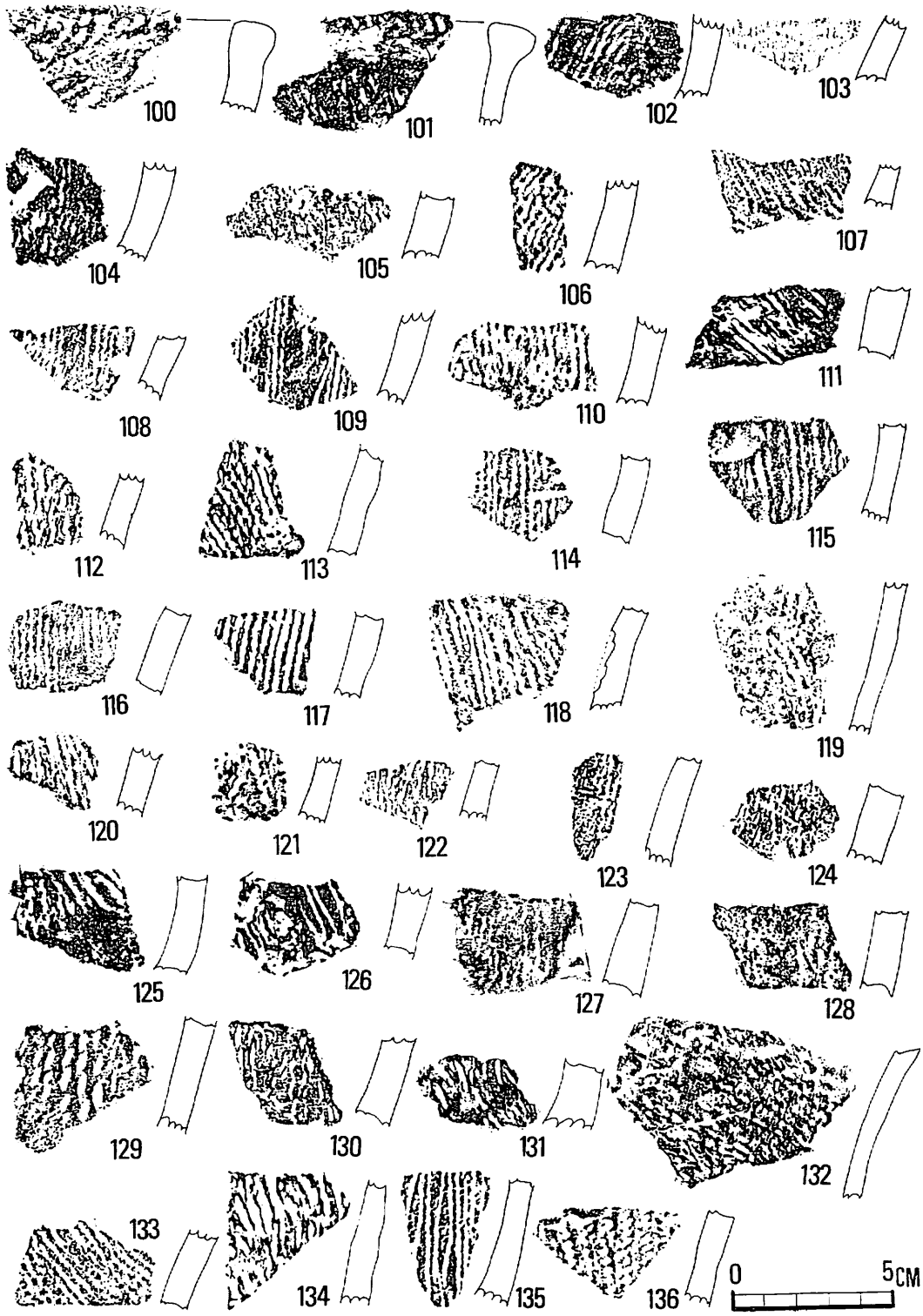
第59図　上前原　出土縄文土器



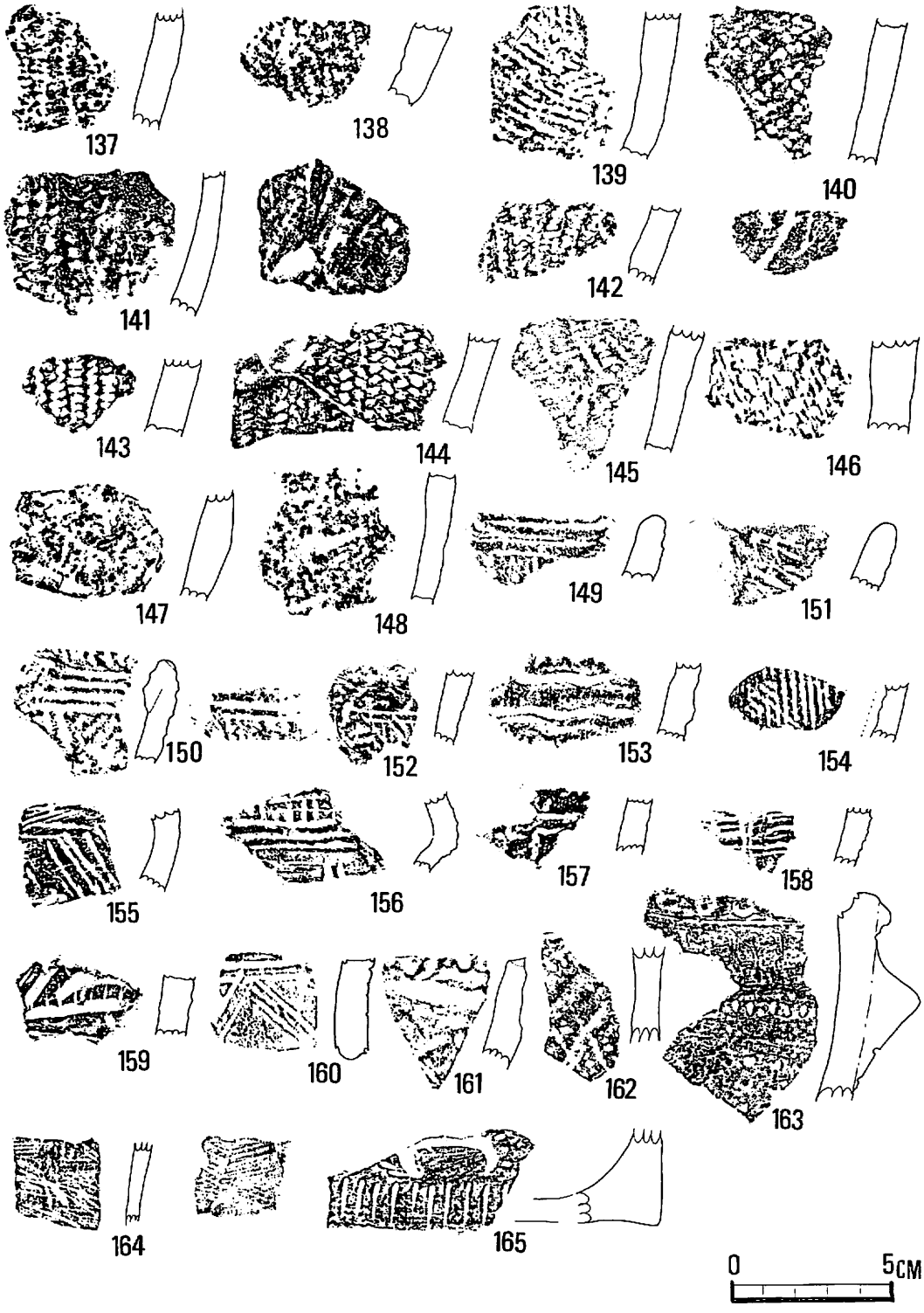
第60図　上前原　出土縄文土器



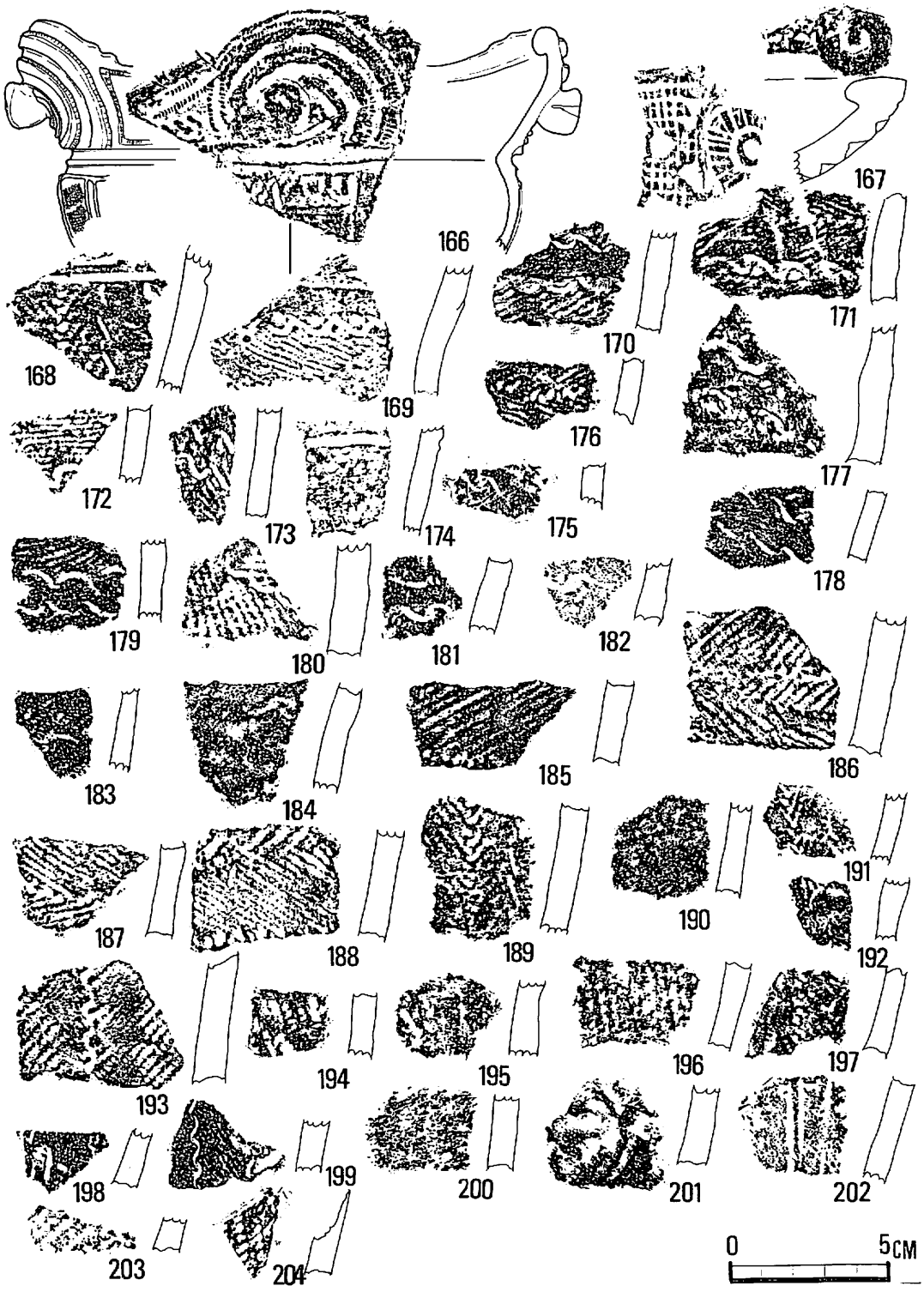
第61図　上前原　出土縄文土器



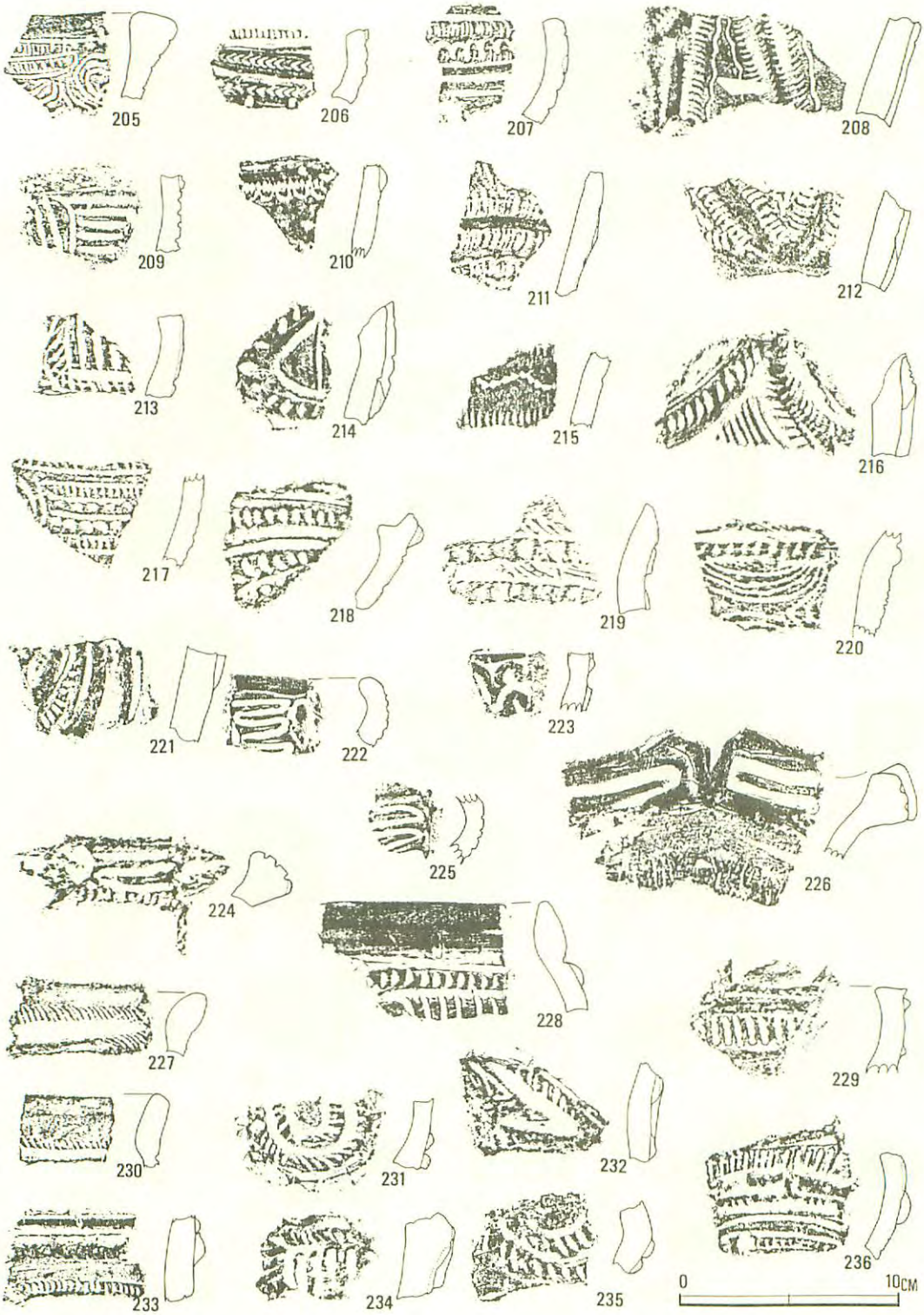
第62図　上前原　出土縄文土器



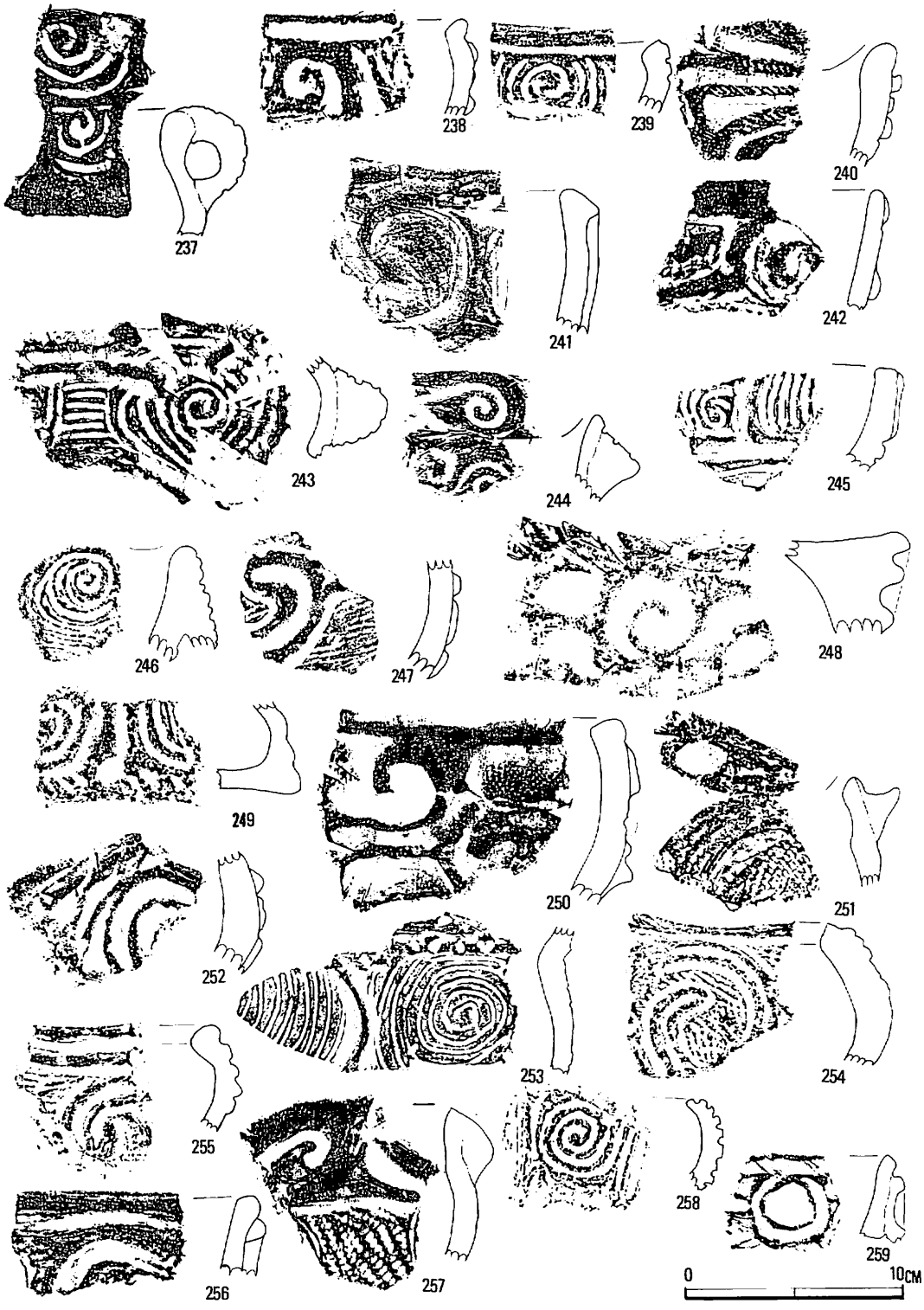
第63図　上前原　出土縄文土器



第64図　上前原　出土縄文土器

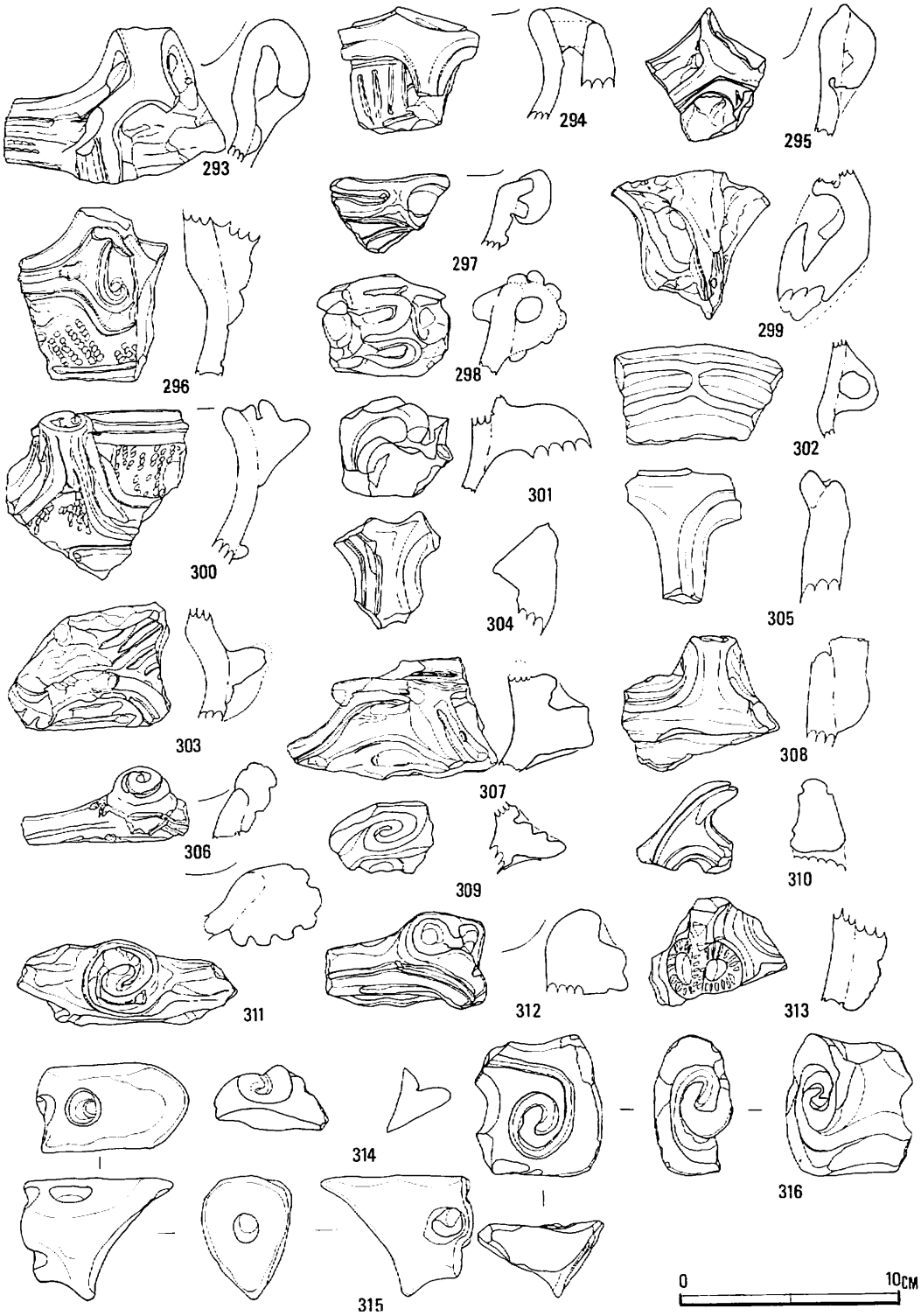


第65図　上前原　出土縄文土器

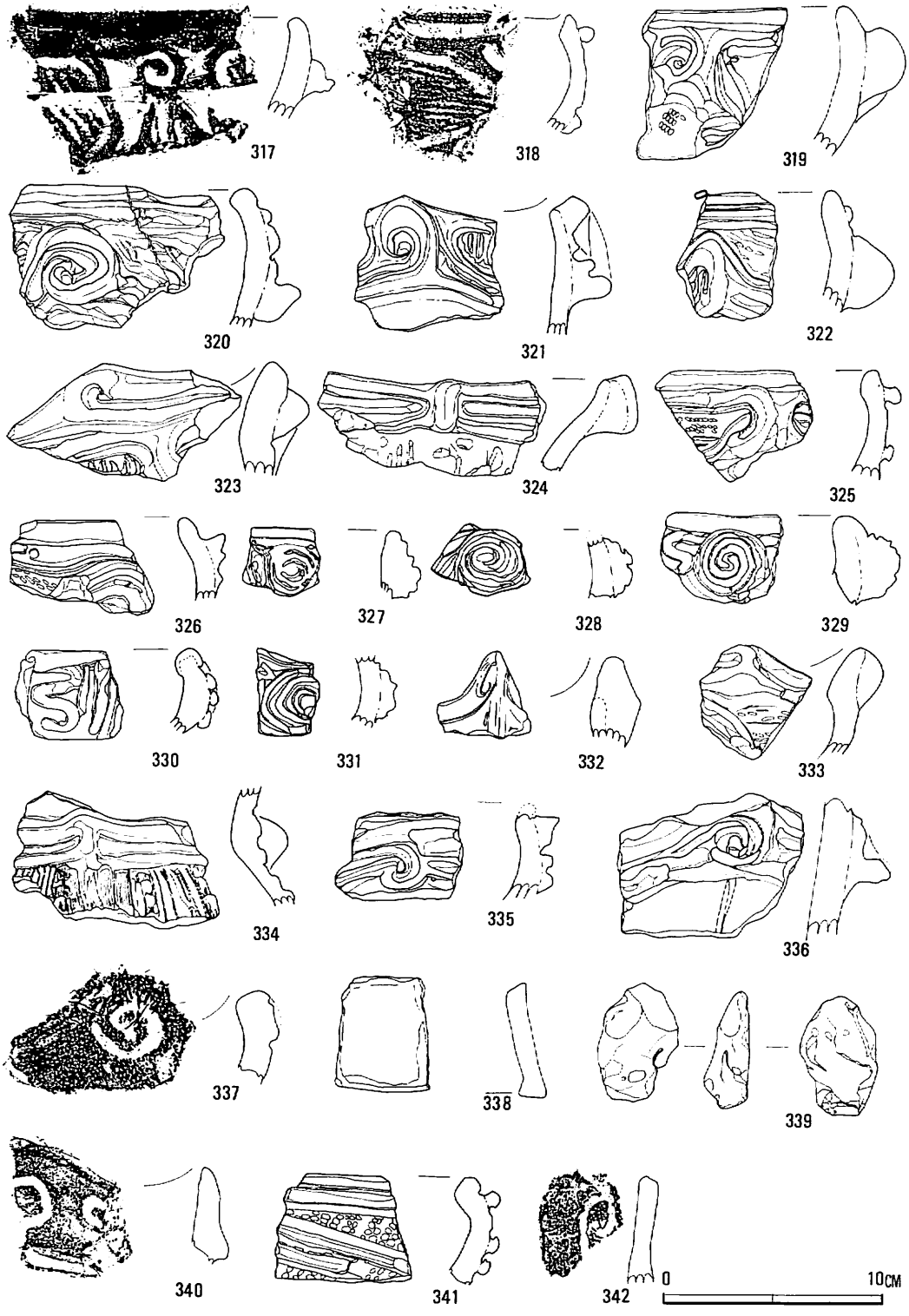


第66図　上前原　出土縄文土器

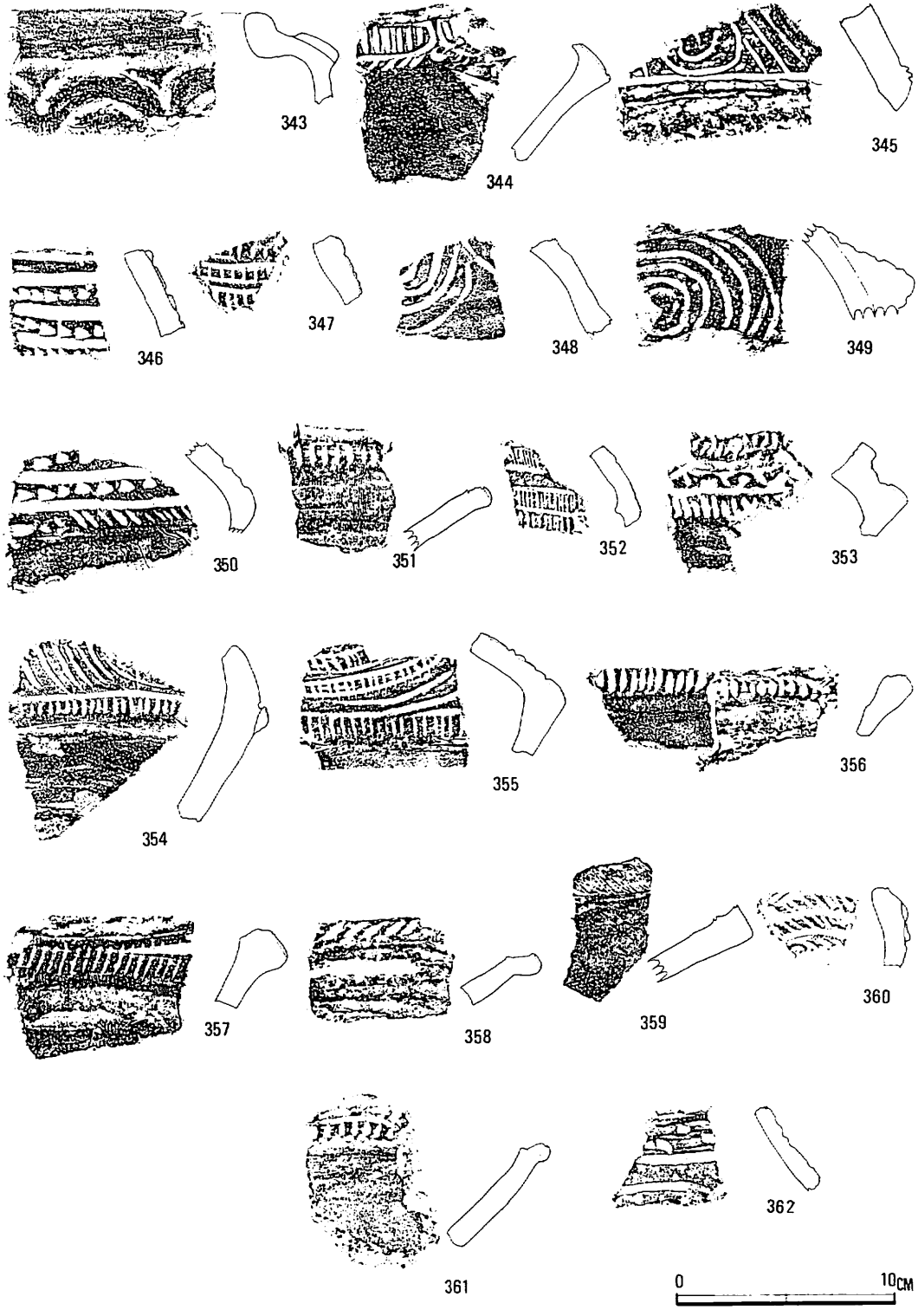
第67図　上前原　出土縄文土器



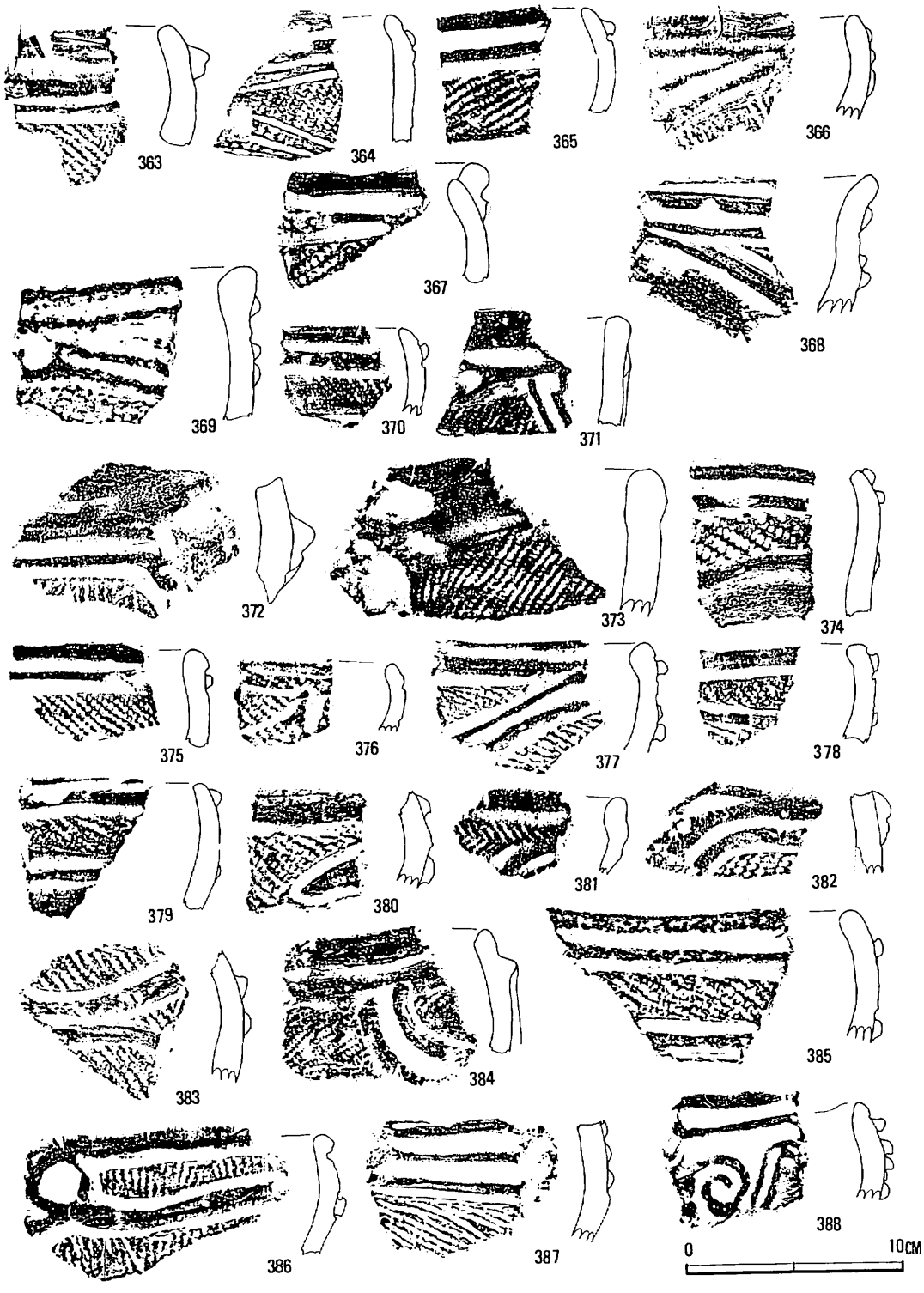
第68図　上前原　出土縄文土器



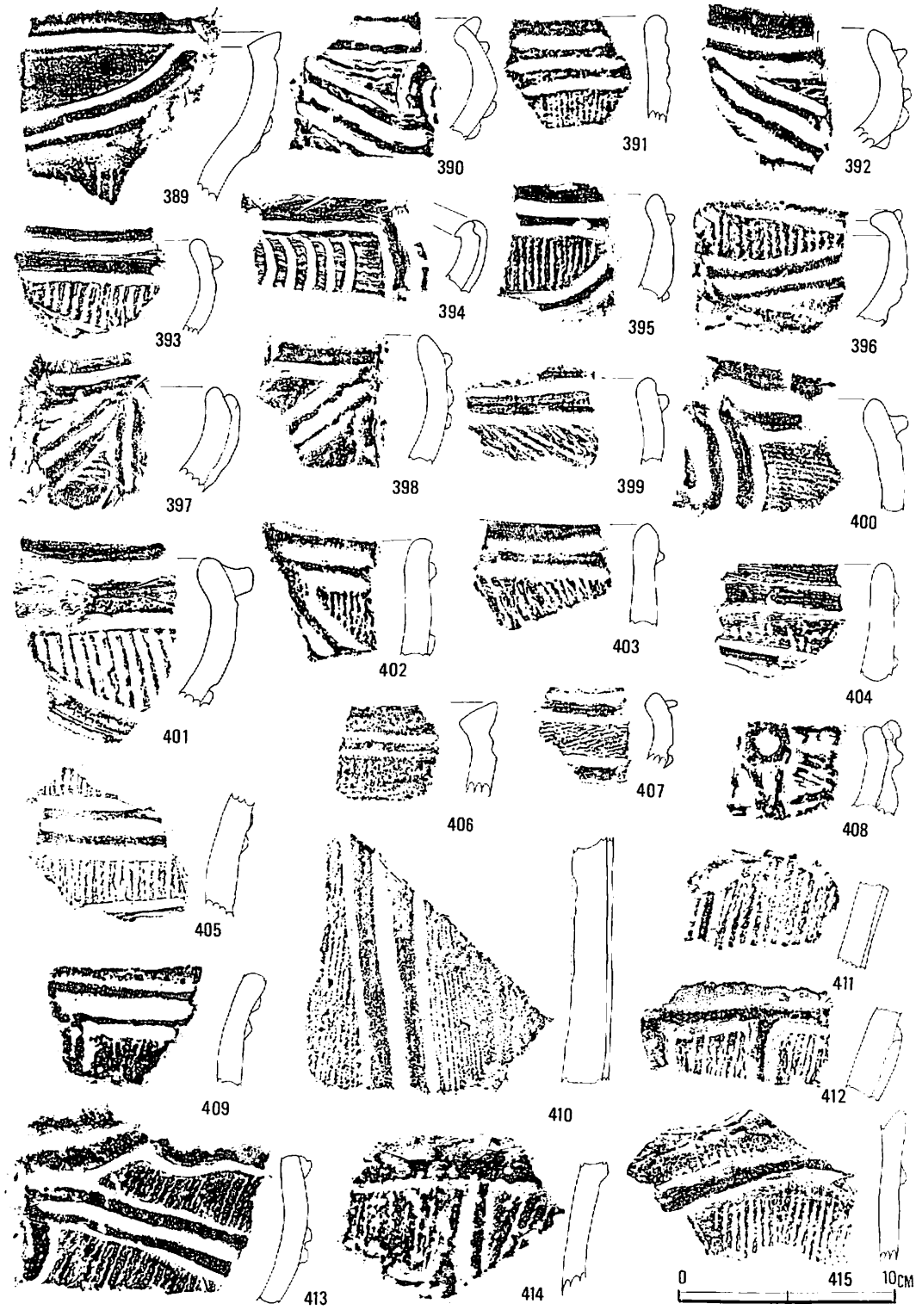
第69図　上前原　出土縄文土器



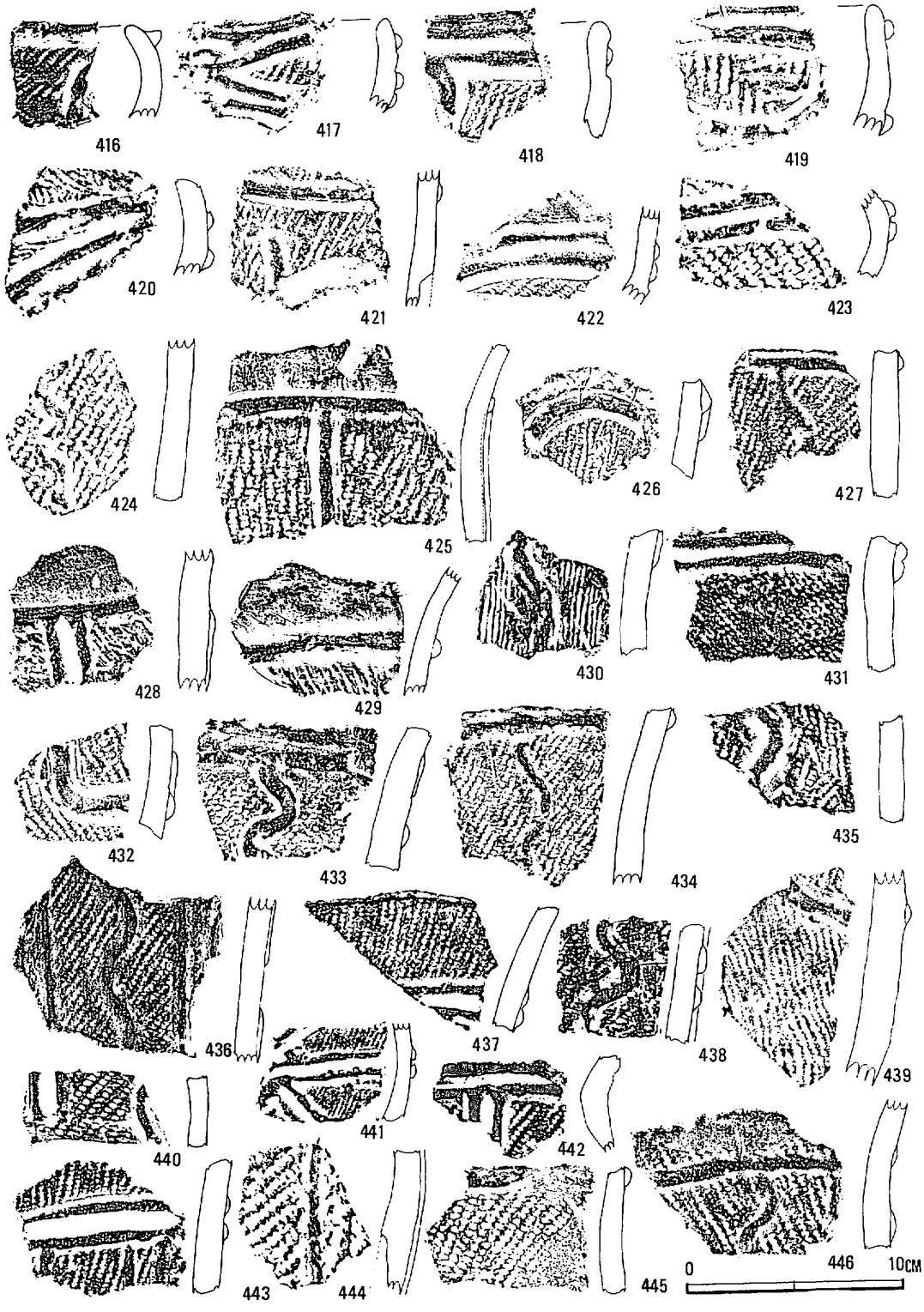
第70図　上前原　出土縄文土器



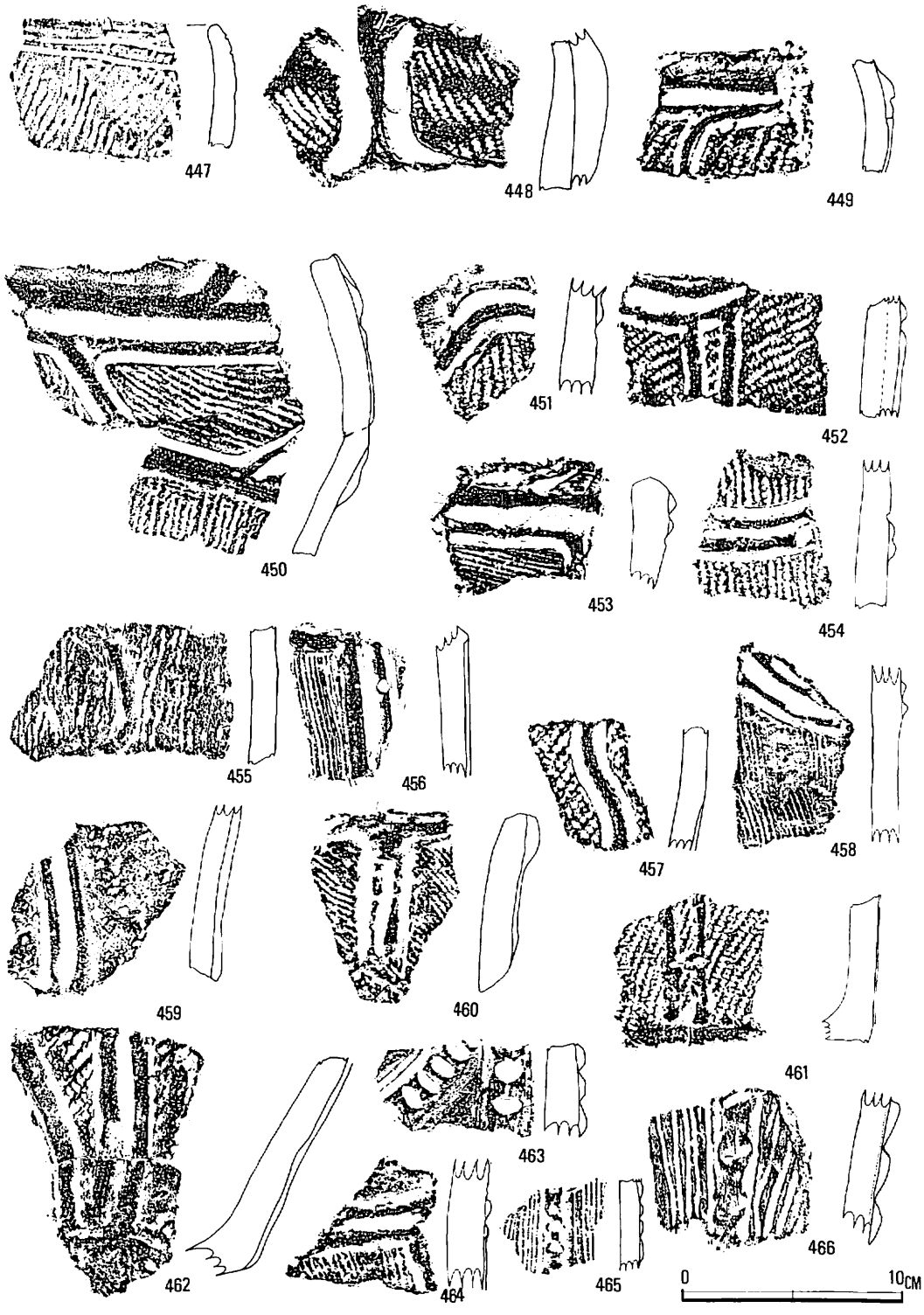
第71図　上前原　出土縄文土器



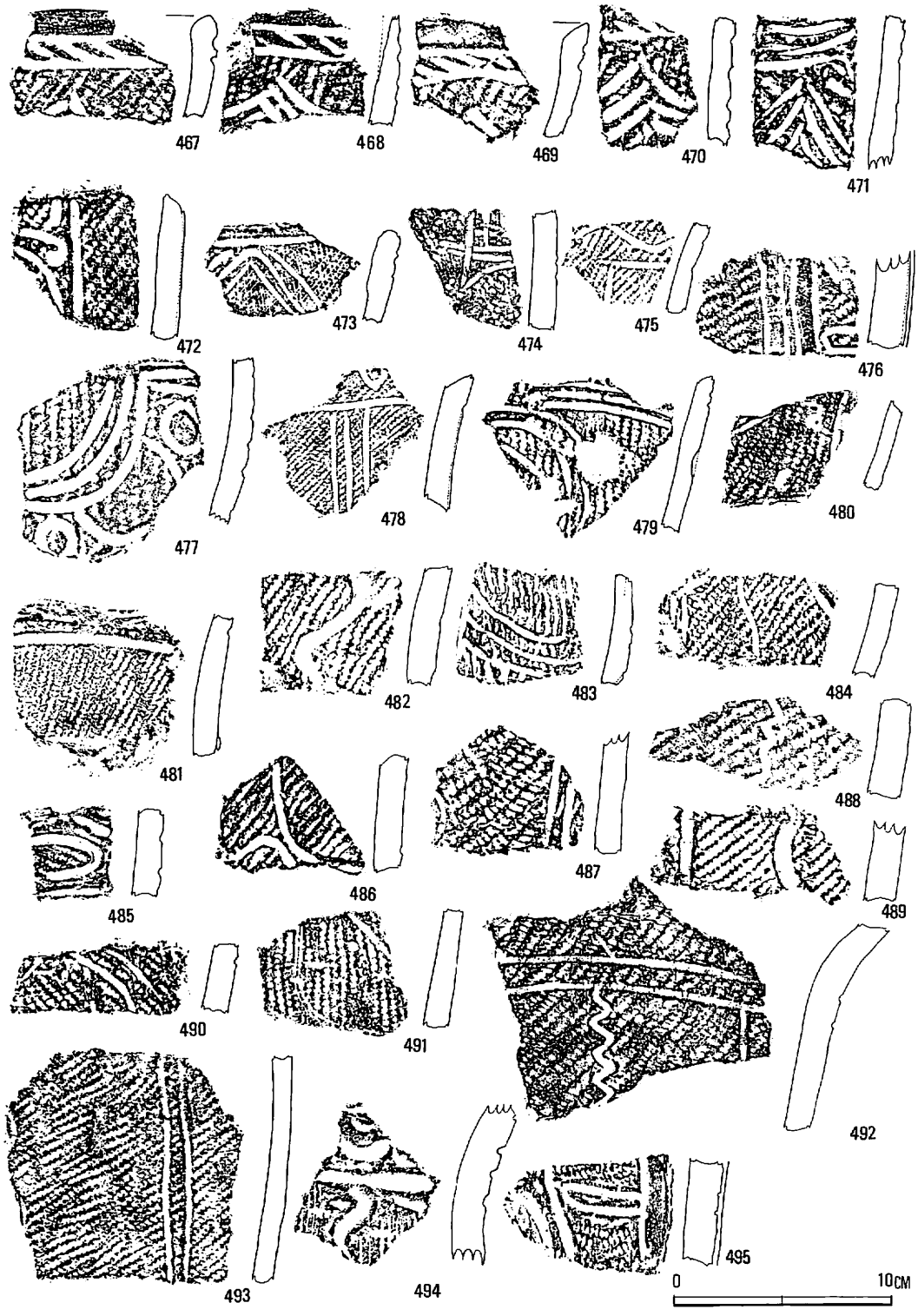
第72図　上前原　出土縄文土器



第73図　上前原　出土縄文土器

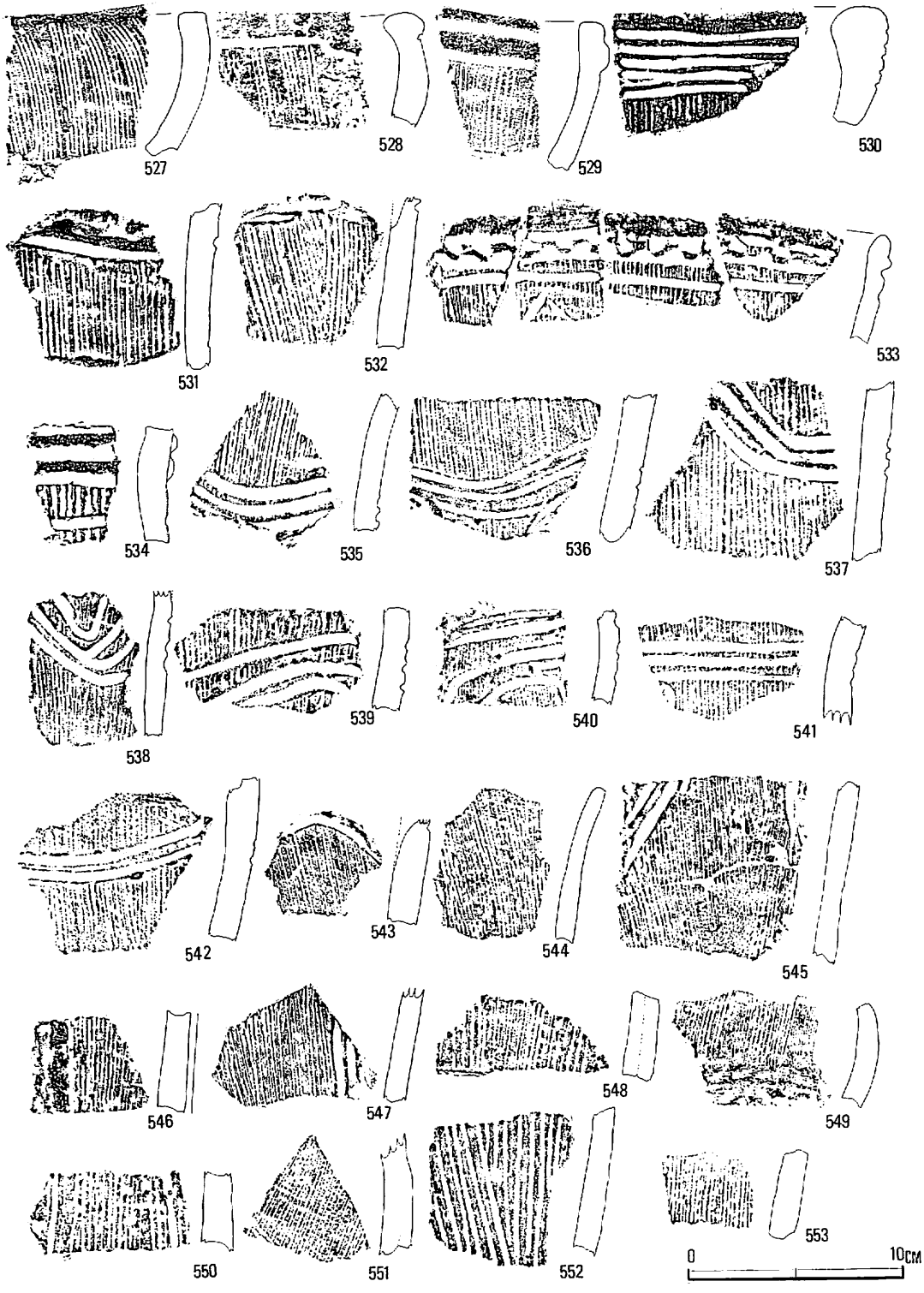


第74図　上前原　出土縄文土器

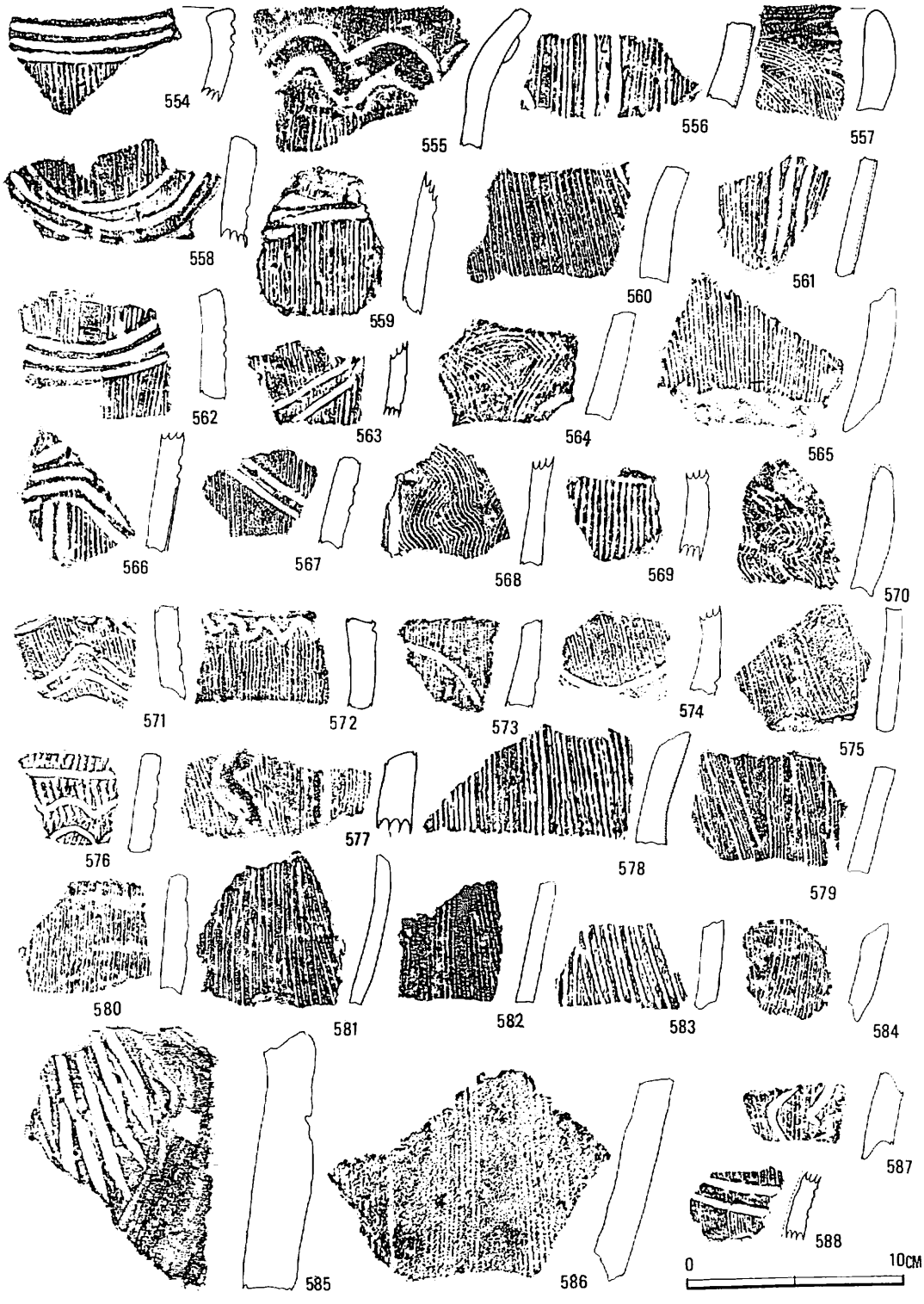


第75図　上前原　出土縄文土器

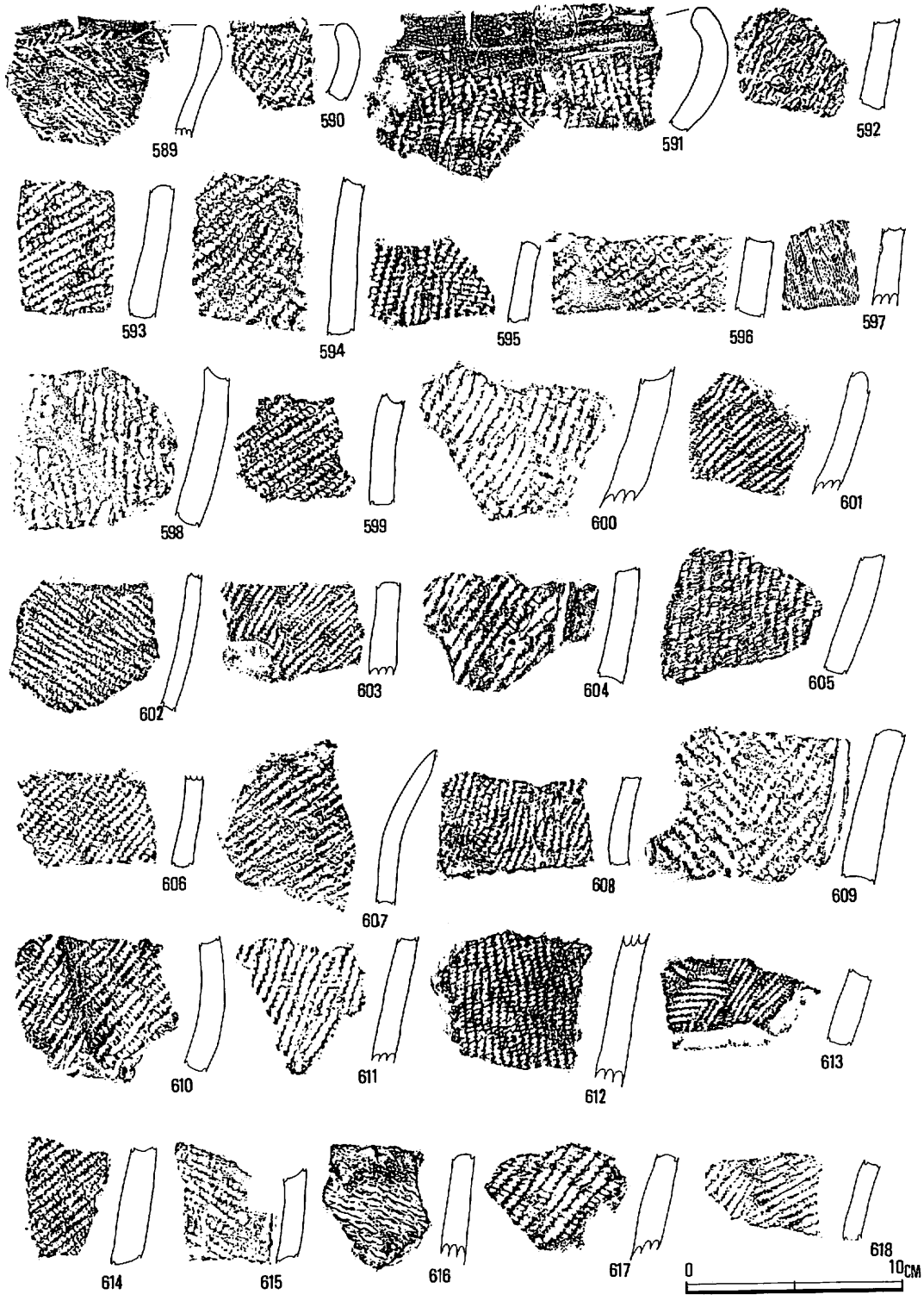
第76図　上前原　出土縄文土器



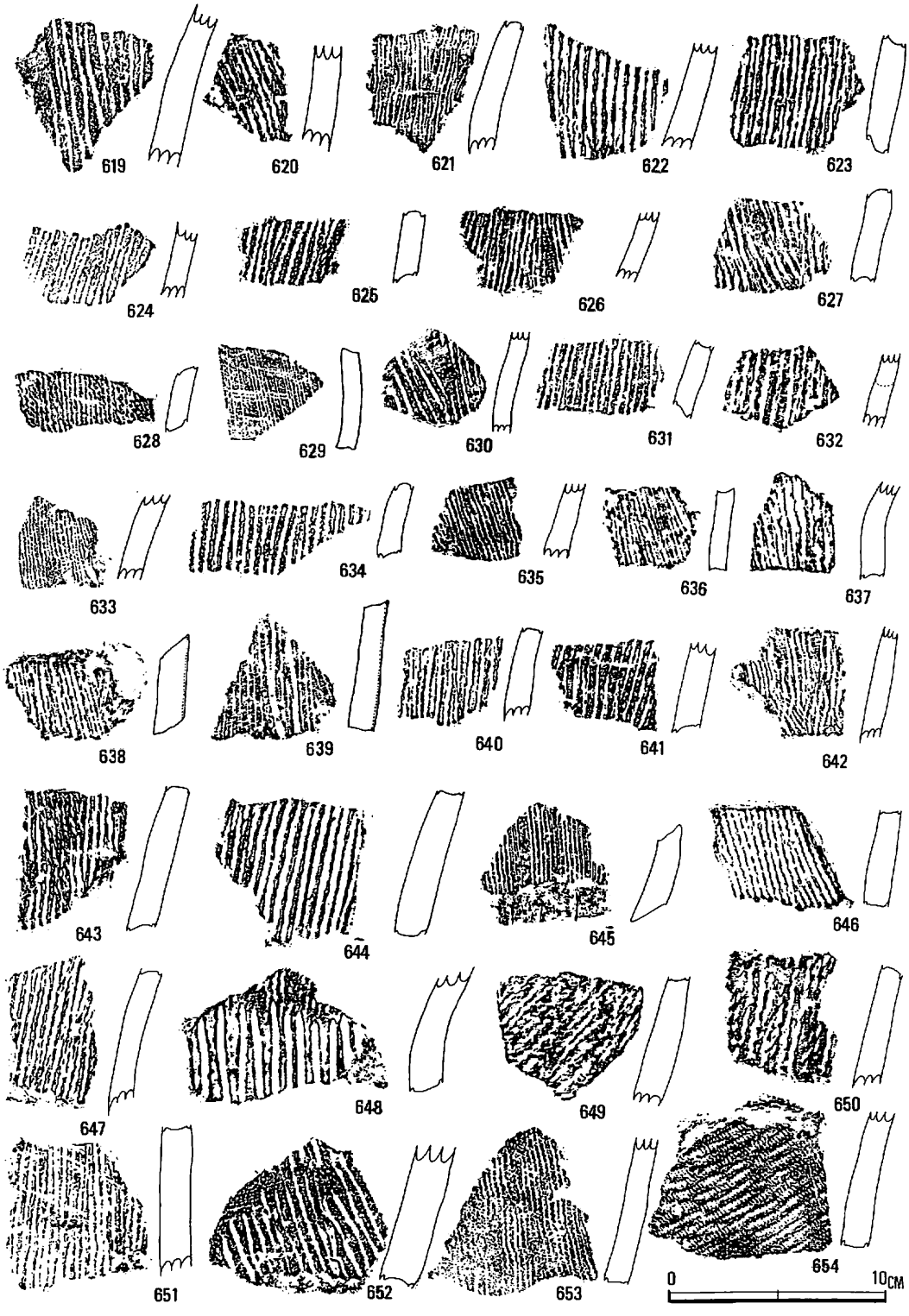
第77図　上前原　出土縄文土器



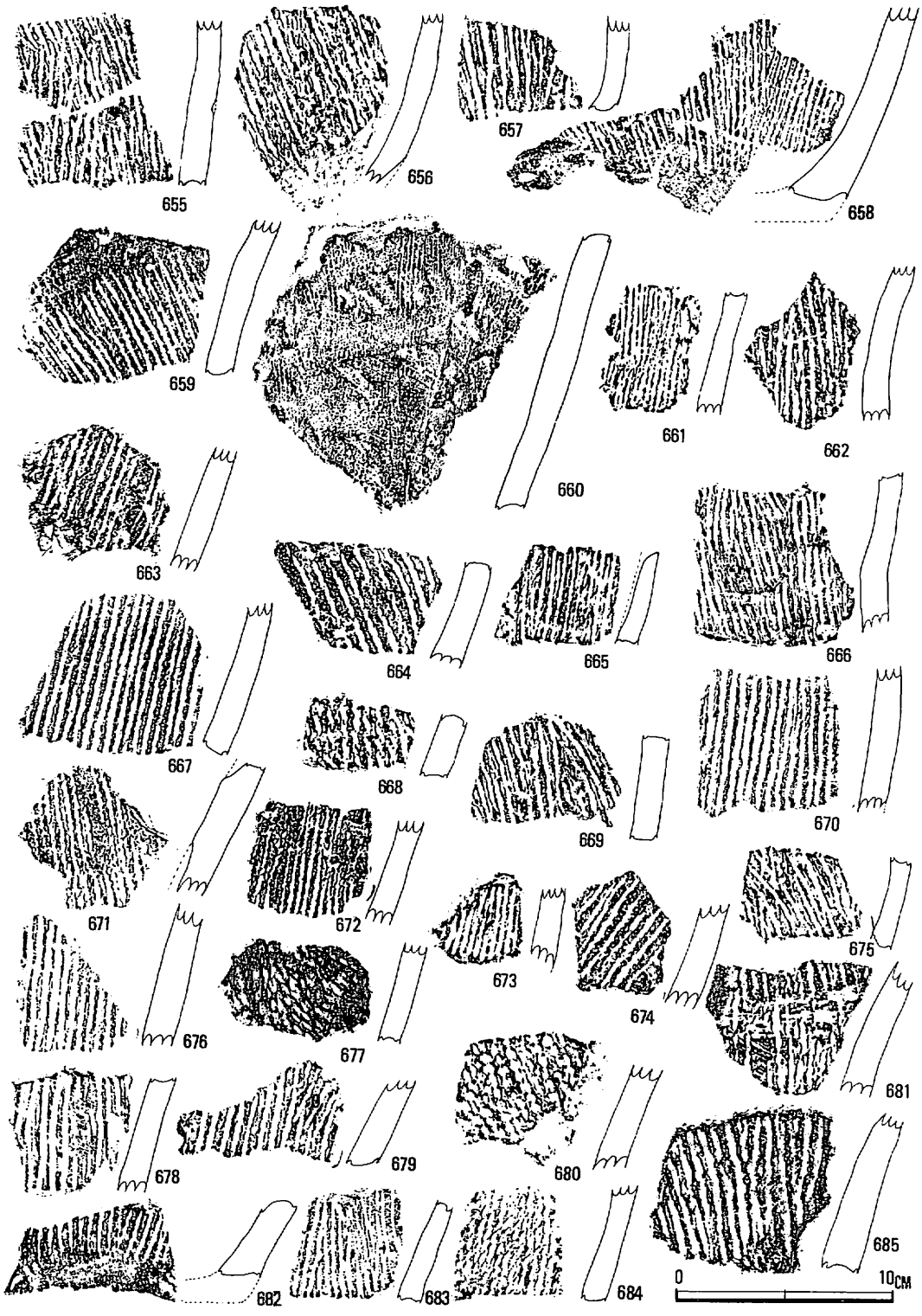
第78図　上前原　出土縄文土器



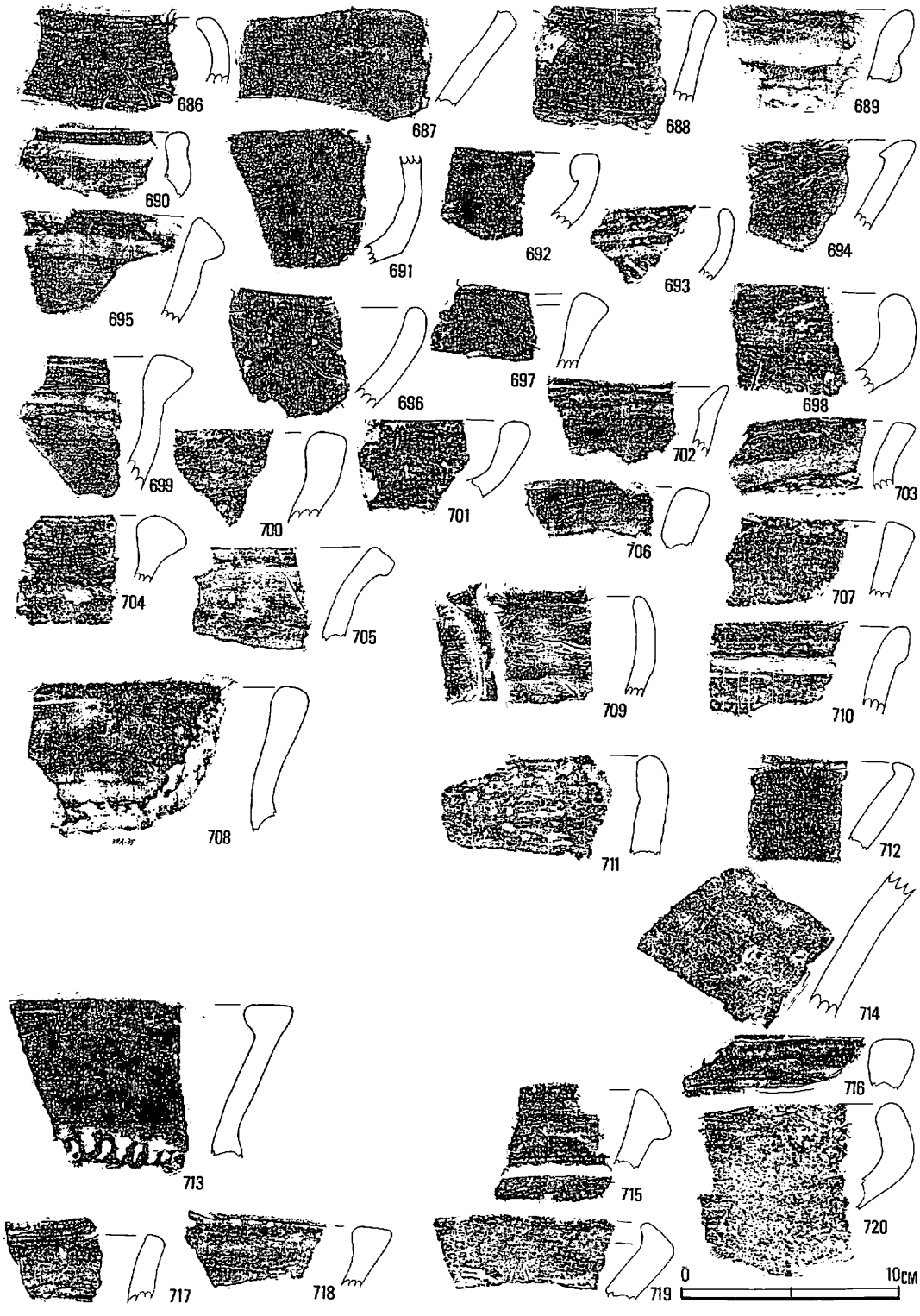
第79図　上前原　出土縄文土器



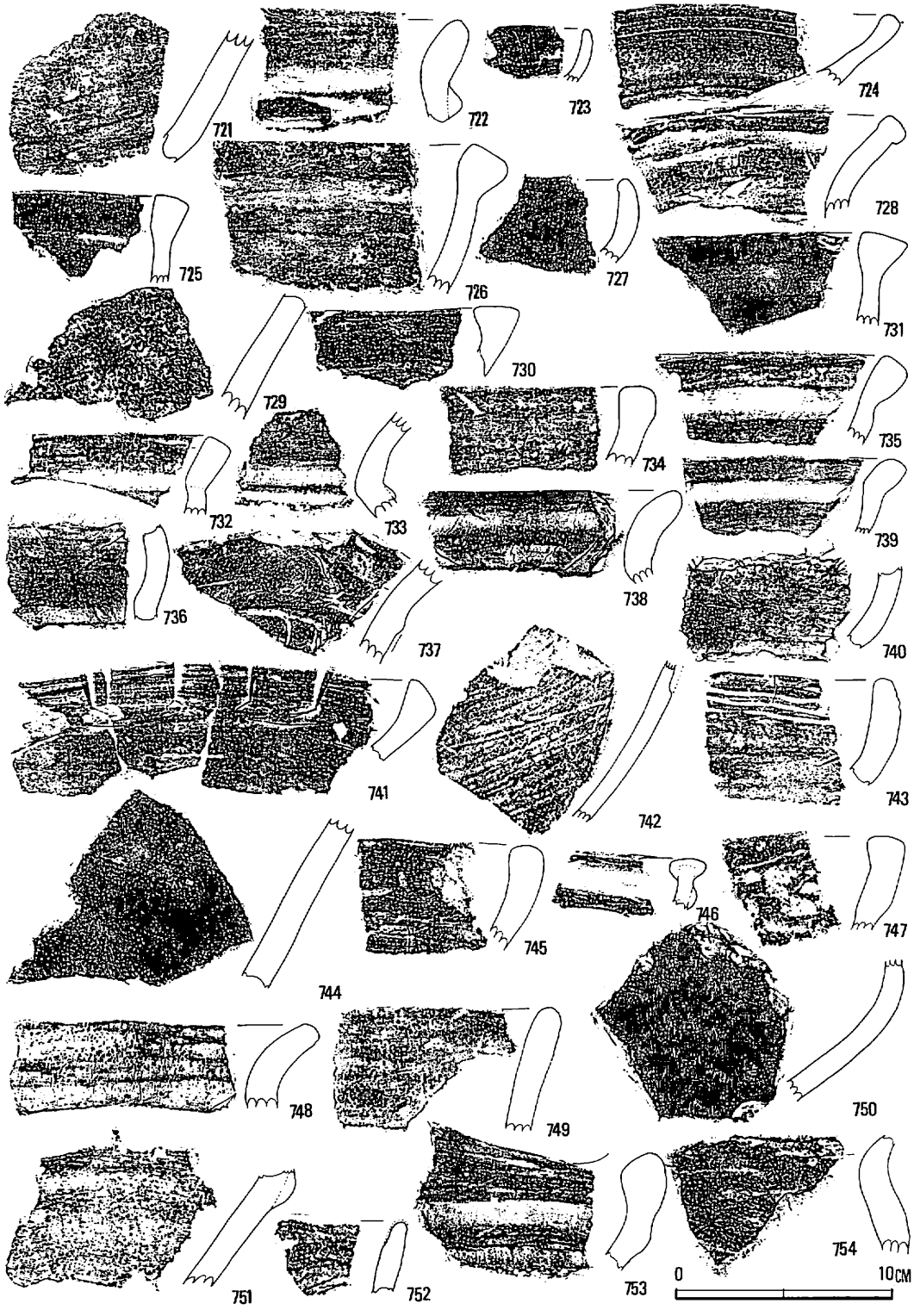
第80図　上前原　出土縄文土器



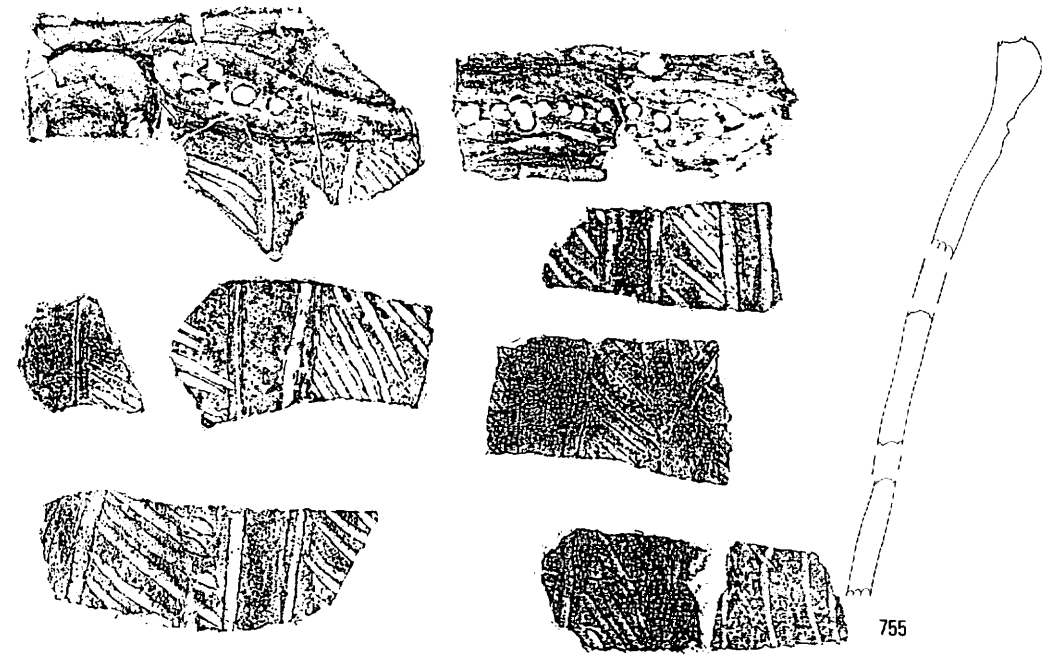
第81図　上前原　出土縄文土器

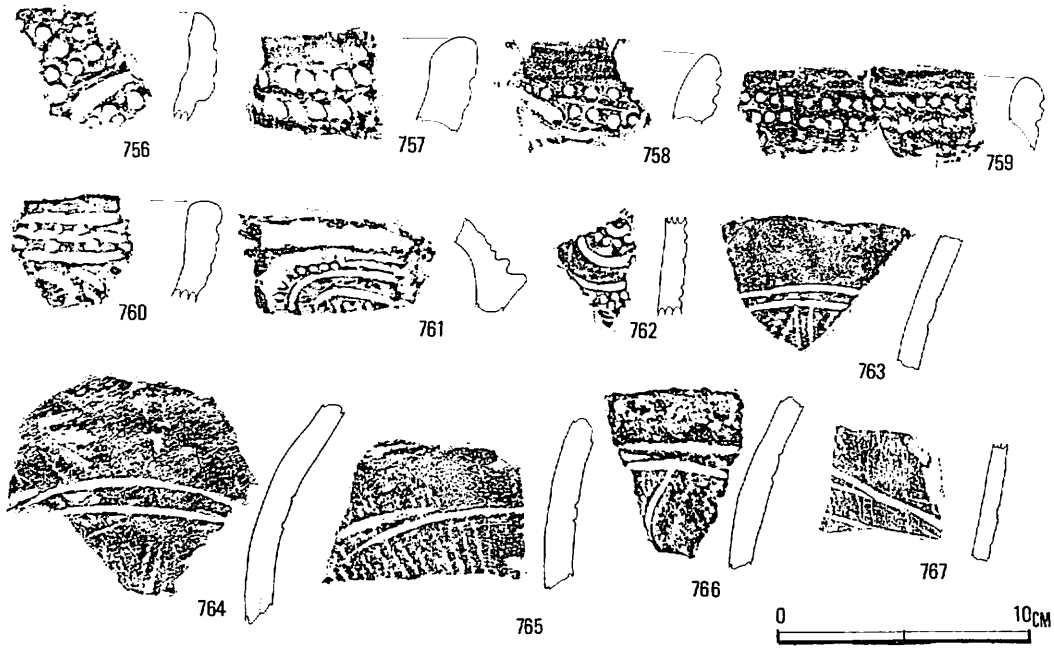


第82図　上前原　出土縄文土器

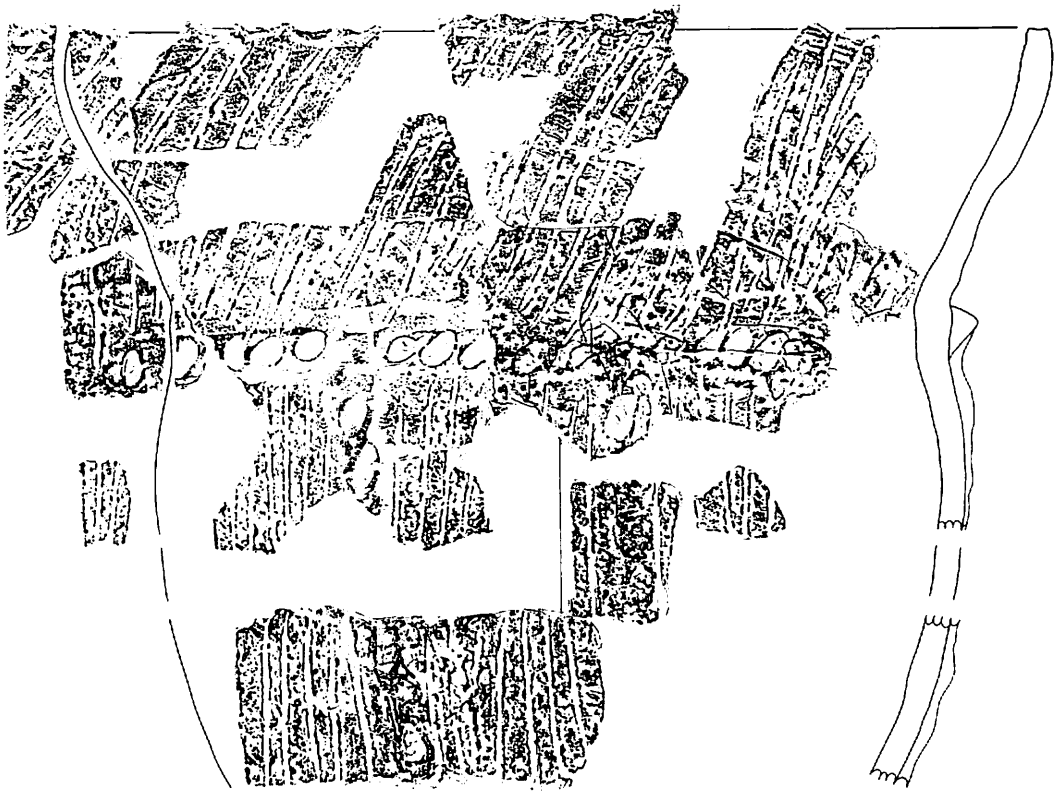


第83図　上前原　出土縄文土器

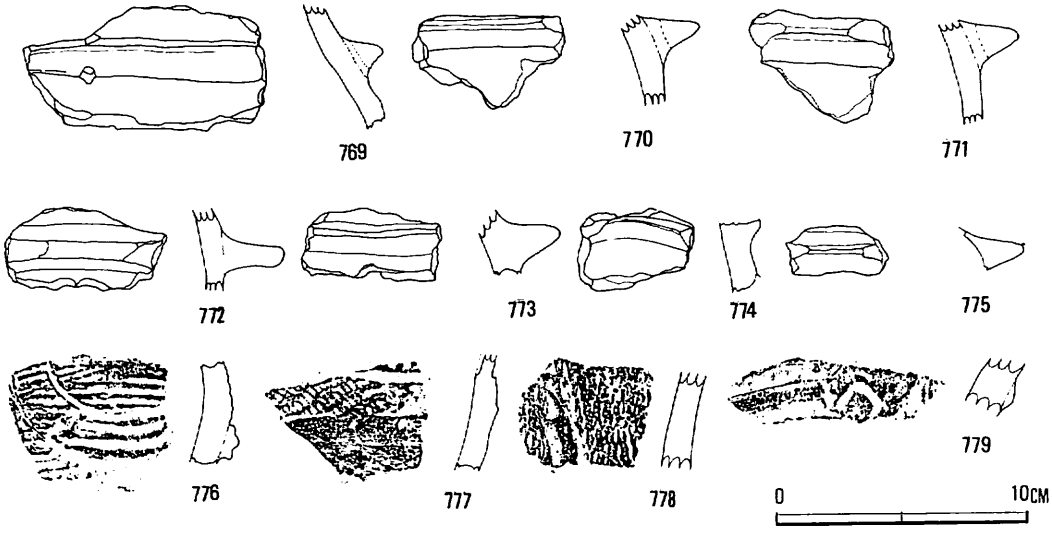




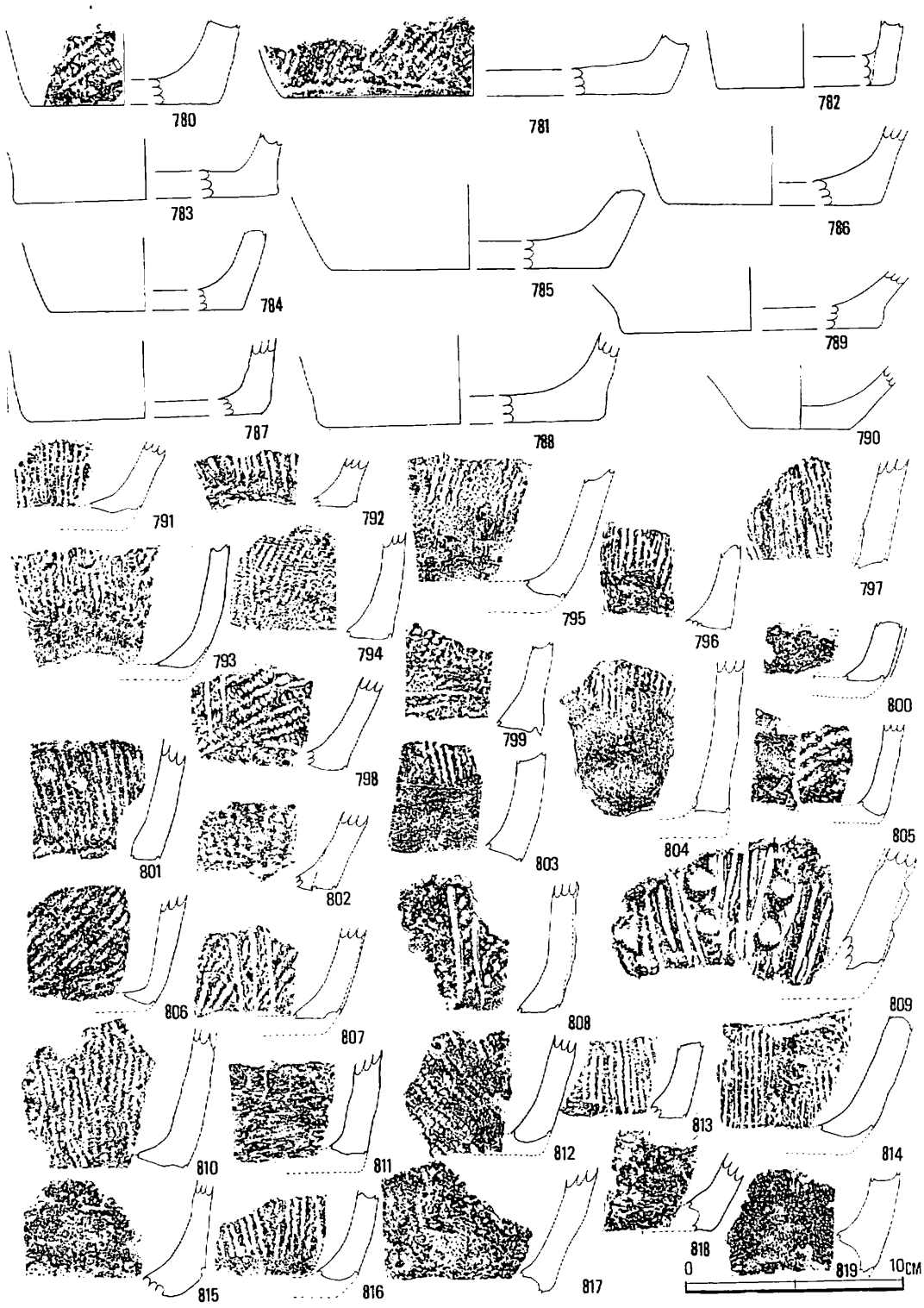
第84図　上前原　出土縄文土器



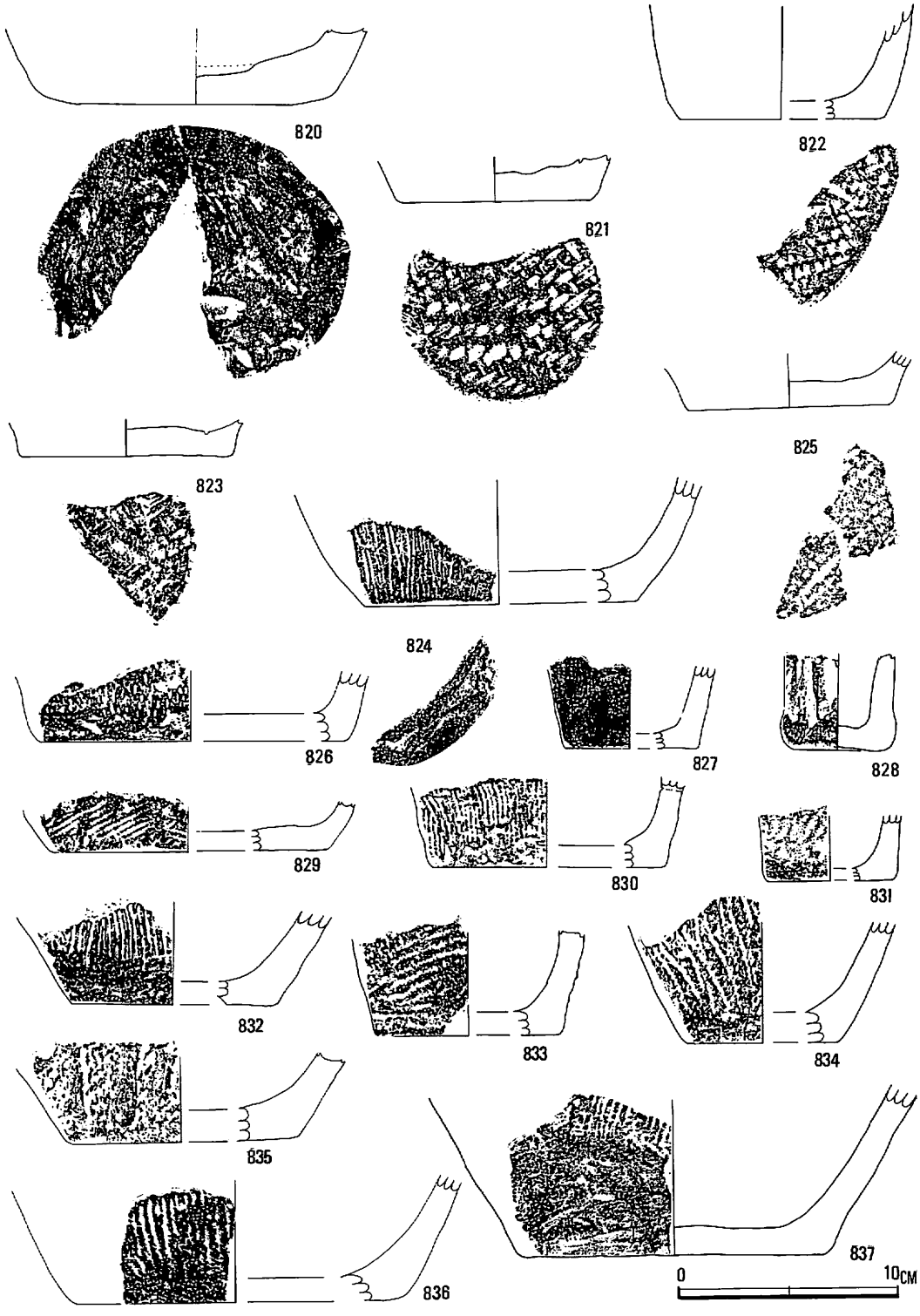
768



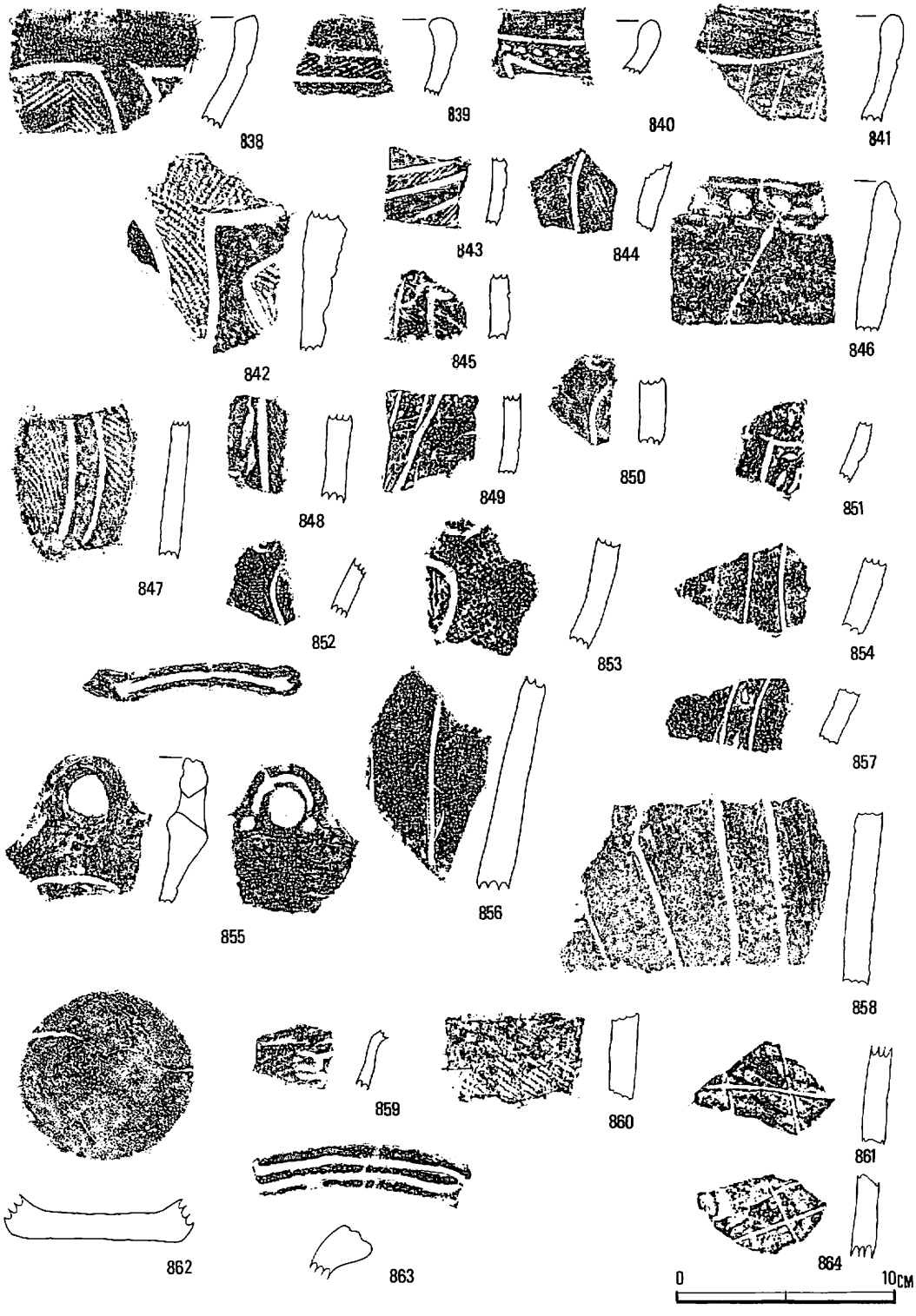
第85図　上前原　出土縄文土器



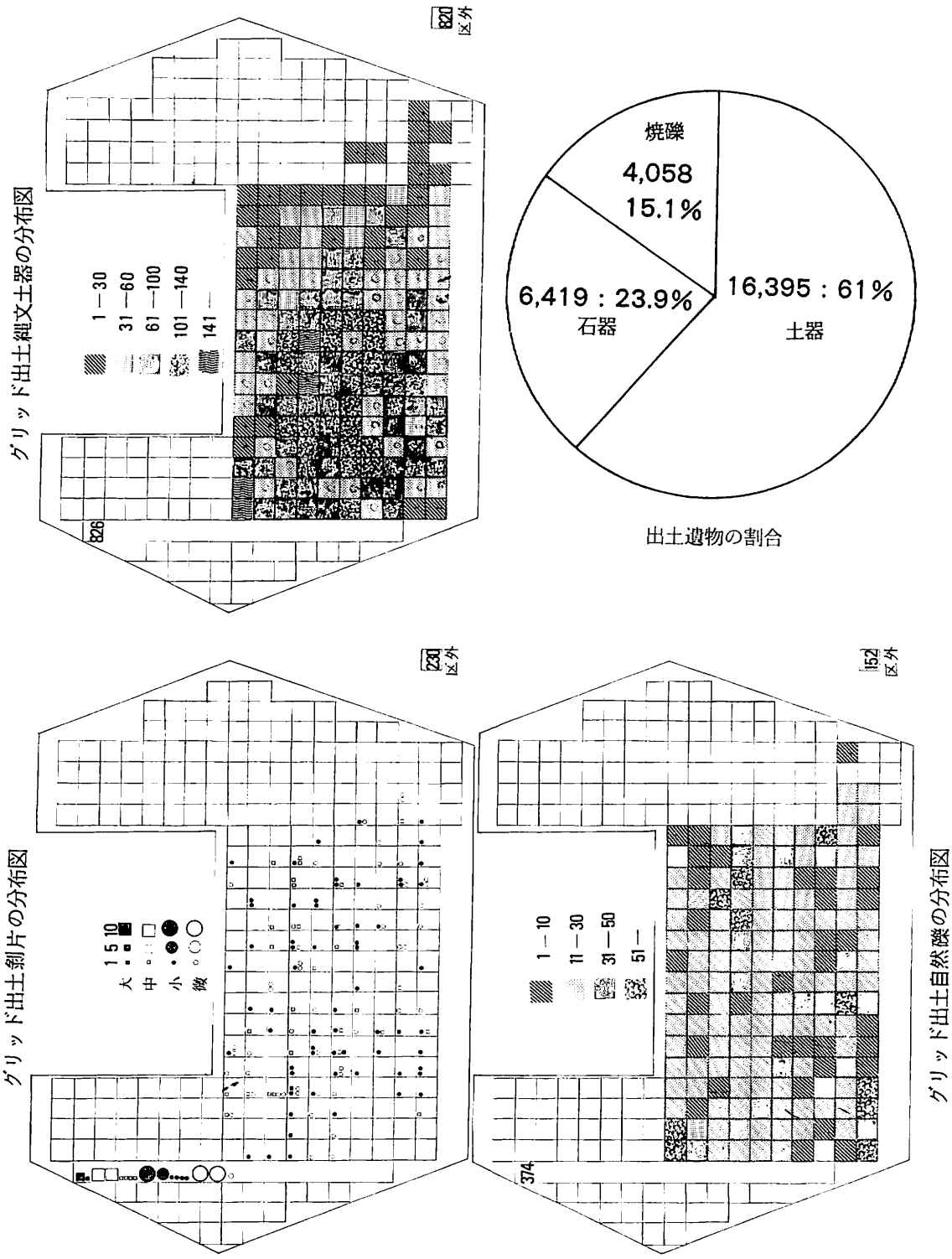
第86図　上前原　出土縄文土器



第87図　上前原　出土縄文土器



第88図　上前原　出土縄文土器



第89図　上前原　出土縄文土器分布

2）土製円盤

縄文土器の破片を利用して作られた円盤状の製品は、縄文時代を通じてみられ、とくに中期以後の遺跡から多数出土している。現在その用途については、玩具・有孔円盤の未成品・土器の補修具・祭祀具の一種・換算具・計算具・蓋など、さまざまな考え方がされている。本遺跡からも、前述のいずれかの用途に利用されたのではないかと考えられる円盤状の製品「土製円盤」が、多数出土している。

本遺跡より出土した土製円盤は、完形品および欠損品を含めて総点数124点であった。この内図示したものは、110点である。これらの製作に利用された土器片は、中期に属するものが主体を占めている。また、これらの製品の内50％以上の欠損品を除いて、有孔のもの、あるいは孔が貫通せず凹んでいるだけのものは1点も無く、すべて無孔の製品である。

第90図に、土製円盤の出土地点を示した。土製円盤は、調査区内において出土地点の明らかなものが93点、A1～4区を縦断して設けた大トレンチより12点、その他フク土中および表採品として19点にそれぞれ分けられる。調査区B1～G4区内での出土点数を見ると、B3区12点、C3区11点、C4区10点と、それぞれ10点以上で最も多く、合計すると33点とこの3区で全区の約35％を占めている。次に多い区はB4、C5、D3、D5区で、それぞれ8、8、9、9点合計34点となり、前述3区の33点を加えると67点で、全区の72％とこの7区で半分以上を占めている。このことから本遺跡において土製円盤の出土地点は、調査区内西側のB3～D5区の範囲にほぼ集中した状況を示していた。

出土層については、110点の内、Ⅱa～Ⅳbと出土層の明らかなものは総数87点である。Ⅱa～Ⅳb層中で土製円盤の最も多い層は、Ⅱb層の33点で全体の約38％を占めている。次に多い層が、Ⅲa層の17点、Ⅱa層の12点となっており、先のⅡb層を加えると合計62点となり、この3層で全体の約71％と半分以上を占めている。このことより、土製円盤の出土層は、Ⅱa～Ⅲa層中に特に多く集中した状況を示している。

土製円盤の大きさについては、長径と短径の計測できるもの56点を第90図のグラフに示した。これによると本遺跡より出土したものは、長径、短径ともにほぼ3～4cm前後の範囲に多いことを示している。さらに、長径、短径の平均値を取ってみると、長径が約3.6m、短径が約3.3cmであった。重さについては、長径との比較でグラフに示した。これによると、重さはほぼ10～20g前後の範囲に多いことを示している。平均値を取ってみると、約15.7gであった。厚さについては、グラフには示していないが、観察表によると0.9～1.1cm前後の範囲に多く、平均値を取ると約1.0cmであった。以上の結果から、本遺跡出土の土製円盤は、大きさは長径が約3.6cm、短径が約3.3cmのほぼ円型、重さは約15.7g、厚さは1.0cmの製品がほぼ平均的なものとなろう。

図版91～ 95は、110点の土製円盤を図示した。個々の製品を観察すると、側面に2種類の調整方法が認められた。研磨したものと、打ち欠いたものの2種類である。図版には、側面の調整方法を、実線の矢印は研磨、点線の矢印は打ち欠きの部分として示し、いずれの表示もないものは不明の部分である。ただし、完形品で実線および点線の矢印表示が全くなされていない製品については、全周が研磨され側面調整を終了しているものである。

観察表の側面調整の欄に示したA～Dのアルファベットは、研磨されている部分の割合に応じてその段階を4つに分けて示した。

Aは全周研磨されているもの。

Bは50％以上研磨されている部分が認められているもの。

Cは50％未満しか研磨されている部分が認められないもの。

Dは全く研磨されている部分が認められないものである。

Aは21点図示した。10、12、14はAの中では長、短径が4cm前後と最も大きい製品である。特に10、12は側面を比較的ていねいに研磨して円形を作り出している。12は前面が剝離。17、19～22、24、27、29～33、35、40は長、短径3cm前後と、本遺跡における平均的な大きさのものであり、特に31、32、33、35は側面をていねいに研磨している。49、52、55、59は長、短径が2cm前後の小さいものである。特に59は、出土した全完形品中では最も小さい製品である。A中では31と52が最も形のよい円形を呈したものである。

Bは欠損品を含めて24点図示した。4、6、11、13はB中で最も大きく、長、短径が4cm前後のものである。研磨調整の部分はていねいにされており、特に11、13は形のよい円形を呈している。13は裏面が剝離。8、9、18、23、34、36、39、41は長、短径3cm前後のものである。Aで図示したもの同様に、本遺跡の平均的大きさの製品である。56はB中の完形品では最も小さく、さらに研磨調整の部分もていねいで、円形を呈する製品としても最も形のよいものである。56、69、70、74、78、81、88、96、97、106、109は欠損品で、残存部分の側面が50％以上研磨調整されているものである。

Cは18点図示した。側面調整の研磨部分が、欠損品を含めて約50％未満しか認められないものである。3、5、7は長、短径ともに4cm以上と、C中で最も大きいものである。特に3、5は研磨部分よりも、打ち欠いて側面調整した部分が大半を占めている点を見ると、全周打ち欠きだけで調整して円盤状に作り出した製品の可能性が考えられる。16、25、26、28、37、38は長、短径ともに3cm前後のものである。16、38はC中では最も形のよい円形を呈した製品である。また、38は3、5同様に、打ち欠き調整だけで作り出された可能性のある製品である。42、44、47、57はCの中でも小形の製品である。50、53、62、67、71は欠損品で、残存部分側面の研磨調整は50％以下である。

Dは47点図示した。1は一部が欠損してはいるが、Dだけでなく全出土品中で円盤の形状をとどめているものとしては、最大のものである。また、側面の調整は50％以上が打ち欠きによるものであることから、Cの3、5、38同様に打ち欠き調整だけの製品の可能性が考えられる。2は約1／5程度欠損している製品であるが、欠損部が残存していれば、おそらく長径が5cm以上にはなるであろう。15、60は長、短径4～3.5cm前後と、大きさが同じで、2点とも打ち欠きだけの製品と考えられる。43、45、46、48、51、58は長・短径3～2cm前後と、D中では小形の製品である。その中で、46、48、58、は側面すべてが打ち欠き調整をして円盤状に作られている。66、68、72、73は欠損品であるが、残存部の長径から、完形品であれば1と同程度の大きさの製品と考えられる。75～77、79、80、82～87、89～95、98～105、107、108、110はすべて欠損品である。

使用土器の部位についてはカメ等の胴部を転用しており、立体的な粘土ひも隆帯を付した部分は

1点（9）利用があるのみで、他はすべて平面的な部位を使用している。

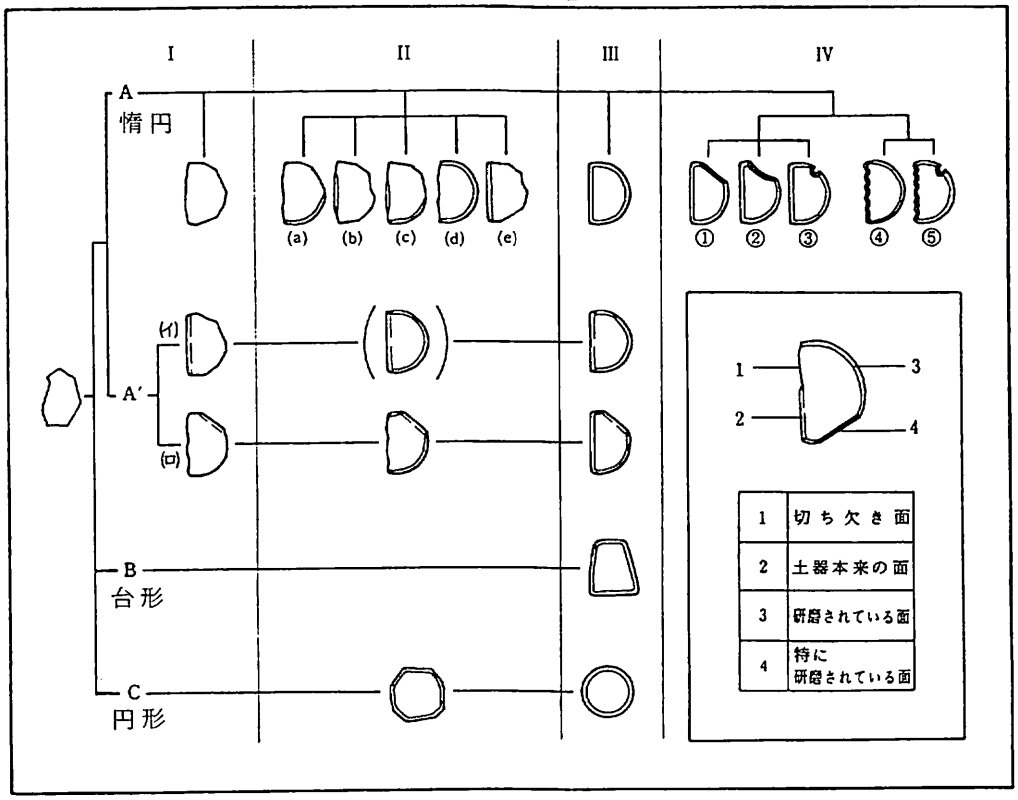
土器型式については22が下小野式にかかる以外、加曽利ＥⅡ～Ⅲ式が主体を占める。剝離しているもの、無文、縄文部分のみの円盤は型式を特定できない。

製作の意図については平均数値の直径3.6cm、厚さ1cm、重さ15.7gの条件で周縁に研磨、打ち欠きの加工を加えた円盤状品を強く意識している。しかも全周に研磨を施して正円に近づけている例（31、35、48、52）の他に、研磨、打ち欠きを部分的にしか施さず、形もゆがむ例があり、円に近付いただけの円盤を未成品としてよいか疑問がある。

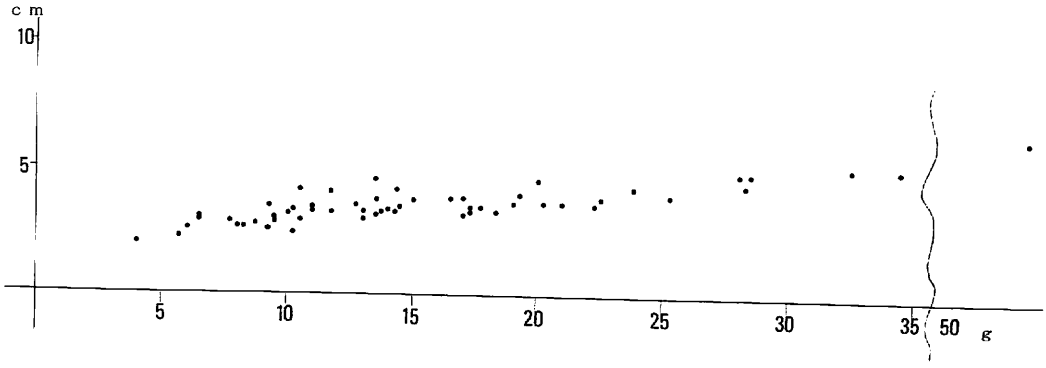
円盤にはアスファルト等の付着物の残る例が無いので使用に関しても前述のとおり不明とせざるを得ない。出土状況は、若干のまとまりはあるものの、他の土器片、石器、焼礫と混在して検出されるため、最終的には、土器片等と同様不用となれば廃棄されるようだ。また祭祀に関わった品とすれば本遺跡では廃棄時に係わりがあるとしても良いだろうが実態については全く論及する用意がない。

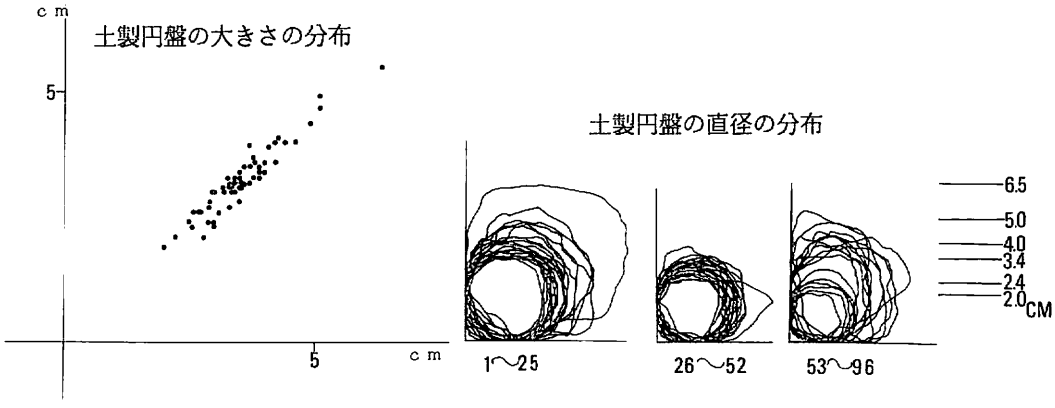
大分県犬飼町舞田原遺跡（文48）は、弥生時代終末から古墳時代の初頭にかかる集落跡であるが土製円盤に類似した資料が562点出土しており、「土器片加工品」と報告されている。時代、地域に大きな差異があるが、形状・加工状態に相似る点があり、分類案を紹介し参考としたい。これは、土製円盤と呼ばれる加工品は円形の完全品だけでなく半円形・方形・半欠品といった「土器片を加工したもの」という本質的な見方を追まられるだろう。

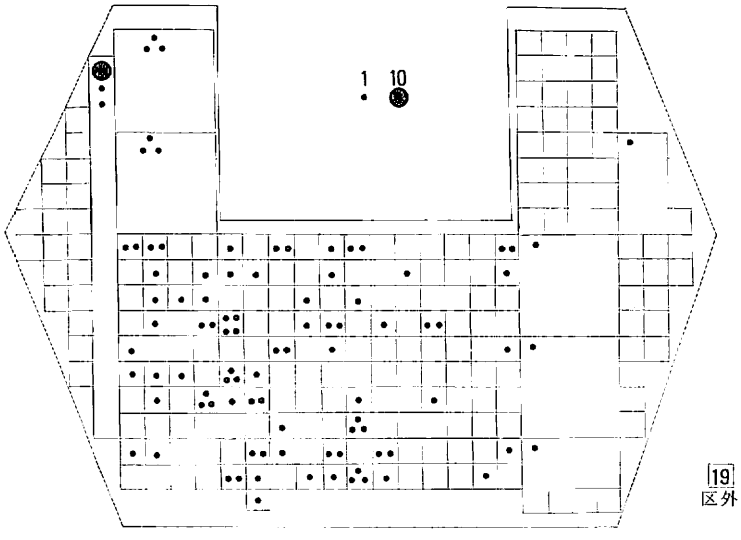
土器片加工品分類案「舞田原」　　犬飼町教育委員会1985



土製円盤の大きさと重量の分布

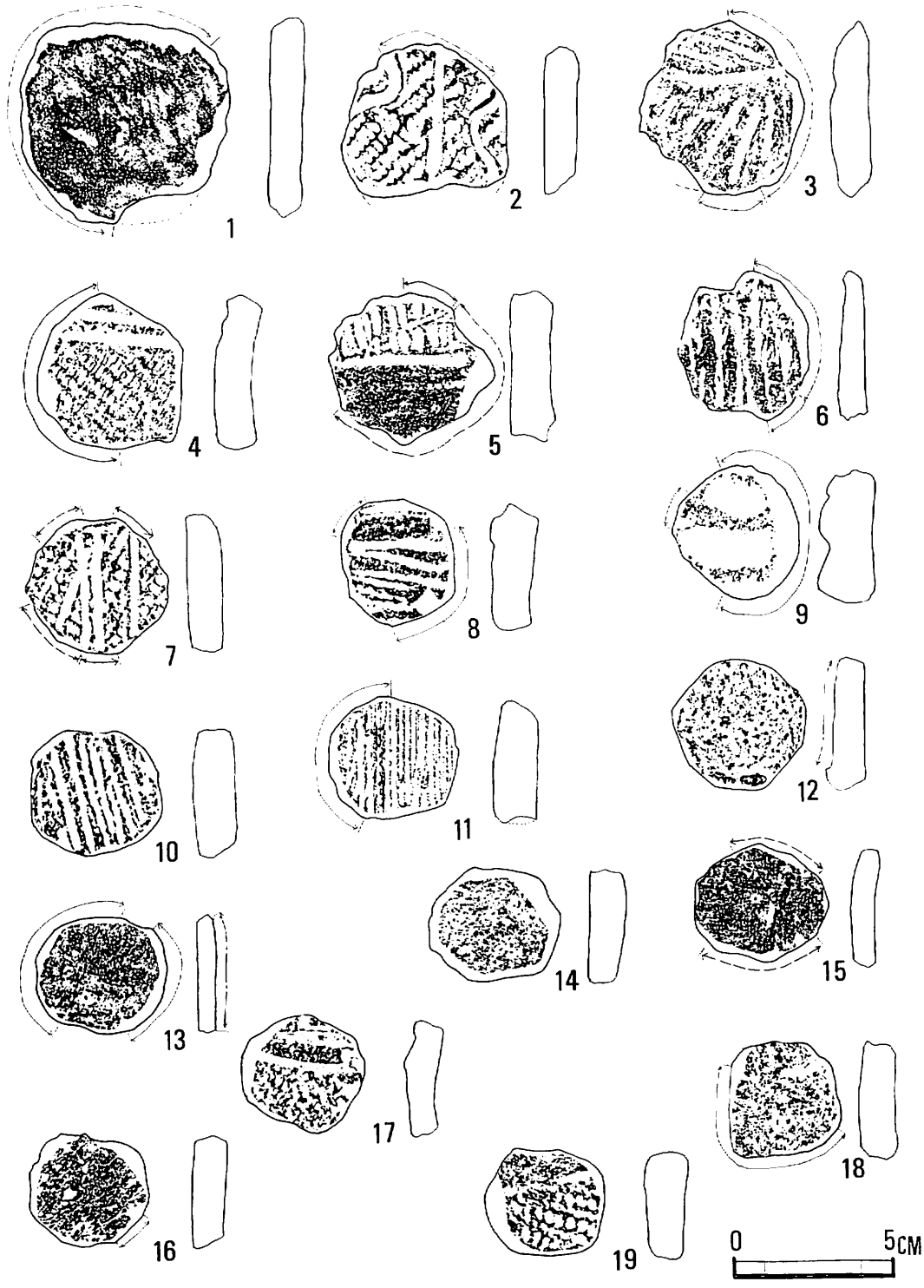




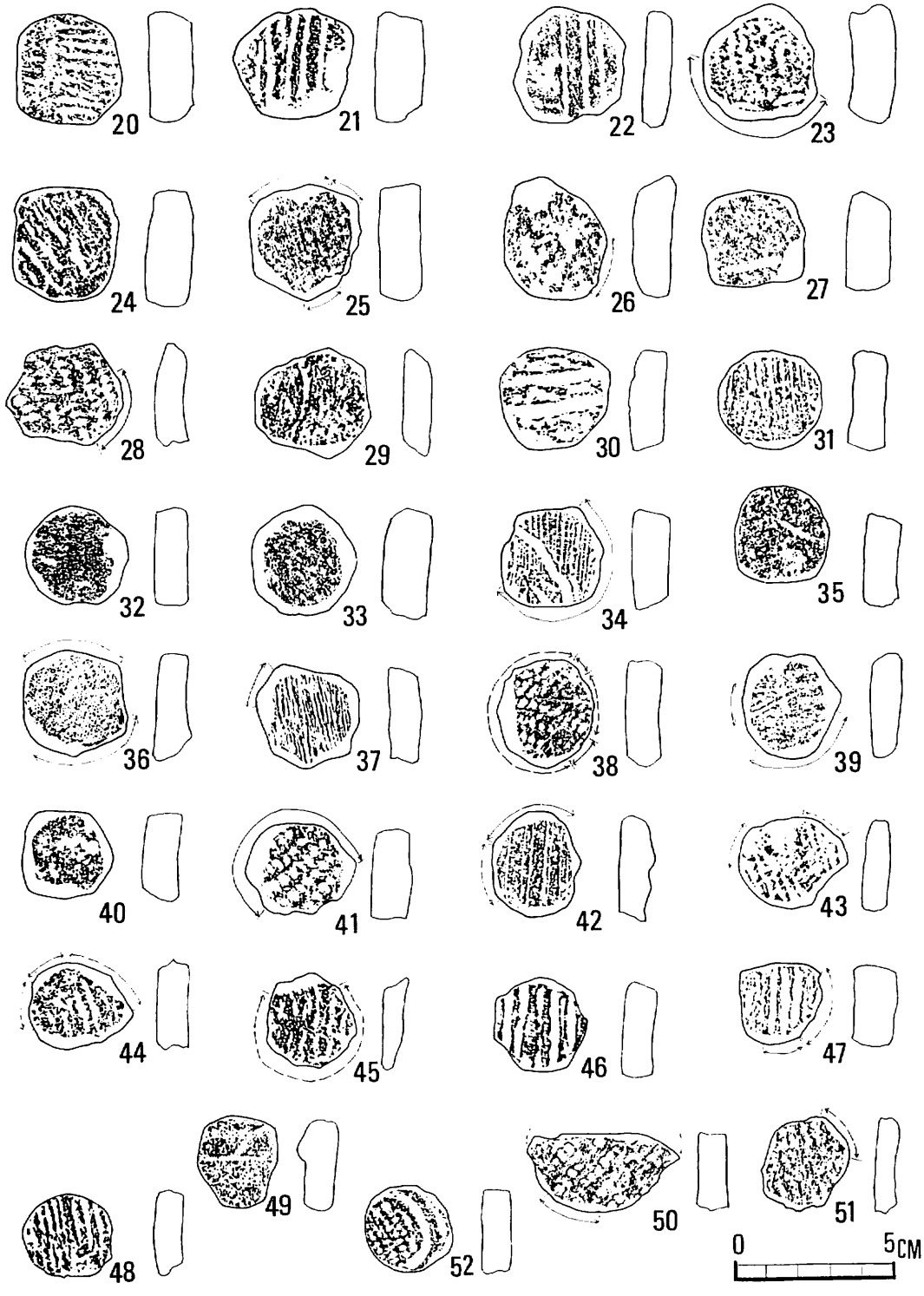


グリッド出土、土製円盤の分布図

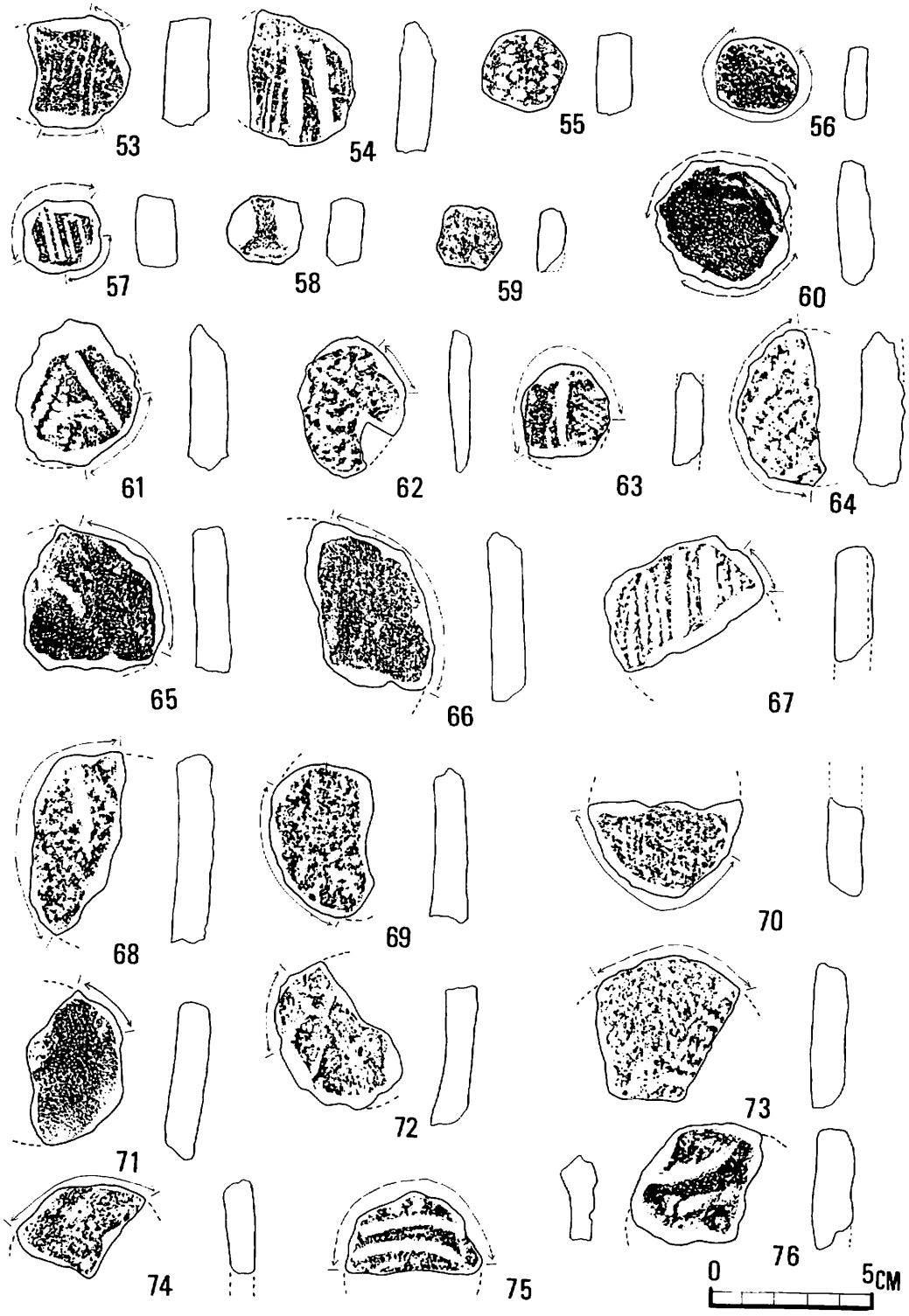
第90図　上前原土製円盤出土分布



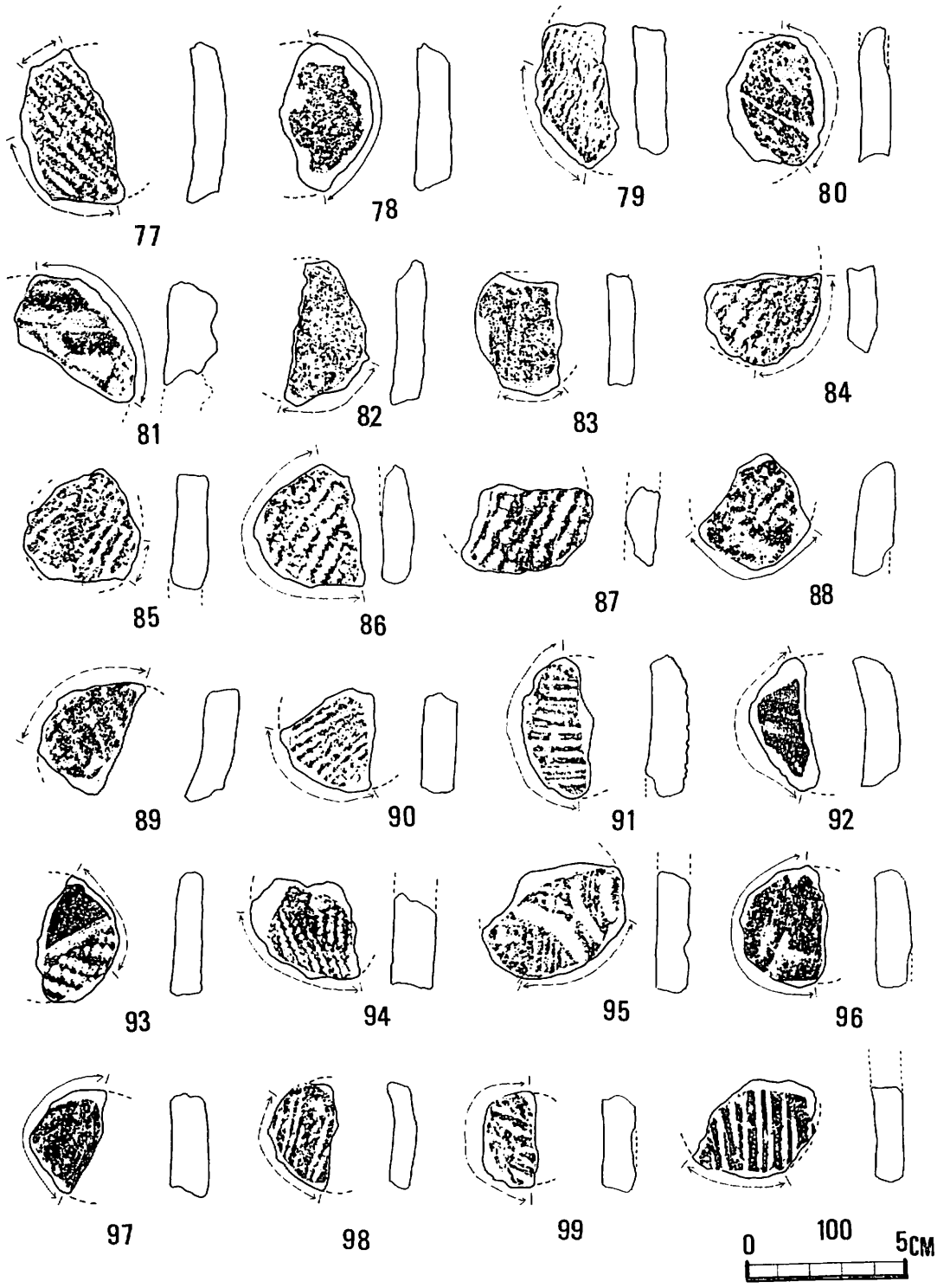
第91図　上前原出土土製円盤



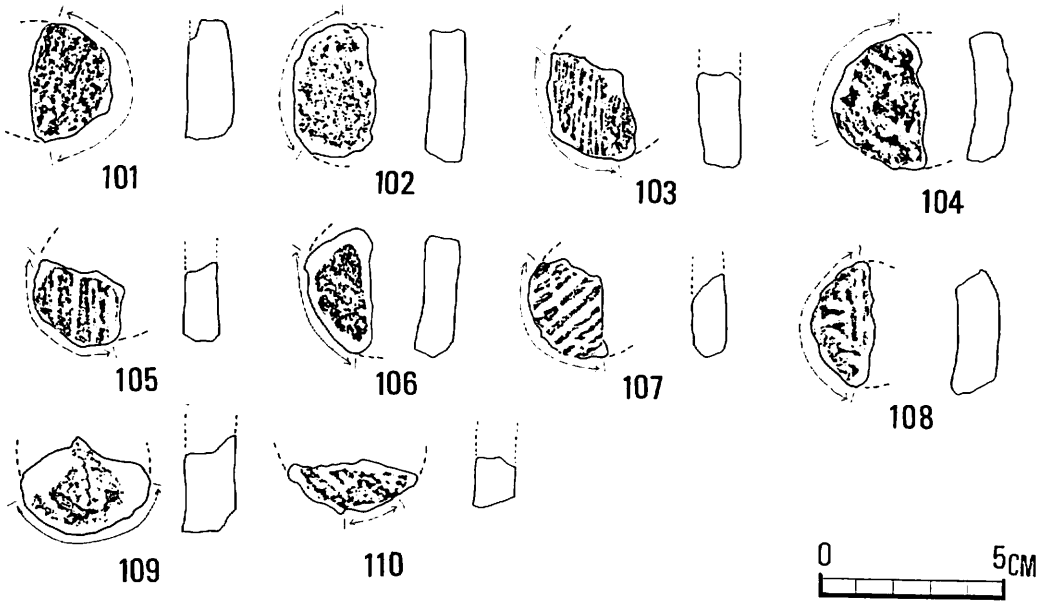
第92図　上前原出土土製円盤



第93図　上前原出土土製円盤



第94図　上前原出土製土円盤



第95図　上前原出土土製円盤

第8表　上前原遺跡縄文土器観察表

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
1	D−5	Ⅳa	A	B−2	B	
2	F−5う	Ⅲb	A	B−2	B	
3	C−4き	Ⅳa	A	A−4	B	
4	B−4	Ⅱb	A	B−2	A	No.225
5	B2−C5	Ⅲb	A	J	B	
6	B−0	Ⅱa	A	B−2	A	1
7	A2−5T	T	A	B−2	B	
8	A2−5T	Ⅶ	A	B−2	B	
9	B3−D3	Ⅴ	A	B−2	A	13
10	B−4け	Ⅳa	A	B−2	B	
11	B3−D3	Ⅴa	A	B−2	A	27
12	フク土	フ	A	B−2	B	
13	E−4あ	Ⅱa	A	B−1	B	
14	B−3そ	Ⅳa	A	B−2	B	
15	B−0	Ⅱa	A	B−2	A	3
16	C−4す	Ⅳa	A	B−5	B	
17	B3−C5	Ⅳb	A	B−2	C	
18	C−3す	Ⅲa	B	B−2	C	
19	B3−D3	Ⅴa	B	B−2	A	28
20	A−4	Ⅶb	B	B−2	B	
21	B3−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
22	A−4	Ⅴa	B	B−2	B	
23	トレンチ	Ⅳb	B	B−2	B	
24	B3−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
25	B3−D3	Ⅴa	B	B−2	A	17
26	4T	Ⅶ	B	B−2	B	
27	B3−D3	Ⅴa	B	B−2	A	24
28	B−2	Ⅲa	B	B−2	A	396
29	4T	T	B	B−2	B	
30	B3−D3	Ⅴa	B	B−2	B	18
31	トレンチ	Ⅳb	B	B−2	B	
32	B3−D3	Ⅶ	B	B−2	A	43
33	A−4T	Ⅶ	B	B−2	B	
34	B3−D3	Ⅴa	B	B−2	B	16

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
35	E−5	Ⅱb	B	B−2	B	
36	C−3か	Ⅱb	B	B−2	C	
37	A−2T	T	B	B−2	B	
38	フク土	フ	B	B−2	B	
39	E−5	Ⅱa	B	B−2	B	
40	D−3う	Ⅱa	B	C	B	
41	E−4か	Ⅲa	B	A−1	B	
42	A−2T	T	B	B−2	B	
43	C−5う	Ⅳa	B	B−2	B	
44	B−2	Ⅲa	B	B−2	A	493
45	A1〜5T	T	B	B−2	B	
46	B3−D3	Ⅶ	B	B−2	A	15
47	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
48	C−4そ	Ⅳa	B	B−2	B	
49	C−4け	Ⅳa	B	B−2	B	
50	D−4か	Ⅲa	B	A−7	C	
51	B3−C5	Ⅳb	B	B−2	C	
52	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
53	D−3す	Ⅱb	B	B−2	C	
54	D−5き	Ⅲa	B	B−2	B	
55	B−2	Ⅲa	B	B−2	C	
56	B−3し	Ⅳa	B	B−2	C	
57	B〜Cた	Ⅳa	B	B−1	A	
58	1号フク土	フ	B	B−2	C	
59	C−3た	Ⅲa	B	B−2	C	
60	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
61	D−4え	Ⅱa	B	B−2	B	
62	D−4	Ⅲb	B	B−2	B	
63	C−4え	Ⅲb	B	B−2	B	
64	C−4そ	Ⅳa	B	B−2	B	
65	C−3そ	Ⅲa	B	A−4	B	
66	C−3う	Ⅱb	B	B−2	C	
67	フク土	フ	B	B−2	B	
68	B−1	Ⅲa	B	B−2	A	581
69	B−2	Ⅲa	B	B−5	B	633
70	1H		B	B−2	B	5
71	B−3う	Ⅳa	B	B−2	B	
72	C−4せ	Ⅲa	B	B−2	C	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
73	F−3	Ⅱb	B	B−2	B	
74	D−4け	Ⅲa	B	B−2	B	
75	C−4い	Ⅱb	B	B−2	B	
76	D−3さ	Ⅱb	A	B−5	B	
77	B2−C5	Ⅳb	A	B−5	B	
78	C−4さ	Ⅲb	A	B−5	B	
79	B2−C5	Ⅳb	B	B−5	B	
80	B−4こ	Ⅳa	B	B−5	B	
81	B3−C5	Ⅳb	B	B−5	B	
82	B3−D3	Ⅴa	B	B−5	B	5
83	1H	Ⅴa	B	B−5	B	
84	B−3し	Ⅲa	B	B−5	B	
85	E−4せ	Ⅱb	B	B−5	A	
86	D−3く	Ⅲa	B	B−2	B	
87	B2−C5	Ⅳb	B	B−5	B	
88	B−3し	Ⅲb	B	B−5	A	
89	C−5お	Ⅳa	B	B−2	B	
90	B−3し	Ⅲb	B	B−5	B	
91	C−3か	Ⅱb	B	B−5	B	
92	E−4お	Ⅱb	B	I	C	
93	D−5う	Ⅱb	B	B−5	B	
94	C−4さ	Ⅲa	B	I	A	
95	D−4け	Ⅲa	B	B−2	B	
96	D−4あ	Ⅱa	B	B−2	A	
97	C−4さ	Ⅲa	B	I	B	
98	D−4か	Ⅱb	B	B−2	B	
99	C−4い	Ⅳa	B	B−2	C	
100	D−4あ	Ⅱb	A	B−2	B	
101	B−2	Ⅱa	A	B−2	A	215
102	C−4え	Ⅲb	B	B−2	B	
103	B−4う	Ⅳa	B	G	A	
104	E−3そ	Ⅱa	B	B−2	B	
105	C−3き	Ⅱb	B	A−4	B	
106	C−3	Ⅱb	B	B−2	B	
107	D−4い	Ⅱb	B	B−2	C	
108	A1〜5T	T	B	B−2	C	
109	E−5か	Ⅱb	B	B−2	B	
110	B−1	Ⅱb	B	B−2	C	540

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
111	4T	T	B	B−2	B	
112	E−4た	Ⅱb	B	B−2	B	
113	C−3し	Ⅱb	B	B−2	B	
114	A2−5T		B	B−2	B	
115	B3−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
116	B−5え	Ⅲb	B	B−2	C	
117	フク土	フ	B	B−2	B	
118	B−4せ	Ⅳa	B	B−2	B	
119	B2−C5	Ⅳa	B	B−2	B	
120	B−4し	Ⅳa	B	B−2	B	
121	B−4あ	Ⅱa	B	B−2	B	
122	C−3う	Ⅱa	B	B−2	C	
123	4T	T	B	B−2	B	
124	B−4か	Ⅱb	B	B−2	B	
125	C−4く	Ⅲa	B	B−2	B	
126	B2−C5	Ⅳb	B	I	B	
127	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	C	
128	4T	T	B	B−2	C	
129	C−4え	Ⅱb	B	B−2	B	
130	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
131	D−3こ	Ⅲa	B	B−2	B	
132	表採	表	B	B−2	C	
133	フク土	フ	B	B−2	C	
134	A1〜5フ	フ	B	B−2	C	
135	B−3た	Ⅲb	B	B−2	B	
136	D−3う	Ⅱa	B	B−2	B	
137	A2−5T	T	B	B−1	B	
138	B−1	Ⅲa	B	B−1	A	250
139	フク土	フ	B	B−1	C	
140	B2−C5	Ⅳb	B	B−1	B	
141	B−3あ	Ⅲa	B	B−1	C	
142	3号土壙	土	B	B−1	A	
143	B−3き	Ⅳa	B	B−1	B	
144	A2−5T	T	B	B−1	C	
145	B−3か	Ⅱb	B	B−1	A	
146	C−3く	Ⅱb	B	B−1	C	
147	A−4T	T	B	B−5	A	
148	B−2	Ⅱa	B	B−1	C	140

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
149	D−4き	Ⅲa	A	C−2	B	
150	C−4た	Ⅲa	A	C−1 A−10	B	
151	C−5こ	Ⅱb	A	B−1	C	
152	C−3す	Ⅲa	B	C−1 J	B	
153	B2−D5	Ⅳb	B	A−9	B	
154	C−3う	Ⅱb	B	B−1	A	
155	フク土	フ	B	C−2	B	
156	B−3き	Ⅲa	B	C−1 A−8	C	
157	フク土	フ	B	C−2	B	
158	C−3う	Ⅱb	B	C−2	C	
159	B2−C5	Ⅳb	B	A−10	A	
160	フク土	フ	B	A−9 J	B	
161	4T	T	B	A−11	C	
162	フク土	フ	B	B−1	B	
163	表採		B	A−10	C	
164	D−5う	Ⅱa	B	I	I	
165	B3−E5	Ⅱb	B	C−2	C	410
166	フク土		A	A−14 D−1	B	
167	フク土	フ	A	C−2 G・E	B	
168	B2−C5	Ⅳb	B	A−8 T	C	
169	A2−5T		B	B−6 B−1	B	
170	E−4す	Ⅲa	B	B−6 B−1	B	
171	F−3	Ⅱa	B	B−6 B−1	B	
172	E−5か	Ⅱb	B	A−3	C	
173	D−4か	Ⅱb	B	B−1	C	
174	E−4あ	Ⅱa	B	A−1	C	
175	F−3	Ⅱa	B	B−5	B	
176	E−5く	Ⅲa	B	B−6 G	B	
177	フク土	フ	B	B−6 A−10	A	
178	D−3し	Ⅱa	B	B−1	B	
179	A2−5T		B	B−1	B	
180	B−4し	Ⅲb	B	B−1	B	
181	E−5こ	Ⅱb	B	B−5	B	
182	E−4こ	Ⅱb	B	B−1	B	
183	3号土壙	土	B	B−1	B	
184	4T	T	B	A−8 波状紋	B	
185	フク土	フ	B	B−1	B	
186	E−4か	Ⅱb	B	B−1	B	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
187	C−3し	Ⅲa	B	B−2	C	
188	B−4せ	Ⅳa	B	B−1	B	
189	B−2	Ⅲa	B	B−1	B	473
190	B−4き	Ⅳa	B	B−1	B	
191	B−2	Ⅲa	B	B−1	C	489
192	フク土	フ	B	B−1	B	
193	B−3け	Ⅳa	B	B−1	B	
194	B−4う	Ⅱa	B	B−1	B	
195	B−0す	Ⅱa	B	B−1	B	
196	A−0そ	Ⅱb	B	B−1	B	
197	D−5う	Ⅲb	B	B−1	B	
198	B−4あ	Ⅱa	B	B−J	C	
199	C−5	Ⅳa		B−2	C	
200	B−3た	Ⅱb	B	B−5	B	
201	C−4う	Ⅲa	B	B−1	C	
202	D−3お	Ⅱa	B	C−1	B	
203	D−4あ	Ⅱa	B	B−1	B	
204	C−5	Ⅳa	B	B−2	B	
205	フク土	フ	A	D−1 A−11	B	
206	A−1	T	A	F−2	AとC	
207	B−3え	Ⅱb	A	B−6、C−2 A−6	C	
208	A−2	T	B	A−10 A−14	B	
209	C−4け	Ⅳa	B	J F−2	B	
210	A2−6	T	B	A−11 B−6	B	
211	B−2	Ⅳa	B	A−14 C−2,B−6	B	973
212	B3−C5	Ⅳa	B	A−14	B	54
213	B−3け	Ⅱa	A	A−1 G	C	
214	C−5	Ⅳa	B	A−8 A−14	B	
215	A−3	T	B	G	C	
216	3	土	A	A−14 A−8,J	A	
217	B3−E5	Ⅱb	B	A−10 G	C	402
218	B−5き	Ⅳa	B	A−14 A−11	AとC	
219	B3−C5	Ⅳa	A	J A−9	C	89
220	B−3い	Ⅱb	B	A−10	B	
221	B2−C5	Ⅳb	B	J	C	
222	B−3そ	Ⅲa	A	A−8	B	
223	B−5う	Ⅳa	B	A−12	B	
224	C−3た	Ⅱb	A	A−8 J	B	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
225	C4−い	Ⅱb	B	A−8	B	
226	A2〜5	T	A	A−3	B	
227	C−4き	Ⅱb	A	A−8 J	B	
228	B3−D3	Ⅲb	A	A−14 A−8	AとC	150
229	B−4た	Ⅲb	A	A−9 G	AとC	
230	E−4い	Ⅱb	A	A−8 J	AとC	
231	B3−C5	Ⅳa	B	A−12 J	C	124
232	A2−5	T	A	A−12 J	C	
233	F4−4	土	B	A−12	B	
234	A−1	T	B	A−10 J	B	
235	D−3い	Ⅱa	B	A−14	B	
236	B−1	Ⅱb	B	A−12	C	119
237	B2−C5	Ⅳb	A	D−1	C	4
238	B2−C5	Ⅳb	A	D−1	B	
239	B3−E5		A	D−1	B	388
240	B3−E5	Ⅱb	B	A−12	B	106
241	B3−D3	Ⅲb	A	D−1	B	118
242	B2−C5	Ⅳb	A	D−1	B	
243	B3−D3	Ⅲb	B	D−3	B	30
244	C−3け	Ⅲa	A	D−3	B	
245	C−4せ	Ⅲb	A	D−4	B	
246	C−3す	Ⅱb	A	D−3	B	
247	A−1	T	B	A−13	B	
248	B3−C5	Ⅳa	A	D−4 B−1	B	29
249	B3−C5	Ⅳa	B	D−3	AとC	7
250	B3−C5	Ⅳa	A	D−4 B−1	C	96
251	B3−E5	Ⅲa	A	B−1	B	No.139
252	B2−C5	Ⅳb	B	A−12	B	
253	B3−E5 B−4て	Ⅲa Ⅳa	B B	D−1 D−1	B B	228
254	B3−E5	Ⅲa	A	D−4 B−1	B	177
255	B5−E5	Ⅲa	A	D−4	AとC	320
256	B3−E5	Ⅱa	A	D−2	AとC	129
257	B2−C5	Ⅳb	A	A−7	B	
258	B3−E5	Ⅲa	B	D−2	AとC	176
259	B3−D3	Ⅲb	A	A−12 E	C	15
260	A−4	T	A	D−4	B	
261	B−3お	Ⅳa	B	D−1	A	
262	TA−1	T	B	D−2	B	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
263	A−4	T	A	A−7	B	
264	B3−E5	Ⅱb	B	D−4	AとC	26
265	F5あ−く	Ⅲa	A	D−2	C	
266	B−2	Ⅲa	B	D−1	B	603
267	B−す	Ⅳa	A	A−8	B	
268	B−4き	Ⅱb	A	A−7	B	
269	A2−5T	T	A	D−2 B−1	C	
270	B−1	Ⅱa	B	D−4	B	270
271	B−2	Ⅲb	A	D−2	B	No.836
272	A2−5	T	B	D−4	B	
273	A2−5	T	B	D−4	B	
274	E−4せ	Ⅱb	A	D−4	B	
275	C−3き	Ⅱb	B	A−7	B	
276	E−4か	Ⅱa	A	A−12 B−1	A	
277	C−5い	Ⅳa	A	D−4	B	
278	フク土	土	B	D−4	B	
279	B3−D3	Ⅲb	A	A−1	B	93
280	E−4か	Ⅱa	D	F	B	
281	C−3さ	Ⅲa	B	D−1	B	
282	C−4	Ⅲb	B	A−7	B	
283	B−3け	Ⅳa		D−1 G	AとC	
284	A−2T	T	A	D−1 F	B	
285	B−3く	Ⅱb	B	D−4	AとC	
286	B3−E5	Ⅱb	A	A−5	A	16
287	A−4	T	B	D−1	C	
288	B3−C5	Ⅳa	B	D−4	B	38
289	B3−E5	Ⅱb	B	D−4	C	195
290	3土	土	B	D−2	B	
291	E−4た	Ⅱb	A	D−1	B	
292	B−4せ	Ⅳa	A	A−12	B	
293	B3−C5	Ⅳa	A	D−5	C	175
294	A−3	T	A	D−5	C	
295	A−2	T	A	D−5	B	
296	A2〜5	T	B	A−8	B	
297	C−4う	Ⅱb	A	A−8 D−5	B	
298	B3−E5	Ⅱa	とって	A−9 D−5	B	109
300	B3−E5	Ⅱb	A	D−3, A−12, B−2	AとC	192
301	B3−E5	Ⅱa	とって	D−5	B	79

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
302	A2−5	T	とって	D−5	B	
303	B−2	Ⅱb	B	A−8	C	314
304	B−2	Ⅲb	とって	A−8	B	673
305	A2−5T	Ⅱa	A	A−8	B	
306	B3−E5	Ⅱb	A	D−3	C	389
307	A2−5T	T	A	A−12	B	
308	B3−E5	Ⅲa	とって	D−3 A−12	B	145
309	B−4け	Ⅳa	B	D−1	B	
310	E−4し	Ⅲa	B	A−8	C	
311	A−1	T	A	D−3	B	
312	B2−C5	Ⅳb	とって	A−12	B	
313	C−4す	Ⅲb	B	A−10	C	
314	B−5か	Ⅳa	B	D−1	C	
315	3−土	土	とって	B−5	A	
316	1−H	H	A	集石化	C	9
317	B3−C5	Ⅳa	A	A−1 D−3	C	18
318	A−1T	T	A	A−7	C	
319	B3−E5	Ⅱb	A	D−3 B−1	AとC	341
320	B3−D3	Ⅲb	A	A−12 D−3	B	45
321	B3−D3	Ⅲb	A	D−2	A	118
322	B−3く	Ⅱb	A	D−4	B	
323	B3−C5	Ⅳa	A	A−9	C	38
324	A2−5	T	とって	D−4	B	
325	B−3け	Ⅳa	B	B−1	B	
326	B−3お	Ⅳa	A	A−13	B	
327	B2−C5	Ⅳb	A	D−4	C	
328	C−3こ	Ⅱb	A	D−3	B	
329	フク土	フ	A	A−12 D−3	B	
330	B−3え	Ⅱa	A	A−9	B	
331	D−4く	Ⅱa	B	D−1	B	
332	B−3う	Ⅱb	A	D−1	B	
333	3土塊	土	A	A−12 B−1	C	
334	B3−C5	Ⅳb	A	A−12 G−1	C	24
335	B−5う	Ⅳa	A	A−12	B	
336	B2−C5	Ⅳb	A	D−2	B	23
337	B−4あ	Ⅳa	A	D−1	AとC	
338	B5−E5	Ⅲa	A	B−5	B	302
339	E−4か	Ⅲa	B	B−2	C	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
340	T	Ⅱa	A	A−8	C	
341	F−5あく	Ⅲa	A	A−12 B−1	C	
342	フク土	フ	A	D−1	A	
343	B3−E5	Ⅱb	B	A−9	C	44
344	B3−D3	Ⅲb	A	A−8	B	5
345	B2−C5	Ⅳb	A	F A−8	B	
346	B2−C5	Ⅳb	A	F−1	B	
347	D−5お	Ⅲa	B	C−2	A	
348	C−5あ	Ⅲb	B	B−4	AとC	
349	B3−C5	Ⅳb	B	D−1	B	7
350	B3−E5	Ⅱa	B	A−8	B	23
351	B−2	Ⅲa	A	B−5	AとC	654
352	C−5く	Ⅲa	B	A−8 J	A	
353	C−4あ	Ⅳa	B	A−14 F−2	B	
354	B3−E5	Ⅱb	B	A−10	B	143
355	D−4	Ⅲb	B	A−8 J	C	
356	C−4か	Ⅲa	B	A−10 J	C	
357	B2−C5	Ⅳb	A	A−7	B	
358	表採	表	B	A−8 G	B	
359	B−4あ	Ⅳa	B	A−6	A	
360	C−4さ	Ⅳa	B	A−14 G	AとC	
361	B3−E5	Ⅱb	B	A−9 J	C	113
362	C−4こ	Ⅲb	B	A−1	C	
363	B3−E5	Ⅱb	A	A−5	C	337
364	B−4き	Ⅲb	A	A−7	B	
365	A2−5	T	A	A−7	C	
366	B−1	Ⅱa	A	A−13	C	282
367	A−2	T	A	A−7	A	
368	B3−E5	Ⅱb	A	A−8	B	453
369	3−土	土	A	A−7	A	
370	2−土	土	A	A−7	B	
371	B2−C5 B2−C5	Ⅳb	C	A−12，B−1,A−5	AとC	
372	B−2	Ⅲb	B	A−3	B	665
373	B3−E5	Ⅱa	A	A−1	A	132
374	B2−C5	Ⅳb	A	A−5	A	
375	B3−E5	Ⅲa	B	A−7	B	208
376	C−4け	Ⅱb	A	A−7	A	
377	B3−E5	Ⅱb	A	A−13	B	199

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
378	B−4て	Ⅳa	A	A−7	B	
379	B−5え	Ⅳa	A	A−5	C	
380	A−1	T	B	A−7	A	
381	C−3そ	Ⅳa	B	A−5	B	
382	1Hカク乱	カク乱	B	A−7	A	
383	B3−E5	Ⅱb	B	A−7	B	269
384	B−2	Ⅲa	A	A−7	B	536
385	B3−D3	Ⅲb	A	A−7	B	61
386	B2−C5	Ⅳb	A	A−7 E	B	9
387	A−1	T	B	D−4 B−1	B	
388	B3−C5	Ⅳa	A	D−4	B	17
389	B3−C5	Ⅳa	A	A−13	B	
390	B3−E5	Ⅲa	A	A−6	A	353
391	A2−5	T	A	A−3	B	
392	B3−C5	Ⅳb	A	A−13	A	
393	A−0	T	A	A−13	C	
394	D−3い	Ⅱa	A	A−1	C	
395	A−2	T	A	A−6	C	
396	B2−C5	Ⅳb	A	A−13	B	
397	B3−E5	Ⅱb	A	A−13	C	58
398	B3−E5	Ⅱb	A	A−12	B	349
399	B−1	Ⅱa	A	A−13	A	65
400	B2−C5	Ⅳb	A	A−4	B	
401	B−1	Ⅱb	B	A−12 J	C	554
402	フク土	フ	A	A−6	B	
403	B−3き	Ⅲa	A	A−6	A	
404	B−2	Ⅲb	A	A−5	A	741
405	B3−C5	Ⅳa	B	A−6	A	110
406	フク土	フ	A	A−13	C	
407	B3−E5	Ⅱb	B	A−13	B	237
408	B2−C5	Ⅳb	A	A−6	A	
409	B3−E5	Ⅱa	A	A−6	B	
410	B3−E5	Ⅱa	B	A−3	A	196
411	B−2	Ⅲb	B	A−6	B	862
412	B3−E5	Ⅲa	B	A−6	A	286
413	3−土	土	B	A−6	A	
414	1−土	土	B	A−3	A	
415	B3−C5	Ⅳa	B	A−6	A	19

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
416	B3−E5	Ⅱb	A	A−7	A	73
417	B3−D3	Ⅲb	A	A−7	B	151
418	フク土	フ	A	A−13	B	
419	A−3	T	A	A−7	C	
420	A−3	T	B	A−5	A	
421	B3−C5	Ⅳa	B	A−6	A	19
422	フク土	フ	B	A−7	A	
423	B3−E5	Ⅱb	B	A−7	C	281
424	B3−C5	Ⅳa	B	A−1	AとC	12
425	A−1	T	B	A−7	A	
426	B3−E5	Ⅱb	B	A−7	A	316
427	B3−E5	Ⅱb	B	A−6	A	125
428	B3−D3	Ⅲb	B	A−6	B	28
429	A−2〜5	T	B	A−2	B	
430	D−4	Ⅲb	B	A−6	A	
431	A−3	T	B	A−7	B	
432	B−4そ	Ⅳa	B	A−7	C	
433	D3−E5	Ⅱb	B	A−5	A	133
434	A−2	T	B	A−5	A	
435	B−3そ	Ⅳa	B	A−1	B	
436	A−4	T	B	A−5	A	
437	B2−C5	Ⅳb	B	A−5	B	
438	C−3え	Ⅱb	B	A−5	A	
439	D−3	Ⅲb	B	A−7	A	
440	C−3す	Ⅲa	B	A−1	B	
441	B−4	Ⅴa	B	A−7	A	
442	A−2−5	T	B	A−1	A	
443	B3−E5	Ⅱb	B	A−5	A	89
444	T−4	T	B	A−5	A	
445	B2−C5	Ⅳb	B	A−5	B	
446	A−4	T	B	A−5	C	
447	B−2	Ⅲa	BA	A−3	A	487
448	B3−D3	Ⅲb	B	A−7	A	12
449	B−2	Ⅳa	B	A−7	A	
450	B3−E5 B3−C5	Ⅱb Ⅳa	B B	A−13 A−3	B	158 39
451	F−5き	Ⅳa	B	A−7	C	
452	A1−5Tフ	T	B	A−5	B	
453	B3−E5	Ⅱa	B	A−13	B	125
454	D−3	Ⅲb	B	A−7	A	
455	A−2	T	B	A−6	B	
456	B−4そ	Ⅳa	A	C−3	B	
457	B3−E5	Ⅱa	B	A−1	B	128
458	B3−E5	Ⅲa	B	A−6	B	151
459	B3−E5	Ⅱb	B	A−5	B	93
460	A1−5	T	B	A−13	A	
461	B2−C5	Ⅳb	C	A−5 J	A	
462	B2−C5	Ⅱb	B	A−5	A	
463	B3−D3	Ⅲb	B	J A−12	B	106
464	B−2	Ⅱa	B	A−6	B	399
465	B−3く	Ⅱb	B	J C−3	B	
466	B3−E5	Ⅲa	B	A−12	C	197
467	A2−5	T	B	A−1	B	
468	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	B	174
469	B3−E5	Ⅱb	A	A−1	A	210
470	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	B	
471	B3−E5	Ⅱb	B	A−2	C	344
472	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	B	
473	B3−E5	Ⅱb	B	C−2	B	279
474	C−4え	Ⅱb	B	A−2	C	
475	B−2	Ⅲb	B	A−1	B	786
476	B3−E5	Ⅱb	B	A−7	B	141
477	B3−E5	Ⅲa	B	A−1	AとC	375
478	B3−D3	Ⅲb	B	A−1	B	111
479	B−2	Ⅳa	B	A−1	B	1021
480	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	C	112
481	B2−C5	Ⅳb	B	A−1	B	
482	A−2T	T	B	B−1	B	
483	B−2	Ⅲa	B	A−3	B	445
484	C−5	Ⅳa	B	A−1	B	
485	B−E5フ	Ⅲb	B	A−1	B	
486	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	A	
487	フク土	フ	B	A−1	B	
488	B3−E5	Ⅱb	B	A−1	B	76
489	D−5く	Ⅲa	B	A−1	A	
490	A−2	T	B	A−1	B	
491	B−3せ	Ⅲa	B	A−1	A	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
492	B3−C5	Ⅳa	B	A−1	B	41
493	A2−5T	T	B	A−1	A	
494	B3−D3	Ⅲb	B	C−2	B	34
495	B−4さ	Ⅳa	B	A−7	C	
496	B−2	Ⅲb	A	A−3 G	AとC	754
497	A2−5T	Ⅱa	A	F−2	B	
498	B−4あ	Ⅳa	A	F A−1	AとC	
499	A2−5T	T	A	B−2 A−10	C	
500	A−4T	T	A	F A−8	B	
501	B−3け	Ⅱa	A	F−2	B	
502	B−4う	Ⅲa	A	F−2 B−1	C	
503	C−3さ	Ⅱb	A	F A−8	C	
504	A−2T	T	B	F−2	C	
505	表採	表	A	A−3	C	
506	B−3か	Ⅲb	B	F−2 C−1	B	
507	B3−E5	Ⅱb	B	A−8	B	94
508	1土壙		B	C−1 G	C	
509	D−4	Ⅲb	B	C−2 G	C	
510	B3−C5	Ⅳa	B	C−1 A−10	AとC	148
511	B−2	Ⅳa	B	A−3	A	No.1031
512	A2−5T	Ⅱa	B	A−7 J	A	
513	B−3う	Ⅲb	B	B−2	C	
514	フク土	フ	B	A−3	C	
515	B−3す	Ⅳa	B	A−12	C	
516	フク土	フ	B	A−11	C	
517	A−4T	T	B	A−11	A	
518	B−2	Ⅲb	A	A−1	B	715
519	フク土 A−4T	T	B	A−1	A	
520	A2−5T	T	A	A−3 G	B	
521	フク土	フ	B	A−8	B	
522	A−3T	T	B	F−2	B	
523	B3−C5	Ⅳa	B		A	
524	D−3お	Ⅱb	A	A−10	C	
525	B3−E5	Ⅱb	B		A	52
526	3土	土	B	B−1 D−1	B	
527	TA−1	T	A	C−1	C	
528	A−4T	T	A	A−3	B	
529	B2−C5	Ⅳb	A	A−13	B	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
530	B2−C5	Ⅳb	A	A−3	A	No.12
531	A−3T	T	B	C−2	A	
532	B−2	Ⅲb	B	C−2	AとC	No.776
533	A3−5T,A−3T,B−2	Ⅱa Ⅲb	A	C−4	B	No.714
534	B−1	Ⅱb	B	A−13	C	No.411
535	B3−E5	Ⅱb	B	C−2	C	No.385
536	B−2	Ⅲb	B	C−2	C	738
537	B3−E5	Ⅱa	B	C−2	C	83
538	フク土	フ	B	A−3	B	
539	B2−C5	Ⅳb	B	A−3	A	No.11
540	B−2	Ⅲb	B	A−3	A	937
541	B−2	Ⅱa	B	C−2	A	No.42
542	B−2	Ⅲb	B	A−3	B	879
543	D−3あ	Ⅱb	B	C−2	A	
544	B3−E5	Ⅱb	B	C−1	B	No.276
545	TA−1	T	B	C−2	B	
546	D−3	Ⅲb	B	A−3	B	
547	フク土	フ	B	C−2	A	
548	フク土	フ	B	C−1	A	
549	C−3こ	Ⅲb	B	C−1	A	
550	1−土	土	B	C−2	A	
551	B−2	Ⅲb	B	C−2	C	No.668
552	B3−C5	Ⅳb	B	C−1	A	
553	B−2	Ⅲa	B	C−1	A	No.506
554	A−2〜5	T	A	C−3	A	
555	B5−E5	Ⅲa	B	A−13	B	336
556	A−4	T	B	C−2	C	
557	C−4お	Ⅲb	A	C−1	C	
558	A−O	T	B	C−2	B	
559	2−5	T	B	C−2	B	
560	B3−C5	Ⅳa	B	C−1	C	61
561	A2−5T	Ⅱa	B	C−2	C	
562	B3−C5	Ⅳa	B	C−2	C	99
563	B−2	Ⅲb	B	C−2	C	820
564	A−2〜5	T	B	C−2	C	
565	B3−E5	Ⅲa	B	C−1	AとC	150
566	D−3く	Ⅲa	B	C−2	AとC	
567	C−3す	Ⅲa	B	C−2	C	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
568	B2−C5	Ⅱb	B	C−2	C	
569	B−2	Ⅱa	B	C−2	A	93
570	B−3お	Ⅳa	B	C−1	B	
571	A2−5	T	B	C−2	B	
572	B−3そ	Ⅲa	B	C−2	B	
573	B2−5	T	B	C−2	A	
574	A2−5	T	B	C−2	B	
575	A−2	T	B	C−1	B	
576	B3−E		B	A−3	B	465
577	A−4	T	B	C−3	B	
578	B3−E5	Ⅱa	B	C−1	A	177
579	B2−C5	Ⅳb	B	C−1	A	
580	B3−E5	Ⅳa	B	C−1	A	37
581	B−2	Ⅲa	B	C−1	C	478
582	B2−C5	Ⅳb	B	C−1	C	
583	B2−C5	Ⅳb	B	C−1	C	
584	B3−E5	Ⅱb	B	C−1	B	85
585	B3−C5	Ⅳa	B	A−2	B	178
586	B3−E5	Ⅲa	B	B−2	B	195
587	B−3く	Ⅱb	B	C−2	B	
588	B2−C5	Ⅳb	B	C−2	A	
589	フク土	フ	A	B−1	A	
590	E−4あ	Ⅱa	A	B−1	A	
591	B3−C5 B3−D5	Ⅳa Ⅲb	A	B−1	C	No.186 No.100
592	B−5い	Ⅳa	B	B−1	AとC	
593	D−4か	Ⅱa	B	B−1	B	
594	1−土	土	B	B−1	B	
595	D−4た	Ⅳa	B	B−1	C	
596	B3−C5	Ⅳa	B	B−1	C	No.14
597	B−4う	Ⅲa	B	B−1	B	
598	B3−E5	Ⅲb	B	B−1	B	No.380
599	B−3け	Ⅳa	B	B−1	B	
600	A2−5T	T	B	B−1	C	
601	B3−E5	Ⅱb	B	B−1	C	No.103
602	B3−C5	Ⅳa	B	B−1	C	No.26
603	A2−5T	T	B	B−1	A	
604	A2−5T	T	B	A−1	A	
605	B3−E5	Ⅱb	B	B−1	A	No.87

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
606	フク土	フ	B	B−1	B	
607	A2−5T	T	B	B−1	C	
608	B2−C5	Ⅳb	B	B−1	C	
609	A2−5T	T	B	A−1	C	
610	B−2	Ⅲb	B	B−1	C	864
611	B2−C5	Ⅳb	B	B−1	C	
612	B3−C5	Ⅳb	B	B−1	B	
613	A−3T	T	B	B−1	B	
614	C−5く	Ⅳa	B	B−1	C	
615	T−4	T	B	B−1	C	
616	B−1	Ⅱa	B	B−1	A	No.216
617	B−1	Ⅱa	B	B−1	B	No.116
618	B2−C5	Ⅳb	B	B−1	C	
619	B−1	Ⅱa	B	B−2	C	No.153
620	E−4か	Ⅲa	B	B−2	A	
621	A2−5T	T	B	B−2	A	
622	C−4せ	Ⅲb	B	B−2	A	
623	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	A	No.185
624	B−2	Ⅲb	B	B−2	B	No.858
625	A2−5T	T	B	B−2	B	
626	フク土	Ⅱa	B	B−2	B	
627	C−4き	Ⅲa	B	B−2	A	
628	C−3く	Ⅱb	B	B−2	A	
629	1−土	土	B	C−1	B	
630	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	C	No.73
631	D−4す	Ⅱa	B	B−2	C	
632	D−4そ	Ⅲa	B	B−2	B	
633	B−2	Ⅲb	B	B−2	B	No.882
634	C−3さ	Ⅱb	B	B−2	C	
635	D−3い	Ⅱb	B	B−2	B	
636	B−1	Ⅱa	B	B−2	A	No.92
637	E−4け	Ⅲa	B	B−2	C	
638	B−1	Ⅱa	B	B−2	C	No.127
639	D−3お	Ⅱb	B	A−3	C	
640	B−3あ	Ⅲa	B	B−2	B	
641	T−4	T	B	B−2	C	
642	B−1	Ⅱb	B	B−2	B	No.560
643	フク土	フ	B	B−2	A	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
644	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	A	
645	A2−5T	Ⅱa	B	C−1	B	
646	A−2T	T	B	B−2	A	
647	B3−C5	Ⅳa	B	B−2	C	No.22
648	AT−2	T	B	B−2	A	
649	A−4T	T	B	B−2	A	
650	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	A	
651	B3−D3	Ⅲb	B	B−2	A	No.84
652	フク土	土	B	B−2	B	
653	B3−E5	Ⅳa	B	B−2	A	No.50
654	B2−C5	Ⅳb	B	B−1	B	
655	C−5く	Ⅲb	B	B−2	A	
656	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	C	274
657	B3−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
658	A−3	T	C	B−2	AとC	
659	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
660	B3−E5	Ⅱa	B	B−2	B	79
661	B−4し	Ⅳa	B	B−2	B	
662	B−2	Ⅲa	B	B−2	B	512
663	B3−E5	Ⅱa	B	B−2	B	197
664	B3−C5	Ⅳa	B	B−2	B	3
665	B−1	Ⅱa	B	B−2	B	298
666	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	A	368
667	B3−E5	Ⅲa	B	B−2	C	318
668	D−3お	Ⅱb	B	B−2	B	
669	B−1	Ⅱa	B	B−2	C	68
670	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	B	267
671	BC−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
672	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
673	B−1	Ⅱa	B	B−2	B	106
674	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	B	
675	B−2	Ⅲa	B	B−2	A	515
676	pit6	Ⅲb	B	B−2	B	
677	B2−C5	Ⅳb	B	B−2	C	
678	A−4	T	B	B−2	C	
679	B−2	Ⅲb	B	B−2	C	920
680	B−4し	Ⅲb	B	B−2	C	
681	A−4	T	B	B−2	B	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
682	B−3え	Ⅲa	C	B−2	A	
683	A2−5	T	B	B−2	B	
684	B3−E5	Ⅲa	B	B−2	A	355
685	A−4	T	B	B−2	B	
686	B2−C5	Ⅳb	B	B−5	B	
687	A−4	T	B	B−5	B	
688	B3−E5	Ⅱb	A	B−5	C	407
689	B3−D3	Ⅲb	A	B−5	B	96
690	B2−C5	Ⅳb	A	B−4	B	
691	A2−5	T	B	B−5	B	
692	C−4か	Ⅱa	A	B−5	B	
693	C−4い	Ⅲa	A	B−5	B	
694	C−4お	Ⅲb	A	B−5	B	
695	B3−E5	Ⅲa	A	B−5	C	196
696	B3−E5	Ⅲa	A	B−5	B	322
697	A2−5	T	A	B−5	C	
698	B−1	Ⅲa	A	B−5	C	613
699	C−4す	Ⅳa	A	B−5	B	
700	B3−C5	Ⅳb	A	B−5	B	701
701	E−4す	Ⅱb	A	B−5	C	
702	B−3せ	Ⅲa	A	B−5	C	
703	B−2ふ	Ⅲa	A	B−5	C	
704	1−土	土	A	B−5	B	
705	1−H	Ⅳa	A	B−5	B	164
706	A2−5	T	A	B−5	C	
707	B3−E5		A	B−5	C	31
708	A−3	T	A	B−5	C	
709	B3−E5	Ⅱb	B	B−4	C	
710	B3−E5	Ⅱb	A	B−4	C	123
711	B3−E5	Ⅱa	B	B−5	A	132
712	D−4い	Ⅱb	A	B−5	C	
713	A−4	T	A	B−5	C	
714	B3−C5	Ⅳa	B	B−5	C	81
715	B3−E5	Ⅱb	A	B−4	C	320
716	C−3せ	Ⅱb	A	B−5	C	
717	C−5	Ⅳa	A	B−5	C	718
718	B−1	Ⅱa	A	B−5	C	248
719	B3−D3	Ⅲb	A	B−5	C	10

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
720	A−3	T	A	B−5	C	
721	B3−E5	Ⅱa	B	B−5	C	54
722	B2−C5	Ⅳb	A	A−12	C	
723	B−4し	Ⅲb	A	B−5	C	
724	フク土	フ	A	B−4	C	
725	B3−E5	Ⅲa	A	B−5	C	391
726	B3−C5	Ⅳb	A	B−5	C	
727	B−1	Ⅱb	A	B−5	C	428
728	A2−5T	T	A	B−4	C	
729	B3−E5	Ⅱa	B	B−5	C	117
730	B−3さ	Ⅱb	A	B−5	C	
731	B−2	Ⅲb	A	B−4	C	869
732	B3−D3	Ⅲb	A	B−4	C	105
733	D−4か	Ⅲa	B	B−4	C	
734	B2−C5	Ⅳb	A	B−5	C	
735	B3−E5	Ⅲa	A	B−4	B	99
736	C−4う	Ⅱb	B	B−5	C	
737	フク土	フ	B	A−12	C	
738	B3−D3	Ⅲb	A	B−4	C	3
739	TA−1	T	A	B−4	C	
740	B3−D3	Ⅲb	B	B−5	C	89
741	B3−E5 B2−C5	Ⅱb Ⅳb	A	B−5	C	101
742	3土壙	土	B	B−2	C	
743	B3−E5	Ⅱb	A	B−4	C	44
744	BC−C5	Ⅳa	B	B−5	C	156
745	B3−D3	Ⅲb	A	B−5	C	110
746	B3−E5	Ⅱa	A	B−4	C	208
747	E−4そ	Ⅱa	A	B−5	C	
748	B−2	Ⅲb	A	B−5	C	729
749	B3−E5	Ⅱb	A	B−5	B	255
750	B3−E5	Ⅲa	B	B−5	C	300
751	A2−5T	T	B	B−5	C	
752	B−2フク土	Ⅲa	A	B−5	C	
753	B3−E5	Ⅱb	A	B−4	C	364
754	B−3て	Ⅳa	B	B−5	C	
755	B3−C5	Ⅳb	B	F−2	B	
756	フク土		A	F−2	B	
757	B−2	Ⅱa	A	G	A	35

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
758	B−1	Ⅱa	A	G	B	327
759	D−5お B−3き	Ⅲa Ⅲb	A	G	C	
760	B3−E5	Ⅱb	A	F−2	C	69
761	B2−C5	Ⅳb	B	F−2	C	
762	C−5か	Ⅳa	B	F−2	B	
763	B−2	Ⅲa	B	A−1	A	522
764	A2−5T		B	A−1	B	770
765	D−5う	Ⅲa	B	A−1	A	259
766	B2−C5	Ⅳb	B	A−1	B	
767	B−4き	Ⅳa	B	A−1	B	
768	A2−5T		B	A−10	B	
769	試1		A		C	
770	B3−E5	Ⅱb	A	B−5	B	
771	B−3あ	Ⅲa	A	B−5	C	
772	B−3お	Ⅳa	A	B−5	C	
773	B3−E5	Ⅱb	A	B−5	C	419
774	C−4し	Ⅱb	A	B−5	C	
775	F−4	Ⅱa	A	B−5	B	1
776	B3−E5	Ⅱb	B	A−5	A	246
777	B−4い	Ⅳa	B	A−2	C	
778	B−3け	Ⅳa	B	A−1	C	
779	C−3き	Ⅱa	B	A−9	B	
780	A−2	T	C	B−1	B	
781	B3−C5	Ⅳa	C	B−1	B	138
782	A2−5	T	C			
783	A2−5	T	C			
784	E−4お	Ⅲa	C	B−2	B	
785	1Hピット		C	B−2	A	2
786	B3−E5	Ⅳa	C	B−5	B	25
787	フク土	フ	C			
788	B3−C5 A−2	Ⅳa T	C	B−5	B	123
789	A−4	T	C	B−5	C	
790	B3−D3	Ⅲb	C			2
791	B−2	Ⅱa	C	B−2	B	188
792	A−1	T	C	B−2	B	
793	A2−5 B−4あ	T Ⅳa	C	A−4	C	
794	D−4	Ⅲb	C	B−1	B	
795	D−3う	Ⅱa	C	B−2	C	

No.	出土地点	層位	部位	文様表現	内面調整	登録No.
796	D−4あ	Ⅱb	C	B−2	B	
797	B−5う	Ⅳ	B	A−3	B	
798	B−2	Ⅲa	C	A−1	B	503
799	B3−E5	Ⅲ	B	A−1	B	392
800	フク土	フ	C	B−5	B	
801	A1−5	T	C	B−2	B	
802	A−3	T	C	B−1	CとB	
803	B3−E5	Ⅱb	C	B−2	B	363
804	B3−E5	Ⅲa	C	B−2	C	216
805	C−5 D−4そ	Ⅳa Ⅲa	C	B−1	C	
806	A2−5	T	C	B−1	B	
807	B−3せ	Ⅳa	C	A−1	B	
808	B3−D3	Ⅲb	C	A−1	B	143
809	B3−E5	Ⅱb	B	B−2	C	118
810	B3−E5	Ⅱb	C	B−2	B	62
811	A2−5	T	C	B−5	B	
812	フク土	フ	C	B−1	B	
813	1H	カク 乱	C	B−2	B	
814	B3−E5	Ⅱb	C	B−2	B	22
815	A−4	T	C	B−5	B	
816	B−2	Ⅲb	C	B−2	B	
817	B−3う	Ⅱb	B	B−5	B	
818	A−1	T	C	B−5	B	
819	C−4A		B	B−5	B	
820	A−3T		C	B−5	A	
821	B2−C5	Ⅳb	C	B−5	剝離	16
822	B3−E5	Ⅲa	C	B−5	B	331
823	B3−E5	Ⅱb	C	B−5	B	297
824	B3−E5	Ⅱb	C	B−2	B	375
825	B−5う C−3さ	Ⅳa Ⅲa	C	B−5	B	
826	B3−E5	Ⅱb	C	B−2	B	283
827	B−3あ	Ⅱb	C	B−5	A	
828	E−4そ	Ⅱb	C	A−6	B	
829	表採		C	B−1	B	
830	TA−1		C	B−2	B	
831	D−5き,D−4す、C−5く	Ⅲa Ⅱb Ⅲa	C	A−3	B	
832	3土	Ⅱb	C	B−2	C	
833	B2−C5	Ⅳb	C	B−2	B	
834	B3−E5,B3−E5,B−3く	Ⅱb Ⅱb Ⅱb	C	B−1	B	105 102
835	B3−C5	Ⅳa	C	B−1	B	182
836	1−土		C	B−2	B	
837	B3−C5，B−E5,B2−C5	Ⅳa Ⅲb Ⅳb	C C	A−3 B−5	A B	16 340
838	表採		A	A−3	B	
839	表採		A	A−3	B	
840	表採		A	F−2	B	
841	表採		A	B−4	A	
842	表採		1	A−2	B	
843	表採		B	A−4	A	
844	表採		B	A−4	B	
845	表採		B	A−1	B	
846	表採		A	F−2	B	
847	表採		B	A−4	B	
848	表採		B	A−4	B	
849	表採		B	A−2	A	
850	表採		B	A−2	A	
851	表採		B	F−2	A	
852	表採		B	A−2	B	
853	表採		B	A−2	B	
854	表採		B	B−4	B	
855	表採		A	B−4	A	
856	表採		B	B−4	A	
857	表採		B	B−4	B	
858	表採		B	B−4	B	
859	表採		B	A−1	B	
860	表採		B	B−1	A	
861	B−3あ	Ⅲa	B	A−8	B	
862	表採		C	B−5	B	
863	表採		A	B−4	B	
864	A2−5T		B	A−8	B	

縄文土器観察表略記号一覧

〔胎　土〕

A 白色粒子を多く含む

B 赤褐色粒子を多く含む

C 黒色粒子を多く含む

D 金雲母を多く含む

〔焼　成〕　60％以上を被う

イ　赤褐色

ロ　茶褐色

ハ　黄褐色

ニ　灰褐色

ホ　黒褐色

ヘ　白黄色

ト　その他

〔内面の調整〕

A ケズリ　一定の範囲がケズリとられ、素地上の砂粒が移動又脱落したりする

B ナ　デ　器面がセンイ、指などでナデられ細かいすじが残る

C ミガキ　器面がヘラ状工具などで研磨され、平滑な面を生じる

〔文様の表現〕

A 沈　線

B 無　文

C 櫛目文

D 渦巻文

E 円　文

F 刺突文

G 刺突沈線文

H 楕円文

I　条痕文

J 篦　文

1 縄　文

2 磨消縄文

3 撚糸文

4 磨消撚糸文

5 隆　線

〔器　形〕

A 鉢

B 深　鉢

C 浅　鉢

D 注　口

E 片　口

F 釣　手

G 香　炉

H 壷

I　蓋

J 台　付

〔部　位〕

A 口縁部

B 胴　部

C 底　部

D 突起部

第9表　土製円盤観察表

No.	出土地点	層位	長径 cm	短径 cm	厚さ cm	重量 g	側面調整	欠損
1	B2−C5	Ⅳb	6.3	5.5	1.0	53.50	D	
2	B−5え	Ⅳa	5.0	4.4	0.9	30.00	D	1／5
3	A1−5	大トレ	5.1	4.9	1.2	34.50	C	
4	3号土壙		4.9	4.4	1.1	28.50	B	
5	C−4か	Ⅱb	5.1	4.7	1.3	32.50	C	
6	B−2〜C−5	Ⅳb	4.6	4.0	0.9	20.00	B	
7	B−1 No.550	Ⅱb	4.3	4.1	1.1	23.75	C	
8	C−4お	Ⅲb	3.9	3.4	1.2	22.50	B	
9	B−4し	Ⅲa	3.9	3.3	1.6	28.00	B	
10	フク土		4.4	4.0	1.4	28.25	A	
11	C−3た	Ⅱb	4.0	3.6	1.3	25.25	B	
12	B−3〜E−5 No.146	Ⅱa	4.2	4.0	0.9	10.50	A	
13	A−3	Ⅱb	4.1	3.9	0.6	11.75	B	
14	D−4あ	Ⅱb	4.0	3.4	1.1	19.25	A	
15	B−4お	Ⅳa	4.2	3.6	0.7	14.25	D	
16	D−3こ	Ⅲa	3.8	3.7	1.0	17.00	C	
17	C−5い	Ⅲb	3.8	3.6	0.8	16.00	A	
18	B−2フク土	Ⅲa	3.5	3.3	1.2	17.25	B	
19	E−5え	Ⅲa	3.7	3.2	1.1	19.0	A	
20	E−3す	Ⅱa	3.3	3.2	1.3	18.25	A	
21	D−5あ	Ⅱa	3.6	3.5	1.5	22.25	A	
22	A−4大トレ		3.6	3.2	0.8	13.50	A	
23	A−2	Ⅱb	3.7	3.7	1.2	20.25	B	
24	B3−C5	Ⅳb	3.5	3.1	1.4	17.70	A	
25	A−0け	Ⅱb	3.7	3.5	1.3	21.00	C	
26	B−4こ	Ⅲb	3.8	3.3	1.1	13.50	C	全面風化
27	A−2	Ⅱb	3.2	3.0	1.4	17.00	A	
28	D−5か	Ⅲa	3.5	3.4	1.0	11.00	C	
29	B−5い	Ⅲa	3.4	3.2	0.8	10.25	A	
30	B−4し	Ⅲb	3.5	3.1	1.0	14.50	A	
31	B2−C5 No.3	Ⅳb	3.3	3.1	1.0	14.25	A	
32	A−4	Ⅱb	3.2	3.1	1.0	13.50	A	
33	C−5お	Ⅳa	3.3	3.1	1.3	17.25	A	
34	C−4き	Ⅲb	3.4	3.3	1.1	14.00	B	
35	表採		3.0	2.9	1.0	13.00	A	
36	B−3し	Ⅲb	3.6	3.2	1.0	12.75	B	
37	1号住北ピット No.1		3.3	3.1	1.0	11.75	C	
38	A−5	Ⅱb	3.3	3.0	1.1	13.75	C	
39	B−3あ	Ⅱb	3.2	3.0	0.8	10.00	B	
40	あ−3G	Ⅱb	3.0	3.0	1.1	10.50	A	
41	B−3た	Ⅲa	3.3	3.0	1.1	13.00	B	
42	B−3せ	Ⅱb	3.3	2.7	1.1	11.00	C	
43	B−3さ	Ⅱa	3.5	2.8	0.8	9.25	D	
44	C−4け	Ⅲa	3.1	2.6	1.1	9.50	C	
45	D−5か	Ⅲa	2.9	2.8	0.9	6.50	D	
46	C−3う	Ⅱb	2.9	2.6	0.9	9.50	D	
47	D−4せ	Ⅱb	2.5	2.7	1.2	10.25	C	
48	C−3か	Ⅱb	2.7	2.8	1.0	8.00	D	
49	B−3い	Ⅲb	2.9	2.4	1.0	7.75	A	
50	C−3あ	Ⅱb	4.6	(2.5)	0.9	13.50	C	1／2
51	B−4き	Ⅱb	3.0	2.3	0.9	6.50	D	
52	A−3	Ⅱb	2.7	2.6	0.9	8.25	A	
53	D−3く	Ⅲa	3.7	(3.5)	1.2	15.25	C	1／5
54	D−4こ	Ⅱb	4.3	3.1	1.0	15.00	D	1／5
55	A−2	Ⅱb	2.6	2.6	1.1	9.25	A	
56	フク土		2.6	2.3	0.8	6.00	B	
57	B−4う	Ⅱb	2.8	2.1	1.3	8.75	C	
58	B−1 No.893	Ⅲb	2.2	2.1	1.2	5.75	D	
59	C−5う	Ⅱb	2.0	1.9	0.9	4.00	A	
60	B−2〜C5	Ⅳb	3.9	3.5	0.9	16.50	D	
61	フク土		3.8	(3.7)	1.0	19.00	D	1／5
62	B−2〜C5	Ⅳb	4.0	(3.1)	0.6	7.75	C	1／6
63	D−5う	Ⅱb	2.7	(2.6)	0.8	7.75	D	1／6
64	フク土		3.6	(2.4)	1.4	18.00	D	1／2
75	B−4か	Ⅳa	4.2	(4.1)	1.0	15.50	C	2／3
66	D−5あ	Ⅱb	4.5	(3.2)	1.0	23.00	D	2／3
67	D−5う	Ⅱb	4.7	(3.0)	1.0	22.25	C	1／2
68	フク土		5.6	(2.7)	1.0	20.00	D	2／3
69	B−4し	Ⅲb	4.6	(2.7)	1.0	15.00	B	1／2
70	4T		4.0	(2.8)	1.0	14.50	B	1／2
71	B3〜C5	Ⅳb	4.5	(2.8)	1.0	14.75	C	1／2
72	D−3そ	Ⅱa	4.5	(2.7)	0.9	15.25	D	1／2
73	E−4え	Ⅱb	4.7	(3.5)	0.9	22.00	D	2／3
74	B2〜C5	Ⅳb	4.0	(2.4)	0.8	7.75	C	3／4

No.	出土地点	層位	長径 cm	短径 cm	厚さ cm	重量 g	側面調整	欠損
75	A−4T		4.0	(2.5)	0.7	8.75	D	1/2
76	E−5	Ⅱb	3.6	(3.3)	1.3	20.00	D	3/4
77	フク土		4.4	(2.8)	1.0	16.00	D	1/2
78	D−4せ	Ⅲa	4.3	(2.5)	1.1	13.00	D	1/2
79	4T		3.2	(2.1)	1.0	12.00	D	2/3
80	フク土		3.9	(2.8)	0.8	12.00	D	1/2
81	4T		4.7	(2.2)	2.5	16.50	C	3/4
82	B−3て	Ⅳa	4.3	(2.1)	0.9	9.80	D	1/2
83	pit13	Ⅲa	3.5	(2.5)	0.8	9.50	D	1/3
84	D−3す	Ⅱb	3.5	(2.7)	1.0	10.60	D	1/2
85	B2−C5	Ⅳb	3.5	(3.4)	1.0	13.75	D	1/5
86	E−5き	Ⅳa	3.6	(3.2)	0.9	12.25	D	1/3
87	4T		3.7	(2.5)	1.0	12.25	D	1/2
88	B1 No.22	Ⅱa	3.3	(2.8)	1.2	12.00	C	1/2
89	E−3え	Ⅱa	3.7	(2.3)	1.0	11.00	D	3/4
90	D−3け	Ⅱb	3.1	(2.5)	1.0	10.00	D	3/4
91	C−3す	Ⅱb	2.4	(1.8)	1.0	11.50	D	2/3
92	注記なし		4.0	(1.5)	1.0	7.75	D	2/3
93	B−3た	Ⅲa	3.6	(2.5)	0.8	8.25	D	1/2
94	4T		3.8	(2.6)	1.3	15.25	D	1/3
95	C−4こ	Ⅲa	4.4	(3.0)	0.8	15.50	D	1/2
96	D−5お	Ⅲa	3.5	(2.5)	1.0	10.00	B	1/2
97	B−3か	Ⅲa	3.2	(2.0)	1.2	7.75	B	1/2
98	フク土		3.1	(2.0)	0.7	5.25	D	1/2
99	D−5か	Ⅱa	2.9	(1.6)	1.1	7.00	D	1/2
100	F−3	Ⅱa	3.8	(2.8)	0.8	10.25	D	1/2
101	A−4T		3.1	(2.1)	1.1	8.50	D	1/2
102	A−5T		3.5	(2.0)	1.0	8.75	D	1/2
103	E−3え	Ⅱa	3.4	(2.2)	1.1	8.75	D	2/3
104	E−3く	Ⅱa	3.5	(2.5)	0.9	9.75	D	1/2
105	B−3い	Ⅲa	2.5	(1.8)	0.9	5.50	D	3/4
106	C−4お	Ⅱb	3.0	(1.5)	0.9	5.75	C	2/3
107	D−3お	Ⅱb	3.0	(2.1)	0.9	6.50	D	2/3
108	C−4お	Ⅲa	3.3	(1.6)	1.1	6.00	D	1/2
109	C−5お	Ⅳa	3.4	(2.7)	1.4	9.75	C	1/2
110	A−2−5T		3.2	(1.2)	1.2	5.50	D	3/4

3）石　器

本遺跡から出土した石器の種類は多種多量であった。主な石器の分布状況は第89、97、98図のとおりであるが、焼礫、礫、土器片等の分布状況と特に区別されることはない。これは遺跡の調査範囲が埋没谷の斜面にあるため遺物の原位置を保ちにくく、遺物が同一条件で流動、堆積したと考えられる。

出土層位については、編年の指標となる土器と同じく、早期撚糸文系土器には礫器・スタンプ型石器が、中期の土器群に打製石斧・掻器等ほとんどの石器が伴う。円形礫・土製円盤はほとんど同一層に分布しており、同時期と考えて良い。また黒燿石微細剥片は同一層から出土しており、他層からは出土していない。時期的に限定されるだろう。以下、これらの石器の種類を分類に従って説明を加える。出土層位、属性等について第10表を参照されたい。

A　石　鏃	I　石　皿	Q　自然礫
B　スタンプ型石器	J　円形礫	R　焼　礫
C　礫　器	K　円盤型石製品	S　その他
D　打製石斧	L　棒状礫	
E　磨製石斧	M　石　錘	
F　掻　器	N　磨　石	
G　石　匙	O　敲　石	
H　石　錐	P　剝　片	

A 石　鏃（第117図2、第118図34、45、46）

1は1Hより出土した小形品である。34は加熱を受けている。未製品であろう。両方とも黒燿石製である。45は基部の抉りが比較的明瞭で草創期所産と考えられる石鏃に近似するが、46と伴う出土層位から早期撚糸文土器に伴うだろう。チャート製である。

B スタンプ型石器（第110図）

1類（第110図172、175、177）体部に加工が見られず、打割面からの細かい剝離が見られるもの。打割面は1回の剝離によって作られ、研磨痕が観察できる。177の研磨痕は明瞭でない。

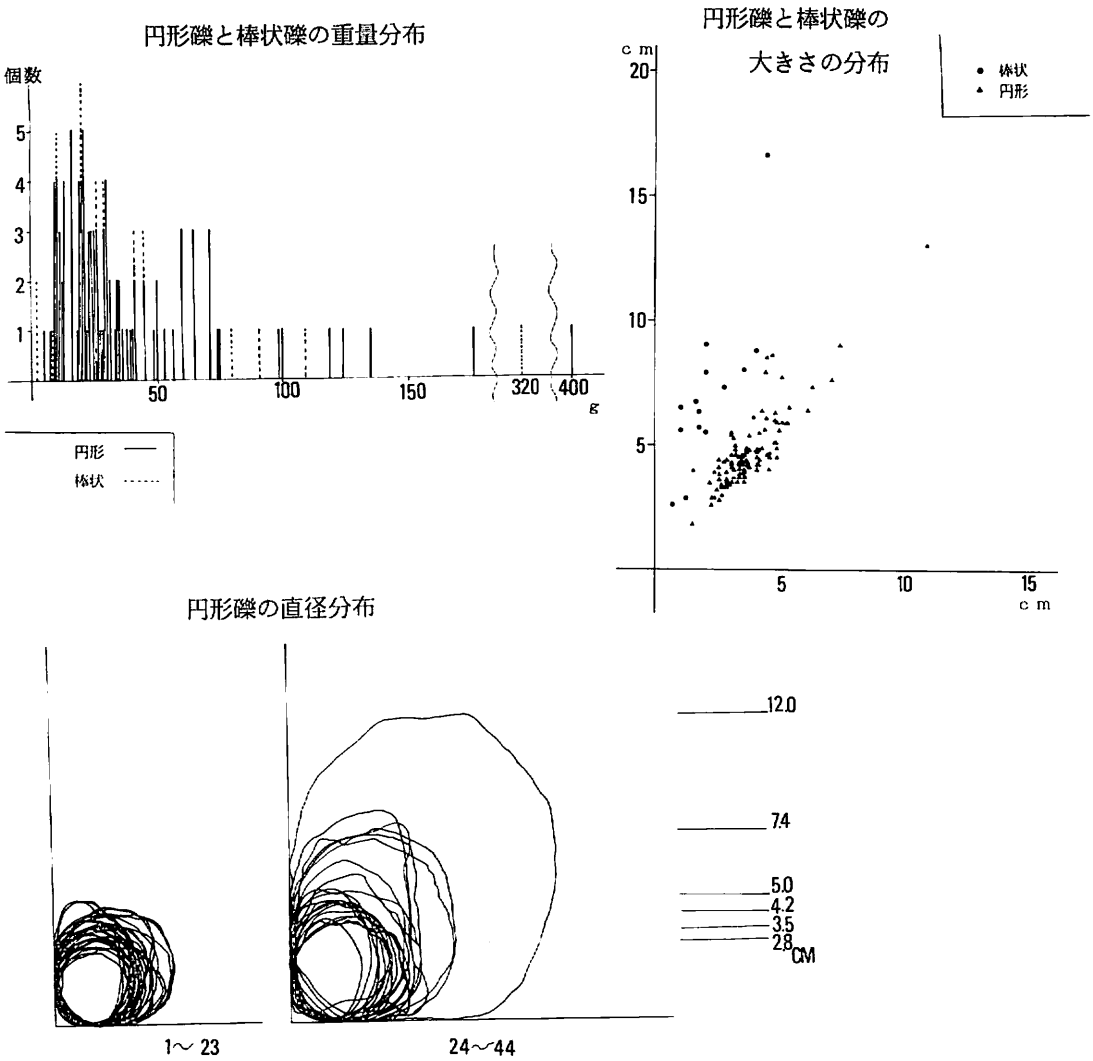
2類（第110図171、173、174、176）体部に加工が施されているもの。いわゆる凡字型石器である。171の打割面は3回の剝離による。他は1回の剝離によって作られる。研磨痕が観察できる。

C 礫　器

1類、片刃のものを一括した。a. 長方形及び楕円形礫の長軸を刃部としたもの、（第109図164、第166、196、198、199、202）

b. 長方形礫の2側縁を刃部としたもの（第111図179、180、第112図、195第113図220）

c. 長方形礫の3側縁を刃部としたもの（第112図200、第113図、214）d. 正面に分割面を持ち2側辺から正面にかけて刃部をつくるもの（第109図160、165、170、第111図182、183、184、185、190、第112図201、203、205、206、第113図223）



第96図　上前原　円形・棒状礫計測図

2類、両刃のものを一括した。a. 長方形の楕円形礫の1～3側縁に刃部加工を施したもの、(第109図162、167、第111図186、188、191、192、第113図209、210、211、213、219、221、222、第114図、225、227、231) b. 全周に加工を施し亀甲状のもの (第109図166、168、第111図189、第112図197、第113図207、216、217、第114図231、232)

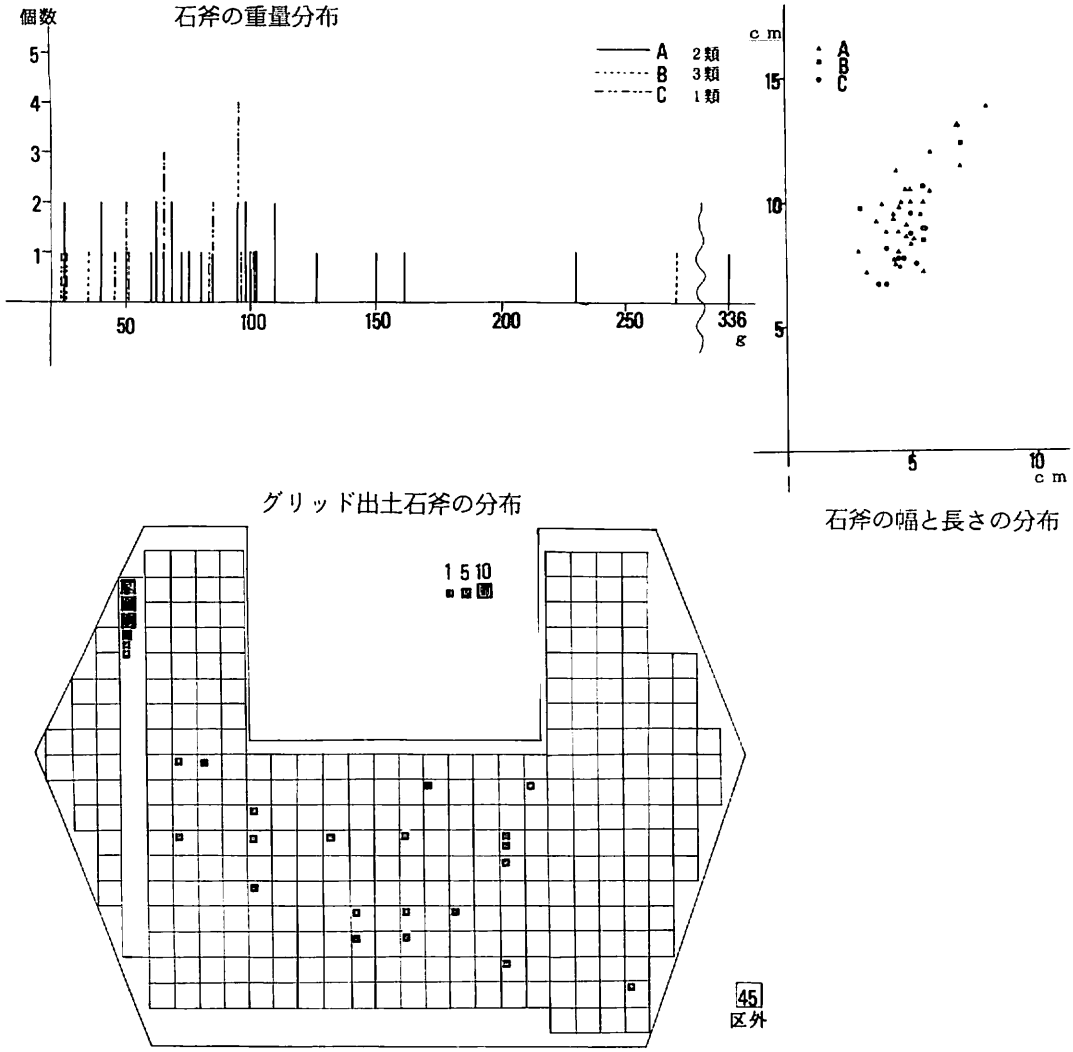
D 打製石斧 (第104～109図)

1類　分銅形を呈するもの 58、59とも比較的大型で自然面を残している。

2類　バチ形を呈するもの a. 側縁がやや内弯するもの 60～71、73～80、83、99、100、102、110、120、127、131～156 b. 側縁が直線的で基部を細かく作り出しているもの72、93、101、111、

3類　短冊形を呈するもの81、82、84～90、94、96～98、103～109、114～119、121～130

4類　不定形なもの95 、5類　楕円形を呈するもの178 、6類 8cm未満で完形な小形のもの、



第97図　上前原　打製石斧計測図

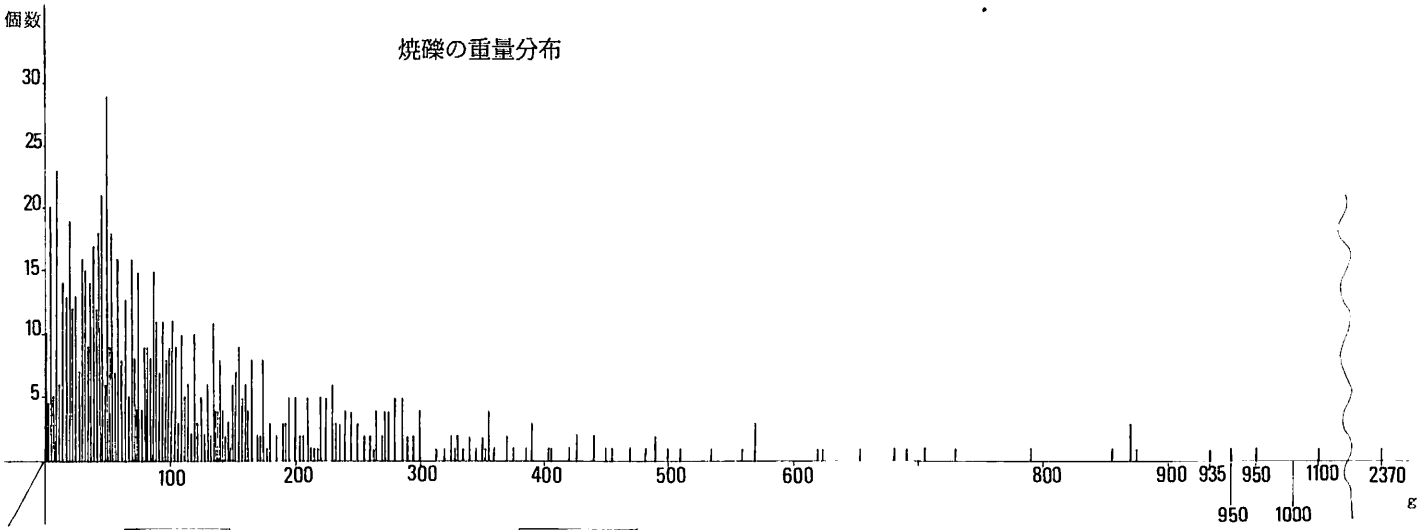
91、92、112、113、152、154～159、91、92は短冊形、他はバチ形を呈する。小形品の中でも157～159は5cm大と特に小形品である。他は、刃部の破損品である。187、208、212、215、218、224、229がある。

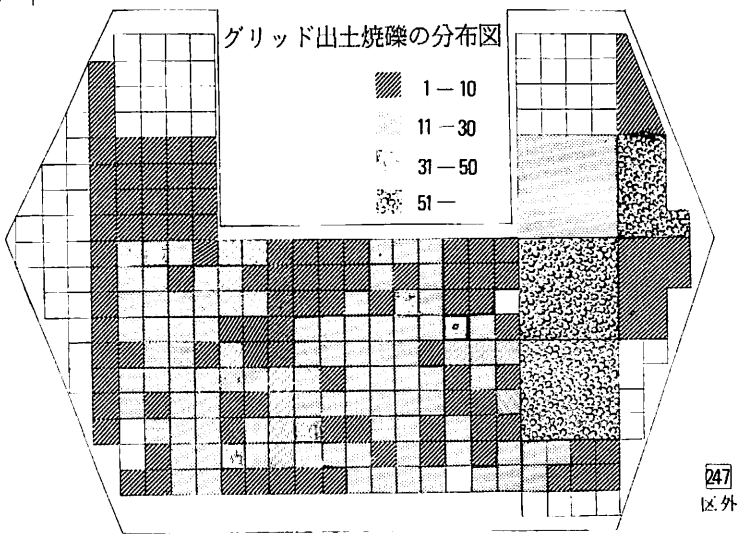
E 磨製石斧（第110図 193）

全面を良く研磨された短冊形の石斧である。刃部を欠失している。本遺跡では磨製石器の出土は本例の他に刃部の小破片が出土しているだけであった。

F 掻　器

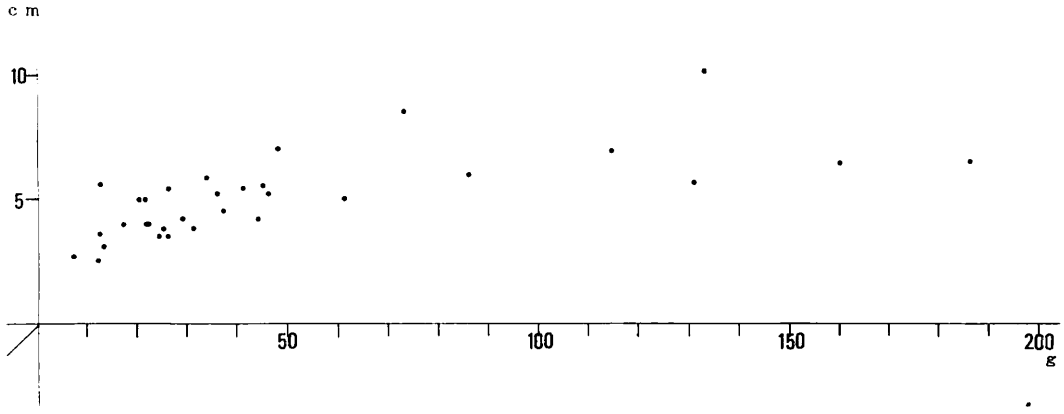
1類　片側縁を刃部としているものを一括した 226、228、230、2類　両側縁を刃部としているものを一括した。233、236、 3類　表面に大きく自然面を残し、刃部加工は表面から正面方向に行なわれている。163、169、 4類　剝片を素材とし下縁を刃部としている。161、181、235



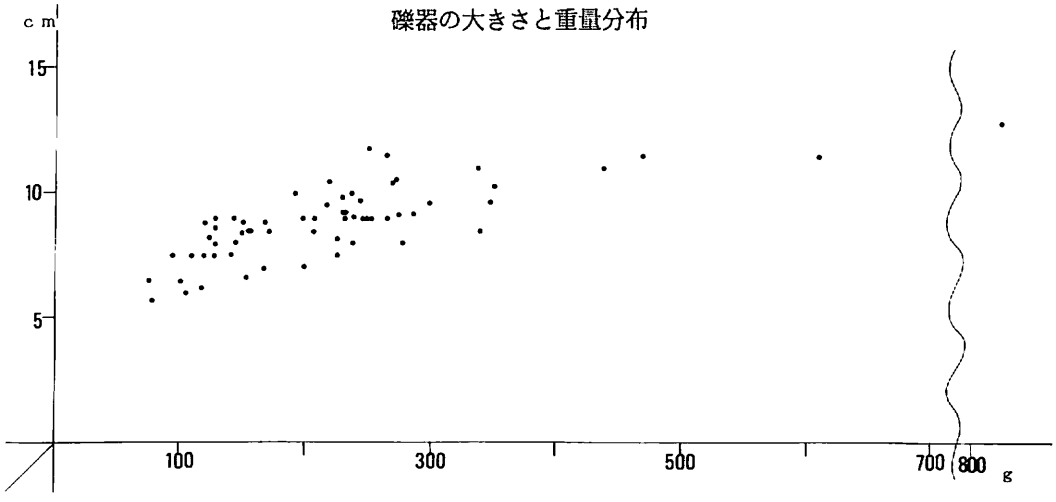


第98図　上前原　焼礫計測図・出土分布図

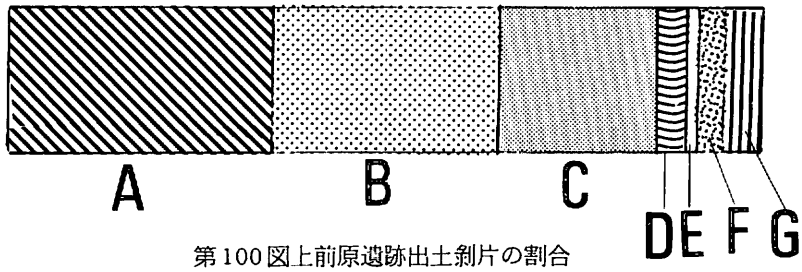
石核の大きさと重量分布



礫器の大きさと重量分布



第99図　上前原・石器計測図



第100図上前原遺跡出土剥片の割合

A	微細剥片	300コ	34.9%
B	小型剥片	253コ	29.4%
C	中型剥片	186コ	21.6%
D	大型剥片	37コ	4.3%
E	使用痕のある剥片	11コ	1.2%
F	再生剥片	27コ	3.1%
G	黒燿剥片	45コ	5.2%

G 石　匙（第118図47）　チャート製、つまみ部分の小片であるが、横型石匙であろう。

H 石　錐（第118図44）　完存品である。錐部が長く細かく丁寧な調整が施されている。

I 石　皿（第114図234）　石皿の小破片である。凹穴が残っている。他に接合しないが小片が出土している。

J 円形礫（第102図）　　これらは自然の河原であり、砂岩、花崗岩を主体としている。大まかな形状から小・中・大と区分出来る。欠損部分が認められる礫もある。a. 小型品1～33、35、36、中型品34、37、38

K 円盤型石製品（第103図）

明らかに円形を意識して作出しようとしており、40、42の自然偏平な礫を薄く剝離した石材を用いる39、41～44がある。形状から小・中・大に区分できる。a. 小型品40は、正面に自然面を残し裏面は数回の剝離によって平面にする。周縁は細かな打ち欠きの後研磨されている。44も同様であるが43は研磨されていない。b. 中型品39、41がある。偏平楕円の自然礫を使用しており、この自然面を生かし、周縁のみに打ち欠きを施している。研磨はされていない。42は打ち欠き調整の後、加熱を受けており表面が赤変している。

L 棒状礫（第103図）

楕円または偏平な棒状礫である。自然な欠損を除いてほとんど加工等が施されていない。57は石棒の破片と考えられる。

M 石　錘（第115図）

244、245がある。偏平楕円礫の両端を打ち欠き縄止とする。

N 磨　石（第115、116図）

1類、砂岩、花崗岩等の偏平長楕円礫を一括した。246～256、267、274がある、平坦部を主要な研磨面としている。

2類　砂岩、花崗岩等の円、楕円礫を一括した。204、242、257～255、268～273がある。257は周縁に敲打痕がある。263は正面に浅いくぼみを有する

O 敲　石（第114図）

1類　大形棒状礫を素材とした237は、先端部と側縁上部を敲打面としている。

2類　小型棒状礫を素材としたものを一括した。238、240、241は　両端部分に敲打による剝離痕が見られる。

3類　比較的大形の偏平礫を素材とした239は一端に敲打による欠損が見られる。

P 剝　片（第117～119図）

1類　黒燿石を素材とした剝片を一括した。第117図1.3～26、第118図27～33、35～43がある。

2類　チャートを素材とした剝片を一括した。（第119図48～78）48、49、60、71、78には、一部に使用痕が認められる。

3類　安山岩、花崗岩、砂岩等の打製石斧や掻器に伴う剝片が微細なものから大型のものまで多量にある。本類は図化を省いた。

Q 自然礫

石質はチャート、砂岩、粘板岩、安山岩等の全く加工を加えられていない円形礫、破損礫で占められている。5～10cm大、20～30cm大の円・楕円礫が8割を占める。この中で5cm未満の円形礫はJの項に別記した。

R 焼　礫

石質、法量等はQ自然礫と何ら異なるところがない。すべて加熱を受け、赤変又は崩壊している礫を本類とした。破損礫が6割以上を占めるが完形の礫は80～120g前後のものが主となる。なお覆土中の焼礫は数に入れないため、実数は4,058個以上であったことを付記しておく。

小　結

円盤形石製品の中で42は他の小中形品の倍近い大きさを有するが、これは後者と性格を異にするためだろう。42に似た遺物は縄文～弥生時代に属する有孔円盤状石斧の未製品がある。この製作具として敲打器、穿孔具については棒状礫が知られている（文89）が、本遺跡でも出土があった。完成品や穿孔過程を示す他の遺物が無いので可能性の指摘にしたい。

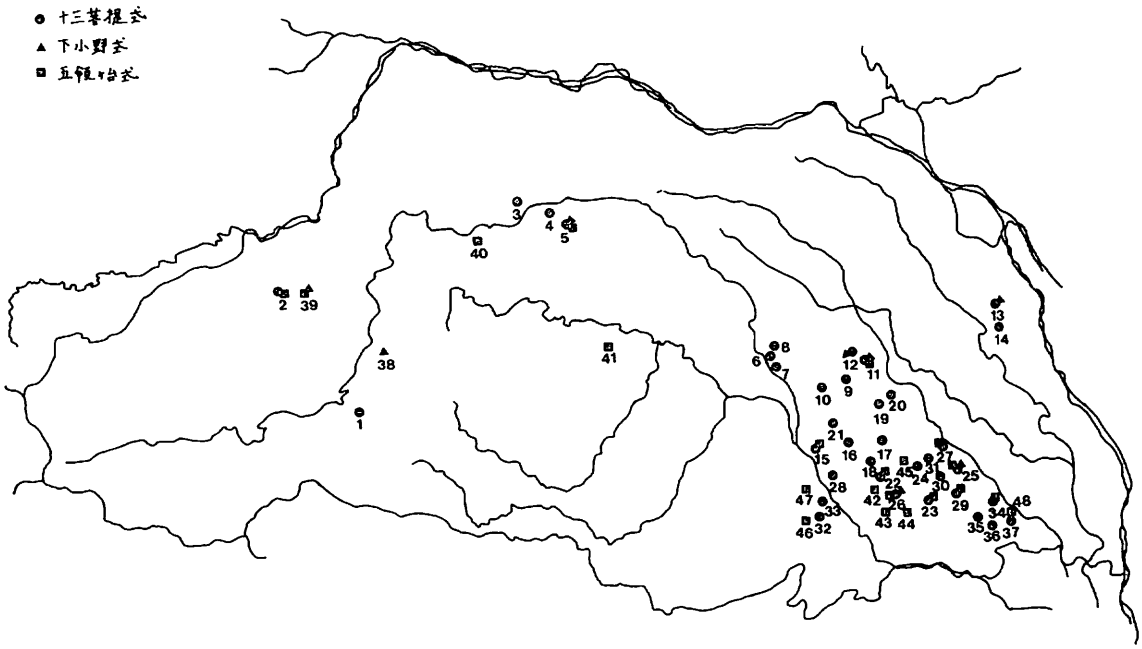
スタンプ形石器は7個検出されたが、小田静夫氏のとる（文90）素材の形状による分類では、棒状礫：Ⅰ類が1個偏平礫：Ⅱ類が6個とに分けることができる。撚糸文土器に伴うことが多くの遺跡で認められており、上前原遺跡では井草Ⅱ式から稲荷台式までの間に当る。

4）縄文時代前期末中期初頭の遺物

第5群C類166は前期末の十三菩提式に比定できる資料である。十三菩提式土器については、今村啓爾氏による変遷区分があり、4段階の変遷がそれぞれ時期区分を示すとしている。上前原遺跡の166は渦巻状の隆線に結節の浮線文を巻きつけX字状としたジグザクのソーメン状浮線文や結節文が加えられる。口縁は内側へ丸く肥厚し、大きな波状をなし体部で屈曲する。十三菩提式土器の中では後葉に位置づけるだろう。本遺跡では明らかな十三菩提式は一片だけであるが、第5群B類とした撚糸文土器は早期にかかる撚糸文土器とは異なった一群で十三菩提式土器に伴うもの（文79）と考えられる。また十三菩提式土器を出土する遺跡からは多くの黒燿石片が伴うという指摘もあり（文91）、本遺跡からも黒燿石片が44個、チャート片が44個出土している。出土層位もⅡ～Ⅲb層と土器と大差なく、前期末～中期初頭の土器群に属しても良いと考えられよう。

第6群Aは小破片であるが集合沈線三角形刻文を施し、渦巻状の模様構成をしている。口唇上に渦巻形の突起があり口縁断面が内側に突出するなど前代の特徴を有しているところから五領ヶ台式の中でも前葉段階に比定できるだろう。この五領ヶ台式土器には、羽状縄文、結節縄文を施文された粗製の土器が伴うとされており、本遺跡では第6群B類がこれに当ると考えられる。

この下小野式と呼ばれる土器群は五領ヶ台式土器に並行すると考えられており、この例も多いが、時に五領ヶ台式土器を欠いて十三菩提式土器と伴っている例（文92）もあって、実態がすべて解明されているわけではない。

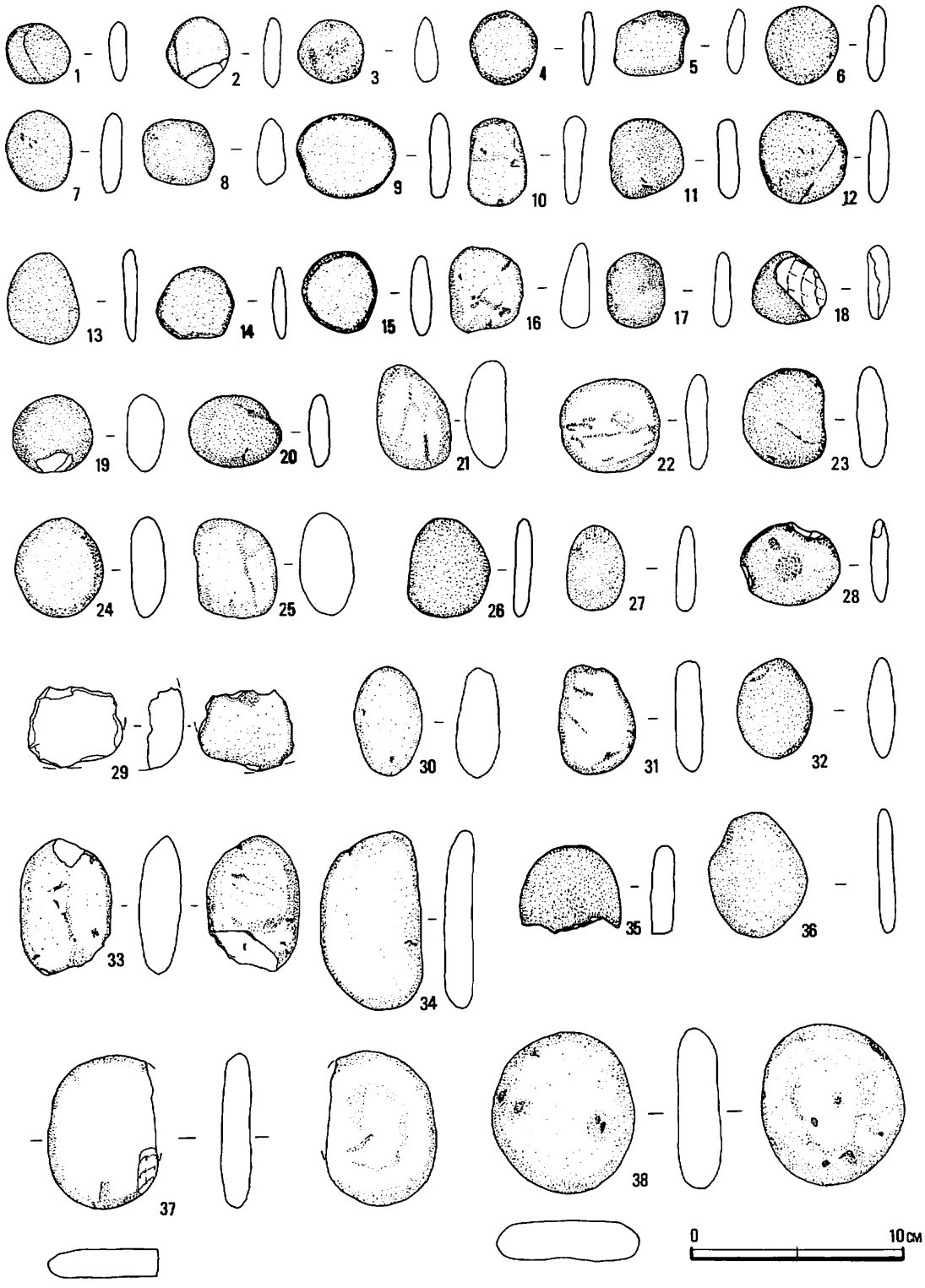


第101図　埼玉県の前期末～中期初頭の遺跡

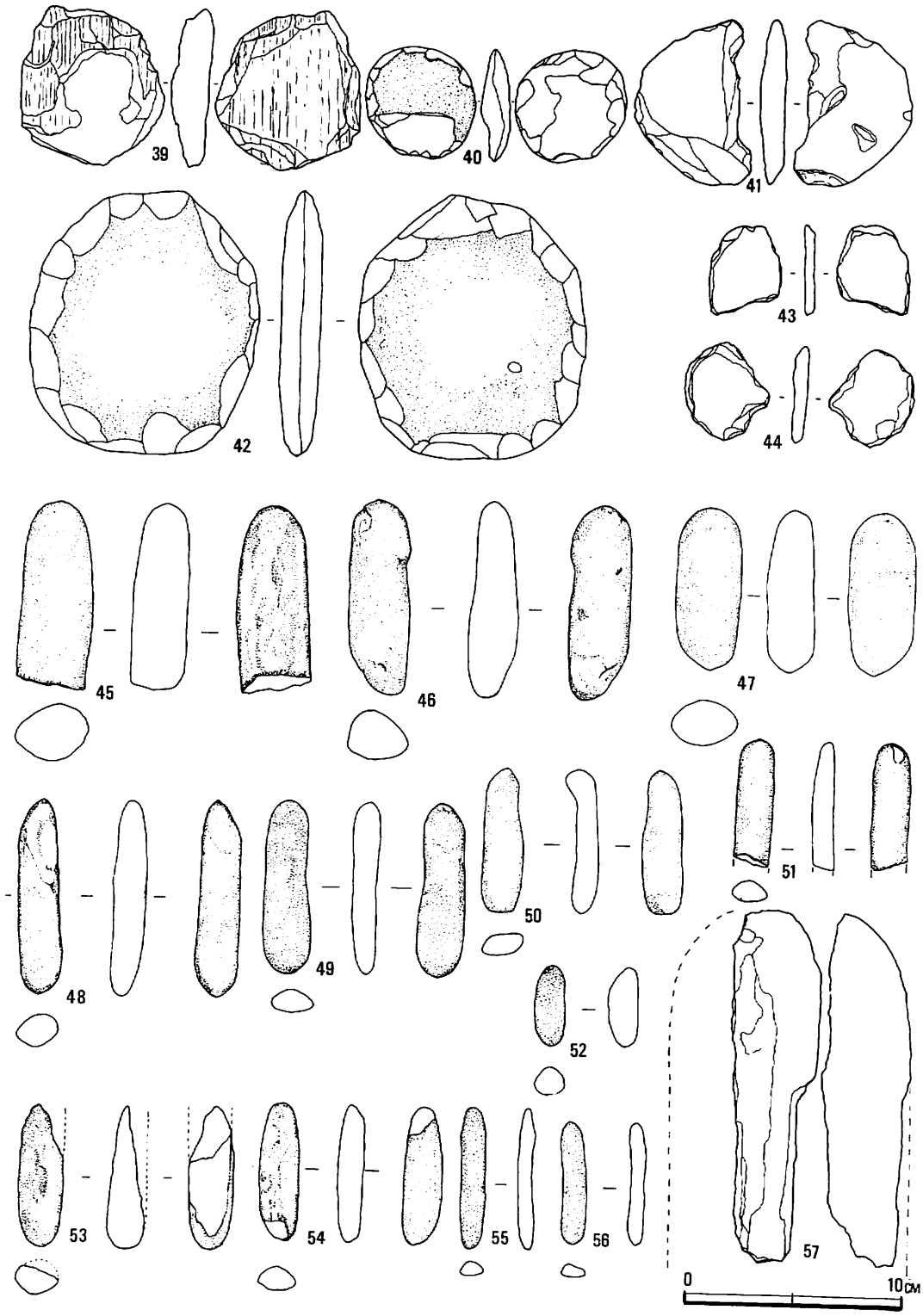
第101図に埼玉県内での十三菩提式・五領ヶ台式・下小野式土器出土の遺跡を掲げた。調査例の多寡にもよるが、大宮台地周辺に割合集中していることが窺われる。しかし、これらの出土例はほとんど小破片であり出土数も十数片に満たない例さえある。復元可能な資料には、浦和市井沼方遺跡（文93）、大宮市鎌倉公園遺跡（文94）がある。秩父地方では吉田町わらび沢遺跡（文95）に完存例がある。江南、櫛引地域でも数ヶ所の遺跡が知られるのみで、入間、比企地方はもっと希薄な地域でありほとんど報告例をみない。

住居跡の検出例はもっと少なく、浦和市根岸遺跡（文96）で五領ヶ台期の住居跡が調査されているにすぎない。この大宮台地の調査例では縄文早期と前期末～中期初頭の時期が同じ遺跡で重なっていることが多いということである。上前原遺跡からも早期の遺物が出土している。

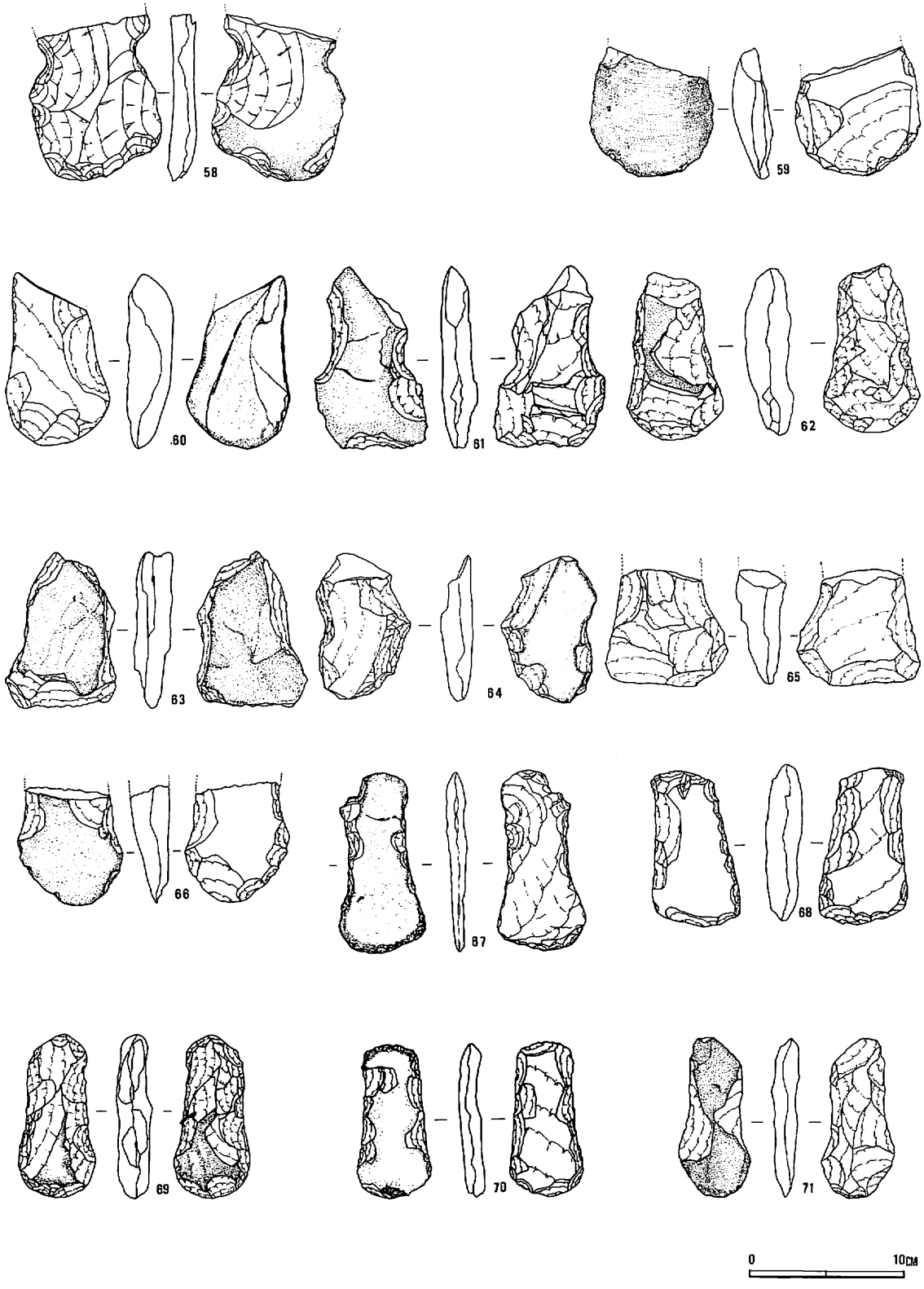
また、上前原遺跡出土の五領ヶ台、下小野式土器については、西関東に広く普及した信州を中心とした踊場式の伝統が見られ、東関東の大木6b以来の系譜を引く五領ヶ台、下小野式に近い印象を受ける。いずれにしろ、比企丘陵の北縁に広がる江南台地は秩父山地より続く丘陵・台地の西端に当り、同時に北東より北武蔵に入って最初の台地でもある。江南台地周辺は南北、あるいは東西の接点に位置していた時期があったのではないかと考えたい。



第102図　上前原　出土石器

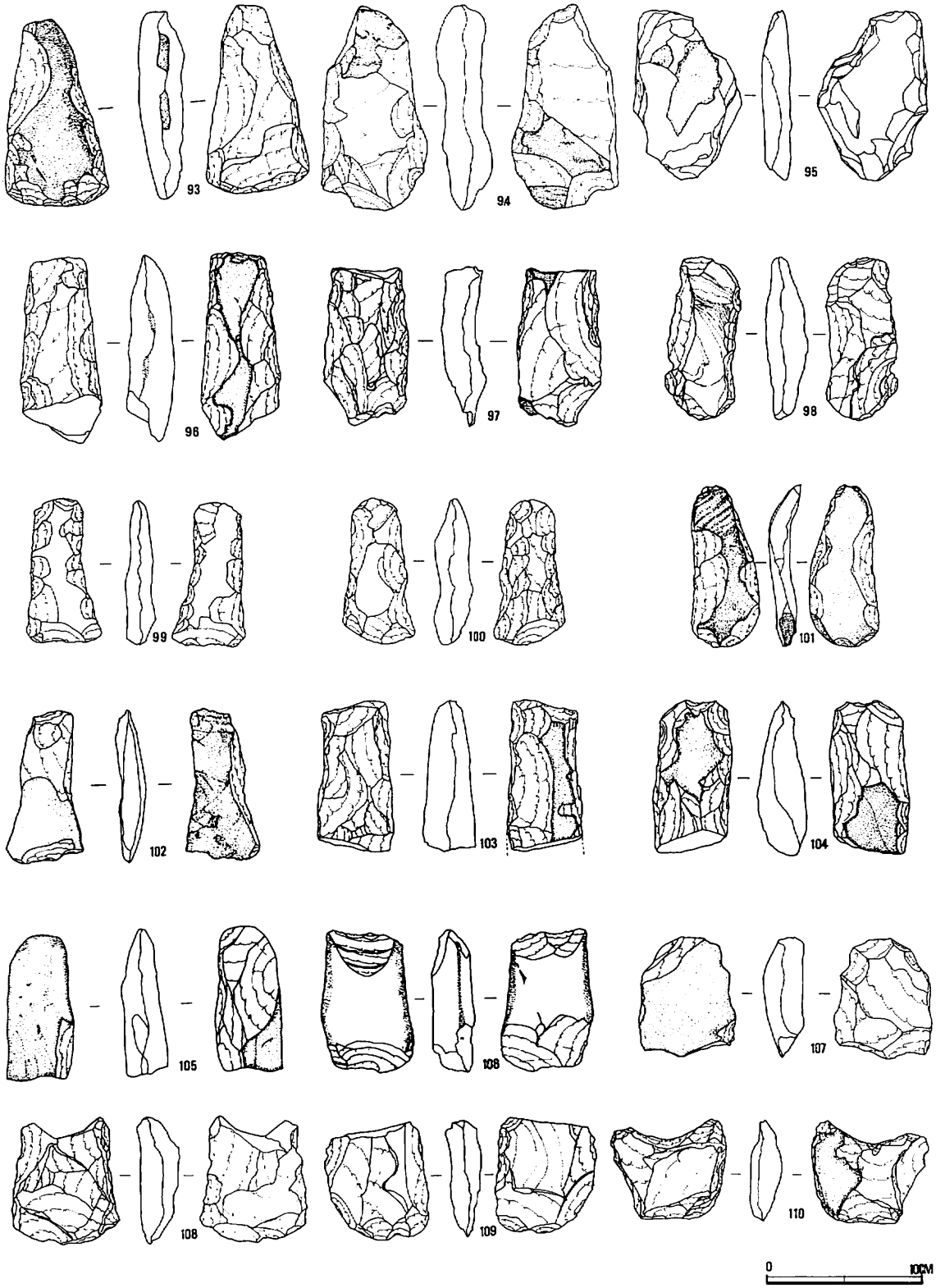


第103図　上前原　出土石器

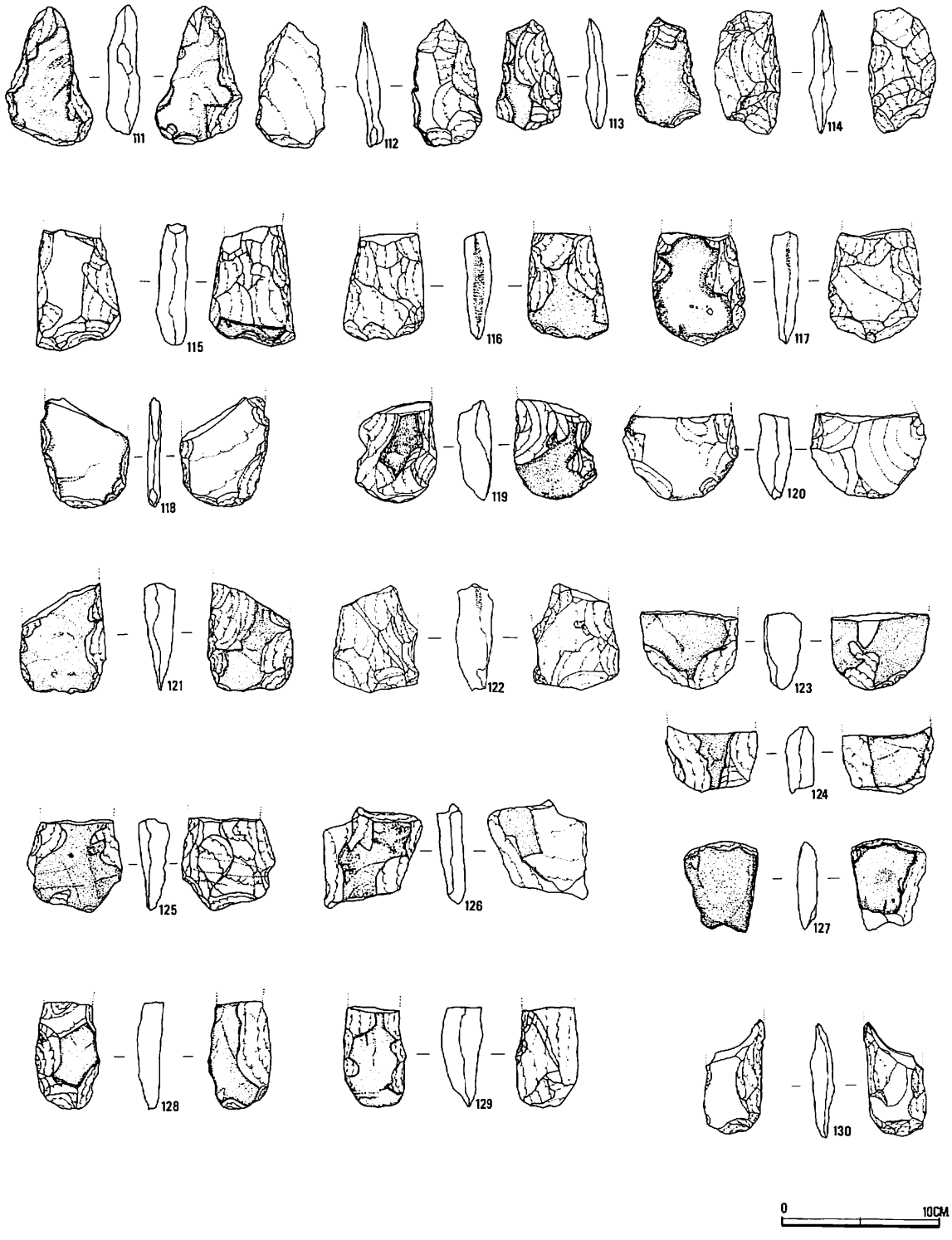


第104図　上前原　出土石器

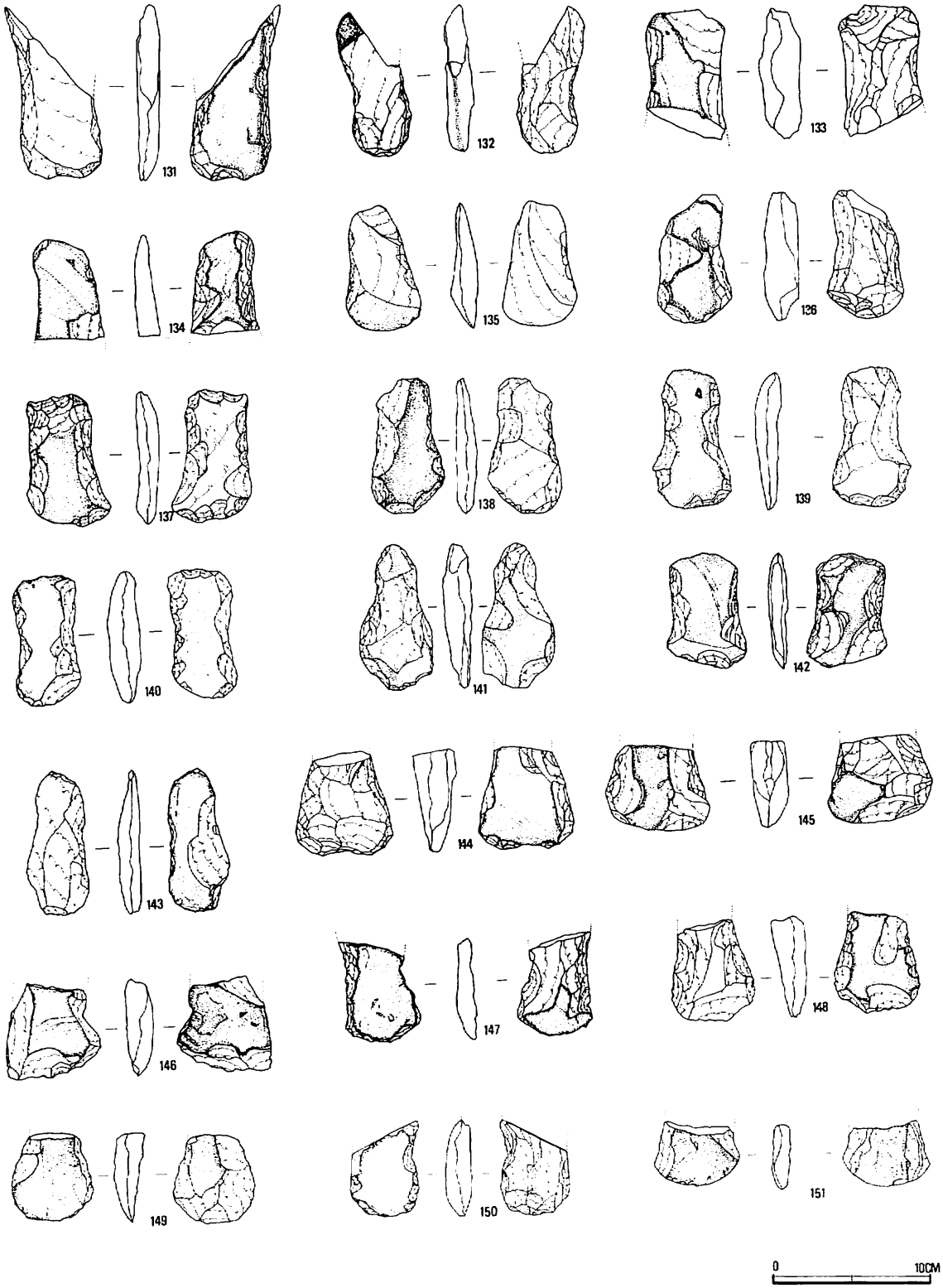
第105図　上前原　出土石器



第106図　上前原　出土石器

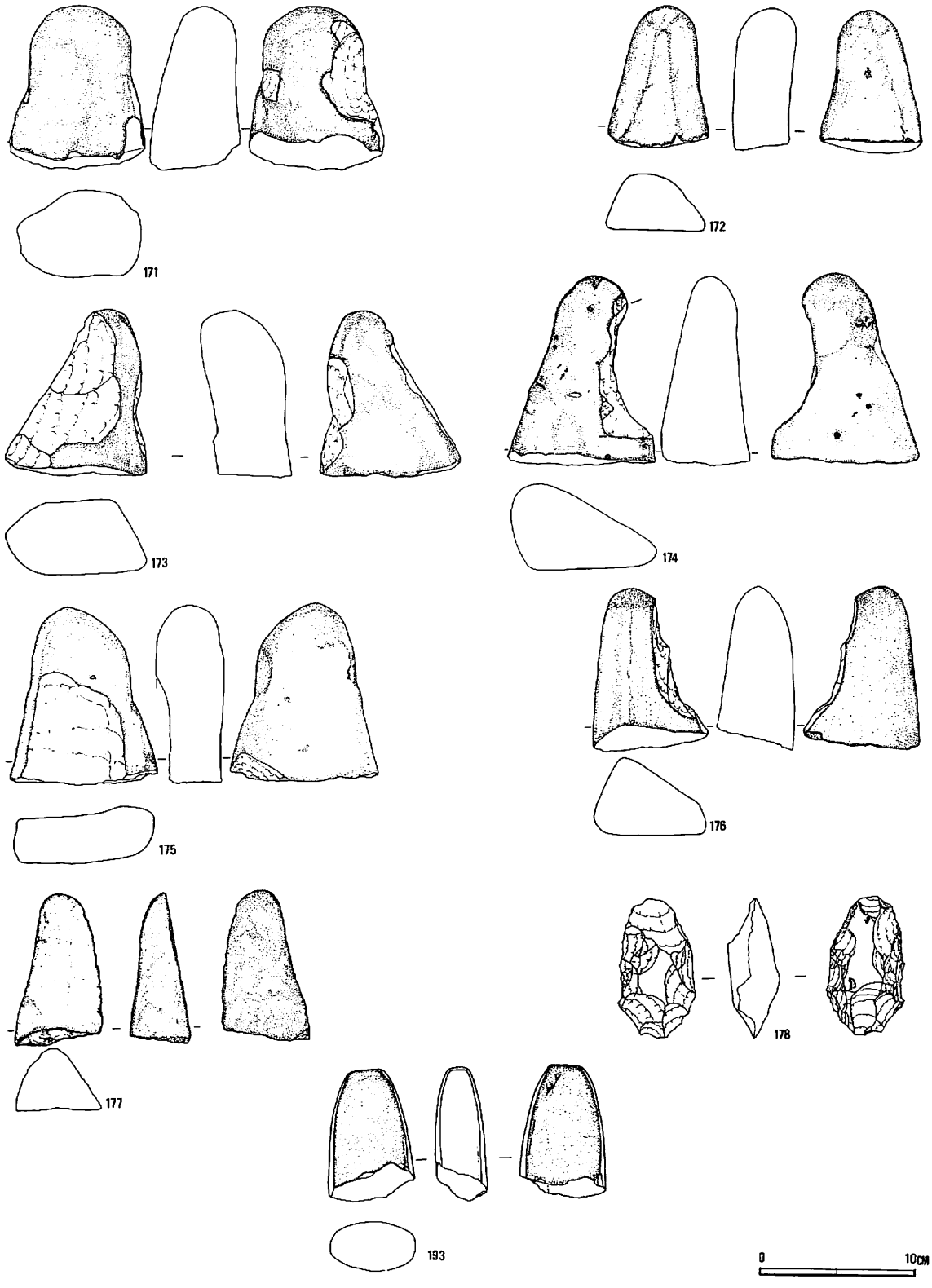


第107図　上前原　出土石器

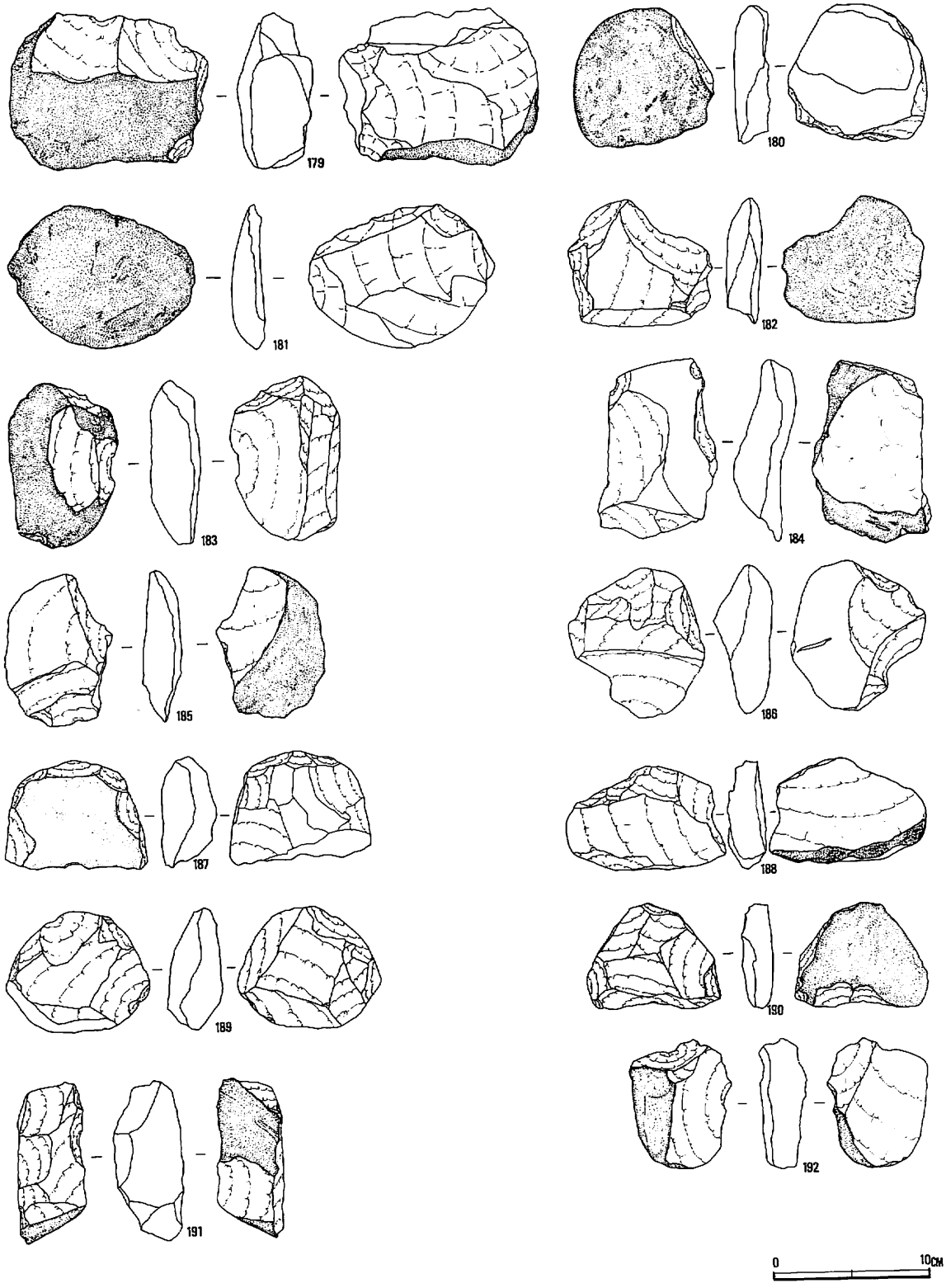


第108図　上前原　出土石器

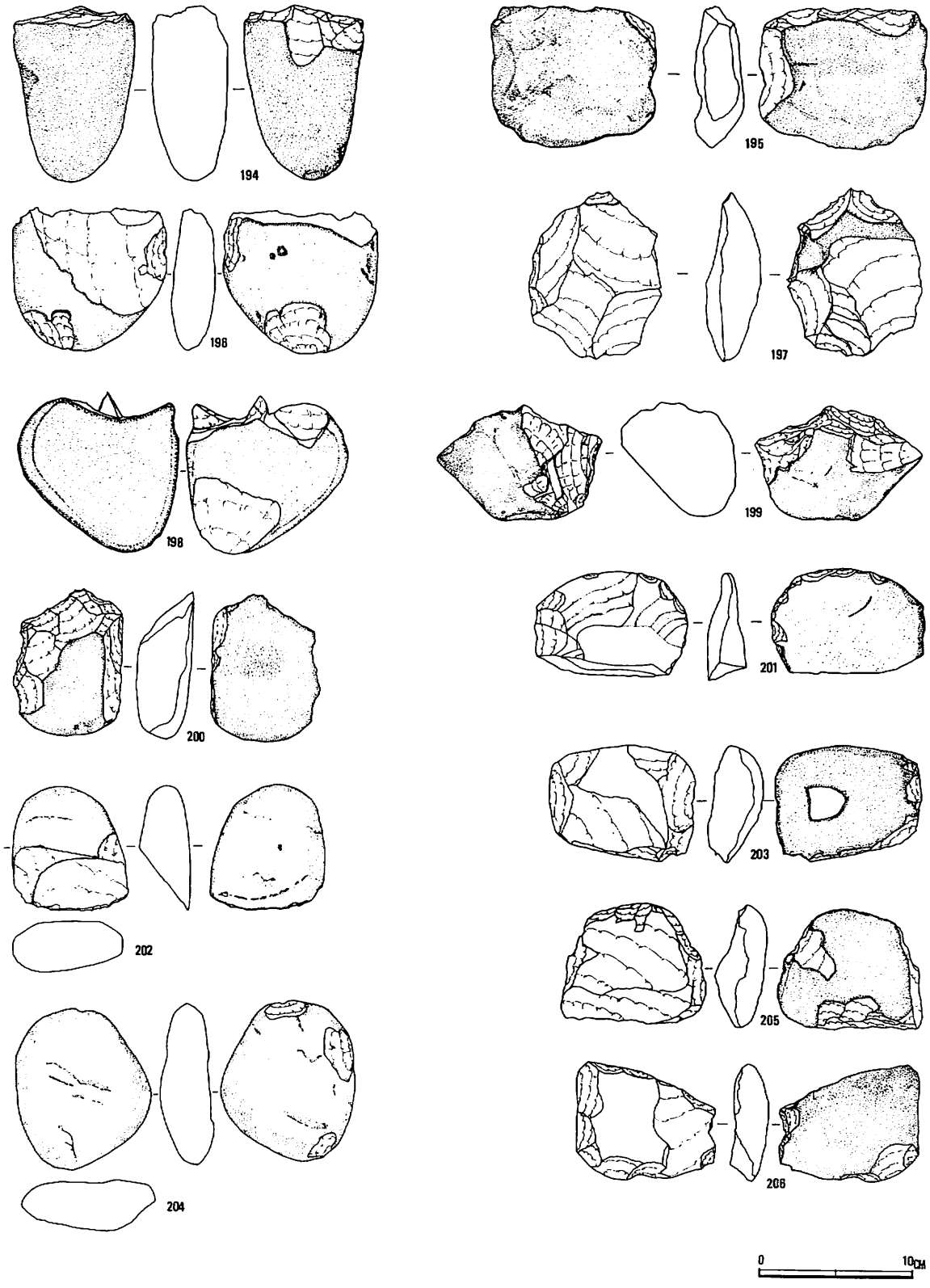
第109図　上前原　出土石器



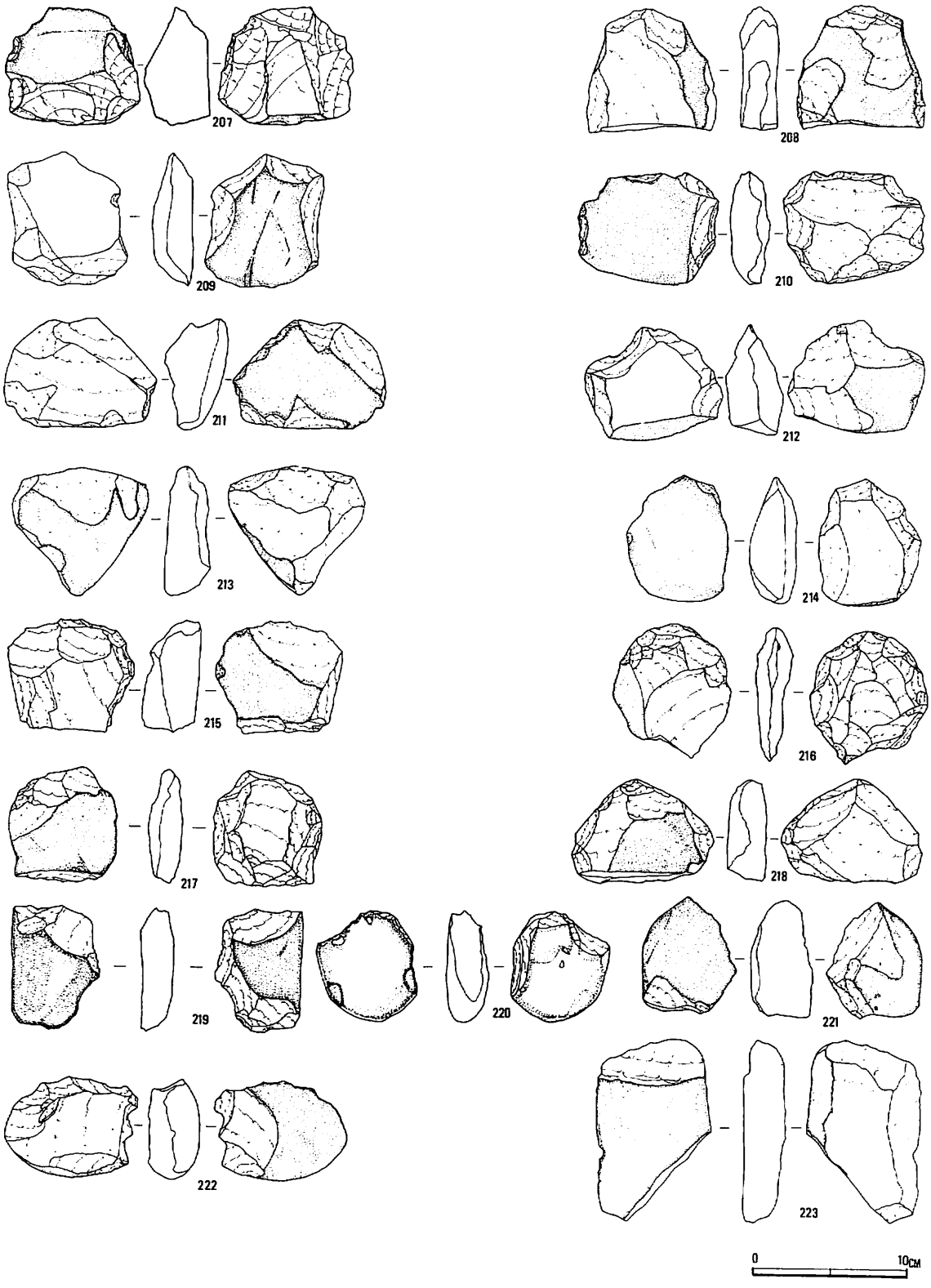
第110図　上前原　出土石器



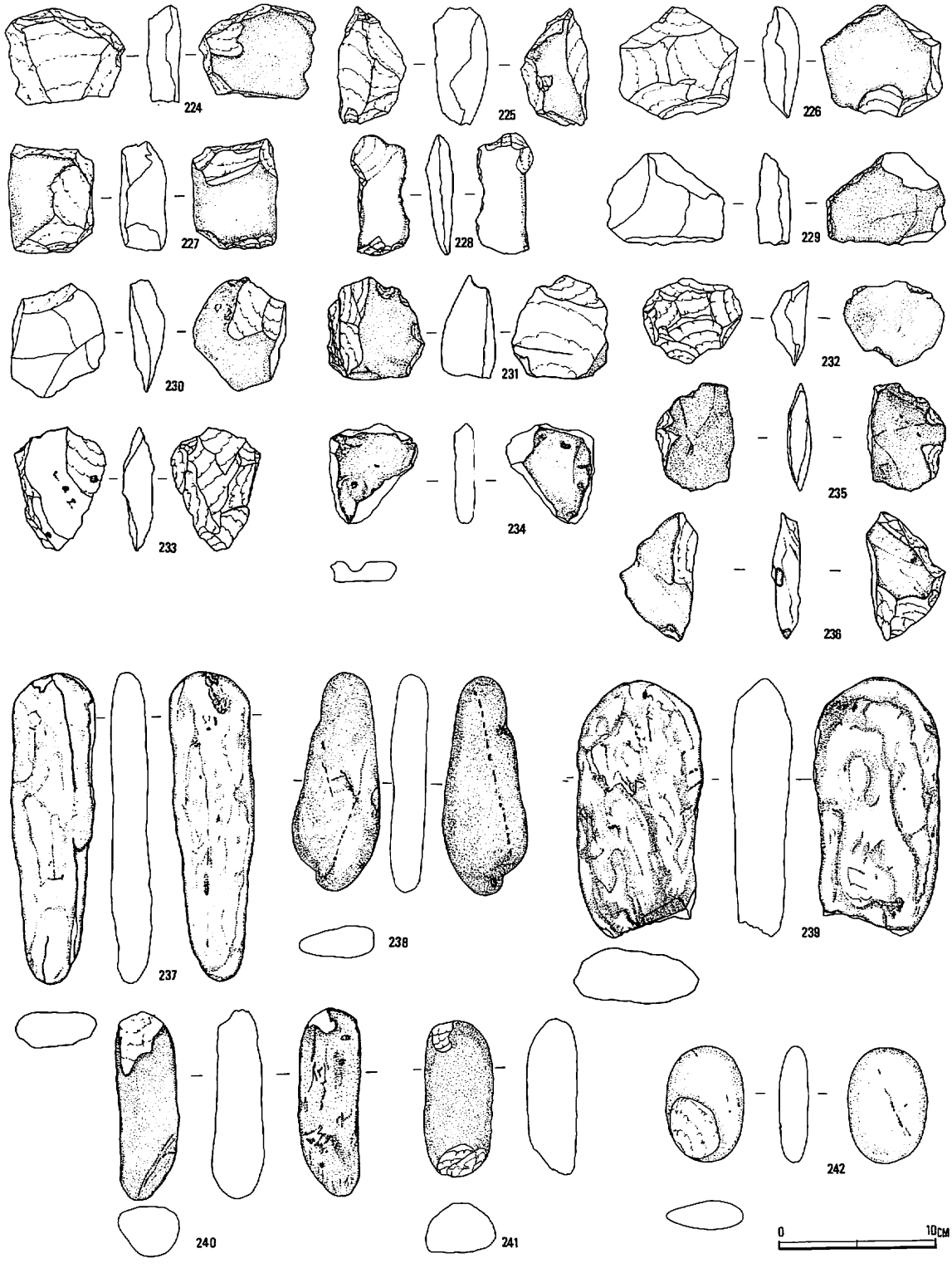
第111図　上前原　出土石器



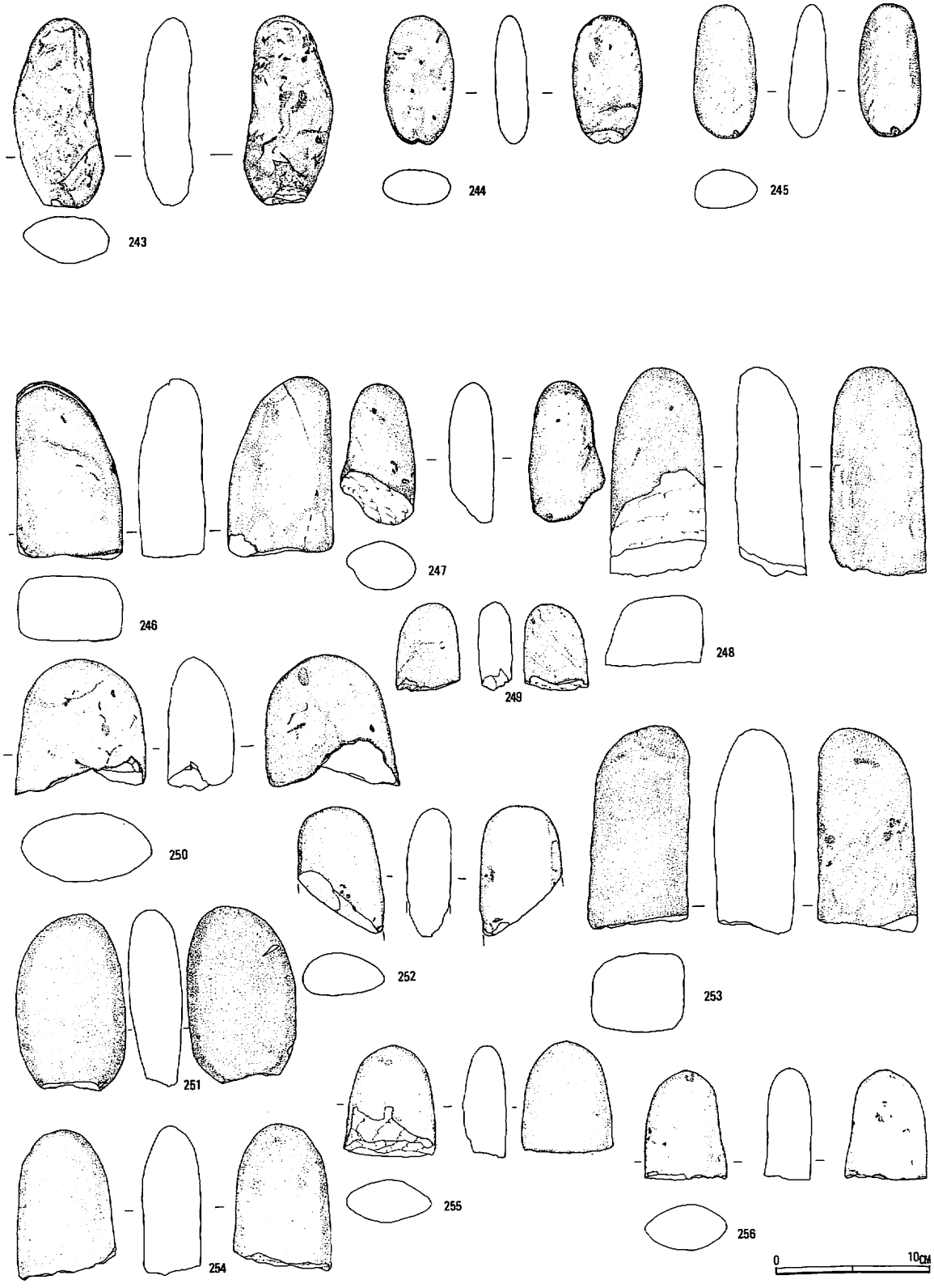
第112図　上前原　出土石器



第113図　上前原　出土石器

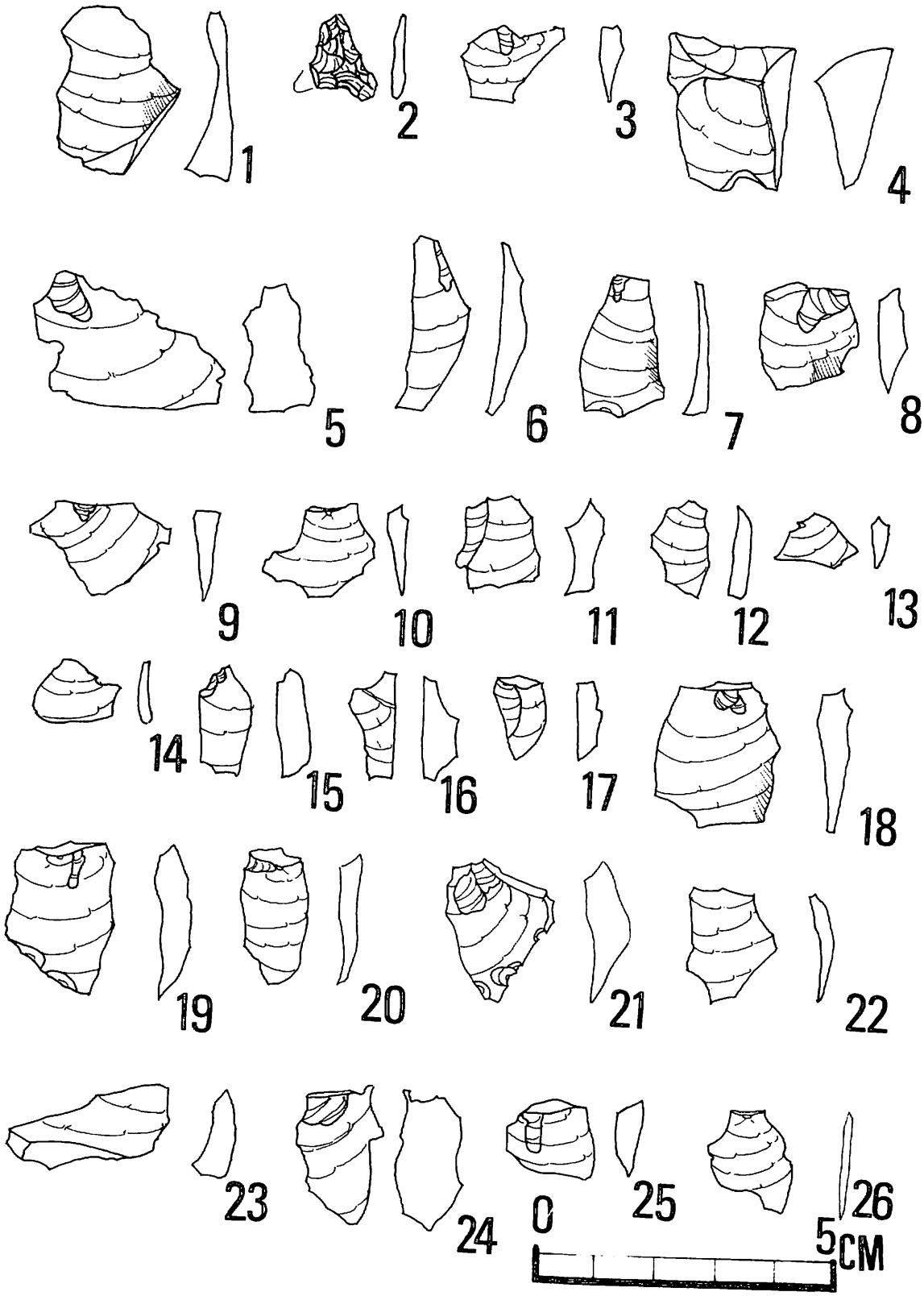


第114図　上前原　出土石器

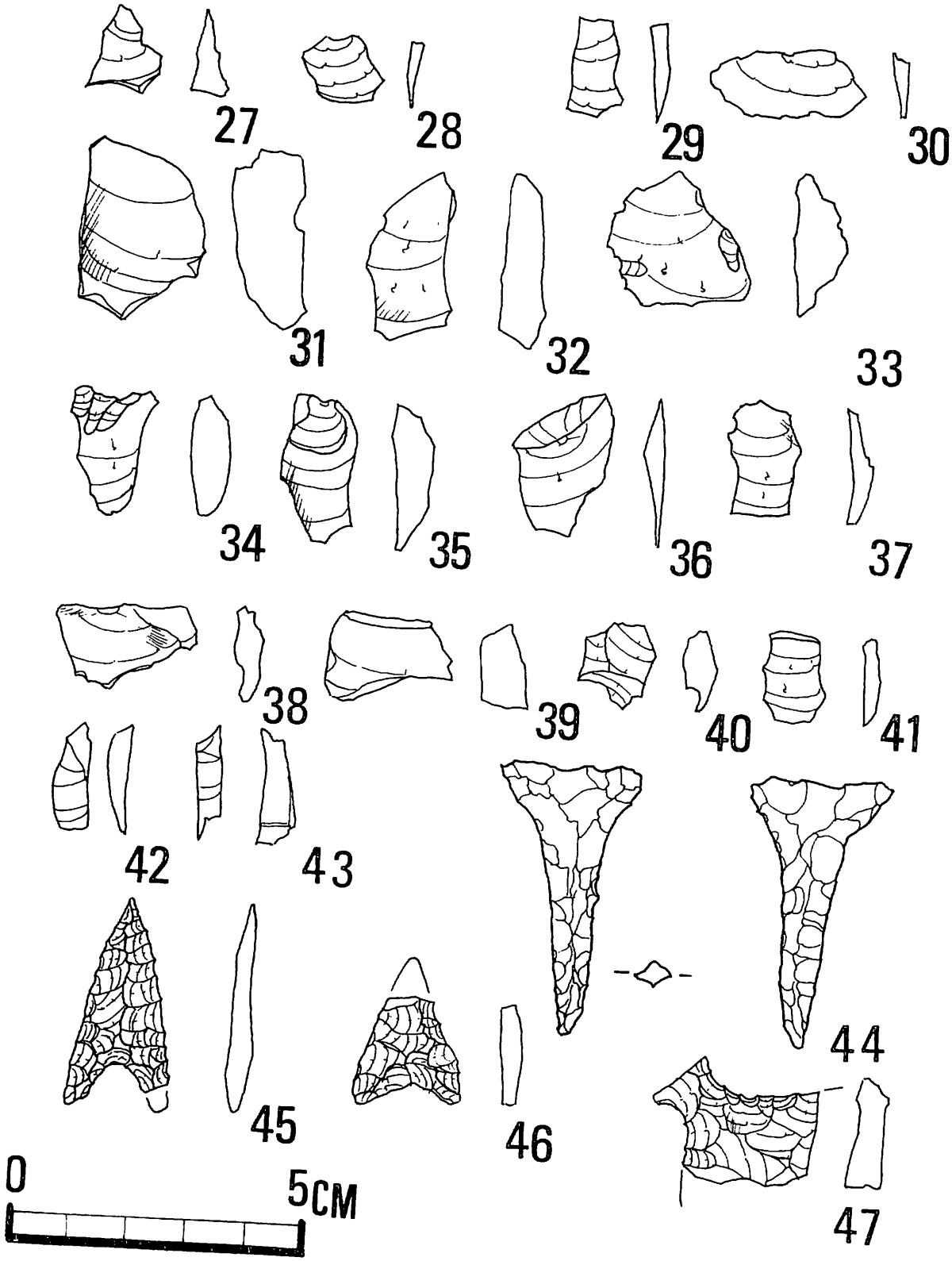


第115図　上前原　出土石器

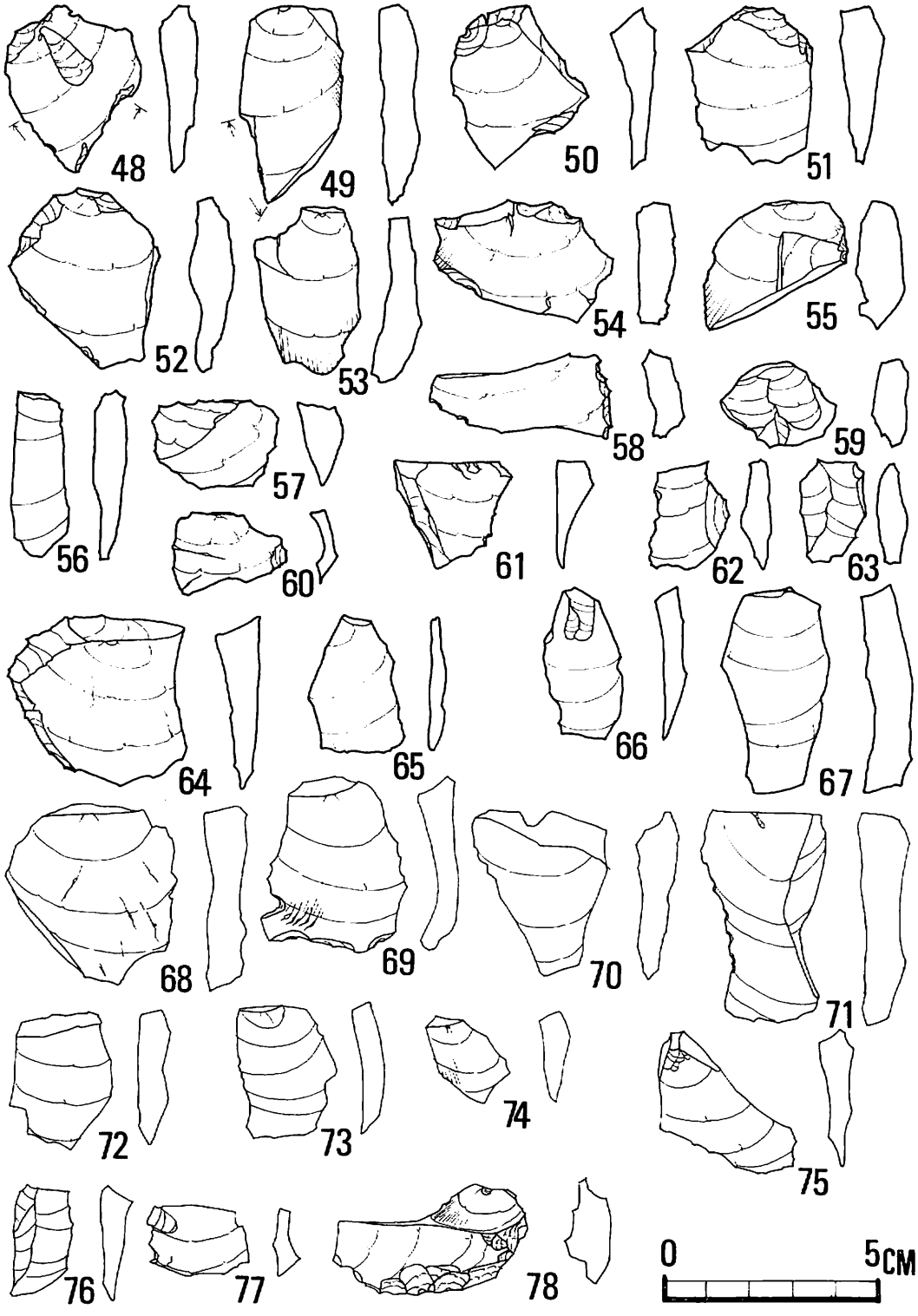
第116図　上前原　出土石器



第117図　上前原　出土石器



第118図　上前原　出土石器



第119図　上前原　出土石器

第10表　上前原遺跡出土石器観察表

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
1	フク土		2.8		0.8	8	砂岩	
2	A−3	Ⅱa	3.3		0.8	10	花崗岩	30
3	フク土		3.0		1.0	12	砂岩	
4	C−4し	Ⅲb	3.5		0.5	10	砂岩	
5	A−3	Ⅱa	3.0		0.8	10	花崗岩	144
6	フク土		3.6		0.7	15	砂岩	
7	D−4そ	Ⅱb	3.7		0.9	16	砂岩	
8	フク土		3.0		1.2	18	粘板岩	
9	フク土		3.9		0.9	25	砂岩	
10	A−3	Ⅱa	4.1		0.8	15	花崗岩	40
11	フク土		3.6		0.9	19	砂岩	
12	フク土		4.3		0.9	28	砂岩	
13	A2−5T		4.3		0.6	15	砂岩	
14	B3−E5	Ⅱb	3.4		0.6	12.5	砂岩	361
15	フク土		3.8		0.9	25	砂岩	
16	P−12 フク土	Ⅲb	4.0		1.3	29	花崗岩	
17	フク土		3.5		0.8	10	輝石安山岩	
18	G−2	Ⅱb	4.5		1.0	13	砂岩	
19	フク土		3.6		1.7	33	砂岩	
20	フク土		3.4		0.9	19	砂岩	
21	B−1	Ⅱa	5.0		2.0	45	花崗岩	152
22	B−2 フク土	Ⅲa	4.5		0.9	34	花崗岩	
23	G−2	Ⅱb	4.7		1.4	37	砂岩	
24	C−5く	Ⅳa	4.8		1.6	60	輝石安山岩	
25	B−1	Ⅲb	4.8		2.5	70	花崗岩	583
26	C−3す	Ⅱb	4.6		0.8	26	砂岩	
27	フク土		4.0		0.9	14	砂岩	
28	フク土		3.9		0.8	24	砂岩	
29	B−2	Ⅲb	3.9		1.4	37	花崗岩	701
30			5.2		2.0	53	花崗岩	
31	B−2	Ⅲb	5.2		1.3	40	花崗岩	945
32	フク土		4.7		1.2	30	粘板岩	
33	B3−D3	Ⅲb	6.5		1.9	70	花崗岩	114
34	A2−5T		8.4		1.3	93	花崗岩	
35	フク土		4.1		1.0	32	砂岩	
36	フク土		5.9		0.7	27	砂岩	
37	B2−C5	Ⅳb	7.3		1.3	97	花崗岩	
38	B−2	Ⅲa	7.6		2.0	161	花崗岩	
39	B3−E5	Ⅱa	7.2	6.6	1.7	98	結晶片岩	43
40	B2−C5	Ⅳb	5.2	5.1	1.4	39	砂岩	
41	1H	Ⅲa	7.6	4.8	1.2	60	結晶片岩	68
42			12.2	10.5	1.8		花崗岩	被熱
43	1H		4.1	3.3	0.4	11	緑泥片岩	
44	フク土		4.5	3.9	0.6	13	結晶片岩	
45	B3−E5	Ⅲa	8.7	3.4	2.5	108		97
46	B−2	Ⅲb	9.1	2.7	2.2	86		713
47	1H	Ⅲa	7.6	3.0	2.1	89		129
48	P−12	Ⅲb	9.1	1.9	1.5	42		
49	B2−C5	Ⅳb	8.0	1.9	1.1	37	閃緑岩	
50	B−0さ	Ⅱa	6.7	1.8	0.9	24	粘板岩	
51	フク土		6.0	1.7	0.9	16	砂岩	
52	A−3	Ⅱa	3.7	1.9	1.3	10		34
53	フク土		6.6	2.0	1.3	25		
54	フク土		6.4	1.8	1.1	20		
55	E−3す	Ⅱa	6.5	1.1	0.6	6	砂岩	
56	B3−E5	Ⅳb	5.6	1.0	0.6	5.0	砂岩	6
57	B3−D3	Ⅲb	16.3	4.1		314	結晶片岩	144
58	D−4	Ⅲb	10.8	8.1	1.3	185	頁岩	35
59	B3−D3	Ⅲb	8.0	7.8	2.4		頁岩	36
60	B3−C5	Ⅳa	11.4	5.6	2.8	268	頁岩	
61	B−4T		11.9	4.8	1.9	225	頁岩	
62	B3−E5	Ⅱb	11	4.6	2.8	263	砂岩	11
63	B3−C5	Ⅳa	10.2	5.6	2.2	171	頁岩	76
64	B3−E5	Ⅱa	9.5	5.5	2.1	136	頁岩	47
65	フク土		7.5	7.3	2.1	179	頁岩	
66	A2−5T		7.7	5.5	2.5	140	頁岩	
67	B3−C5	Ⅳa	11.8	3.9	1.0	76	頁岩	131
68	B−2	Ⅲb	10.2	4.8	2.2	160	頁岩	
69	B3−D3	Ⅲb	10.8	3.9	2.2	145	頁岩	117
70	フク土		10.1	4.0	1.4	92	頁岩	
71	B3−C5	Ⅳb	10.5	3.6	2.1	95	頁岩	
72	A−1T		9.6	2.6	0.8	35	頁岩	
73	A−3T		9.0	3.0	1.0	50	頁岩	
74	B3−E5	Ⅱa	8.8	4.6	1.4	116	頁岩	186

No	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
75	B2－C5	Ⅳb	9.0	4.3	2.4	121	頁岩	
76	フク土		8.3	4.1	1.6	96	頁岩	
77	フク土		7.4	4.1	2.4	106	頁岩	
78	C－3す	Ⅱb	9.3	3.4	1.7	71	頁岩	
79	B2－C5	Ⅳb	8.8	4.3	1.9	60	ホルンフェルス	
80	F－4	Ⅱa	8.4	4.1	1.6	96	頁岩	
81	A2－5T		9.9	3.9	1.6	100	頁岩	
82	F－4	Ⅱa	9.4	4	1.8	93	頁岩	116
83	B－C5	Ⅳb	9.6	3.8	1.9	110	頁岩	
84	1Hカク乱		8.8	3.6	1.1	65	頁岩	
85	A2－5T		7.7	3.6	1.2	61	頁岩	
86	A2－5T		8.2	3.2	1.5	79	頁岩	
87	D－3く	Ⅱb	8.1	2.8	0.9	41	頁岩	
88	フク土		7.2	3.9	1.4	72	頁岩	
89	フク土		7.8	3.9	1.3	62	頁岩	
90	E－3そ	Ⅱa	9.5	3.6	1.4	89	砂岩	
91	D－4け	Ⅱa	7.3	2.6	1.2	39	砂岩	
92	フク土		7.5	2.6	0.8	25	頁岩	
93	B3－E5	Ⅱb	12.2	5.0	2.8	264	頁岩	79
94	C－4お	Ⅱb	13.3	5.9	2.3	333	頁岩	
95	A2－5T		11	6.7	1.8	187	頁岩	
96	B－	Ⅱa	12.1	4.5	2.8	230	頁岩	12
97	B3－C5	Ⅳa	10.3	5.4	2.2	172	頁岩	
98	F－4	Ⅱa	10.5	4.2	2.6	125	頁岩	
99	A－3T		9.4	3.3	1.6	83	頁岩	
100	B3－E5		9.5	3.4	2.1	106	頁岩	226
101	A2－5T		10.5	3.9	1.3		砂岩	
102	1Hカク乱		9.9	3.1	1.5	80	頁岩	
103	B2－C	Ⅳb	9.8	4.2	2.7	212	頁岩	
104	F－4	Ⅱa	10	4.8	2.9	176	頁岩	75
105	B3－E5	Ⅱb	9.5	4.0	2.3	175	頁岩	333
106	B3－E5	Ⅱa	9.3	5.5	2.6	220	頁岩	130
107	B3－E5	Ⅱb	78	5.7	2.4	149	頁岩	8
108	フク土		8.3	6.2	2.4	168	頁岩	
109	B3－E5	Ⅲa	7.6	6.4	1.9	122	頁岩	379
110	フク土		6.6	6.3	2.0	100	頁岩	
111	A2－5T		8.3	4.1	1.9	100	頁岩	

No	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
112	フク土		8.1	4.0	1.4	40	頁岩	
113	B3－E5	Ⅱa	7.1	3.7	1.2	40	頁岩	157
114	B－1	Ⅱa	8.0	4.2	1.2	51	頁岩	95
115	A－1T		7.8	4.8	1.7	111	頁岩	
116	フク土		6.9	4.7	1.6	95	頁岩	
117	フク土		7.2	5.7	1.5	94	頁岩	
118	フク土		7.0	5.6	0.8	49	頁岩	
119	フク土		6.4	4.4	2.0	81	ホルンフェルス	
120	1H	Ⅱb	5.5	7.1	2.1	100	頁岩	210
121	F－5く	Ⅲb	7.0	5.4	1.5	71	頁岩	
122	E－5う	Ⅱa	6.9	5.1	2.4	106	頁岩	
123	C－3	Ⅱb	5.0	5.9	2.2	81	頁岩	
124	C－3す	Ⅲa	4.3	5.4	1.6		頁岩	
125	B3－E5	Ⅱb	5.9	6.0	1.5	75	頁岩	273
126	A－3T		6.4	5.7	1.9	86	ホルンフェルス	
127	A2－5T		5.7	4.0	1.2	48	砂岩	
128	フク土		6.8	4.1	1.4	50.1	頁岩	
129	B－1	Ⅱa	6.9	3.8	2.9	83	頁岩	31
130	B3－E5	Ⅱb	7.4	3.5	1.3	40	頁岩	170
131	A－3T		11.3	4.6	1.4	100	頁岩	
132	B3－E5	Ⅱa	9.5	3.4	1.6	72	頁岩	160
133	フク土		8.4	4.5	2.5	133	頁岩	
134	B－3	Ⅱa	6.5	3.9	1.2	50	頁岩	
135	フク土		8.1	3.7	1.4	62	頁岩	
136	フク土		8.2	4	2.1	110	頁岩	
137	B3－E5	Ⅱa	8.5	3.9	1.2	90	頁岩	172
138	B－2	Ⅲa	8.7	3.7	1.2	60	頁岩	407
139	D－3そ	Ⅱa	8.9	3.4	1.4	89	頁岩	
140	T－4		8.4	3.4	2.0	110	頁岩	
141	B3－C5		9.3	3.4	1.8	80	頁岩	171
142	P－4	Ⅲb	7.5	4.2	1.2	60	頁岩	
143	フク土		9.3	3.4	1.3	73	頁岩	
144	B2－C5	Ⅳb	6.6	5.4	2.0	119	頁岩	
145	フク土		5.5	6.1	2.3	105	頁岩	
146	B3－E5		6.2	4.9	1.6	79	頁岩	416
147	フク土		6.5	4.0	1.1		頁岩	
148	B－2	Ⅱb	6.5	5.1	1.6	75	頁岩	290

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
149	F−3	Ⅱa	5.8	4.7	1.6	58	頁岩	
150	フク土		6.2	4.2	1.7	60	頁岩	
151	B−2 フク土	Ⅲa	4.2	5.1	1.1		頁岩	
152	フク土		7.3	3.4	1.0	50	頁岩	
153	B−2	Ⅲa	4.4	5.3	1.1	34	頁岩	
154	フク土		4.6	3.5	1.3	40	頁岩	
155	フク土		7.5	2.4	0.5	23	頁岩	
156	B3−E5	Ⅱb	7.6	3.2	1.3	62	頁岩	83
157	B2−C5	Ⅳb	5.7	2.7	0.9	21	砂岩	13
158	B−3く	Ⅱa	5.2	3.5	1.1	25	砂岩	
159	C−4さ	Ⅲa	6.0	3.0	0.9	27	頁岩	
160	フク土		9.1	5.0	2.0	230	頁岩	
161	フク土		8.9	5.0	2.1	120	頁岩	
162	フク土		8.7	4.0	3.7	165	ホルンフェルス	
163	B3−C5	Ⅳa	8.2	6.5	1.9	121	頁岩	
164	1Hカク乱		6.7	6.8	1.9	125	頁岩	
165	フク土		6.1	6.1	1.8	104	頁岩	
166	東原表		7.4	6.9	3.9	236	頁岩	
167	B−3	Ⅳb	8.7	4.1	2.6	136	頁岩	
168	フク土		6.3	5.5	3.7	115	頁岩	
169	フク土		7.9	6.8	1.5	126	頁岩	
170	1H	Ⅲa	6.1	5.6	1.9	101	頁岩	77
171	B3−E5	Ⅱb	10.7	8.4	5.6	722	砂岩	458
172	B3−E5	Ⅲa	9.3	6.4	3.6	316	閃緑岩	236
173	B0−E5	Ⅱb	10.8	9.0	4.7	630	閃緑岩	276
174	B2−C5	Ⅳb	12.5	9.3	5.6	631	閃緑岩	2
175	B2−C5	Ⅳb	11.5	9.1	3.4	1240	閃緑岩	20
176	B3−E5	Ⅳb	10.6	7.2	5.0	426	閃緑岩	362
177	B3−E5	Ⅱb	9.1	5.5	3.9	180	シルト岩	423
178	B3−C5	Ⅳa	9.0	4.8	3.1	141	頁岩	
179	フク土		10.2	12.4	4.5	822	頁岩	
180	1Hカク乱		8.9	8.4	2.2	246	ホルンフェルス	
181	B−2	Ⅳa	9.4	12.0	1.9	250	砂岩	1086
182	G−0け	Ⅱa	8.2	8.9	2.2	230	頁岩	
183	B3−E5	Ⅱb	10.6	6.4	3.1	268	頁岩	360
184	フク土		11.7	6.6	2.8	265	頁岩	
185	1H	Ⅲa	9.8	6.4	2.4	195	頁岩	56

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
186	B3−E5	Ⅳb	9.6	8.3	3.3	240	頁岩	175
187	D−4そ	T	7.1	8.3	3.5	285	頁岩	
188	B−4	Ⅳb	7.0	9.3	2.3	216	頁岩	29
189	B−1	Ⅳb	7.8	8.6	3.3	262	頁岩	466
190	B3−E5	Ⅱa	6.7	7.7	1.9	151	頁岩	190
191	B3−E5	Ⅱb	10.3	4.0	4.4	228	砂岩	213
192	B2−C5	Ⅳb	8.4	5.7	2.6	166	頁岩	
193	F−5	Ⅱa	8.6	5.5	3.3	250	閃緑岩	
194	2−土		11.4	7.7	5.0		頁岩	
195	フク土		9.3	10.7	3.0	440	頁岩	
196	B3−C5	Ⅳb	9.0	9.9	2.7	321	頁岩	26
197	東原表		11.1	8.7	3.5	338	頁岩	
198	1H	Ⅱb	10.0	10.3			頁岩	181
199	A−4T	Ⅳb	7.4	10.3		474	頁岩	
200	フク土		9.6	7.0	3.5	349	頁岩	
201	A2−5T		6.8	9.9	2.5	183	頁岩	
202	B3−D3	Ⅲb	8.1	7.3	2.3	258	頁岩	65
203	B3−D3	Ⅲb	7.1	9.4	3.3	351	頁岩	109
204	1H	Ⅲa	10.5	8.7	3.3	420	砂岩	94
205	B3−E5	Ⅳa	7.7	8.2	3.2	272	頁岩	38
206	B3−E5	Ⅳb	7.5	8.9	2.2	230	頁岩	104
207	A−4T		7.6	8.5	4.1	339	頁岩	
208	B3−C5	Ⅳa	7.8	8.0	2.2	239	頁岩	1
209	G−4	Ⅲa	8.6	7.4	2.6	200	頁岩	13
210	3−土		7.2	8.7	2.5		頁岩	
211	1Hカク乱		7.0	9.8	3.9	298	頁岩	
212	G−4	Ⅲa	7.3	8.6	3.6	242	頁岩	
213	1H	Ⅱb	8.4	8.7	3.0	226	頁岩	176
214	F−3	Ⅳa	8.2	6.5	3.0	206	頁岩	
215	2−土		7.1	8.0	4.4	276	頁岩	
216	E3−E5	Ⅱb	8.6	7.5	1.5	125	頁岩	384
217	T−フ		7.4	6.9	2.2		頁岩	
218	B−2	Ⅲa	6.5	8.8	2.4	206	頁岩	574
219	東原表		8.0	5.6	2.1	142	頁岩	
220	フク土		7.2	6.2	2.8		砂岩	7
221	G−0け	Ⅳb	7.4	6.1	4.0	221	砂岩	
222	B3−E5	Ⅳb	6.5	8.8	3.3	246	砂岩	266

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
223	1Hカク乱		11.8	7.3	2.7	319	頁岩	
224	フク土		6.2	7.3	2.0	139	頁岩	
225	A−3T		7.5	4.3	3.4	116	頁岩	
226	フク土		7.1	7.5	2.3	147	頁岩	
227	フク土		7.0	5.2	2.9	196	頁岩	
228	フク土		7.7	3.5	1.7	56	頁岩	
229	A2−5T		5.7	7.4	2.2	110	頁岩	
230	B3−E5	Ⅱb	7.2	5.9	2.1	94	頁岩	359
231	1Hカク乱		6.4	6.1	3.4	150	頁岩	
232	フク土		5.4	6.3	2.1		頁岩	
233	A2−5T		7.9	5.7	1.9		頁岩	
234	B3−E5	Ⅱb	6.4	5.6	1.3	66	頁岩	429
235	フク土		6.9	5.0	1.5	60	頁岩	
236	B3−E5	Ⅲa	8.1	4.6	1.8	65	頁岩	330
237	B3−C5	Ⅳa	19.9	5.2	1.5	395		51
238	B3−E5	Ⅱb	13.9	5.5	2.3	272		186
239	B3−E5	Ⅲa	16.5	7.9	3.8	737		338
240	B3−E5	Ⅱb	12.1	3.9	3.3	205		18
241	T	Ⅳb	10.0	4.4	3.2	235		22
242	B−3し	Ⅱb	7.5	5.0	1.8	102	砂岩	
243	B3−E5	Ⅱa	12.2	5.3	3.1		ホルンフェルス	166
244	フク土		8.4	4.5	2.1	120	安山岩	
245	B3−E5	Ⅱa	8.7	4.1	2.3		砂岩	70
246	3−土		11.7	6.7	4.3	588	花崗岩	
247	B3−E5	Ⅱb	9.2	4.9	3.0	177	花崗岩	9
248	B3−E5	Ⅱa	13.6	6.1	4.4	626	花崗岩	329

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
249	フク土		5.8	4.1	2.2	76	花崗岩	
250	フク土		8.8	8.3	4.3	445	安山岩	
251	1Hカク乱		11.5	7.1	3.5	455	砂岩	
252	1Hカク乱		8.4	5.3	2.8	175	花崗岩	
253	B3−C5	Ⅱa	13.4	6.2	5.2	877	花崗岩	80
254	B3−E5	Ⅱb	9.9	6.1	3.8	375	花崗岩	38
255	G−0け	Ⅱa	7.3	5.7	2.9	183	花崗岩	
256	B−1	Ⅱb	7.3	5.2	2.9	185	花崗岩	
257	1H		10.8	8.7	2.9	380	砂岩	SJ17
258	A−3T		11.6	8.4	5.0	770	砂岩	
259	B−2	Ⅲb	11.6	7.5	3.1	490	砂岩	691
260	3−土		10.5	5.9	4.8	375	安山岩	
261	1H	Ⅲa	10.2	7.9	3.0	370	花崗岩	395
262	1H	Ⅱb	6.8	7.0	3.3	210	花崗岩	207
263	F−4	Ⅱa	8.2	4.5	3.1	190	安山岩	75
264	B2−C5	Ⅳb	7.7	5.0	2.3	150	花崗岩	1
265	B−2	Ⅱa	7.8	7.1	3.5	286	花崗岩	36
266	1H	Ⅲa	8.0	4.4	1.8	90	花崗岩	59
267	B3−E5	Ⅲa	8.8	5.5	2.5	186	花崗岩	165
268	1H		7.4	6.5	3.2	190	花崗岩	146
269	A2−5T		7.2	4.3	3.1	157	安山岩	
270	B3−E5	Ⅱa	8.3	6.8	3.8	290	花崗岩	100
271	フク土		8.0	7.6	3.5	312	花崗岩	
272	B3−E5	Ⅱa	8.2	8.8	2.8	315	花崗岩	203
273	F−4	Ⅱb	9.0	6.9	4.5	434	安山岩	154
274	B3−D3	Ⅲb	12.2	4.9	2.9	259	花崗岩	16

上前原　石器観察表（第111～113図）

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
1	1H		2.9	2.1	0.6	1.5	黒燿石	41
2	1H		1.6	0.7	0.4	0.5	黒燿石	74
3	1H		2.0	1.4	0.3	0.5	黒燿石	85
4	3号土壙		2.5	2.2	1.1	6	黒燿石	
5	F−4G		3.4	2.1	1.1	6	黒燿石	
6	F−4G		2.9	0.9	0.5	1	黒燿石	47
7	B3−E5	Ⅱa	2.3	1.4	0.2	1	黒燿石	13
8	F−3	Ⅱa	2.1	1.8	0.5	1	黒燿石	1
9	F−3	Ⅱa	2.4	1.5	0.4	1	黒燿石	3

No.	出土地点	層位	幅 cm	長さ cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
10	B3−E5	Ⅱa	2.0	1.5	0.3	0.5	黒燿石	201
11	B3−E5	Ⅱa	1.5	1.3	0.7	1	黒燿石	8
12	F−3	Ⅱa	1.6	1.0	0.3	0.5	黒燿石	5
13	B−2	Ⅲa	1.4	0.8	0.2	0.2	黒燿石	625
14	F−3	Ⅱa	1.4	1.1	0.3	0.5	黒燿石	3
15	B3−E5	Ⅱa	1.8	1.0	0.5	1	黒燿石	213
16	B3−E5	Ⅱa				1	黒燿石	10
17	B3−E5	Ⅱa	1.4	0.9	0.5	1	黒燿石	20
18	B3−E5	Ⅱb	2.6	2.1	0.4	2	黒燿石	171

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
19	B3−E5	Ⅱb	2.5	1.8	0.6	2.5	黒燿石	166
20	1H	Ⅱb	2.3	1.3	0.3	1	黒燿石	203
21	B5−E5	Ⅲa	2.4	1.8	0.6	2	黒燿石	303
22	B3−E5	Ⅲa	1.8	1.6	0.3	0.5	黒燿石	376
23	B3−E5	Ⅱb	2.8	1.4	0.5	2	黒燿石	413
24	B3−E5	Ⅱb	2.2	1.5	0.8	2.5	黒燿石	4
25	G−2	Ⅱb	1.6	1.2	0.5	1	黒燿石	
26	B3−E5	Ⅲa	1.8	1.4	0.2	0.5	黒燿石	311
27	B3−E5	Ⅱb	1.4	1.4	0.5	0.5	黒燿石	39
28	B−4フク土		1.5	1.2	0.1	0.2	黒燿石	
29	表		1.7	1.1	0.3	0.5	黒燿石	
30	フク土		2.7	1.3	0.2	1	黒燿石	
31	表		3.2	2.5	1.2	9	黒燿石	
32	表		2.9	1.8	0.8	4.5	黒燿石	
33	表		2.7	2.2	0.9	4	黒燿石	
34	表		2.1	1.5	0.8	2	黒燿石	
35	表		2.6	1.4	0.8	1.5	黒燿石	
36	表		2.2	1.8	0.4	1	黒燿石	
37	表		1.8	1.2	0.4	1	黒燿石	
38	表		2.3	1.4	0.5	1.5	黒燿石	
39	表		2.3	1.5	0.7	2	黒燿石	
40	表		1.6	1.2	0.6	1	黒燿石	
41	表		1.7	1.1	0.4	0.5	黒燿石	
42	表		1.8	0.5	0.5	0.5	黒燿石	
43	表		2.0	0.6	0.4	0.5	黒燿石	
44	表		4.6	2.2	0.6	3	黒燿石	
45	B3−C5	Ⅳb	3.7	2.0	0.3	2	チャート	
46	B3−E5	Ⅳb	2.0	2.0	0.4	1	チャート	200
47	表		3.9	2.2	0.6	3.5	チャート	
48	B−3	Ⅱa	3.7	3.4	0.6	8.5	チャート	115
49	C−4う	Ⅱb	4.7	2.4	0.9	11	チャート	
50	F−4	Ⅱb	3.4	2.8	0.7	8	チャート	152
51	A2−5T	Ⅱb	3.6	3.0	0.9	8.5	チャート	
52	E−3た	Ⅱb	4.5	3.3	1.1	15.5	チャート	
53	E−4い	Ⅱa	4.0	2.3	0.8	8	チャート	
54	F−4	Ⅱa	4.4	2.7	0.7	10	チャート	139
55	2−5	Ⅱb	4.3	2.2	0.9	5	チャート	

No.	出土地点	層位	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	注記
56	B3−E5	Ⅱa	4.0	1.4	0.7	3.5	チャート	2
57	B−3せ	Ⅱa	3.1	2.1	0.8	5	チャート	
58	F−4	Ⅱa	4.4	2.1	0.7	6	チャート	54
59	B3−E5	Ⅱa	2.6	2.0	0.8	5	チャート	1
60	A−3	Ⅱa	2.7	1.9	0.4	2	チャート	50
61	F−2	Ⅱb	2.7	2.7	0.7	5	チャート	
62	D−う	Ⅱa	2.6	1.8	0.4	2.5	チャート	
63	E−5え	Ⅱa	2.5	1.8	0.8	3	チャート	
64	B3−E5	Ⅲa	4.3	4.0	1.1	15	チャート	190
65	フク土		3.2	2.0	0.3	3.1	チャート	
66	B−2	Ⅲa	3.7	1.8	0.7	2.5	チャート	660
67	B−5き	Ⅳa	4.8	2.8	1.0	13	チャート	
68	フク土		4.4	3.7	0.7	13	チャート	
69	フク土		4.4	3.5	0.7	9.5	チャート	
70	表		4.0	3.5	1.0	9.5	チャート	
71	フク土		5.0	2.8	0.9	15	チャート	
72	フク土		3.3	2.5	0.6	6	チャート	
73	表		3.3	2.5	0.7	4.5	チャート	
74			2.3	1.5	0.8	2	チャート	
75			4.0	2.2	0.7	5.5	チャート	
76			2.7	1.5	0.8	2.5	チャート	
77			2.5	1.8	0.7	2	チャート	
78	表		4.7	2.5	0.8	8	チャート	

V　結　　語

本田・東台・上前原の両遺跡の成果より検討される問題は数多いと思われる。これらの問題点について再確認し、一旦、只見幹線内遺跡の発掘調査成果の報告として区切をつけておきたい。以下に時代を追って記述することにしたい。

旧石器時代の遺跡は今後発見される可能性が高く、層位的な把握と器種の確認が重要となる。特に江南台地の第3期層は南関東地方のそれと成立が異なり、層厚も薄いため直接対比できない状況にある。指標となるテフラの確認などの層位的な面、石器自体の比較など行うべきことが多い。

縄文時代早期では、草創期の確認から始まり、撚糸文、押形文、沈線文土器群といった土器のあり方が注意されるだろう。これらの早期土器群の検出は江南台地や周辺部ではまだまとまった出土例が少なく比較ができないものもある。撚糸文期の住居跡の発見はすでに江南町にあるが、さらに確認例が増し集落の解明に迫りたい。また、江南台地域で撚糸文期の活動が活発だったことの意味にも注意が向けられることが必要だろう。前期末～中期初頭の時期は県内でも稀薄な時期に当たるため、広く検討を要することは自明のことでありさらに、江南台地域での中期の繁栄を迎える意義を考えたい。上前原遺跡では住居跡の検出は1軒に止まったが、周辺に分布すると思われる住居群や集落の構造について調査を進めて行かねばならない。集落の確認は本田・東台遺跡でも同様である。

今回の調査では見い出し得なかったが欠落する時期については、周辺遺跡との検討が必要であろう。各時期の集落規模と継続時期に大きな変動を予想できるだろう。

古墳時代では、本田・東台に見られる集落自体の構造、住居群の変遷の問題がある。本遺跡の場合、激しい重複に見られるように、限定された範囲内での居住、生活活動が活発であったらしく、遺跡と推定される範囲には多数の住居群、膨大な遺物が埋蔵されていることが予想される。集落構造の解明を後にしても、本遺跡内での土器編年を確立しておくことは江南地域の古墳時代研究にかかせない。特に編年については江南台地域や荒川右岸での調査例が少ないだけに、児玉郡域や比企郡域との比較の上に編年することが可能となろう。予測としては時代、地域間の中で微妙なその集落独自の在地性が現われるものと考える。

住居構造については床下土壙の問題がある。これは古墳時代より平安時代まで連綿として続いている。江南台地域での時代を超えた、強い伝統を持った住居構造法と結論づけられる。おそらく今後の江南台地域での調査ではこれは再確認する例が古墳～奈良平安期の住居に見られるだろう。しかし、この伝統の意味や他地域に存在する意味についても検討されなければなるまい。

製鉄関係の問題については、古墳時代小鍛冶の存在や製品のこと、そして今回、成分分析ではっきりした素材鉄の入手先についてである。これには古墳時代の物資の流れと、首長の政治力のかかわりなど派生する問題点が多々ある。本田・東台遺跡の人々の首長は隣接する野原前方後円墳の被葬者と考える立場にあるので、古墳群と集落の面から副葬される鉄製武器、須恵器、埴輪等からも考察、分析を進めたい。

最後に、これが報告の終りではなく、やっと地域研究の入口の扉を開けたに過ぎないことを痛感している。

参考文献

1. a.高村弘毅・寺田稔・山口祐之・池本啓一・樋口政男・高橋建・辻本一美・上原冨二男・植田芳郎・保坂邦之・1979「北埼玉地域の自然環境について（第1報）」立正大学北埼玉地域研究センター年報第2号　同「（第2報」第4号
b.堀口万吉 1980「埼玉の地形と地質」埼玉県市町村誌　第20号
c.埼玉県 1974「土地分類基本調査・熊谷」
2. 中島利治、他 1974『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡』埼玉県遺跡調査会報告　第22集
3. 上野勝・城前喜英・宮田栄三 1978 「埼玉県大里郡江南村採集の先土器時代資料」『いにしえ』第2号　立正大学古代文化研究会
4. 高木義和・栗嶋義明 1982 『南大塚遺跡』 寄居町文化財調査報告第6集
5. 奥野麦生 1984 「埼玉県東松山市雷原採集の先土器時代資料」『Shell Mound』第2号
6. 滑川村 1984『滑川村史』・通史編
7. 寄居町 1984『寄居町史』原始・古代・中世資料編
8. 金井塚良一 1976『花見堂』嵐山町教育委員会
9. 嵐山町 1983『嵐山町史』
10. 新井　端、他 1982『塩前遺跡』江南村文化財調査報告　第3集
11. 高野博光、他 1976 『寺山』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第9集
12. 小野美代子、他 1979『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第20集
13. 安岡路洋、三友国五郎 1966『稲荷原』大宮市教育委員会
14. 谷井　彪、他 1980『舟山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告　第9集
15. 金井塚良一、植木弘 1980『金平遺跡』嵐山教育委員会
16. 渡辺　一、金井塚厚志、他 1985『鳩山窯跡群発掘調査概報』鳩山町教育委員会
17. 金井塚良一　他 1969『平松台遺跡』
18. 植木　弘 1987 『行司免遺跡』 遺構図版編　嵐山町遺跡調査会
19. 村松　篤 1987 『上本田遺跡の調査』第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨
20. 中嶋　宏、他 1982『中郷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第13集
21. a.鈴木敏昭　他 1983 『台耕地　Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第27集
b.酒井清二 1984 『台耕地　Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第33集
22. 金子直行、他 1982 『衆生ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第12集
23. 植木　弘 1987 『神山遺跡』嵐山町遺跡調査会報告 1
24. 高木義和 1982『東国寺東・平倉遺跡』寄居町文化財調査報告書　第7集
25. 寺社下博 1980 『万吉西浦遺跡』熊谷市教育委員会
26. 花園村 1970『花園村史』
27. 今井　宏、他 1984『屋田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第32集
28. 植木　弘 1987『古里古墳群　北田遺跡』嵐山町遺跡調査会報告 2
29. 寺社下　博 1982調査、同氏より教示を賜る

30. 1982 『新編　埼玉県史　資料編 2』
31. 金井塚良一 1968 『番清水遺跡』
32. 金井塚良一 1960「五領C区の発掘調査」『埼玉考古』 第3号
33. 板野和信　他 1987『下道添』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第67集
34. 坂本和俊　他 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
35. 坂本和俊 1986 「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
36. 金井塚良一 1978『吉見町史』上巻「第6節　古墳時代の展開・Ⅱ　竪穴住居址の変遷」
37. 坂本和俊 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
38. 金井塚良一、小渕良樹 1983『岩比田』岩比田遺跡調査会
39. 井上　肇 1979『舞台Ⅰ・Ⅱ』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第17・18集
40. 塩野　博　他 1972 『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告　第1集
41. 金井塚良一 1973 『大谷遺跡』滑川村教育委員会
42. 金井塚良一 1979 「比企地方の前方後円墳－北武蔵の前方後円墳の研究（1）『埼玉県立歴史資料館紀要』第1号
43. 亀井正道 1977 「踊る埴輪出土の古墳とその遺物」『ミュージアム』310号
44. 坂詰秀一・久保常晴・野村幸希 1965「埼玉県野原古墳群の調査－北武蔵における群集墳の一様相について」日本考古学協会　第31回総会研究発表要旨
坂詰秀一、他 1969 「埼玉県大里郡野原古墳群」『日本考古学年報』17
45. 金井塚良一 1975 「比企地方の古墳群の形成」『吉見百穴横穴墓群の研究』
46. a.金井塚良一 1976 「北武蔵の古墳群と渡来系氏族吉志氏の動向」『北武蔵考古学資料図鑑』
b.原島礼二 1978 『東松山市と周辺の古代』東松山市史編纂調査報告　第13集
47. 藤井和夫 1979「床下土壙について」『上浜田遺跡』神奈川埋蔵文化財調査報告15
48. 栗田勝弘、他 1985『舞田原』大分県犬飼町教育委員会
49. 植松章八 1981「住居址床面の二重構造について」『月輪遺跡群』富士見宮市教育委員会
50. 国平健三、藤井和夫 1979 『上浜田遺跡』神奈川埋蔵文化財調査報告 15
51. 中田英、市川正史、伊丹　徹　他 1983『向原遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 1
52. a.菅谷浩之・駒宮史朗 1974 『中道・西北原遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第23集
b.田村　誠 1981 『中道遺跡』神川村教育委員会
53. 柿沼幹夫、小久保徹 1979 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書　第21集
54. 増田一裕　他 1987 『南通線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告　第9集
55. 増田逸郎　他 1980 『埼玉　稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会
56. 原島礼二 1965 「7世紀における農民経営の変質」『歴史評論 177、169、181号』
57. 高橋一夫 1976 「製鉄遺跡と鉄製農具」『考古学研究 87』
58. 小久保徹、他 1970 『黒田古墳群』 黒田古墳群調査会
59. 龍瀬芳之、他 1986 『小前田古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第52集

60. 小久保徹・浜野一重、他「埼玉県における古墳出土遺物の研究　Ⅰ」『研究紀要 83』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
61. 佐藤忠雄 1979 『大寄Ｂ遺跡　西浦北遺跡』岡部町教育委員会
62. 駒宮史朗 1978 『中堀・耕安地・久越前』埼玉県遺跡発掘調査報告　第15集
63. 長谷川厚、他 1980 『大久保山　Ⅰ』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告 1
64. 宮崎朝雄、他 1980 『甘粕山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書　第30集
65. 大澤正己 1986 『越生町五領遺跡出土鉄滓及び鉄釘の金属学的調査報告』越生町教育委員会
66. 川越市 1972 『川越市史　第1巻　資料編』
67. 吉川照章、他 1976 『川崎遺跡』 上福岡市郷土史料　第19集
68. 1984 『新編　埼玉県史　資料編3 古代1 奈良・平安』
69. 高橋一夫 1979 『大山』 『埼玉県遺跡発掘調査報告書　第23集』
70. a.山本　禎、他 『猿貝北・道上・新町口』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第52集
b.山本　禎、他 『猿貝北・新町口』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第61集
73. 中平　薫 1987 『古道　大寺廃寺』日高町埋蔵文化財調査報告　第12集
74. 1973 『埼玉県指定文化財調査報告書』埼玉県教育委員会
75. 土井義夫・新藤康夫 1981 『神谷原　Ⅰ』八王子市椚田遺跡調査会
76. 高橋一夫 1985 『西地総田遺跡発掘調査報告書』草加市の文化財（10）
77. 安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」『東京考古 1』
78. 重久淳一、他 1986 『奈良地区遺跡群　Ⅰ』奈良地区遺跡調査団
79. 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 4』
80. 坂詰秀一・野村幸希 1987 『立正大学熊谷校地遺跡調査室年報 1』
81. 新井　端 1985 『宮下遺跡　元稲荷遺跡』江南町文化財調査報告　第5集
82. 大澤正巳、他 1988 『黒浜遺跡群』蓮田市教育委員会
83. 大宮市教育委員会　山形洋一氏より教示をいただく
84. 金子彰男、他 1987 『 皀樹原槍下遺跡』同遺跡発掘調査概報　Ⅲ
85. 鳩山町教育委員会　金井塚厚志氏より教示をいただく
86. 1987 『鶴ヶ島町史　通史編』
88. 1984 『新編　埼玉県史　資料編3 古代1 奈良　平安』
89. 日下部善巳 1987「環状石斧」『縄文文化の研究 7』雄山閣
90. 小田静夫 1987 「スタンプ形石器」『縄文文化の研究 7』雄山閣
91. 青木義脩 1981 「縄文時代前期終末～中期初頭の動向について」『埼玉考古　第20号』
92. 赤星直忠、他 1973 『横浜市室木遺跡』横須賀考古学会
93. 青木義脩、他 1980 『大間木　和田西　吉場　井沼方』浦和市遺跡調査会報告　第13集
94. 山形洋一、他 1984 『鎌倉公園遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第9集
95. 1980 『新編　埼玉県史　資料編1 原始　旧石器　縄文』
96. 青木義脩、他 1964 『根岸遺跡』浦和考古学会

97. 橋口尚武 1987 「伊豆諸島からみた律令体制の地域的展開」『考古学研究 №132』
98. 佐藤忠雄、他 1986 『内出遺跡』岡部町内出遺跡調査会
99. 大上周三 1986 「床下粘土土壙について」『神奈川県考古同人会20年記念論集』
100. 谷井 彪、他 1982 「縄文中期土器の再編」『研究紀要 82』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
101. 金井塚良一 1979 「渡来系氏族壬生吉志氏の北武蔵移住」『埼玉県史研究 第3号』
102. 若松良一 1986 『諏訪山33号墳の研究』
103. 中野修秀 1984 「土器捨て場考 (1)」『日本考古学研究所集報 Ⅵ』
104. 柿沼幹夫、他 1979 『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
105. 石岡憲雄、他1981 『六反田』岡部町教育委員会
106. 中村倉司 1979 『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第38集
107. 柿沼幹夫 1976 「甑形土器に関する一考察」『埼玉考古 第15号』
108. 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』 Ⅰ 平安学園考古学クラブ
109. 中村 浩、他 1978 『陶 邑』 Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30輯
110. 大澤正己、他 1984 「古代鉄生産の検討」『古代を考える 36』
111. 森田 悌 1983 「古代北武蔵の動向」『信 濃』 第36巻 第5号
112. 茂木由行 1984 「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬考古通信 №9』
113. 石坂 茂、他 1986 『荒砥北原・今井神社古墳・荒砥青柳』 群馬県教育委員会
114. 立正大学考古学研究会 1984～1987 『第四紀』
115. 立正大学古代文化研究会 1982～1984 『考 古』

上前原遺跡上空

上前原遺跡調査地点

本田・東台遺跡上空

本田・東台遺跡調査地点

本田・東台住居跡

上前原遺跡

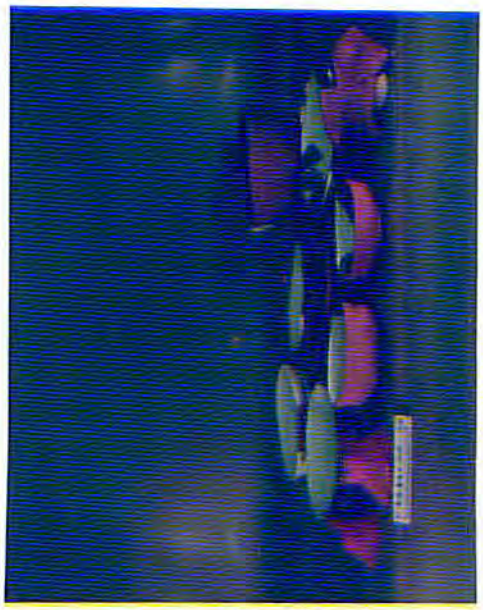
本田・東台５・７号住居跡

上前原遺跡遺物出土状態

本田・東台８号住居跡遺物出土状態

本田・東台４号住居出土遺物

本田・東台11号住居跡床下土壙遺物出土状態



同上出土遺物

本田・東台遺跡景観

図版2

表土除去作業

確認作業

発掘調査　着手状況

1号住居跡

図版4

床の状況 2号住居跡

床下土壙　完掘 2号住居跡

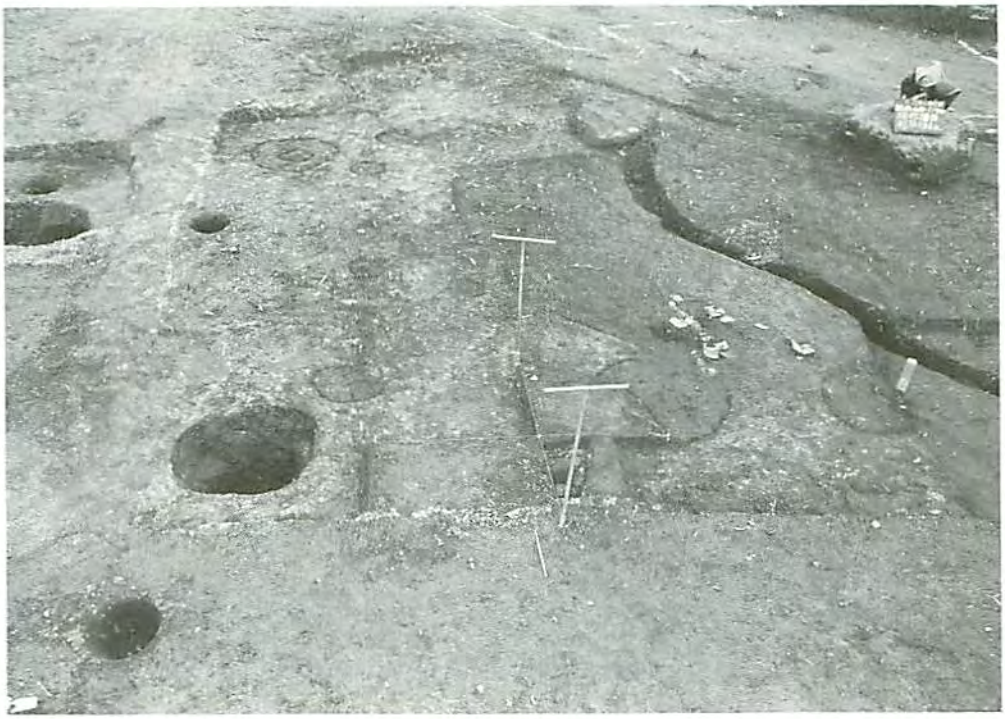
完掘状況 3号住居跡

カマド貯蔵穴 3号住居跡

図版6

5、7、3号住居跡　床の状況

3、4号住居跡床下土壙完掘



5号住居跡　床下土壙　7号住居跡　プラン状況

5号住居跡　完掘状況

5号、7号住居跡　完掘

8号住居跡　床の状況

6 号住居跡　遺物出土状態

6 号、15 号住居跡　完掘状態

図版10

9、12、13号住居跡　遺物出土状態

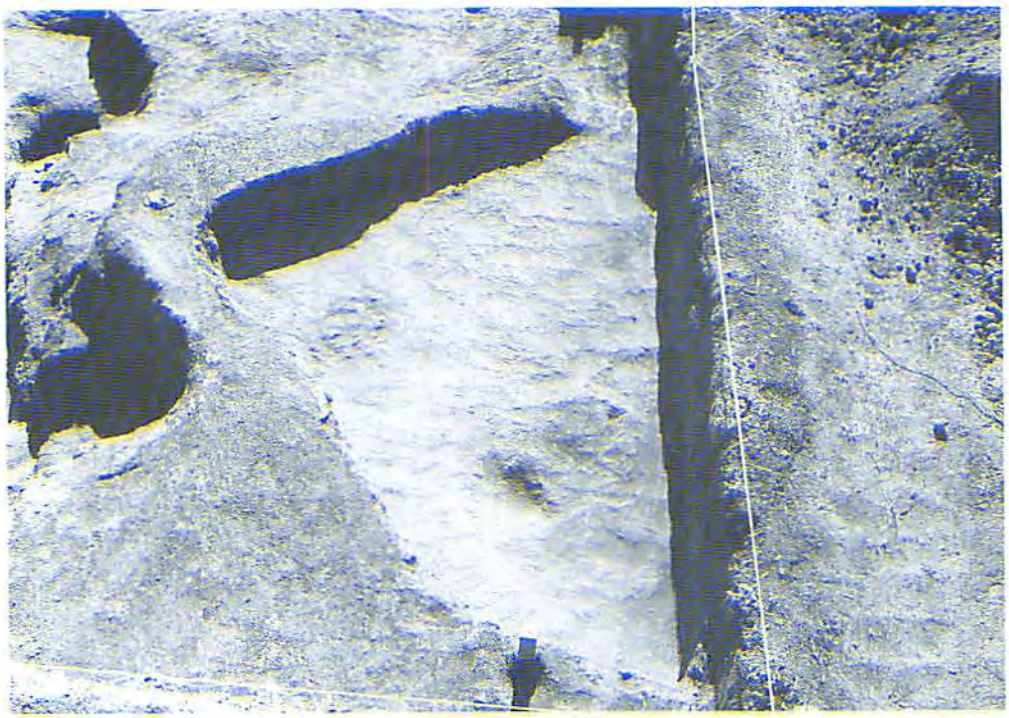
13号住居跡　床の状態

10号住居跡　床の状況

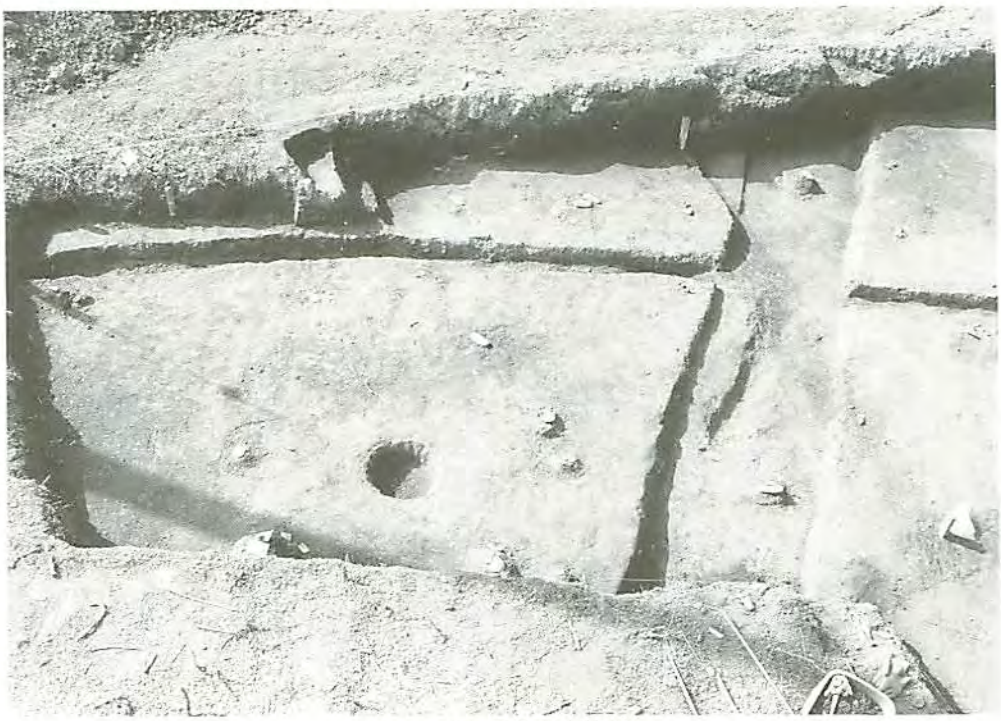
10号住居跡　完掘状況

図版12

12号住居跡　完掘



14号住居跡　完掘



溝 A－3G 遺物出土状態

溝 A－3G 13号住居跡完掘

図版 14

↑

切り合う住居群

↓

4号住居跡　東壁カマド

同　上　　完掘

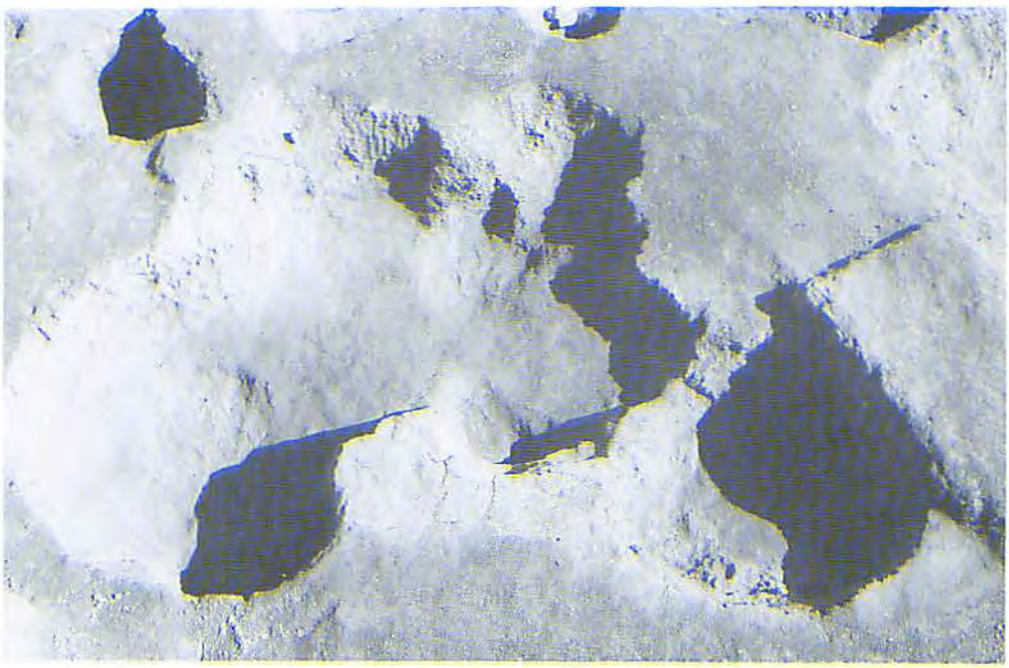
8号住居跡　カマド周辺

同　上　　細部土器出土状況

8号住居跡　支脚の状況

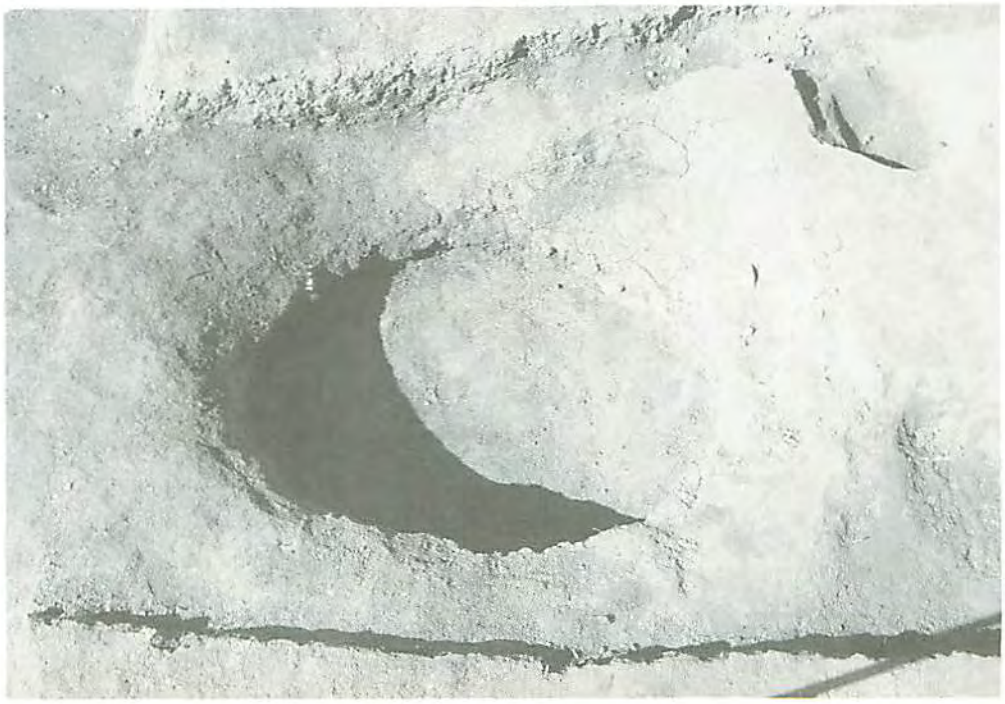
8号住居跡　完掘状況

11号住居跡床下土壙内遺物の出土状況



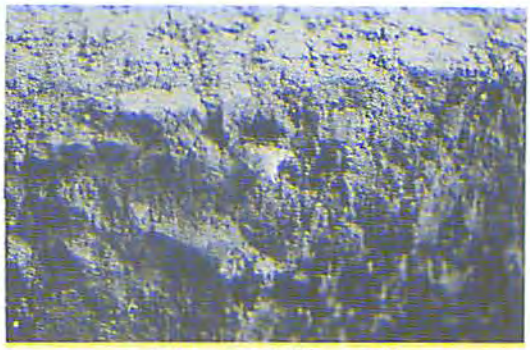
同　上　　完掘状況

井　戸



13号住居跡　床下土壙

2号住居貯蔵穴内



2号住居床下土壙内　石鏃

3号住居カマド右脇、こしき、カメ

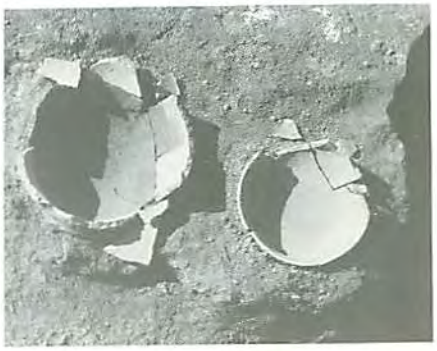
3号住居、床上、こしき、坏

↑ 5号住居貯蔵穴内　↓ 6号住居床上、大鉢

↑ 5号住居床上　↓ 6号住居床上

遺物出土状態

↑ 8号住居カマド脇　8号住居カマド右袖内 →



↑ 8号住居床上

↑ 6号住居床上

→ 10号住居床下土壙内黒燿石剝片

↑ 9号住居床上、ナイフ型石器　↓12号住居床上

12、13号住居床上 ↑

遺物出土状態

図版22

11号住居　床下土壙

11号住居　床下土壙

深掘土層 A－3G

2号住居床下土壙土層

遺物出土状態

2号住居土

2号住居貯

3号住居No.4

4号住居No.6

4号住居No.22

4号住居No.23

4号住居フ

4号住居

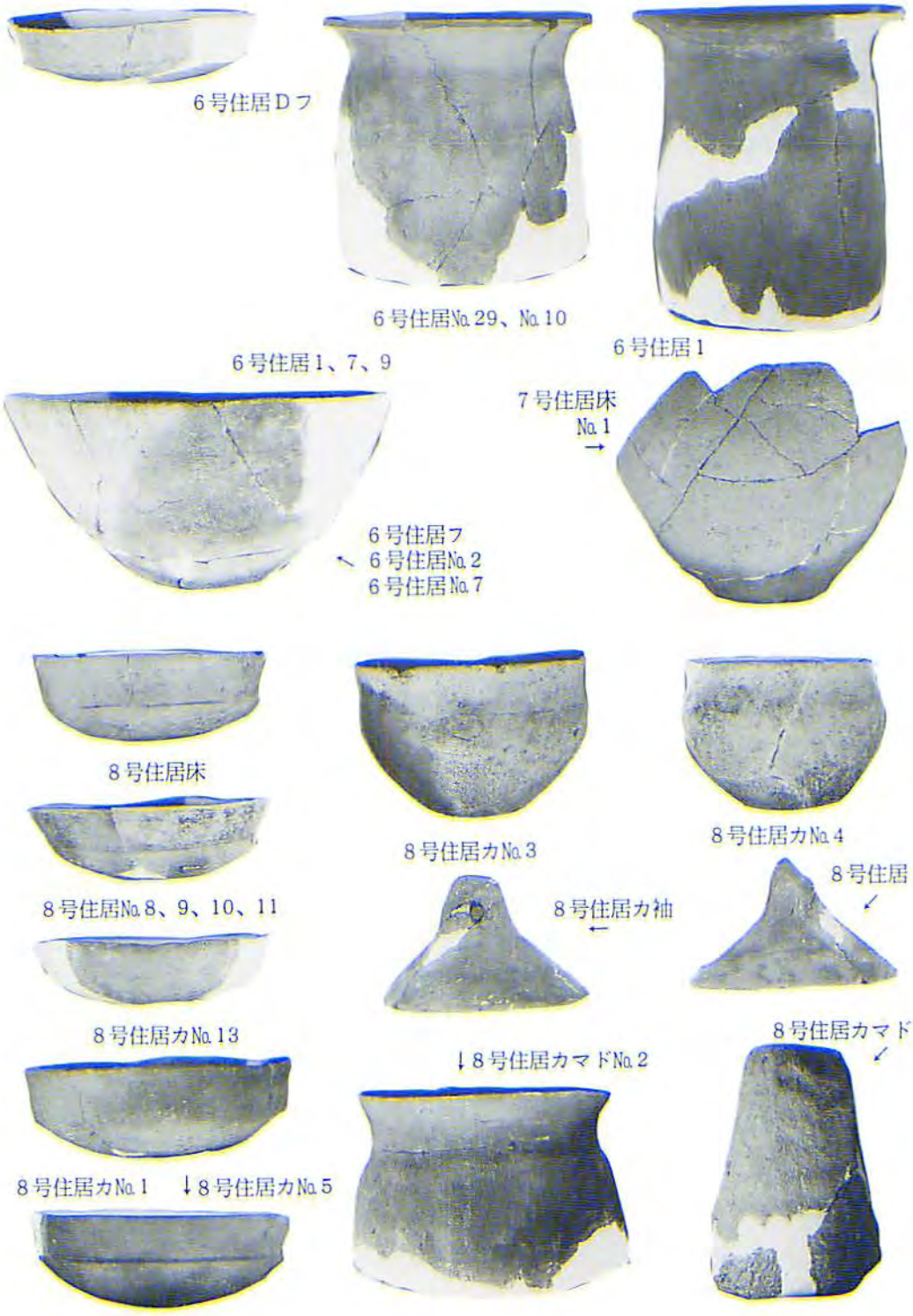
4号住居

5号住居P

5号住居
No.16、
17、13

5号住居No.12

住居跡出土土器


6号住居Dフ
6号住居No.29、No.10
6号住居1
6号住居1、7、9
7号住居床
No.1
6号住居フ
6号住居No.2
6号住居No.7
8号住居床
8号住居カNo.3
8号住居カNo.4
8号住居No.8、9、10、11
8号住居カ袖
8号住居
8号住居カNo.13
8号住居カマド
↓8号住居カマドNo.2
8号住居カNo.1
↓8号住居カNo.5

住居跡出土土器

9号住居6号土

9号住居No.66

9号住居No.54

9号住居5号土No.2

9号住居6号土No.1

9号住居No.28

9号住居No.61、71

9号住居No.41

9号住居No.77

9号住居No.43

9号住居No.11

9～12号住居No.16

9号住居5号土No.8

9号住居No.2

9号住居6号土No.2、7、4、9、6

9号住居No.95

9号住居カマドNo.4

9号住居No.23、No.52

9号住居カマドNo.1

9号住居カNo.5

9号住居
カマドNo.3

←9号住居→
カマドNo.5

住居跡出土土器

9～11号住居

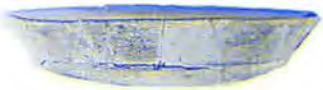
9～11号住居No.2

9～11号住居No.3

9～11号住居

9～11号住居

10号住居No.7、No.2



11号住居床下Dフ

9～11号住居No.5

10号住居DNo.1

11号住居2DNo.7

9号住居2DNo.2

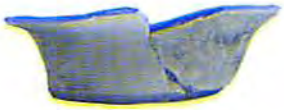
11号住居D

11号住居D37、38

11号住居1DNo.20

11号住居2DNo.8、No.10

11号住居D



11号住居DNo.9

住居跡出土土器

12号住居No.12

12号住居

12号住居No.1

12号住居No.3

12号住居フ　12号住居床No.8

12号住居D No.11

13号住居D

13号住居No.8

12号住居

13号住居D5 No.3

13号住居No.5

A－3 No.2

A－3 No.12

表

↓ 井戸

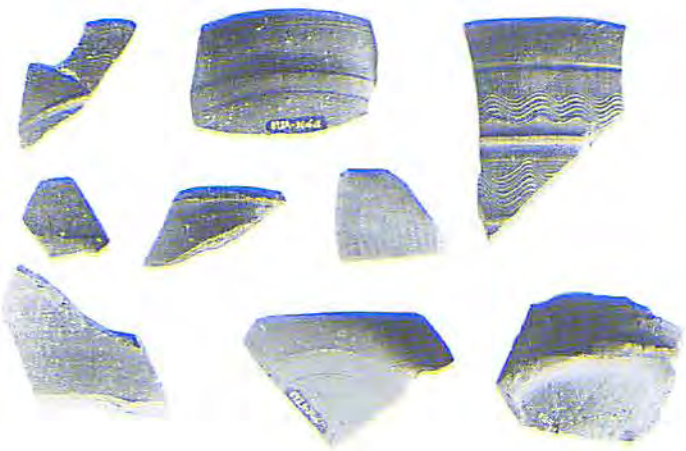
A－3 No.3

A－3 No.3

A－3

A－3 No.7

住居跡出土土器

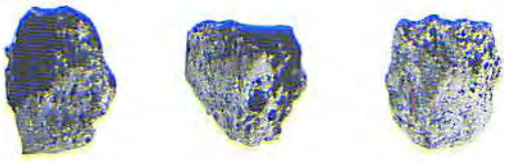


須恵器

暗文土器

砥石

焼土塊



鍛冶滓

出土遺物

貝巣穴泥岩

石器

貝巣穴泥岩、石器

有溝石器

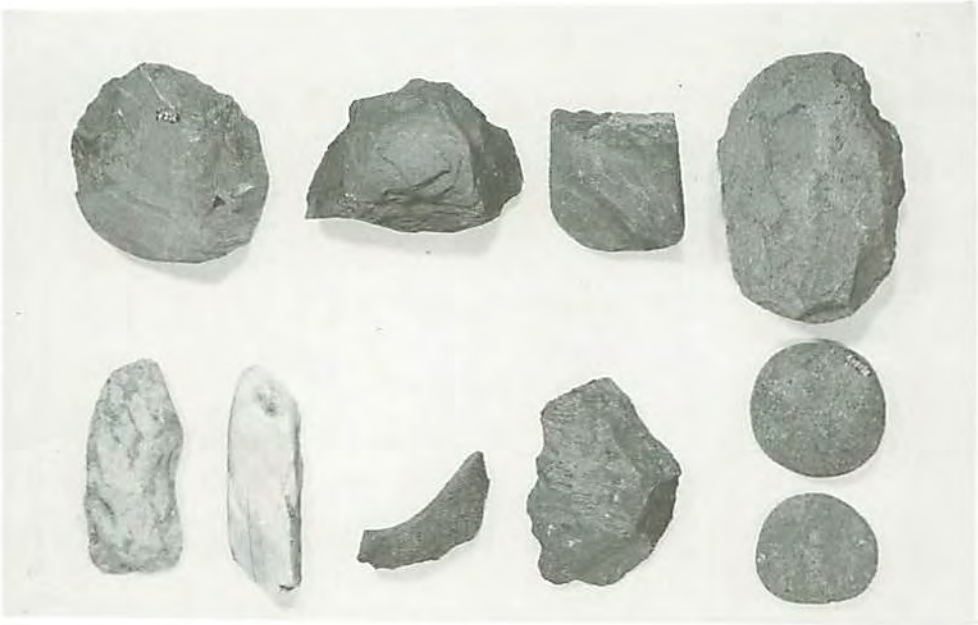
炭化種子

白玉

管玉

土錘

出土遺物



石器

剝片

図版32

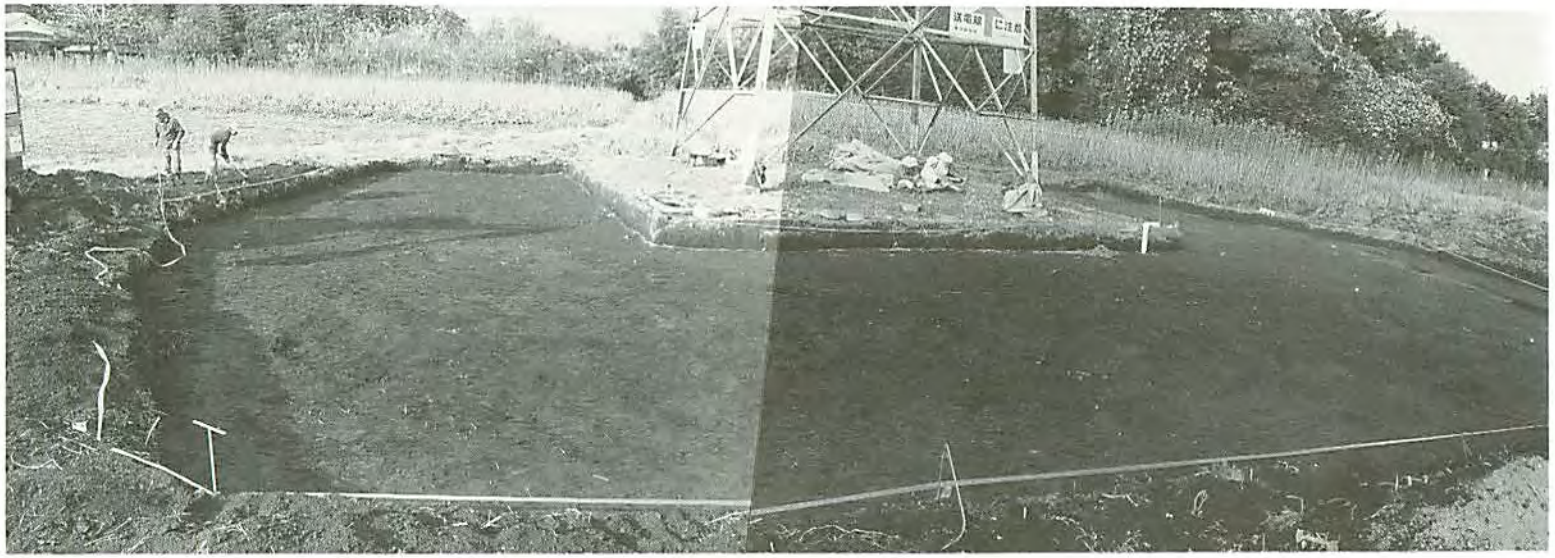
上前原遺跡上空

上前原遺跡景観

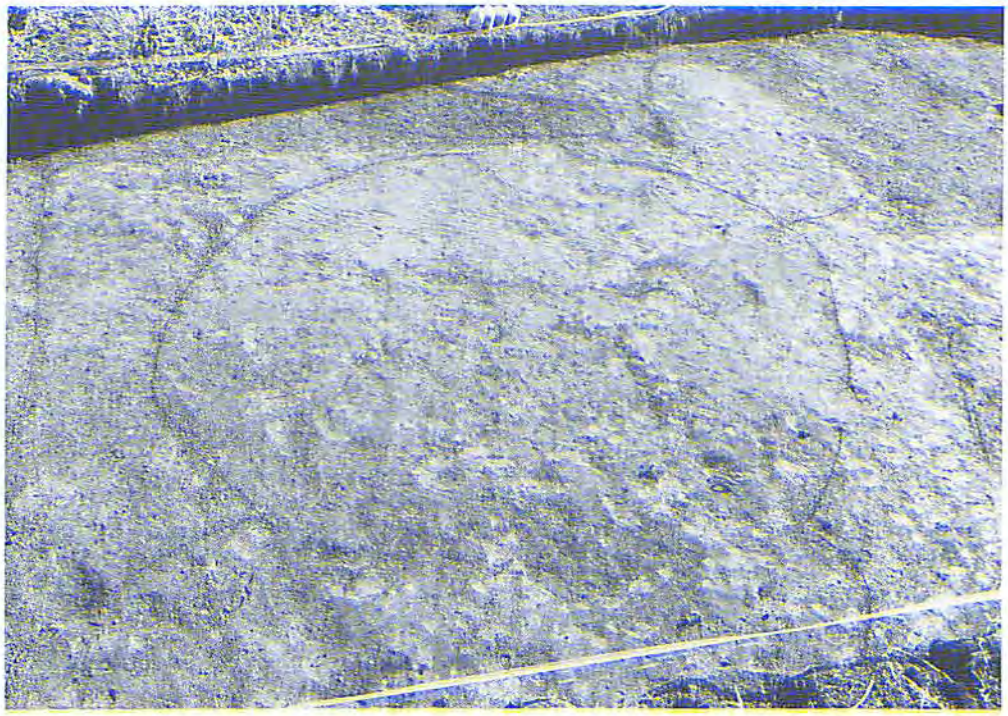
図版34

表土除去作業

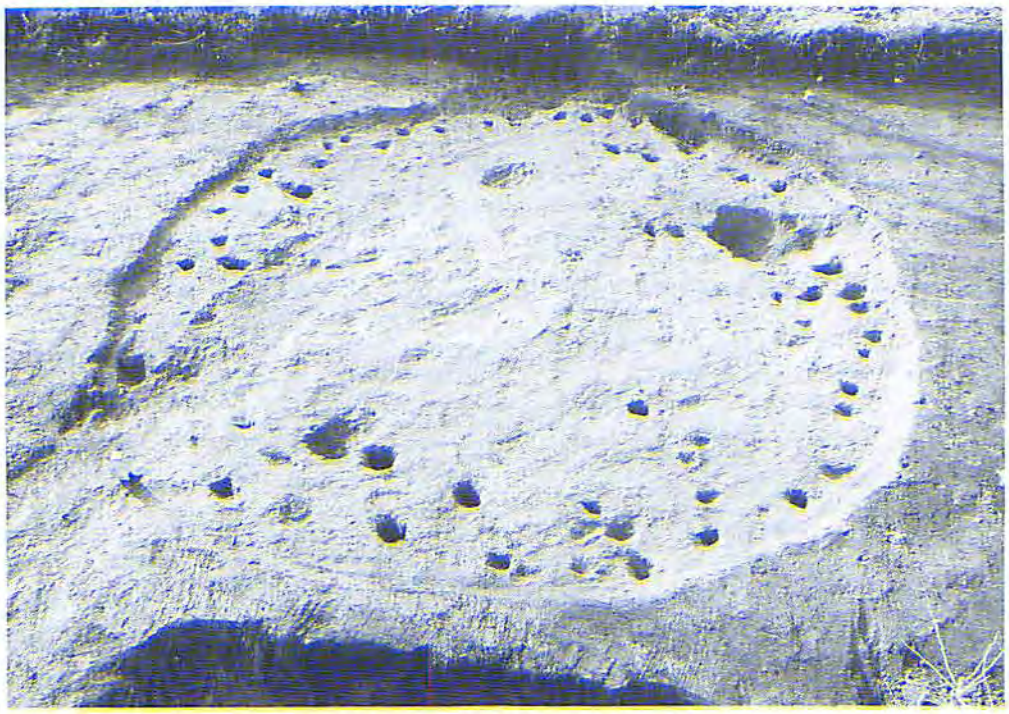
調査状況（第Ⅴ層上面）



表土除去状態



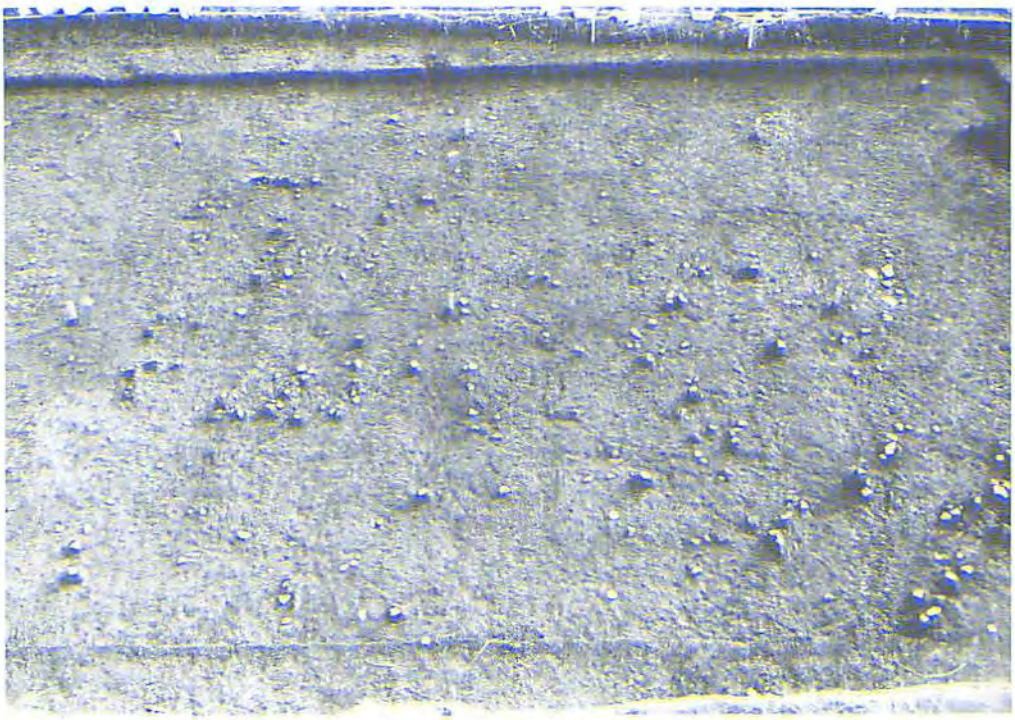
住居跡　検出状況



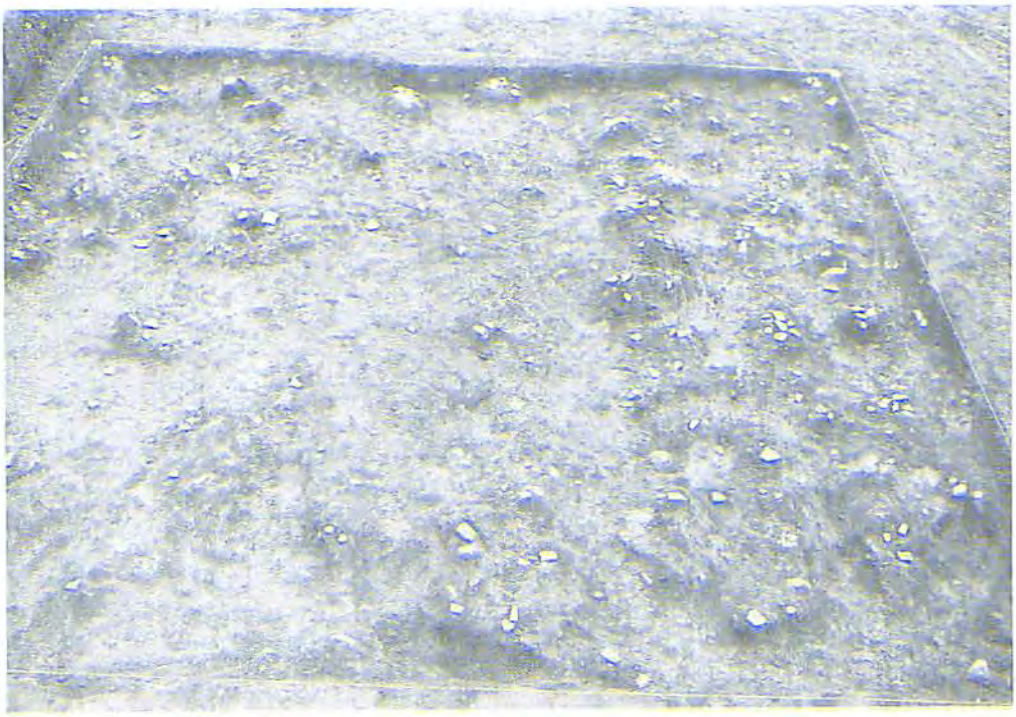
住居跡　完掘状況

1号住居跡内　集石

第Ⅳ層上　土壙群



第Ⅲ層上　遺物出土状態

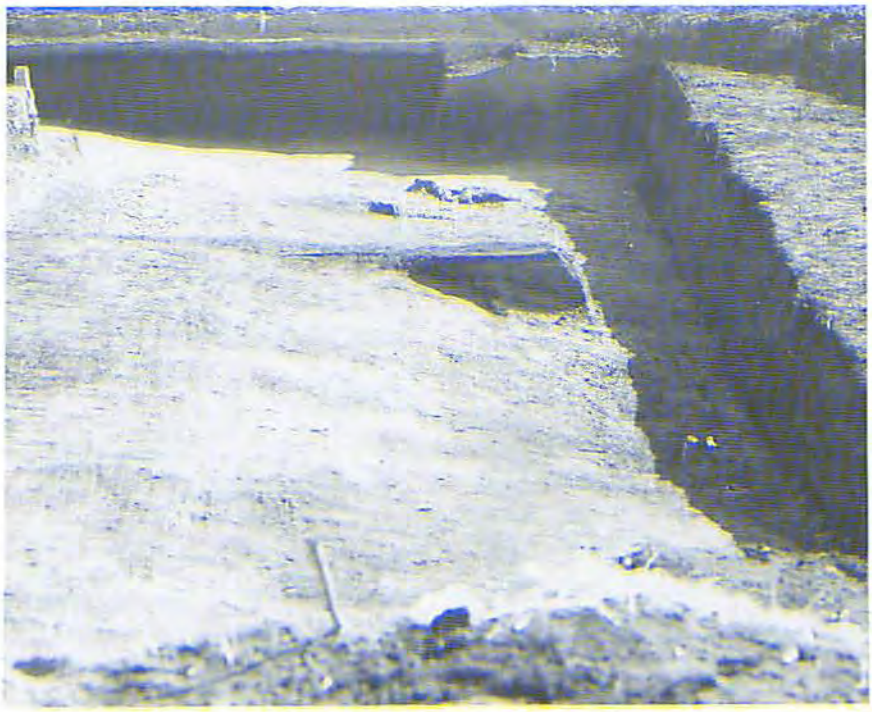


第Ⅳ層上　遺物出土状態

第Ⅳ層下層　遺物出土状態

第Ⅲ層　　遺物出土状態

埋没谷（大トレンチ）土層面



埋没谷　完掘状態

第Ⅲ層1mグリット

土製円盤の出土状態

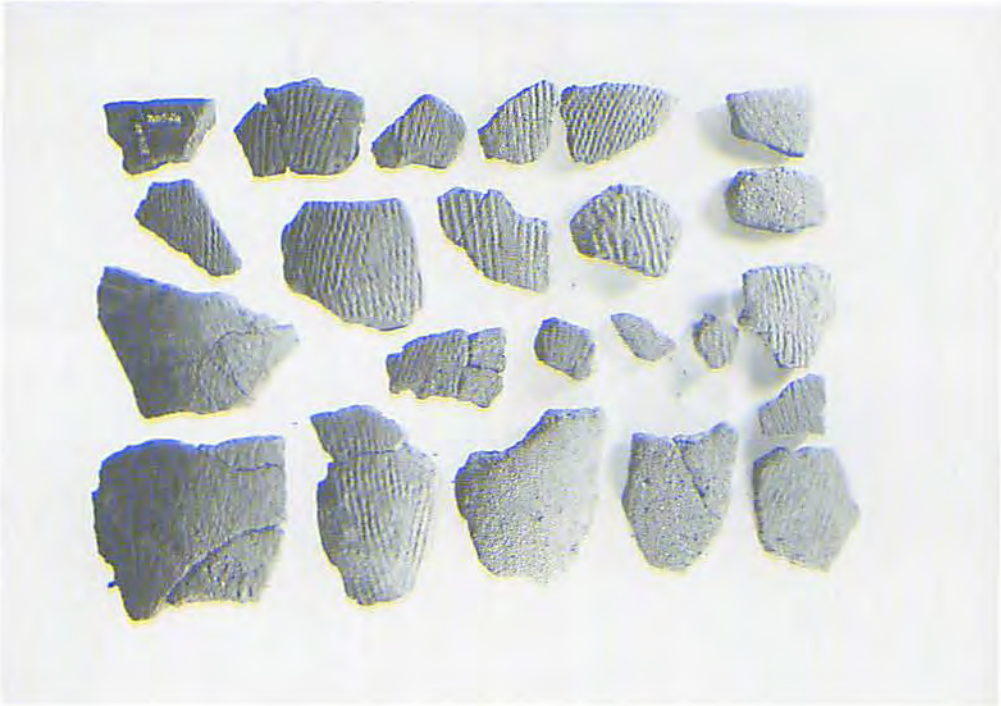
グリット発掘の様子

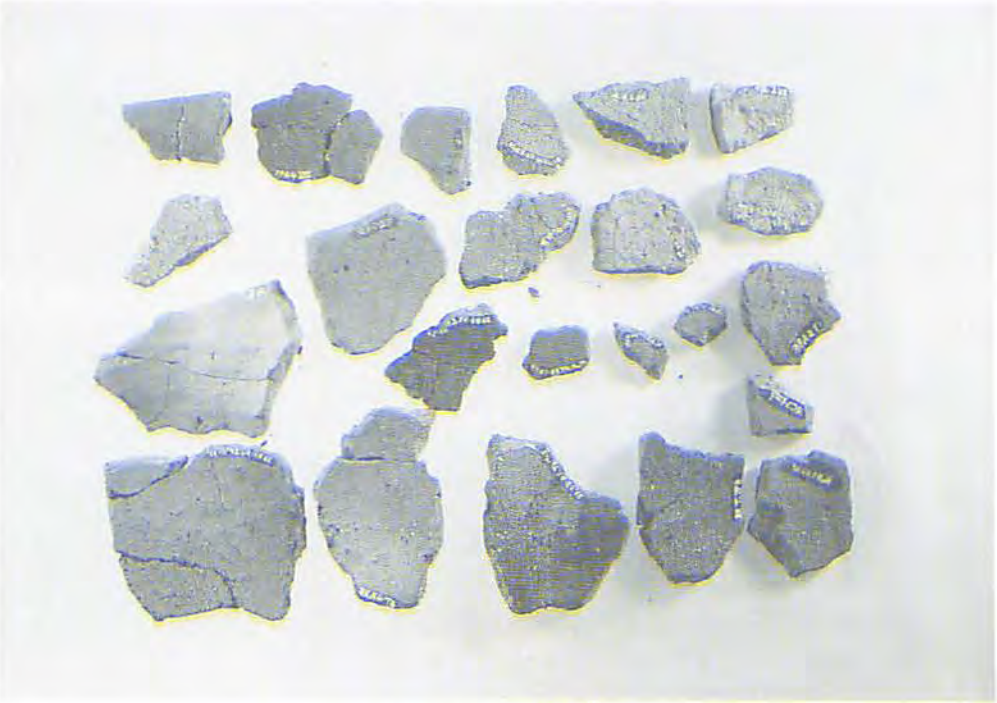
礫・石器・土器の出土状態

第Ⅲ層　遺物出土状態

土器、石器の出土状態（Ⅲ層）

包含層遺物出土状態

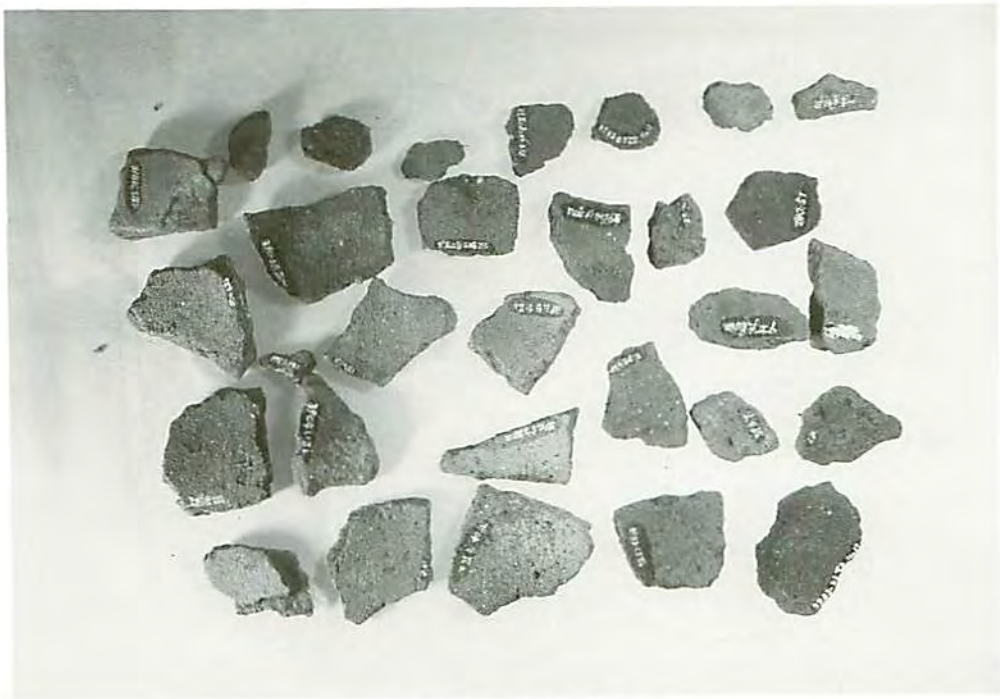




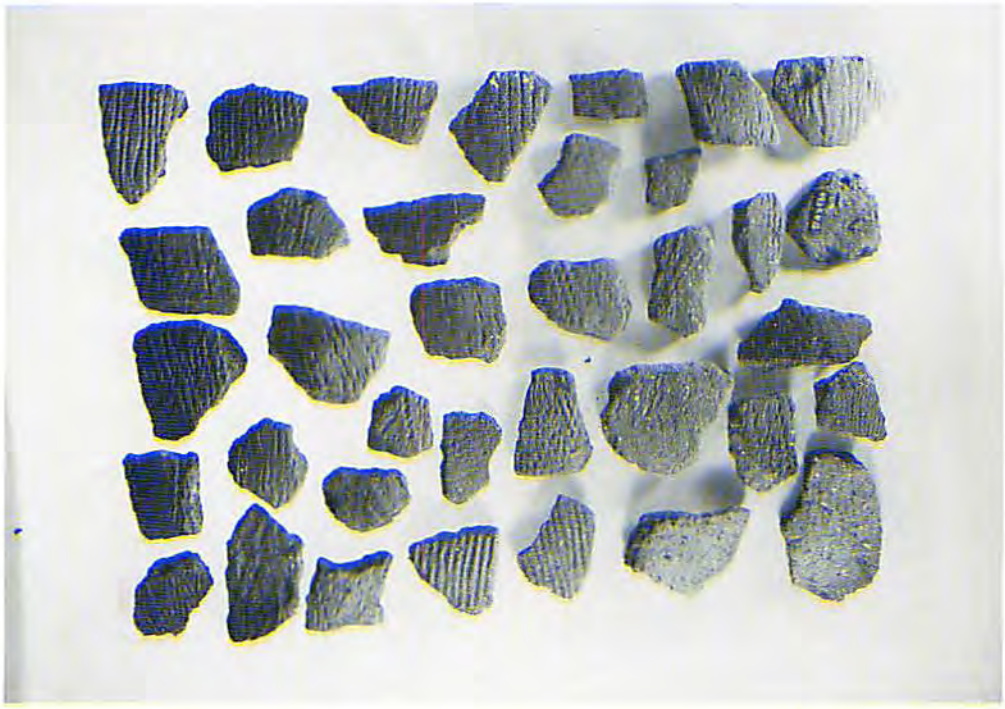
第Ⅷ層出土縄文土器

第Ⅷ～Ⅳb層出土縄文土器

第Ⅱb～Ⅲb層出土縄文土器

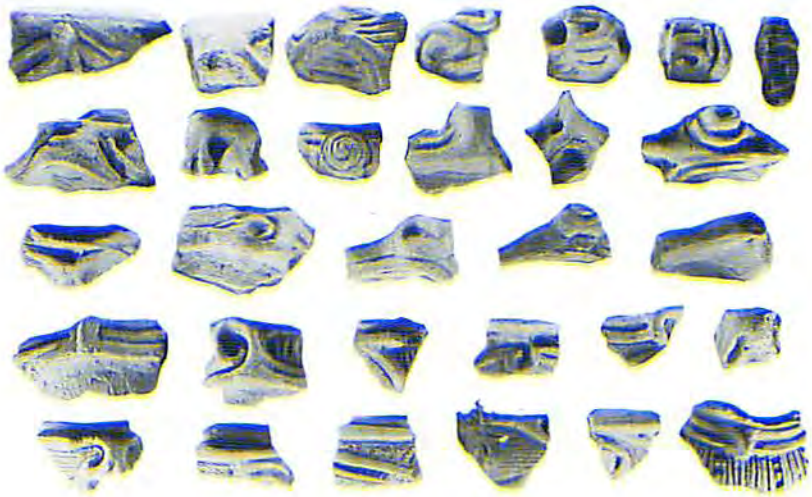


第Ⅱb～Ⅲb層出土縄文土器



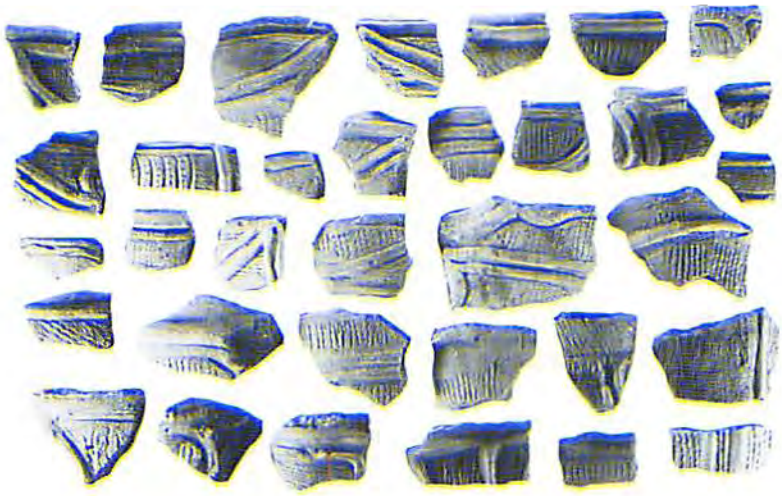
第Ⅱb～Ⅲb層出土縄文土器

第Ⅲa～Ⅲb層出土縄文土器



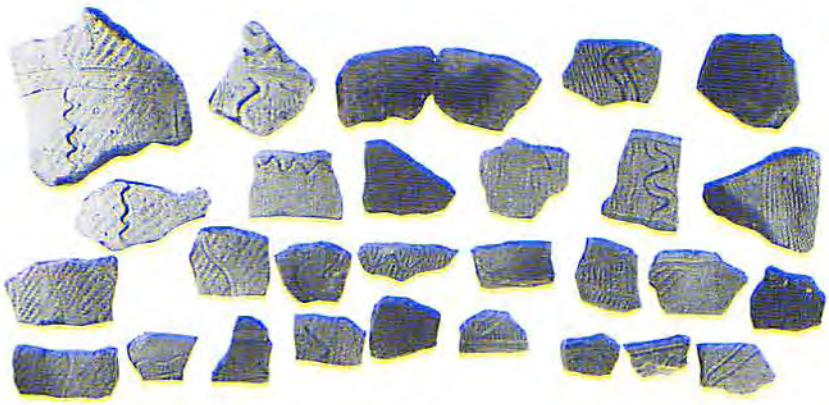
第Ⅱb～Ⅲb層出土縄文土器

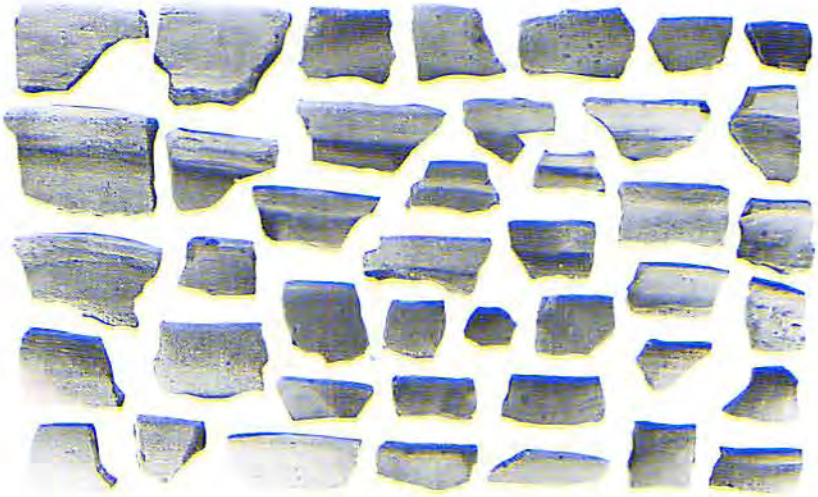
第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器



第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器

第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器

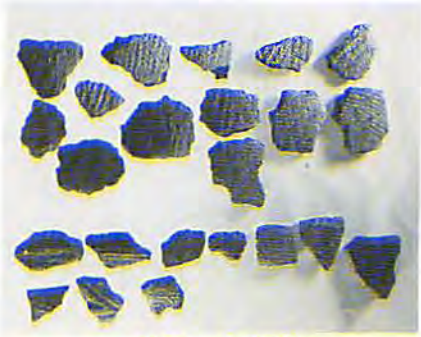




第Ⅱa～Ⅲa層出土縄文土器

第Ⅰ～Ⅱa層出土縄文土器

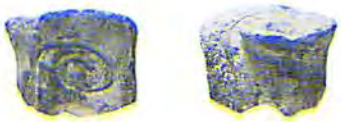
第Ⅴ、Ⅶ層出土



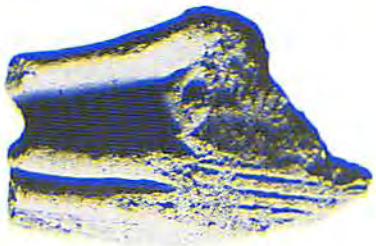
第Ⅴ～ⅡⅤ層出土

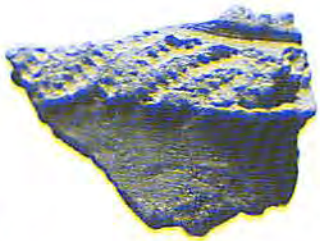
第Ⅲa～Ⅲb層出土有孔鍔付土器

2号土壙出土



1号住居跡集石土壙出土





土器、調整細部、他

第3号土壙出土

調査区採取

調査区採取

1

2

3

4

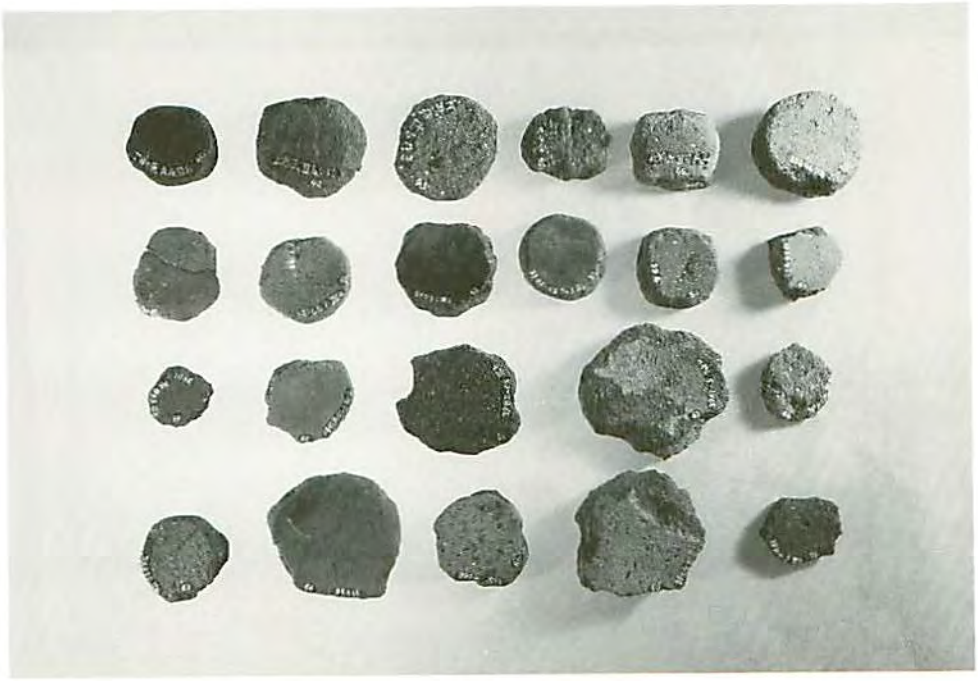
5

6

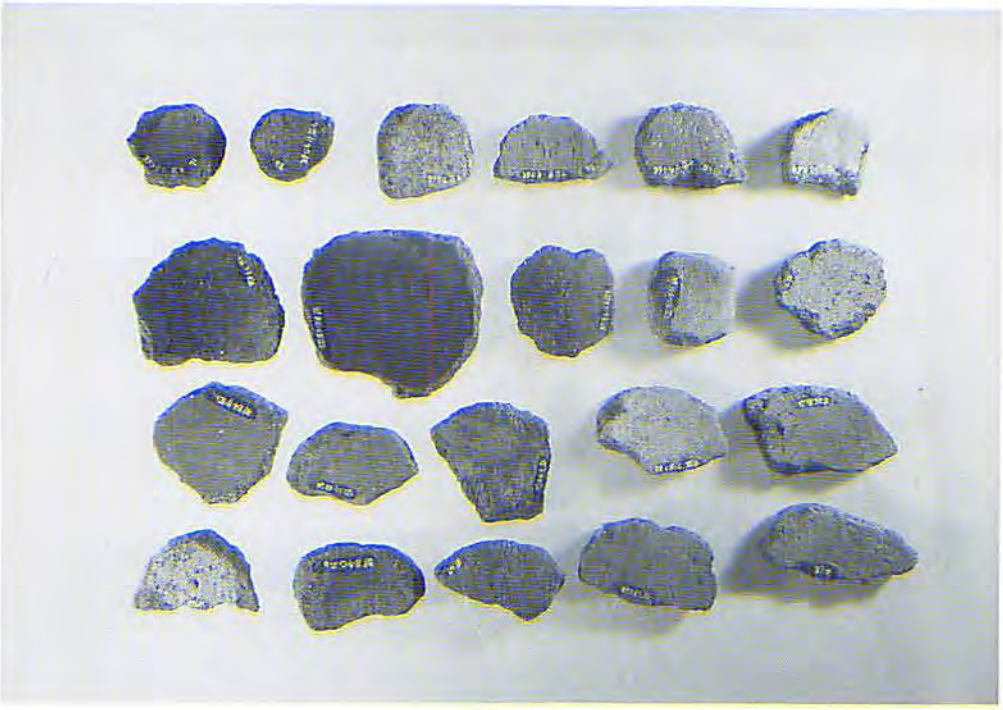
網代底をもつ土器

土器、石器、網代底

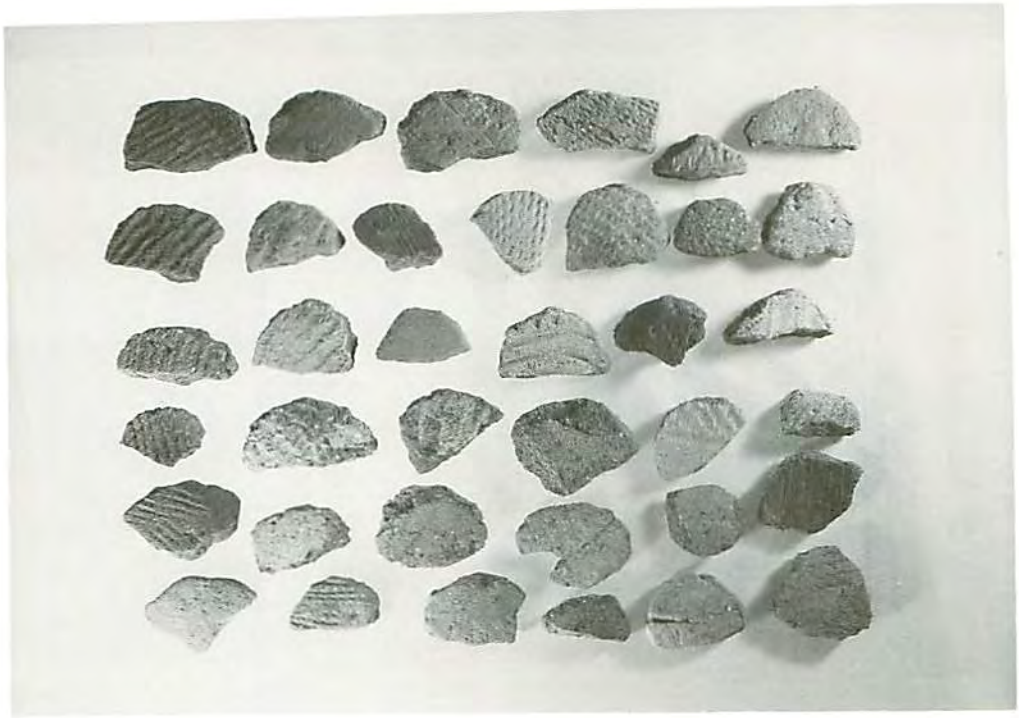
土製円盤



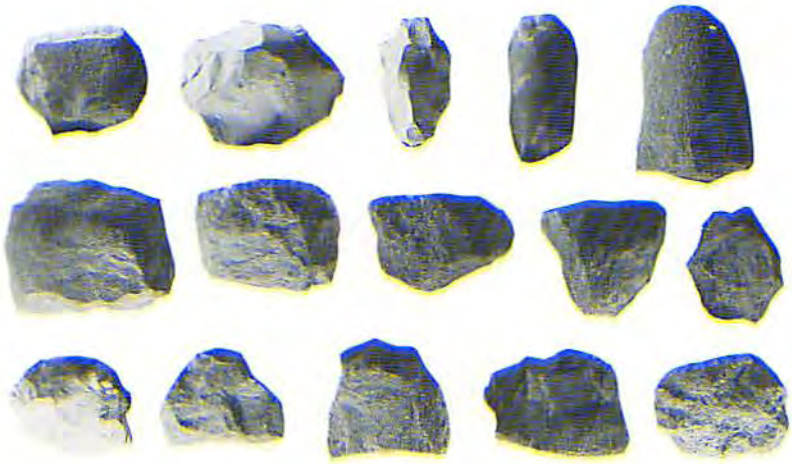
土製円盤

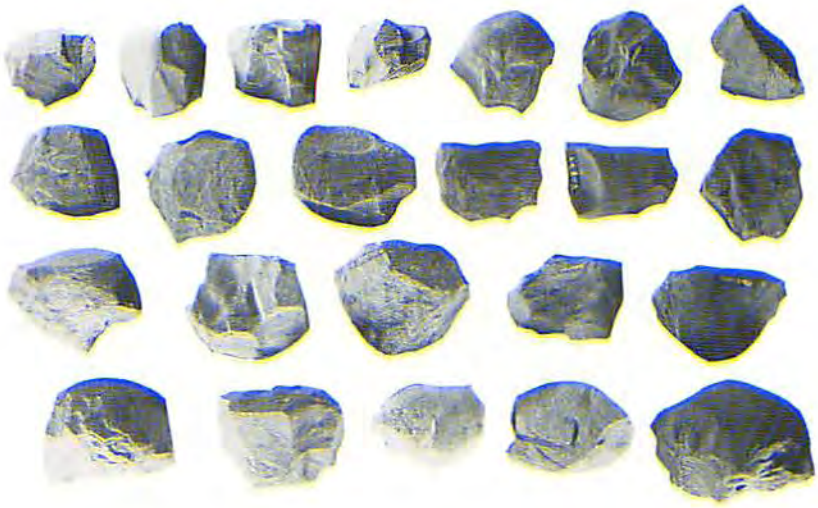


土製円盤



土製円盤

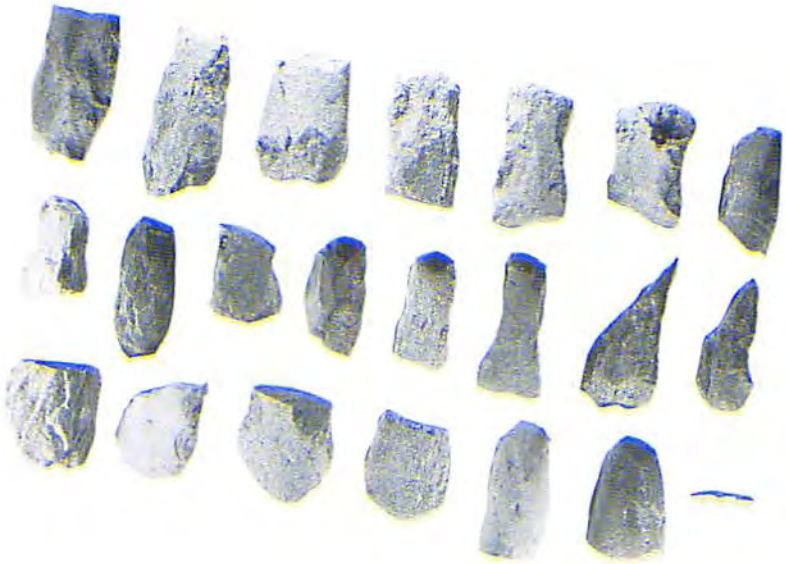


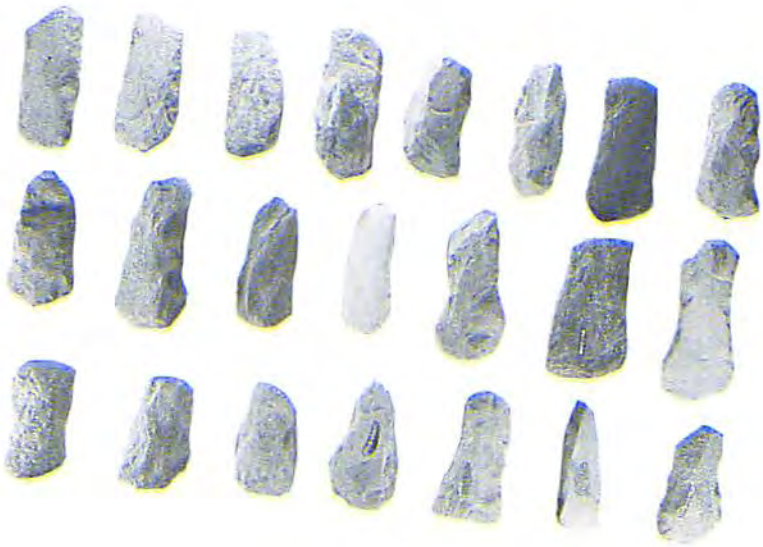


礫器

礫　器

スタンプ型石器





打製石斧

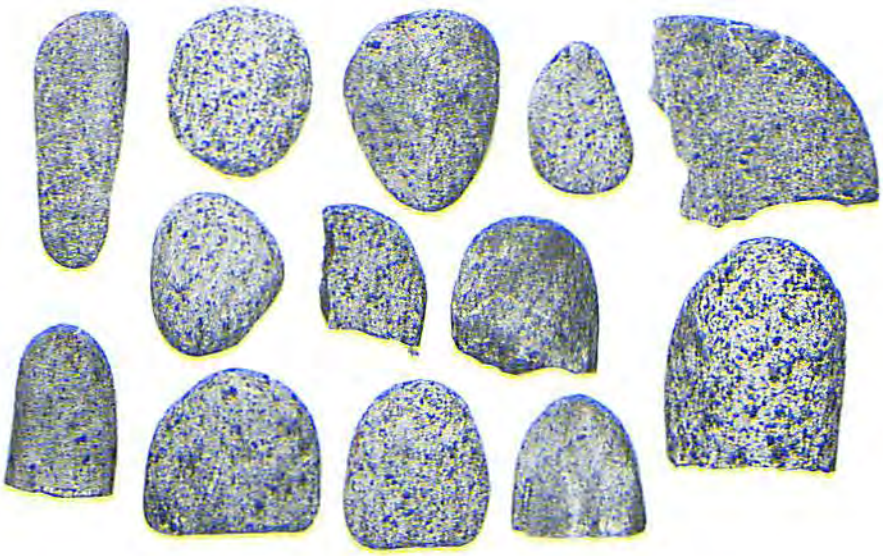
打製石斧

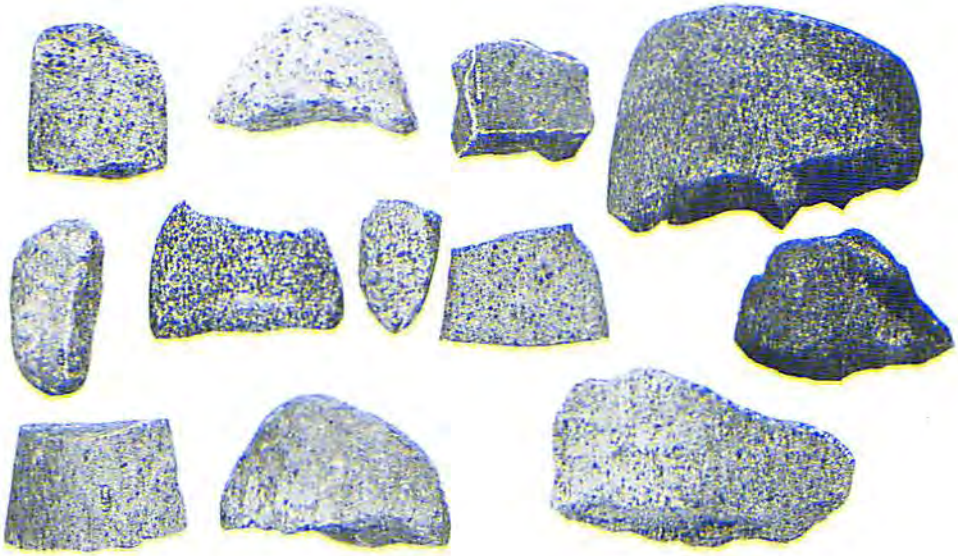
剝　片

棒状石　円盤状石

敲打器　凹石

円形礫

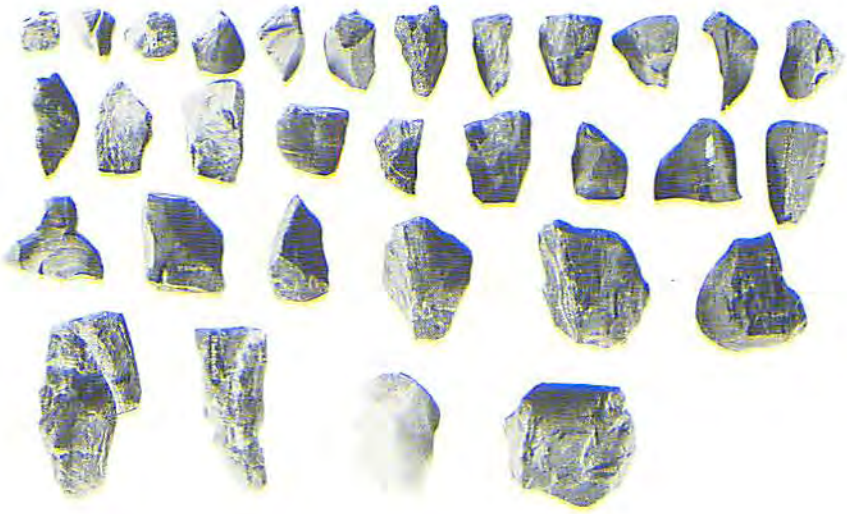




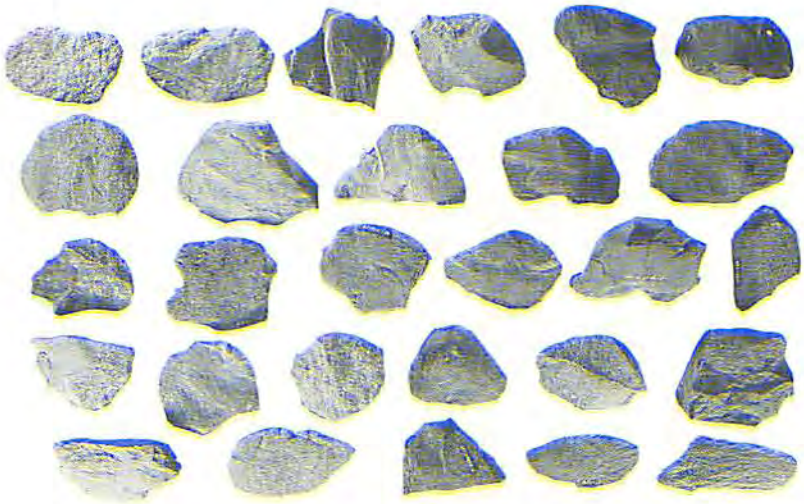
磨 石

黒燿石剝片

チャート製剝片



チャート製剥片

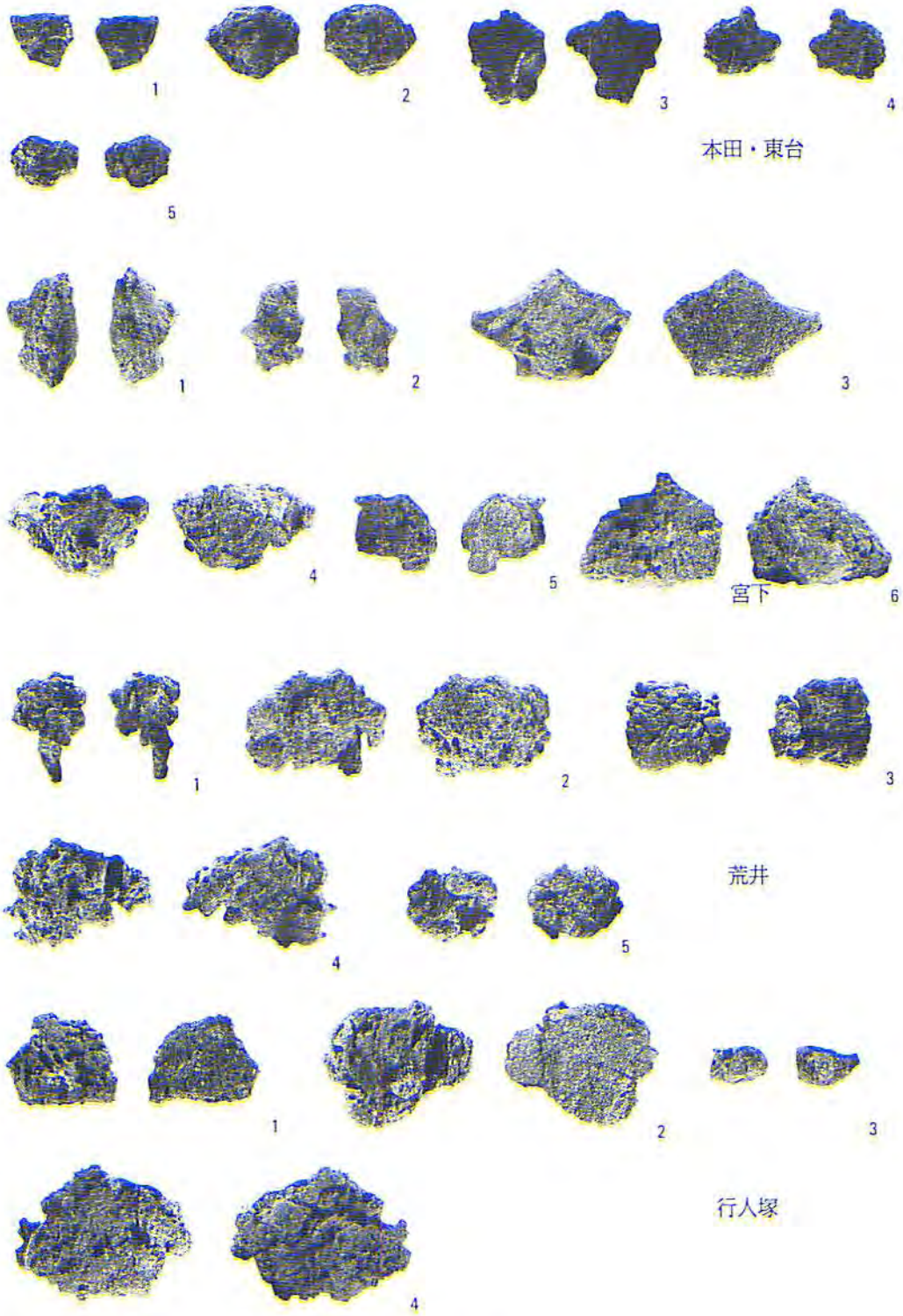


剥　片

焼 礫

焼 礫

図版70

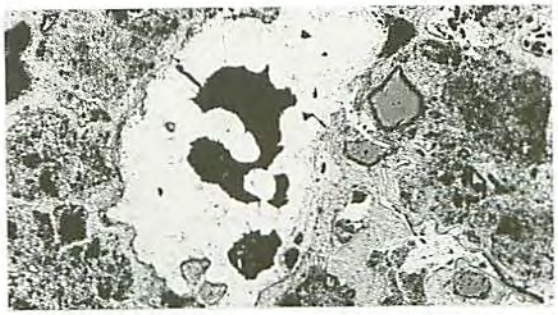


分析用鉄滓

図版71

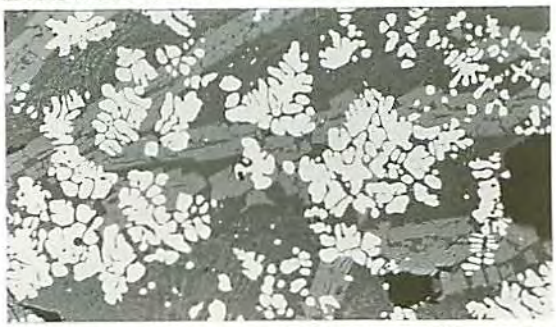
(1) OH 1
本田・東台Ⅰ遺跡
(9号住居跡覆土出土)
鍛 錬 鍛 冶 滓
(鉄酸化物)
×100
外観写真 ⅓

表側　裏側



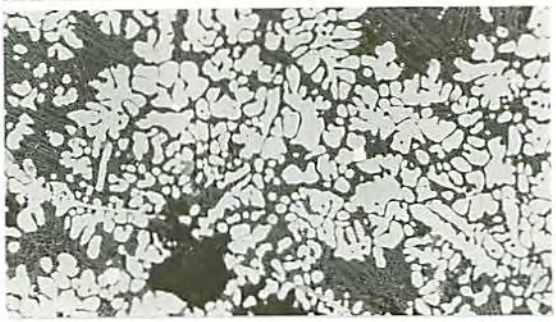
(2) OH 2
本田・東台Ⅱ遺跡
(6号住居跡床出土)
鍛 錬 鍛 冶 滓
×100
外観写真 ⅓

表側　裏側



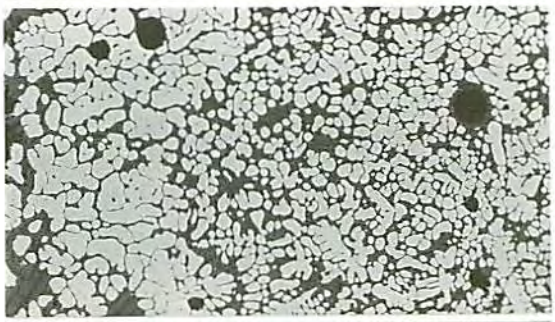
(3) OH 3
本田・東台Ⅰ遺跡
(36号住居跡床出土)
鍛 錬 鍛 冶 滓
×100
外観写真 ⅓

表側　裏側



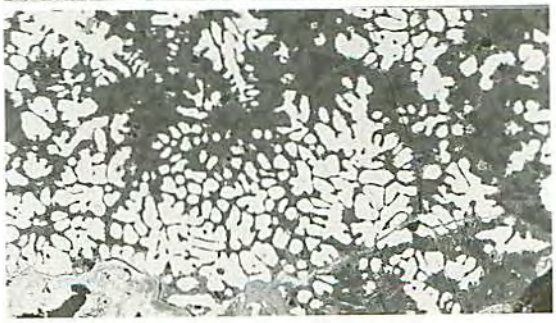
(4) OH 4
本田・東台Ⅱ遺跡
(3号住居跡No.7出土)
(鉄酸化物)
×100
外観写真 ⅓

表側　裏側



(5) OH 5
本田・東台Ⅱ遺跡
(AIG出土)
鍛 錬 鍛 冶 滓
×100
外観写真 ⅓

表側　裏側



鉄 滓 の 顕 微 鏡 組 織

図版 72

江南南小学校見学会

写真撮影

↓調査作業員

見学会　調査風景

整理作業風景

昭和63年3月25日印刷
昭和63年3月31日発行

江南町文化財調査報告第8集

本田・東台上前原遺跡発掘調査報告書

〔編集・発行〕〒360-01 埼玉県大里郡江南町大字柴9番地1
江南町教育委員会
TEL (0485) 36－1521（大代表）

〔印　　刷〕〒360-01 埼玉県大里郡江南町大字小江川2091番地4
熊谷ビジネス・リサーチ
TEL (0485) 36－3110（代表）

〔製　　本〕〒360 熊谷市大字大麻生507
熊谷製本所
TEL (0485) 32－1158（代表）